

高德院周辺遺跡 (No.327)

長谷五丁目337番 7 地点 (I 地点)

長谷五丁目337番15地点 (II 地点)

例 言

1. 本報は「高德院周辺遺跡 (No.327)」遺跡内、鎌倉市長谷五丁目 337番7地点 (略称 KTS0603) と、鎌倉市長谷五丁目337番15地点 (略称 KTS0608) における個人専用住宅の杭基礎構造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 両調査地点の発掘調査期間と調査対象面積は以下の通りである。
 - ☆Ⅰ地点 (長谷五丁目337番7) :平成18(2006)年4月17日～同年6月16日 調査面積:46.75㎡
 - ☆Ⅱ地点 (長谷五丁目337番15) :平成18(2006)年6月28日～同年9月11日 調査面積:39.00㎡
3. 現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。
 - 調査担当者:原 廣志
 - 調査員:太田美智子・小野夏菜・赤堀祐子・榎岡溪音・須佐直子・須佐仁和・中川建二・平山千絵・山口正紀・吉田映子
 - 調査作業員:片山直文・杉浦永章・堀住 稔 (社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
 - 協力機関名:(社)鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
4. 整理作業及び本報の作成は以下の分担で行った。
 - 遺物 実測:小野・榎岡・吉田・原
 - 挿図 作成:小野・平山・原
 - 遺構 墨入:小野
 - 遺物 墨入:榎岡
 - 遺物観察表:平山
 - 遺構 写真:須佐(仁)・原
 - 遺物 写真:平山
 - 原稿 執筆:第1～3章は原が、第4章は調査員協議のもとに原が稿を草した。
5. 出土遺物、図面・写真などの発掘調査資料は、報告書刊行後に鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 本報の凡例は、以下の通りである。
 - 挿図 縮尺:遺構図:1/40 1/50 遺物図:1/3 1/2(銭)
 - 使用 名称:本書で使用する用語のうち、「土丹(どたん)」は逗子シルト岩の砂泥岩、「鎌倉石」は逗子市池子層に顕著な粗粒凝灰岩、「伊豆石」は相模川以西の河川・海浜に産する安山岩で礎石に利用可能な扁平な円礫を指し、表記を簡略化したものである。
 - 遺 構 図:遺構の標高は海拔高の数値を示している。
 - 遺 物 図:黒塗りは灯明皿に付着した油煙煤、漆器の朱漆文様を表現している。
7. 本遺跡の現地調査から本報作成に至るまで、以下の方々からご助言とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい(敬称略、五十音順)。さらに現地調査中に建築施主の金澤匡大氏からは物心両面にわたる多大なご支援を賜わったことに感謝を申し上げたい。
秋山哲夫・伊丹まどか・沖元 道・押木弘己・小野正敏・河野眞知郎・菊川 泉・菊川英政・後藤 健・古田戸俊一・五味文彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木庸一郎・玉林美男・塚本和宏・中野晴久・松尾宣方・松葉 崇・馬淵和雄

目 次

本 文 目 次

第一章	遺跡の位置と歴史的環境	94
	1. 遺跡の位置	
	2. 遺跡の歴史的環境	
第二章	調査の概要	98
	1. 調査の経過	
	2. 測量軸の設定	
第三章	検出遺構と出土遺物	102
	1. I地点の遺構と遺物	
	2. II地点の遺構と遺物	
第四章	まとめ	141
	1. I地点	
	2. II地点	

挿 図 目 次

【I地点】			
図1	遺跡位置図	94	
図2	調査地点位置と周辺遺跡	95	
図3	国土座標位置とグリッド配置図	100	
図4	調査区各壁土層断面図	102	
図5	第1面全測図	103	
図6	第1面土坑・溝・ピット	104	
図7	第1面遺構外出土遺物	105	
図8	第2面全測図	106	
図9	第2面建物1	107	
図10	第2面土坑・ピット	108	
図11	第2面遺構・遺構外出土遺物	109	
図12	第3面全測図	110	
図13	第3面土坑・ピット	111	
図14	第3面遺構・遺構外出土遺物	111	
図15	第4面全測図	112	
図16	第4面建物1	113	
図17	第4面土坑・溝	114	
図18	第4面遺構・遺構外出土遺物	114	
図19	第5面全測図	115	
図20	第5面土坑・かわらけ溜り	116	
図21	第5面遺構・遺構外出土遺物	117	
【II地点】			
図22	調査区各壁土層断面図	122	
図23	第1面全測図	123	
図24	第1面土坑・ピット	124	
図25	第1面遺構・遺構外出土遺物	125	
図26	第2面全測図	125	
図27	第2面建物・土坑・ピット	126	
図28	第2面遺構出土遺物	127	
図29	第2面遺構外出土遺物	128	
図30	第3面全測図	129	
図31	第3面土坑・溝・ピット	130	

図32	第3面遺構・遺構外出土遺物	131
図33	第4面全測図	131
図34	第4面土坑・ピット	132
図35	第4面遺構・遺構外出土遺物	133

図36	第5面全測図	134
図37	第5面土坑・ピット	135
図38	第5面遺構・遺構外出土遺物	135

表 目 次

【I 地点】

表1	周辺の調査地点	96
表2	I地点遺物観察表(1)	118
表3	I地点遺物観察表(2)	119

表4	I地点遺物観察表(3)	120
表5	I地点遺物観察表(4)	121

【II 地点】

表6	II地点遺物観察表(1)	137
表7	II地点遺物観察表(2)	138
表8	II地点遺物観察表(3)	139

表9	II地点遺物観察表(4)	140
表10	I地点分類別出土数量・比率表	142
表11	II地点分類別出土数量・比率表	142

図 版 目 次

【I 地点】

図版1	144
a.	I区第1面全景(北から)
b.	I区第1面全景(南から)
c.	II区第1面全景(南から)
図版2	145
a.	I区第2面全景(南から)
b.	I区第2面全景(東から)
c.	II区第2面全景(東から)
図版3	146
a.	I区第3面全景(南から)
b.	I区第3面土坑1(南から)
c.	II区第3面全景(南から)
図版4	147
a.	I区第4面全景(南から)
b.	II区第4面全景(北から)
c.	II区第4面岩盤掘削面
図版5	148
a.	I区第5面下トレンチ(西から)
b.	I区第5面トレンチ(北から)
c.	II区第5面全景(東から)

d.	II区第5面かわらけ溜り(北から)
e.	II区第5面下トレンチ(北から)
f.	II区第5面下トレンチ(東から)
図版6	149
a.	II区東壁堆積土層
b.	II区北壁堆積土層
c.	II区産業廃棄物攪乱坑
d.	同上攪乱坑
e.	攪乱坑の廃棄物堆積状況
図版7	150
第1面・2面遺構出土遺物	
図版8	151
第2面遺構外	
第3面遺構出土遺物	
図版9	152
第3・4面遺構	
遺構外出土遺物	
図版10	153
第4・5面遺構・遺構外出土遺物	

【Ⅱ地点】

図版11	154	図版15	158
a. I区第1面全景(南から)		a. I区第5面全景(南から)	
b. I区第1面全景(西から)		b. I区第5面全景(西から)	
c. II区第1面全景(東から)		c. II区第5面全景(東から)	
d. II区第1面全景(南から)		d. II区第5面土坑1・3	
e. 第1面土坑2		e. 第5面土坑1	
図版12	155	f. I区南壁堆積土層	
a. I区第2面全景(西から)		g. I区東壁堆積土層	
b. I区第2面全景(南から)		図版16	159
c. II区第2面全景(南から)		a. I区北壁堆積土層	
d. II区第2面全景(東から)		b. II区南壁堆積土層	
e. 建物1-ロ-2柱穴		c. II区東壁堆積土層	
f. 鬼瓦出土状況		d. II区西壁堆積土層	
図版13	156	e. II区西壁堆積土層	
a. I区第3面全景(西から)		図版17	160
b. I区第3面全景(南から)		第1面遺構・遺構外	
c. II区第3面全景(南から)		第2面遺構・遺構外出土遺物	
d. II区第3面全景(東から)		図版18	161
e. 溝1底面 第2面遺構外		第2面遺構外	
f. 土坑1遺物出土状況		第3面遺構出土遺物	
図版14	157	図版19	162
a. I区第4面全景(西から)		第3面遺構・遺構外出土遺物	
b. I区第4面全景(南から)		第4面遺構出土遺物	
c. II区第4面全景(南から)		図版20	163
d. II区第4面全景(東から)		第4面遺構・遺構外	
e. 第4面土坑2土層堆積		第5面遺構・遺構外出土遺物	
f. 第4面上出土かわらけ			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

本遺跡は鎌倉市内中心部の西南部に位置し、調査地の所在する谷戸は露座の鎌倉大仏で有名な高德院の位置から三方に展開する谷戸のうち、北東方向に伸びた谷戸で大谷戸と呼称されている。今回の調査地点はJ R横須賀線鎌倉駅の西方約1.0km 付近の鎌倉市長谷五丁目337番7・337番15に所在する（第1・2図）。遺跡周辺の地形をみると、源氏山に端を発して桔梗山から浅間山に連なる丘陵が南へ伸びて大仏坂切通で画されている。また大谷戸に源を発した稲瀬川は高德院の東山裾を西へ流下し、大仏坂切通や桑ヶ谷などの谷戸から流れてきた小河川と合流するが、大仏通りは暗渠に流れを変えた流路は長谷寺門前から開渠となり東へ曲がり由比ヶ浜へと注いでいる。

大谷戸の規模は南北方向に約750mを測り、北の谷戸奥から南の開口部に向かって傾斜しており、高低差は30m以上となる。調査地点は谷戸中央を走る道路の入口近く、鎌倉大仏からほぼ真東の谷戸内に位置している。大谷戸は開口部幅は80m程であるが谷奥へ行くにつれて開析が進み、大小の小谷戸を内包した樹枝状の地形を呈する。大谷戸を取り巻く尾根の標高は50～75m前後、谷戸内の平地海拔高は13～25m、今回の調査地点は海拔22.95m前後に立地している。現在の大谷戸は各支谷を含めて宅地化が進んでおり、北奥には鎌倉駅から東西に走る新佐助隧道や長谷隧道が通り、往来が絶えない交通要路となっている。

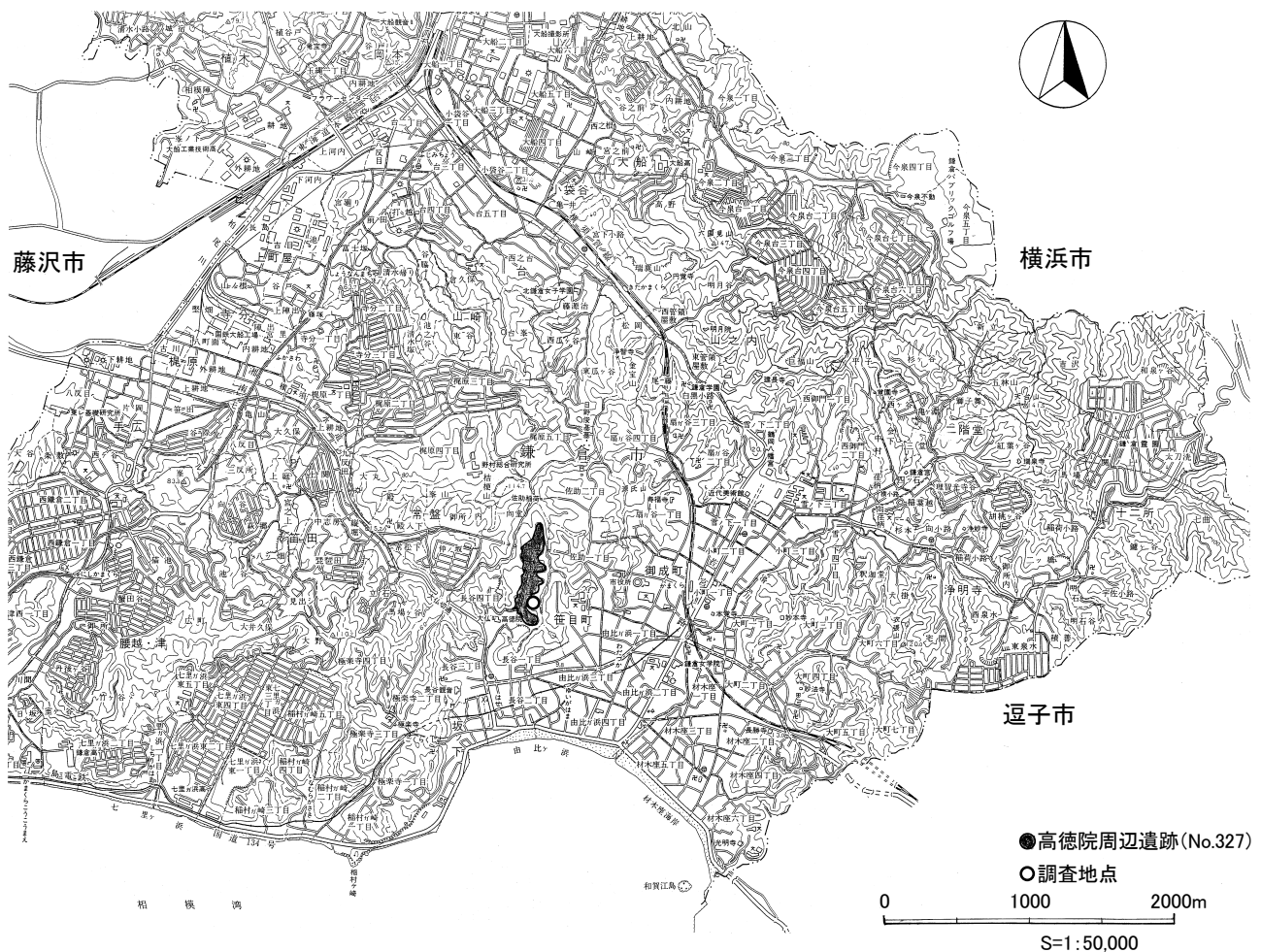


図1 遺跡位置図

2. 遺跡の歴史的環境

鎌倉旧市街地は古代において相模国鎌倉郡に所属し、鎌倉郷と荏草郷の一部に相当すると考えられる。各郷の詳細な範囲と区画は不明だが、本遺跡は鎌倉郷内の西に位置していると推定される。

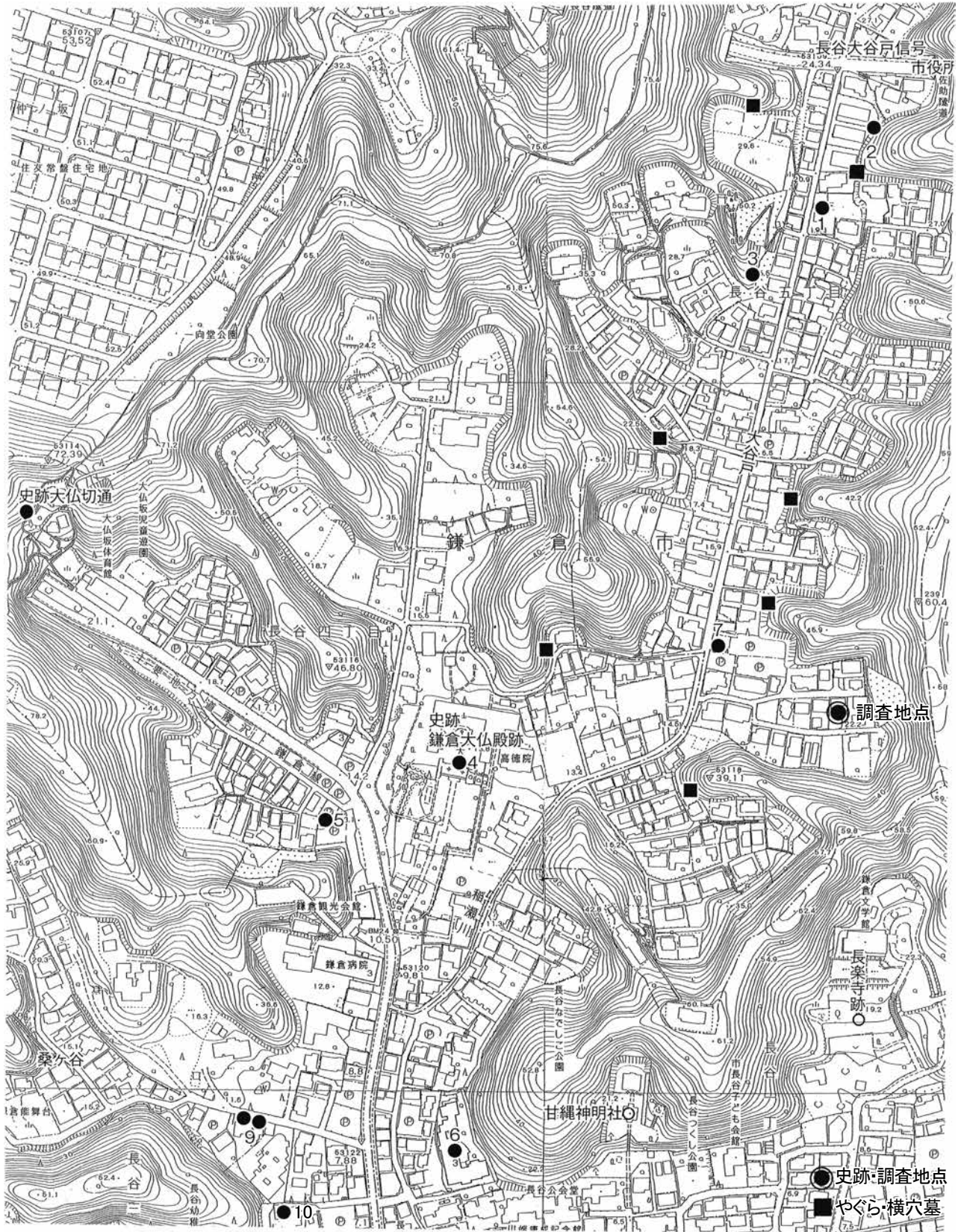


図2 調査地点位置と周辺遺跡

大谷戸の開口部には鎌倉大仏（国宝銅像阿弥陀如来坐像）の鎮座する高德院が所在している。高德院はもと光明寺奥院であり、大異山高徳院清浄泉寺と号す。開山・開基ともに不明であるが、勸進上人浄光で中興は顕誉祐天である。もと浄泉寺の支院であった高德院だけが残ったものと考えられる。

『極楽寺縁起』によれば、鎌倉時代に極楽房忍性が別当に任ぜられたとあり、その頃には悲田もあったことが知られる。南北朝時代以降は建長寺の管轄となり、江戸時代の正徳三年（1713）に芝増上寺僧祐天が山号を獅子吼山と改めたというが、今は大異山に復している。その時に宗旨を真言から天台宗へ改宗し、その際に光明寺の末寺になったようである。

大仏の造立については、『吾妻鏡』暦仁元年（1238）三月二十八日条に僧浄光が諸国に勸進して浄財を集め同年に深沢里大仏堂の事始めが行われ、五年後の寛元元年（1243）に木造の八丈あまりの阿弥陀像及び大仏殿が竣工している。さらに九年後の建長四年（1252）には金銅大仏の鑄造が開始されたが、完成の年次については記載がなく詳しくはわからない。鑄造に際しては、鎌倉鑄物師棟梁の物部重光をはじめ、河内鑄物師丹治久友や大野五郎右衛門らの鑄工が参加したという。金銅大仏の完成時期については諸説あるが、久友の肩書が「鑄師」から「新大仏」への呼称変化に注目し、文応元年（1260）から文永元年（1264）の間の時期の説（清水1979）と、鎌倉時代の政治・宗教史の立場から推測して弘長二年（1262）との指摘があげられる（馬淵 1998）。この金銅大仏も完成時には大仏殿に安置されていたが、その後大仏殿は『太平記』などの記事によると、建武二年（1335）におきた大風で倒壊、明応七年（1498）には津波の被害を受けている。このような相次ぐ災害はついに大仏殿を消滅させ、それ以降再建や倒壊の記事はみられない。元禄十六年（1703）の大地震では台座が崩れ傾くなどするが、正徳年間～元文年間（1711～

遺跡所在地	調査報告書名・遺跡名・遺跡台帳番号など
長谷五丁目 337 番 7、337 番 15	本調査地点（337 番 7= I 地点、337 番 15= II 地点） 高德院周辺遺跡（No. 327）
1 長谷五丁目 387 番 7 一部	原 廣志 2013 「高德院周辺遺跡（No. 327）長谷五丁目 382 番 7 の一部」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会
2 長谷五丁目 377 番、393 番 2	松葉 崇・菊川 泉・鈴木絵美 2010 『長谷大谷やぐら群』かながわ考古学財団 調査報告 257 長谷大谷やぐら群（No. 146）
3 長谷四丁目 550 番 1 外	福田 誠・鈴木 茂・平尾良光ほか 2002 『鎌倉大仏周辺遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 鎌倉大仏殿跡（史跡）
4 長谷五丁目 429 番	大三輪龍彦・田代郁夫 1986 『高德院周辺遺跡（やぐら）発掘調査報告書』高德院周辺遺跡（やぐら）発掘調査団 長谷浅間神社下やぐら（No. 307）
5 長谷四丁目 548 番 4	馬淵和雄 1995 『高德院周辺遺跡』高德院周辺遺跡発掘調査団 高德院周辺遺跡（No. 327）
6 長谷一丁目 290 番 1 外	宗臺秀明・斎木秀雄 1989 『長谷一丁目 290 番 -1 地点遺跡』高德院周辺遺跡発掘調査団 高德院周辺遺跡（No. 327）
7 長谷五丁目 341 番 10 の一部	宮田 眞 2006 『高德院周辺遺跡』（株）博通 高德院周辺遺跡（No. 327）
8 常盤 932 番 1	鈴木庸一郎・菊川英政 2001 『〈古都鎌倉〉を取り巻く山稜部の調査』神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・かながわ考古学財団 大仏切通（史跡）
9 長谷三丁目 630 番 1、630 番 17	田代郁夫・原 廣志 1991 「桑ヶ谷療病院跡 長谷三丁目 630 番 1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』鎌倉市教育委員会 桑ヶ谷療病院跡（No. 294） 木村美代治・田代郁夫 1991 「桑ヶ谷療病院跡 長谷三丁目 630 番 17」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』鎌倉市教育委員会 桑ヶ谷療病院跡（No. 294）
10 長谷三丁目 633 番 2 の一部外 7	瀬田哲夫 2007 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』（株）斎藤建設 長谷小路周辺遺跡（No. 236）

表 1 周辺の調査地点

1740)に僧祐天・養国らによって台座の修復や欠穴の箇所を修理・修復している。その後、関東大震災でも被害を受けるが、昭和34年(1959)に修理が実施され、現在ではみんなに親しまれる露座の大仏の姿となっている。

長谷の地名は長谷寺が建立された鎌倉中期以降に寺名から生まれたもので、それ以前は『吾妻鏡』にも長谷の地名がみられず「甘縄」「深沢」の内に含まれていたようである。『新編相模国風土記稿』には「観音堂起立ありしより寺号によりて村名となす…」とあり甘縄・稲瀬川・桑ヶ谷などの事蹟を記述しており、また明治十二年(1879) 編纂の『県皇国地誌』には長谷の小字に長谷小路・新明町・上町・新宿・甘縄・深沢・愛泉堂・宿屋・入地・長者ヶ久保・小谷・大谷があったと記している。

なお、遺跡周辺の発掘調査事例や旧跡については、図2と共に「表1 周辺の遺跡・旧跡一覧表」を、また引用・参考文献については第4章末にまとめて掲載したのでそれを参照されたい。

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

a. I 地点

市内中心部のやや西部に所在し、鎌倉大仏が所在する南北に長大な谷戸の入口部東側にあたる長谷五丁目に位置している。今回の発掘調査は、鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅建設の計画があったため、工事の実施により掘削深度の関係から埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れが予想され、鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地70cm前後まで近・現代の客土や畑耕作土が確認され、それ直下は薄い中世遺物包含層を挟んで南北朝時代から鎌倉時代に至る少なくとも5時期の遺構面（生活面）と、それに伴う遺物が出土して具体的な埋蔵文化財の存在することが判明した。これにより当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業者との協議を行ったところ、当初の計画に基づき建築工事を実施したいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成18年4月17日から約2ヶ月の予定で発掘調査を実施することになった。

現地調査は4月17日に機材搬入し、試掘データに基づいて地表下70cm程までを重機で除去した後、それ以下を人力により掘り下げての遺構の確認・検出を実施した。その後、平成18年6月16日までの間に必要な記録保存作業を行い、同日に機材撤収して現地調査を終了した。なお調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋しておく。

- 4月17日(月) I区調査範囲の表土・耕作土を重機掘削の実施。テント設営、調査機材搬入。
- 18日(火) 第1面の遺構検出への面出し作業を開始。
- 20日(木) 鎌倉市4級基準点を基に測量軸方眼の設定、海拔高のレベル原点を敷地内へ移動。
- 24日(月) 第1面調査終了。全景写真及び個別遺構の写真撮影、平面図を作成開始。
- 26日(水) 第2面遺構検出への面出し作業を実施。礎石建物の掘り方列を検出。
- 5月 1日(月) 第2面の調査終了。全景写真及び個別遺構の写真撮影、平面図を作成開始。
- 11日(木) 第3面の調査終了。全景写真及び個別遺構の写真撮影、平面図を作成開始。
- 16日(火) 第4面の調査終了。全景写真及び個別遺構の写真撮影、平面図を作成開始。
- 17日(水) 第4面下トレンチの調査で第5面を確認。調査区壁の土層断面図作成。
- 23日(月) II区調査開始、表土を重機掘削し、第1面検出に向け荒掘り作業を開始。
- 25日(木) 調査区北東部で確認した最近の産業廃棄物の投棄した攪乱坑の証拠写真を撮影。
- 30日(火) 第1面の調査終了。全景写真及び個別遺構の写真撮影。第2面検出に向け掘り下げ開始。
- 6月 2日(火) 第2面の調査終了し、平面図作成。全景及び個別遺構の写真撮影を実施。
- 6日(水) 第3面の調査終了。全景及び個別遺構などの写真撮影。平面図を作成開始。
- 8日(木) 第4面の調査終了し、平面図作成。全景・礎石建物・土坑等の写真撮影。
- 12日(月) 第5面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。平面図・地形の等高線図作成。
- 14日(水) 調査区南壁直下にトレンチ設定し、第5面以下の土層堆積の確認調査を実施。調査区壁の土層断面図作成。
- 16日(金) 機材撤収し、現地調査了。

b. II 地点

市内中心部の南西側にあたる長谷五丁目に所在し、前述のように I 地点の南隣に位置している。今回の発掘調査は、鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅の建設計画があったため、工事の実施により掘削深度の関係から埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れが予想され、鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地表下70～90cm前後まで近・現代の客土や畑耕作土が確認され、それ直下は薄い中世遺物包含層を挟んで南北朝時代から鎌倉時代に至る少なくとも5時期の遺構面（生活面）と、それに伴う遺物が出土して埋蔵文化財の存在することが判明した。これにより当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業者との協議を行ったところ、当初の計画に基づき建築工事を実施したいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成18年6月28日から約2ヶ月半の予定で発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は6月20日に機材搬入し、試掘データに基づいて遺構面を傷つけないように地表下70cm程までを重機で除去した後、それ以下を人力により掘り下げての遺構の確認・検出をおこなった。同年9月11日までの間に必要な記録保存作業を行い、同日に機材撤収して現地調査を終了した。なお調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

- 6月28日(水) I区調査範囲の表土を重機で掘削、後追い残土処理。テント設営、調査機材搬入。
- 29日(火) 第1面の遺構検出へ向けての面出し作業を開始。
- 7月 3日(月) I地点を基に測量軸方眼の設定及びレベル原点の敷地内への移動を実施。
- 11日(火) 第1面調査終了。全景等の写真撮影、平面図の作成。第2面検出のため荒掘り作業。
- 20日(木) 第2面調査終了。全景・掘立柱建物等の写真撮影。平面図、建物土層断面図の作成。
- 28日(金) 第3面の全景及び個別遺構の写真撮影、平面図を作成。第4面検出作業を開始。
- 8月 3日(火) 第4面の調査終了。全景写真及び個別遺構の写真撮影、平面図を作成開始。
- 7日(月) 第5面の調査終了。全景写真及び個別遺構の写真撮影、平面図を作成開始
- 11日(火) II区調査開始、表土を重機掘削し、第1面検出に向け面出し作業を開始。
- 21日(月) 第1面調査終了。全景等の写真撮影、平面図の作成。第2面検出のため荒掘り作業。
- 24日(木) 第2面の調査終了。全景写真及び個別遺構の写真撮影。平面図の作成。
- 29日(火) 第3面の調査終了し、平面図作成。全景及び個別遺構の写真撮影を実施。
- 9月 4日(月) 第4面の調査終了。全景及び個別遺構などの写真撮影。平面図を作成開始。
- 6日(水) 第5面の調査終了し、全景・礎石建物・土坑等の写真撮影。平面図及び調査区壁の土層断面図の作成開始
- 11日(月) 機材撤収。現地調査終了。

2. 測量軸の設定

現地調査にあたって使用した測量方眼軸の設定には、図3で示したように国土座標の数値（世界測地系第IV系）を用いている。また本調査地点の南隣に位置で連続した発掘調査を実施したII地点とは同じ敷地内であり、関連した遺構も予想されたので測量方眼を統一して設定することにした。測量軸の基準点は、南側を東西に走る道路に鎌倉市道路管理課が設置した市4級基準点のD086と、D087を採用しており、この基準点の2点（日本測地系第IX座標系）の関係から開放トラバース測量により算出し

た任意の仮原点A点を設けた。さらに測量軸方眼の基準点にあたるA-0杭、E-0杭、H-0杭をそれぞれ設置した。さらに図3で示したようにI・II地点の調査区を2mグリッドに区画して南北方向は北からA・B・C…のアルファベットを、東西方向は西から1・2・3…の算用数字を付し、各方眼の名称は北西角の交差軸点をグリッド名にした。

現地調査で使用した国土座標は、日本測地系（座標A R E A 9）の座標数値であったため、報告書作成の整理作業段階で、国土地理院が公開する座標変換ソフト『web版T K Y 2 J G D』を参考にしながら世界測地系第IX系の座標数値に準じて算出し直したのが下記の数値である。

D 0 8 6 : [X - 75843.0139 Y - 27022.6420] A - 0 杭 : [X - 75721.0355 Y - 26799.2451]

D 0 8 7 : [X - 75879.3806 Y - 27046.3507] E - 0 杭 : [X - 75729.0356 Y - 26799.2454]

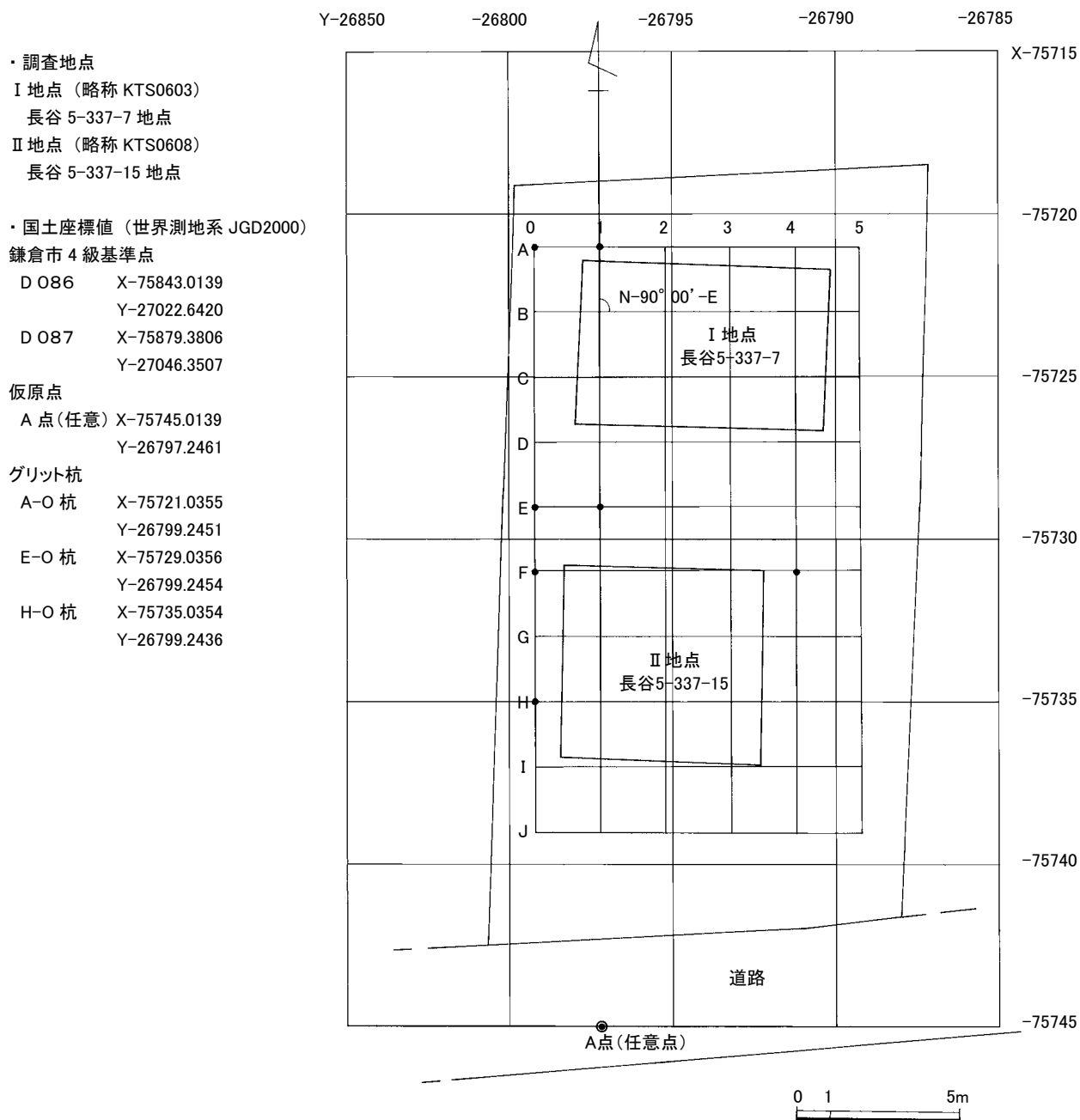


図3 国土座標位置とグリッド配置図

従って、両調査地点は世界測地系第IX系の X - 75715.00~75745.00、Y - 26850.00~26785.00の国土座標区画内に位置している。挿図中の方位は、すべて真北を採用しており、測量方眼の南北軸線はこれに合わせたので真北にほぼ一致している。また両調査地点の経緯度は以下のとおりである。

南北軸線：[N - 90° 00' 08" - E]

調査地点：[東経 35° 19' 00"] [北緯 139° 32' 20"]

海拔高の水準原点移動は、高德院総門の門前道路に設置されていた鎌倉市都市3級水基点 (No.53120 : L = 9.810m) を標高原点として調査地外の道路上に設けた任意点のA点 (L = 22.056 m) と、E - 5 杭上 (L = 22.274m) へ仮水準点を移設した。本報の文章中または挿図に記載したレベル数値はすべてこれを基準にしている。

第三章 検出遺構と出土遺物

1. I 地点の遺構と遺物

a. 層序と生活面

調査地点は大谷戸の開口部近く東側の支谷に位置しており、現地表の海拔標高は23.0m前後でほぼ平坦な宅地を形成している。現地調査は鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果を基にして現地表下約90cmまでの近・現代客土や耕作土などを重機で除去した後、中世遺構の検出調査を実施した。調査

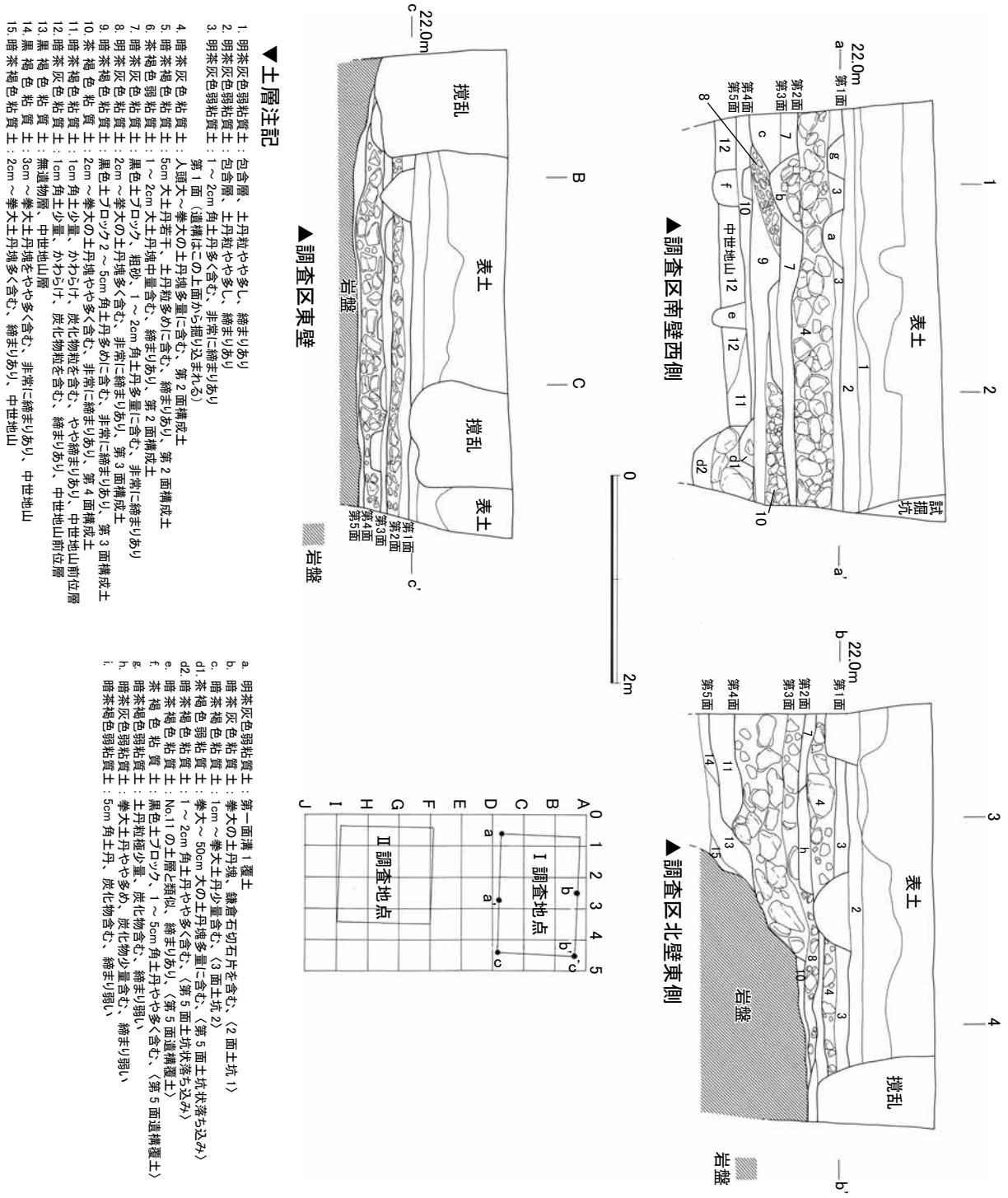


図4 調査区各壁土層断面図

区各壁面堆積土層の状況は図4で示したように遺構覆土を除くと、表土・耕作土以下が1・2層の中世遺物包含層から最下層の岩盤削平面と中世地山上面（中世基盤層＝黒褐色粘質土）まで概ね10層に区分され、少なくとも5時期以上の生活面が確認されている。

試掘調査では2層上面を中世生活面の第1面と捉えていたので遺構確認の精査を実施したところ、顕著な地行面・遺構などの発見には至らなかった。この層を除去すると、海拔高22.0m程で小土丹塊を多く内含した締りの強い明茶褐色粘質土(3層)が顔を覗かせ、遺構も確認されたので第1面と捉えてこの上面で遺構検出を行った。第1面を構成する厚さ15cm前後の土丹版築の地行層と、その下の拳大～人頭大の土丹大小塊を多めに混入した厚い堆積層4層の暗茶灰色粘質土を掘り下げると、包含層を挟まずに表面が硬化した第2面に当たる地形層が表出した。海拔高は調査区西端が21.85m、東端が21.65mであり、東から西に向かって緩やかな傾斜による生活面を構築していた。第3面は8・9層から構成された整地層で海拔高21.50m前後を計り、東端は山裾岩盤を掘削した平らな面を構築していた。西側は岩盤削平面の高さに合わせて大小土丹塊を多量に詰め込んで粗く造成を行った後、小土丹塊や黒色土粘土ブロックを多く混ぜた強い締まりの粘質土(8・9層)で覆われた平らな生活面が構築されており、この生活面に伴い土坑、ピットなどの遺構を検出した。

第4面の地形層は、茶褐色粘質土で小土丹塊を多めに混ぜた締まりのある構築土層である。上面の海拔高は21.15～35mで確認され、遺構には礎石建物や伊豆石礎石、土坑、溝などが検出された。第5面は東側が岩盤削平面及びその上層に堆積する踏み固められて硬化した薄い地行層と、西側域は中世基盤

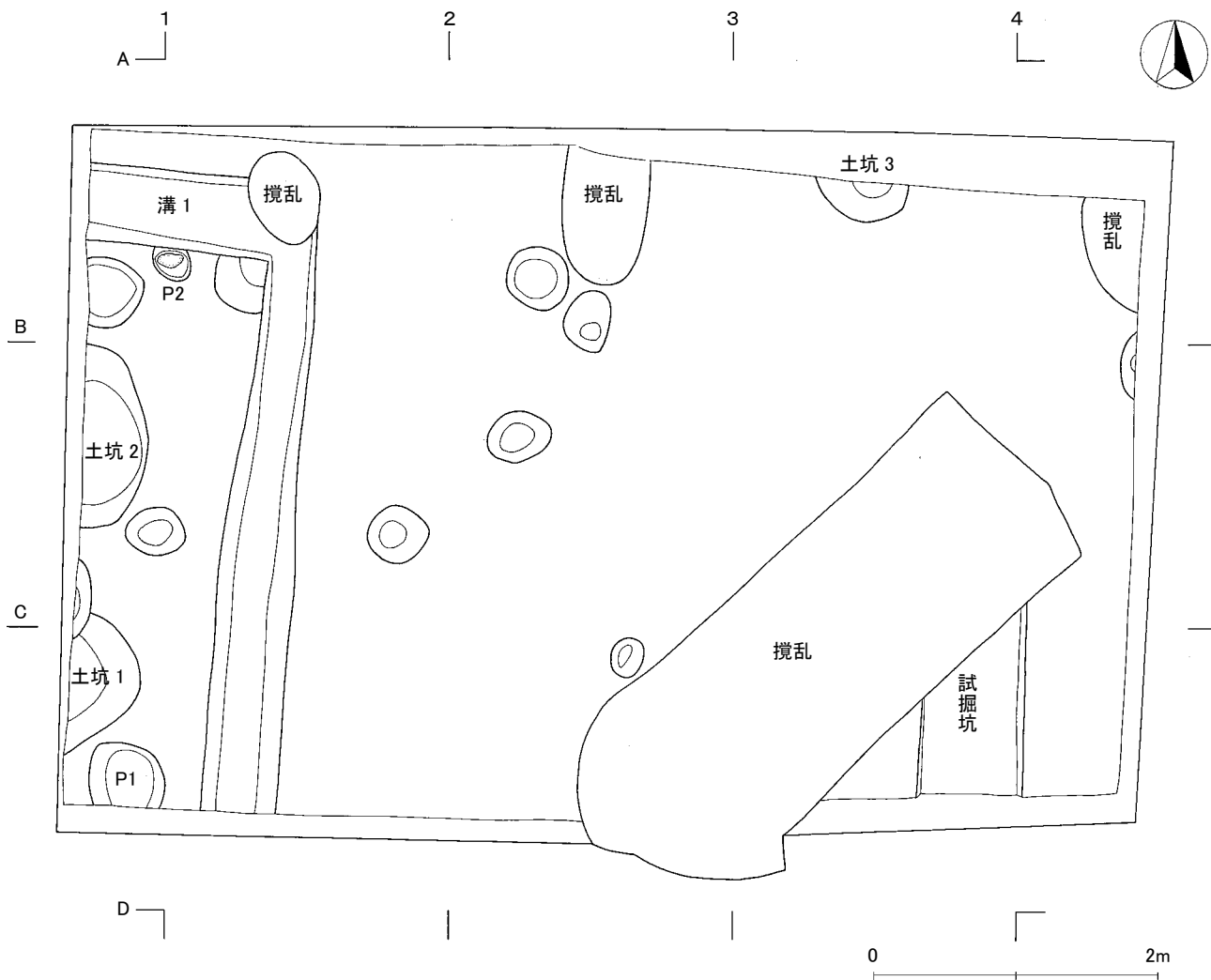


図5 第1面全測図

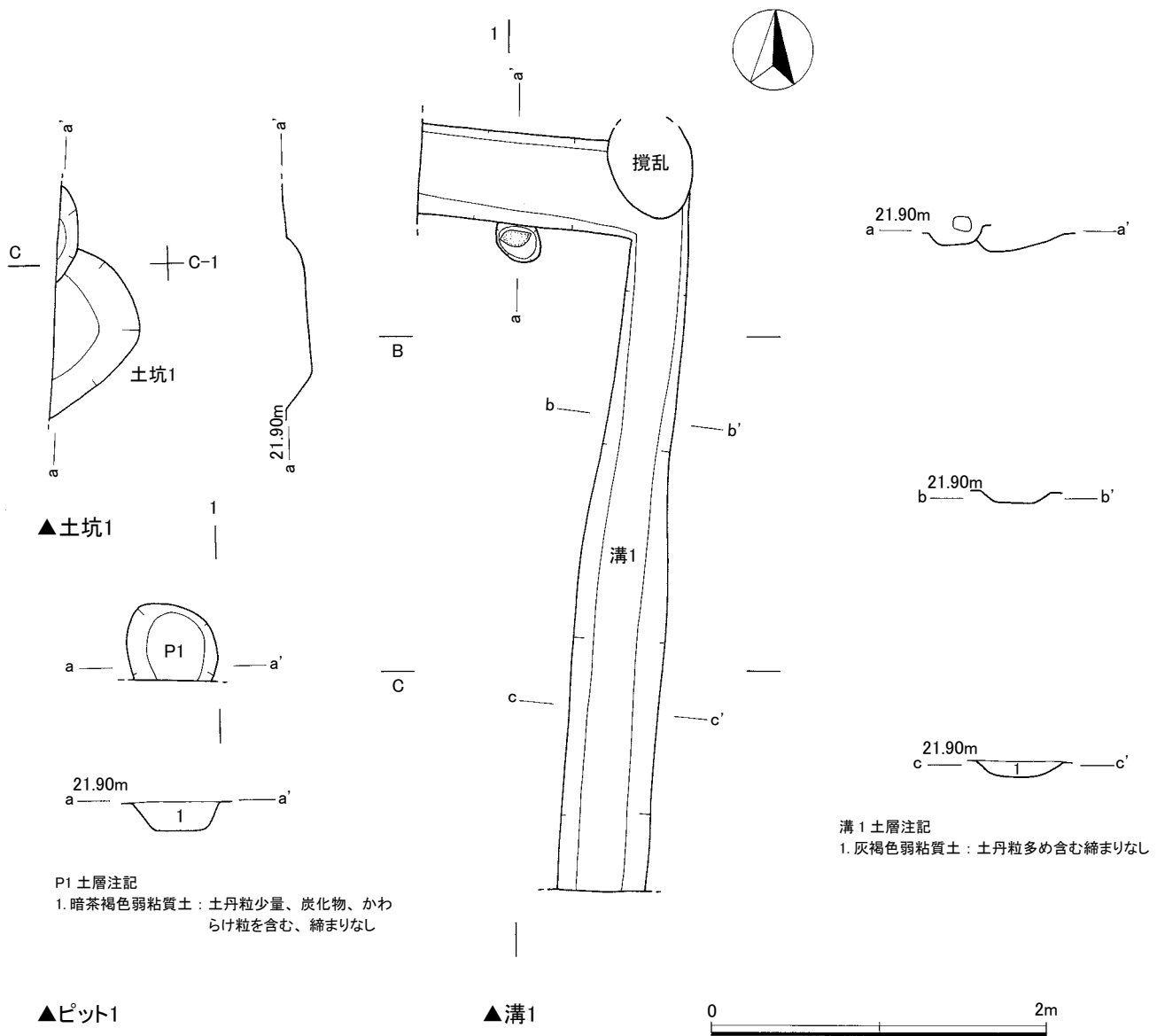


図6 第1面土坑・溝・ピット

土層の黒褐色粘質土や暗茶褐色粘質土（13～15層）で構成されている。検出した遺構は土坑、かわらけ溜り、ピットなどである。以下、検出した遺構・遺物については確認された生活面の調査順に従い上層の第1面から述べる事にしたい。

b. 第1面の遺構と遺物

第1面は厚い表土や耕作土を除去し、1・2層からなる中世遺物包含層を挟んで海拔高22.00m前後で検出された生活面である。この面は1～2cm角の土丹粒を多く交えた締まりの強い硬化した地形層であるが、確認できた遺構の殆んどは掘り込みが浅く、後世の削平による影響と推測される。遺構は土坑5基、溝1条、ピット9穴などが認められ、出土した遺物はかわらけ皿、瀬戸窯製品、瓦類、銅製品などが主に面上から得られた（図5～7）。

試掘坑の北西位置で重複して確認された攪乱坑は、図版6で示したように表土～岩盤までを重機掘削されたもので岩盤には生々しいバケットの爪痕が残されていた。また埋め戻された堆積土には土砂とともに多量の屋瓦、タイル、塩化ビニール管、針金などの産業廃棄物が違法投棄されたことは間違いなかった。従って、調査区壁堆積土層の観察や重機掘削の爪痕、廃棄物の組成から最近の仕業で遺跡破壊

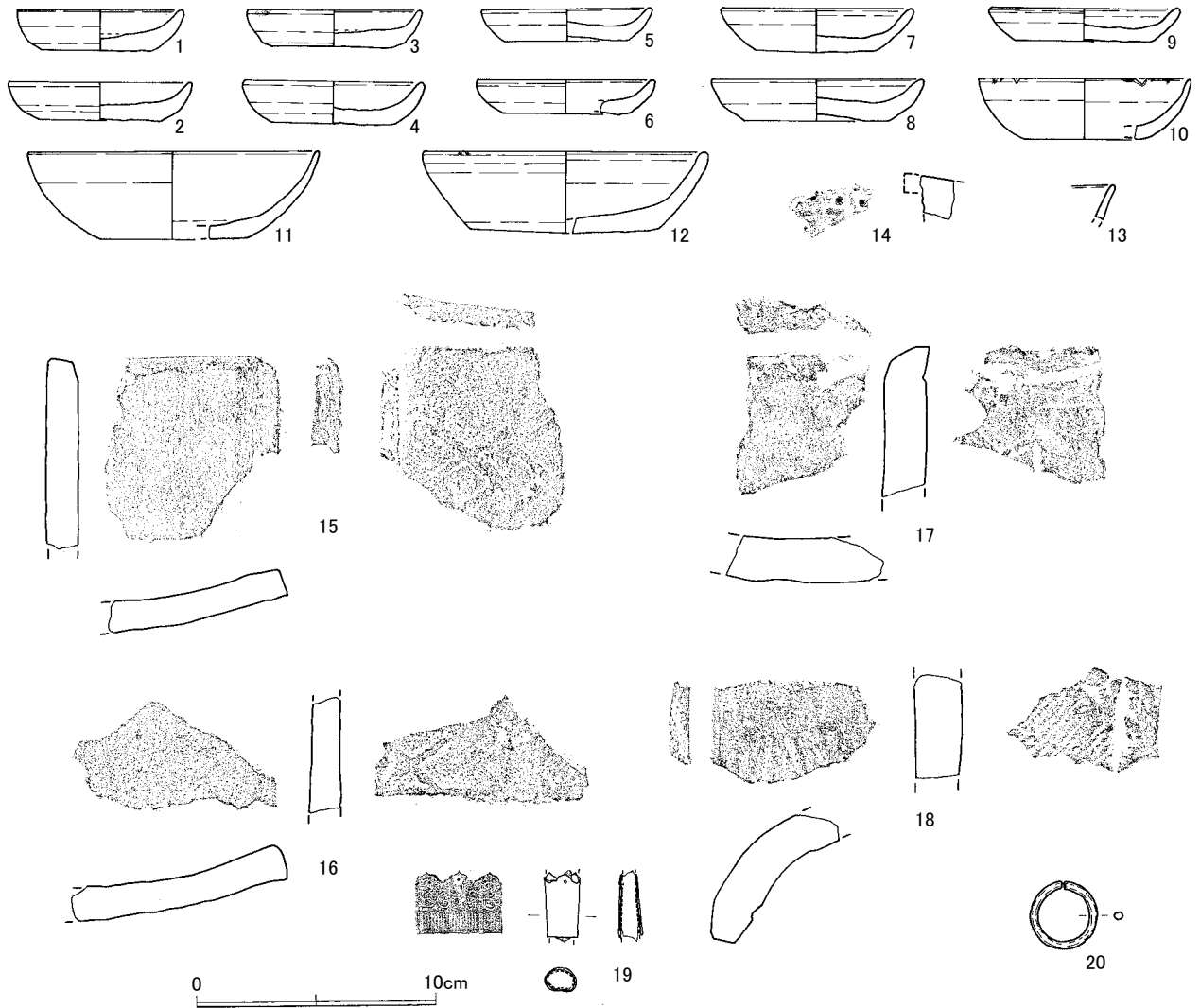


図7 第1面遺構外出土遺物

と判断され市教育委員会へ違法な掘削、投棄の原因究明の為に早急な対応を求めるよう連絡を行った。しかし現況を見学に現地視察ただけでその後の経緯など明確な対応と回答は受けていない。

土坑1：調査区南西隅近くに位置しており、西側は調査区外に拡がり全容不明である。確認できた大きさは東西径103cm、南北径51cm以上、深さ20cm前後、断面皿状の掘り方を呈し、底面の海拔高21.70m前後である。覆土は土丹粒、かわらけ粒を多めに混入した黄褐色粘質土の単一層で底面に炭化物の薄い堆積が確認されたが、遺物はかわらけ小片だけである。

土坑2：土坑1の北側に位置し、西側は調査区外に拡がり全容不明である。確認できた規模は東西径132cm、南北径48cm以上、深さ25cm、断面逆台形の掘り方を呈し、底面の海拔高21.75mである。覆土は土丹粒・炭化物を多く交えた締りのない明茶灰色弱粘質土の単一層で、かわらけ小片だけで図示可能な資料は見られなかった。

土坑3：調査区北壁の3ライン東に位置し、北側は調査区外に拡がっている。確認できた規模は東西径52cm、南北径22cm以上、深さ35cm、断面U字型の掘り方を呈し、底面の海拔高21.75mである。覆土は土丹粒・炭化物を含む締り少量りのない明茶灰色弱粘質土であり、実測可能な出土資料はない。

溝1：混じる灰褐色土で、底面に凝灰岩質砂岩粒の薄い堆積が見られた。遺物はかわらけ小片だけである。調査区西端の位置で1ラインに沿って北方向へ約4.5mが確認され、調査区北壁の手前で西方へL字に曲がって調査区外に延びる溝を検出した。規模は上面幅40～54cm、底面幅28～38cm、深さ15cm前後で浅い掘り方を呈しており、溝底の海拔高は21.80m程である。覆土は土丹粒が多めに

第1面遺構外出土遺物：遺構外とした遺物は第1・2層の遺物包含層か、遺構確認に伴い出土した資料である。図7-1～12はロクロ成形のかわらけである。小皿は口径7.0～7.9cm、器高2cm以下と低めの器高やや粗い胎土が主体を占めるのに対して、10～12の中皿・大皿は粉質な胎土で薄手器壁の背高気味である。13は瀬戸入子で精良均質な胎土で内面に斑な自然降灰がある。14～18は瓦類であるが、14は鐙瓦で外区内縁に珠文を配した巴文と思われ、15～17は凸面に斜格子叩き目を施した女瓦、18は男瓦である。

19・20は銅製品である。19は長さ2.8cm、径1.2～1.5cm、厚さ1mmの筒形状を呈しており、上端は雲形に成形され、下端に向けやや窄まる形状である。表面には毛彫りで上半部に蓮華唐草文、下半部には縦線文の線刻文様を施している。上端付近に径1mmの小孔を有し、中に木質を残すことから丸棒状の柄に取り付けて用いた飾り金具であろう。20は径3mm大の断面丸型のものを外径2.8cmの円形に曲げ加工が施された銅環製品である。

c. 第2面の遺構と遺物

第1面を構築する際の粗い基礎造成にあたり大小土丹塊を多く混入した第4層を除去したのが第2面で海拔高21.75m前後で検出された。この面は概ね黒褐色粘質土ブロックに粗粒凝灰岩の石粒や土丹粒を多く交えた締まりの強い硬化した地形層であった。この面で検出した遺構は礎石建物1軒、土坑8基、掘立柱建物を構成しないピット10穴などであり、遺物はかわらけ、常滑窯や東播磨系の国産陶器、

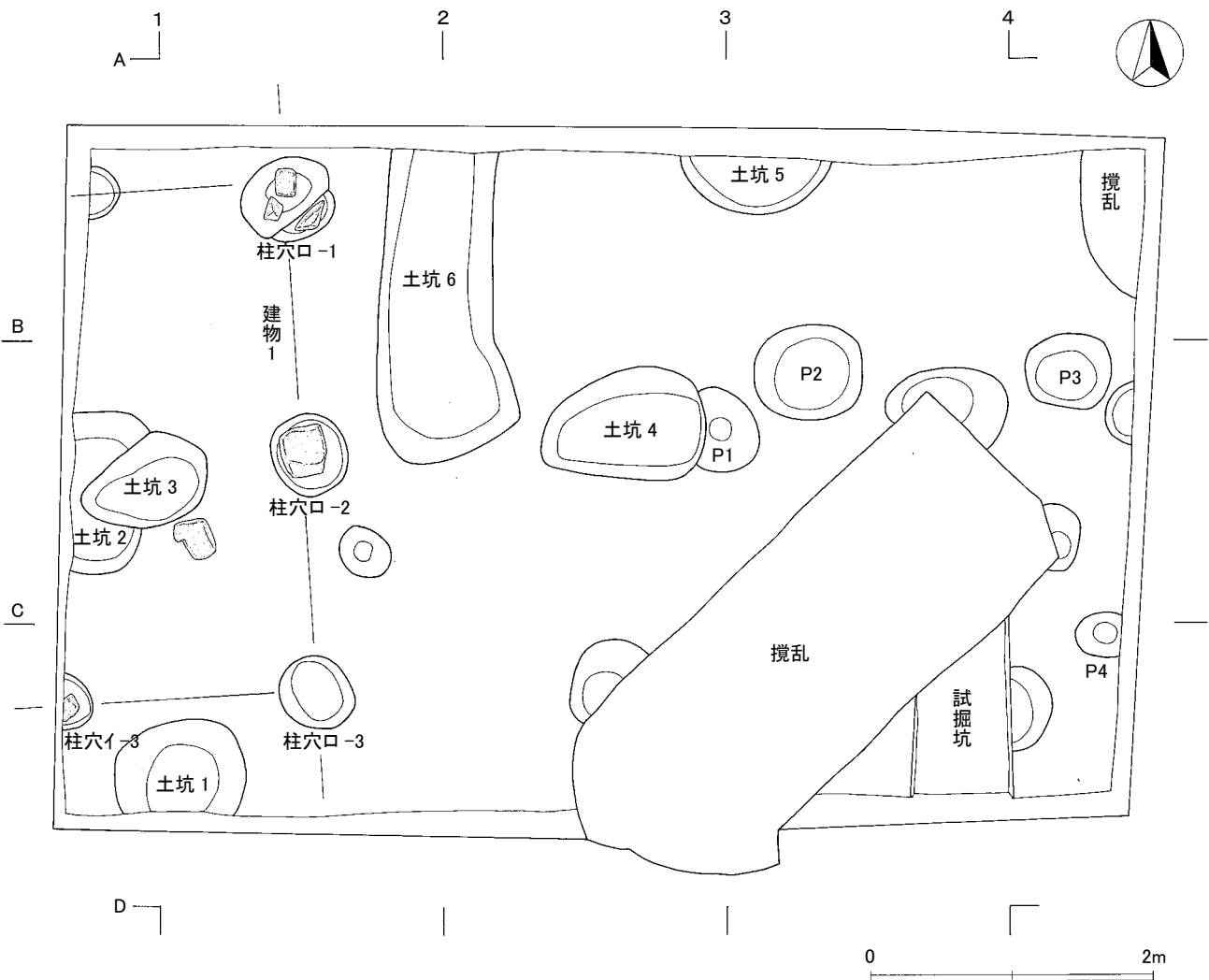


図8 第2面全側図

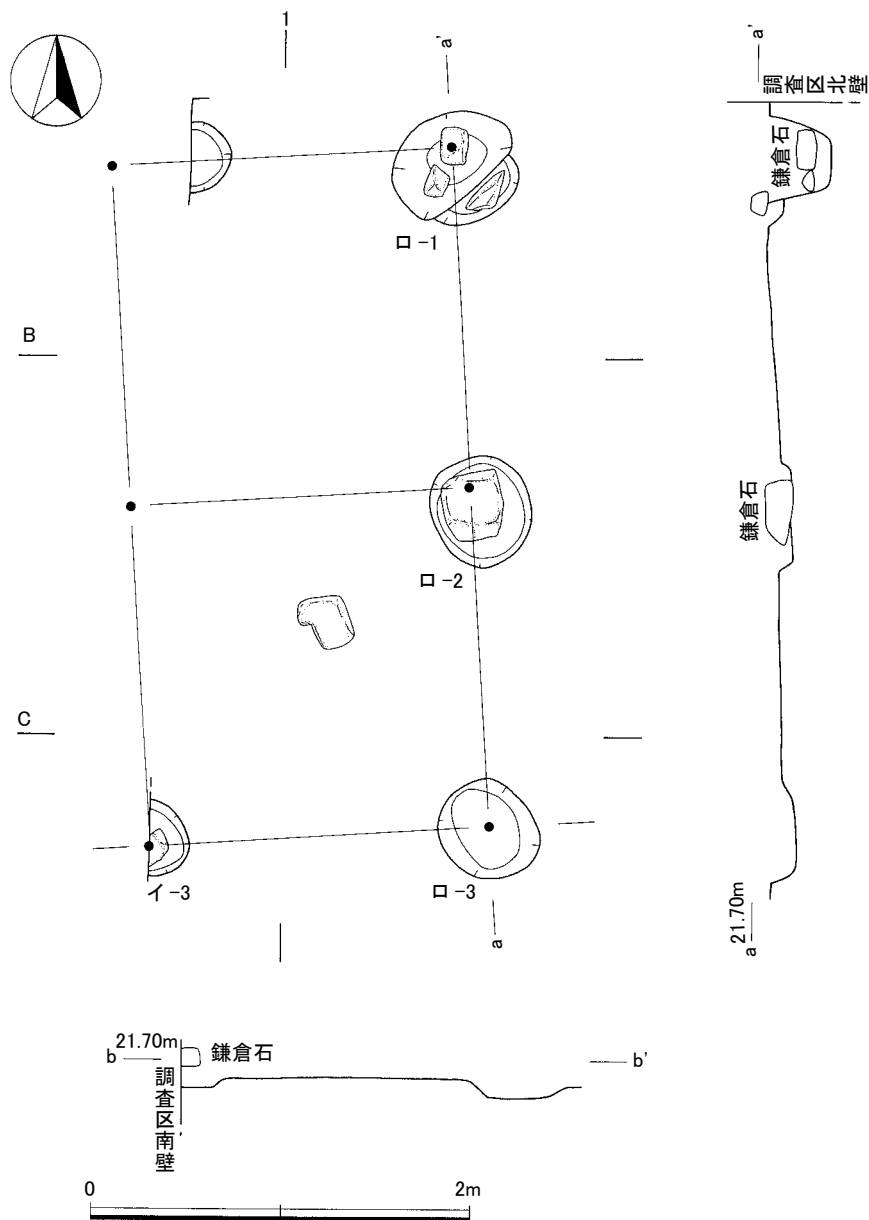


図9 第2面建物1

瓦類、金属製品などが出土しているが、貿易陶磁器や瀬戸窯製品は認められなかった(図8～11)。

建物1：調査区西側で南北二間・東西一間以上を検出した建物であり、柱穴口列が東の限界を示しているが、その他は調査区外に広がっていると考えられるので全容は不明である。掘り方は全体に浅いもので1口には鎌倉石の切石を伴っていたので礎石建物と推測したい。調査区内の確認した南北二間と東西一間の柱間寸法は各掘り方の芯々距離が各180cm(約6尺)を測り、主軸方位はN-2°30'-Wである。各掘り方は平面形状が不整円形を呈し、大きさが径45～60cm、深さ10～15cmと浅く平らな底面をもち、底面の海拔高21.50m前後である。なお口-2掘り方に遺存する礎石は長さ46cm、幅32cm、厚さ15cmの長方形の扁平な鎌倉石を用いている。土坑3に隣接して面上から発見された扁平な鎌倉石も含めて礎石の可能性が考えられよう。

土坑1：調査区南西隅近くに位置しており、南側は調査区外に広がる。確認できた大きさは東西径93cm、南北径65cm以上、深さ38cm、断面播鉢状の掘り方を呈し、底面の海拔高21.25m前後である。覆土は拳大土丹塊や鎌倉石小塊を多く含む暗茶灰色土の単一層、底面に炭化物の薄い堆積がある。出土遺物には図11-1ロクロ成形のかわらけ小皿である。

土坑2・3：調査区西壁中央に位置し、土坑2は建物1の礎石掘り方を壊して掘り込んでいるが、土坑3に壊された古い時期の遺構である。土坑2の確認できた規模は東西径115cm、南北径50cm以上、深さ18cmで断面皿状の浅い掘り方を呈し、底面の海拔高21.75mである。覆土は締りのない暗茶灰色弱粘質土の単一層で、遺物はかわらけ小片だけで図示可能な資料はなかった。

土坑3は規模が東西径95cm、南北径64cm、深さ18cmを測り、平面形は不整円形で断面皿状の浅い掘り方を呈する。底面の海拔高21.35mである。覆土は締りのない暗茶灰色弱粘質土の単一層であり、図示可能な遺物は2のかわらけ大皿だけである。

土坑4：B-3杭に近接した位置でP1を壊して検出された。規模は東西径115cm、南北径81cm、深さ15cm、不整円形を呈した断面皿状の浅い掘り方を有する。底面の海拔高21.75mである。覆土は締りのない暗茶灰色弱粘質土の単一層、図示可能な遺物は出土していない。

土坑5：A-3杭付近の南側、一部が調査区北壁に架かるが東西径110cm、南北径40cm以上、深さ20cmを測り、底面が平らな断面皿状の掘り方である。覆土は土丹粒、炭化物を多めに含む締りの弱い茶褐色土で遺物はかわらけ小片だけである。

土坑6：B-2杭付近の位置で東西位に長く調査区北壁外に広がる土坑である。確認した規模は南北径225cm以上、東西径75~96cm、深さは北端28cm~南端12cmを測り、底面が平らで断面逆台形の形状である。底面の海拔高は21.50m前後である。覆土は土丹粒・粗砂粒を多めに含む締りの弱い茶褐色土弱砂質土であり、図示可能な遺物の出土はない。

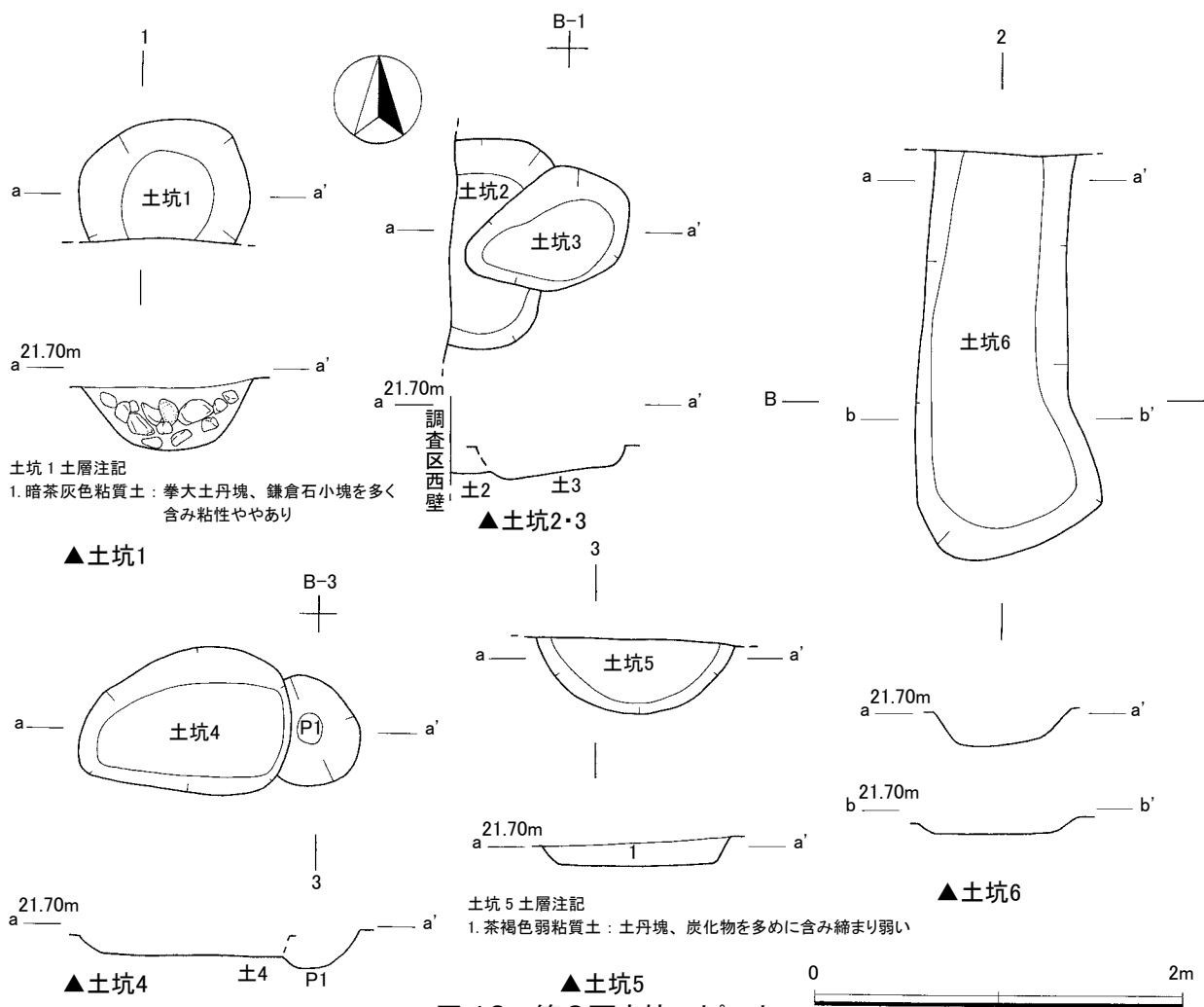


図10 第2面土坑・ピット

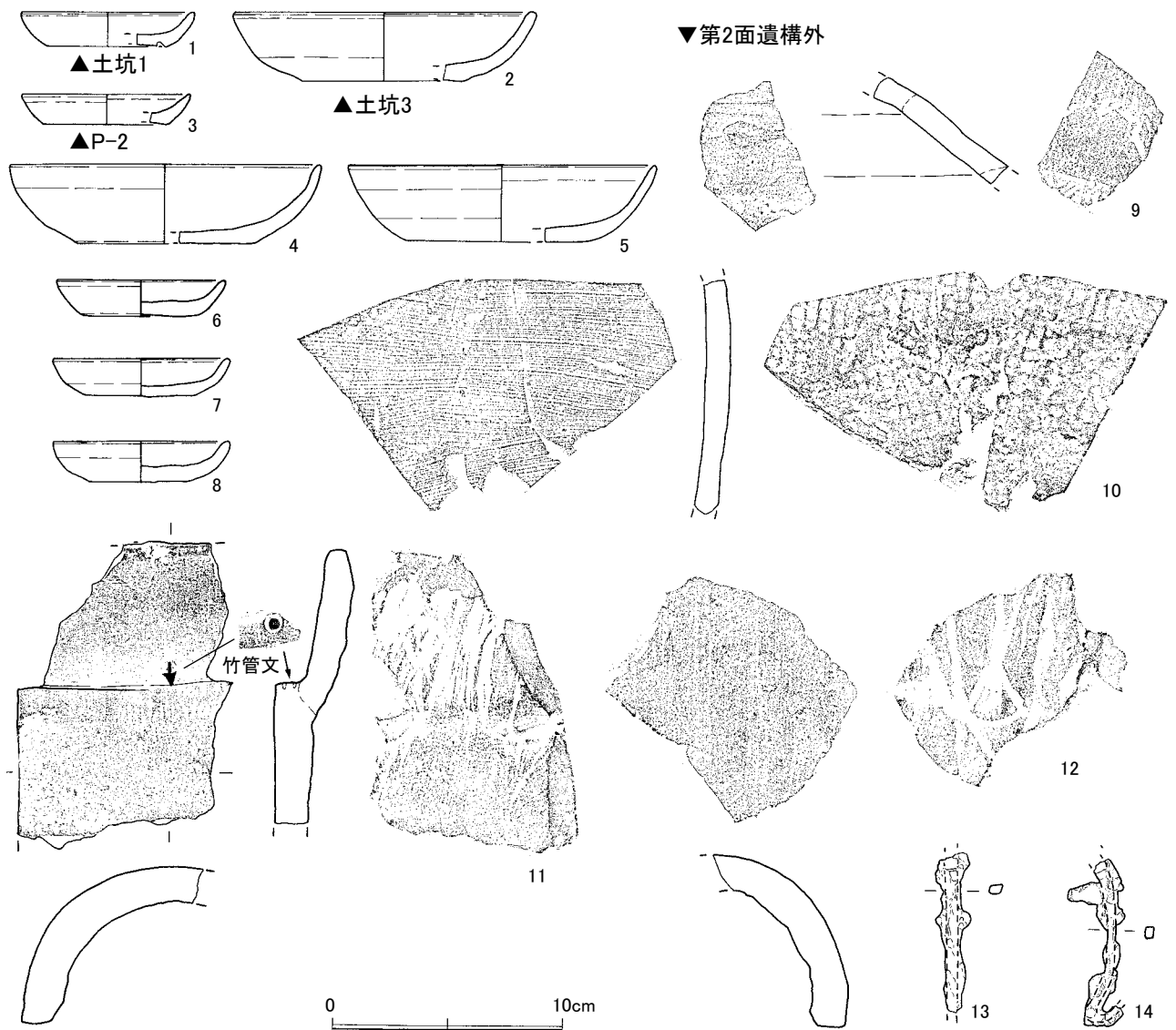


図 11 第2面遺構・遺構外出土遺物

ピット：検出したピットは柱穴並びの確かなものではなく、掘立柱建物や柵列を復元するには至っていない。ここでは出土遺物を伴う例や残りの良好なものについて触れることにする。土坑4と重複するP1は楕円形を呈し、長径63cm、短径52cm、深さ25cmを測り、覆土は鎌倉石粒を多く含む暗茶灰色弱砂質土である。P2は隅丸方形を呈し、長径73cm、短径62cm、深さ32cmを測り、覆土は土丹粒を多く含む茶褐色弱質土、遺物は図11-3のロクロ成形のかわらけ小皿である。

第2面遺構外出土遺物：遺構外出土遺物は第1面下～第2面上までに出土した資料である。4～8はロクロ成形のかわらけ大小皿である。4・5の大皿は粉質な胎土で薄手器壁の背高で有るのに対して6～8の小皿はやや粗胎で背低器形になる。9は常滑窯甕の肩部片、10は瀬戸内系軟質陶器で外面に格子目叩きを施した亀山窯系甕であろう。11・12は男瓦である。共に凸面は縄目叩きを施した後、縦位のナデ消しを施しており、凹面は黒色微砂の離れ砂と細かな布目痕を残す。胎土は夾雑物が多く粗いもので灰色、表面は黒灰色である。11の玉縁有段部に竹管文を押印していたが、これは永福寺Ⅱ期瓦（寛元・宝治年間の修理）や鎌倉極楽寺・多宝寺創建瓦と同じ竹管文を押印している。男瓦の制作技法や胎土・焼成など含めて同一の瓦工房製品と考えられる。

d. 第3面の遺構と遺物

第3面は版築地形層（7層）の第2面構築土を除去すると、8層の明茶褐色粘質土と9層の黒色土ブロック・2～5cm大土丹角を多く含み締りの強い暗茶褐色粘質土で構成された地形面である。この面は海拔高21.75m前後を計り、東端は山裾岩盤を掘削した平らな面に造成され、西側は岩盤削平面の高さに合わせて大小土丹塊を多量に詰め込んで粗く造成を行っていた。その上に黒褐色粘質土ブロックに粗粒凝灰岩の石粒や土丹粒を多く交えた締まりの強い硬化した地形を施していた。検出した遺構は土坑8基、掘立柱建物を構成しないピット10穴などであり、遺物はかわらけ、貿易陶磁器や常滑窯の国産陶器、金属製品などが出土した（図12～14）。

土坑1：C-2杭近くに位置し、南側は調査区外に拡がりため全容不明である。確認できた大きさは東西径154cm以上、南北径108cm、深さ15～25cm、断面皿状の掘り方を呈し、底面の海拔高21.25m前後である。覆土はかわらけ小片・土丹粒・炭化物を多め交えた締まりのない暗褐色土の単一層、底面上からかわらけ3点が出土している。図14-1～3はロクロ成形のかわらけ大小皿、2・3の大皿は口縁一部を打ち欠いた加工を施している。4は鉄釘である。

土坑2・4・8：調査区南西の位置で西壁に架かる重複した3基の土坑が検出された。切り合いの新旧関係は土坑2→4→8の順である。土坑2は東西径40cm・南北径50cm以上、深さ35cmで断面播鉢状の掘り方を呈し、底面の海拔高21.15mである。覆土は締まりのない暗茶灰色弱粘質土の単一層である。土坑4は東西径115cm・南北径110cm以上、深さ40cmで断面逆台形状の掘り方を呈し、底面の海拔高21.05mで

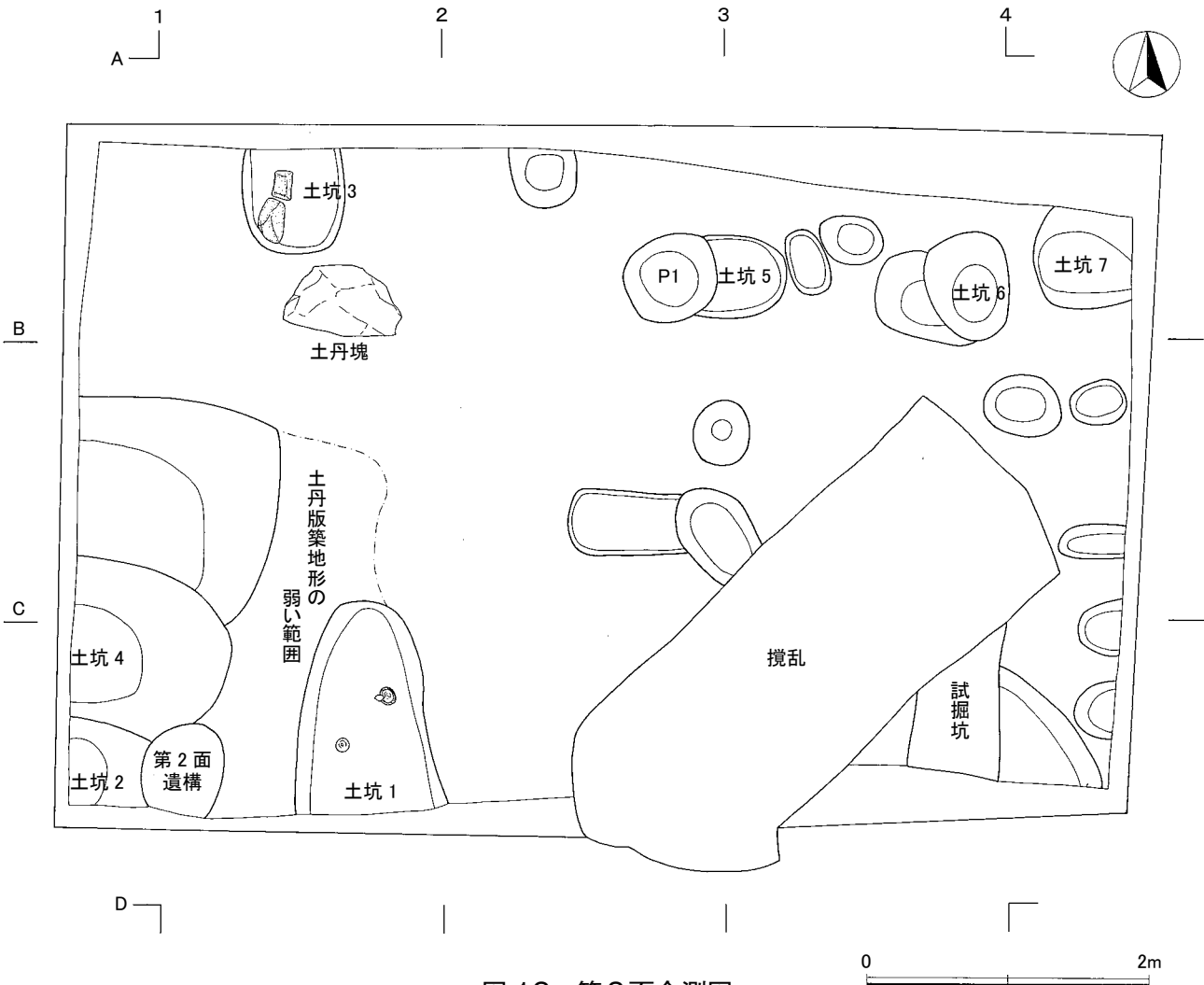
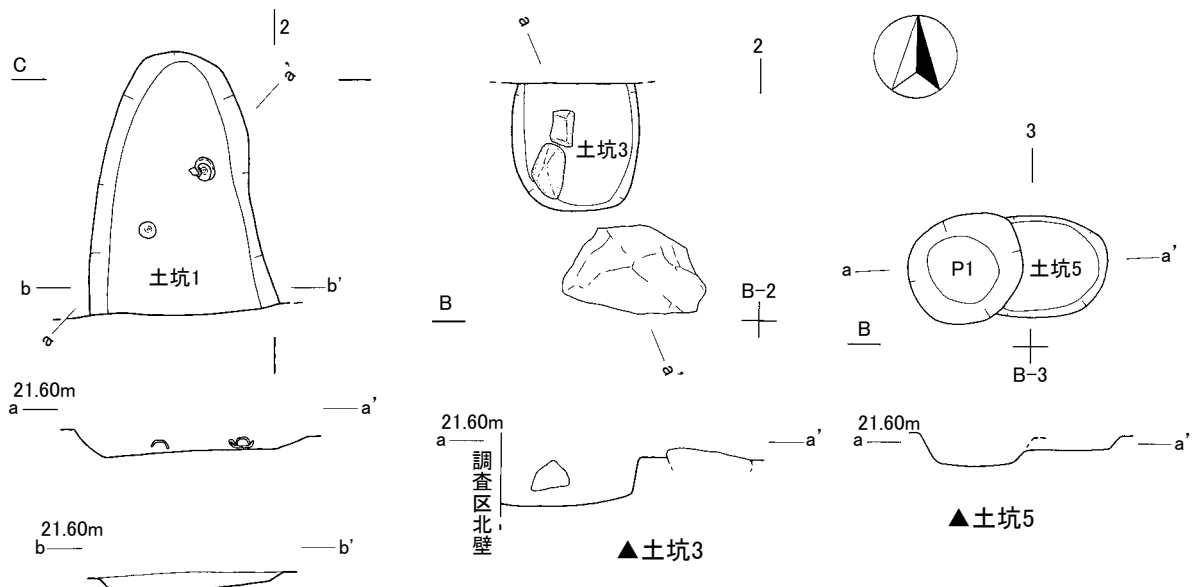


図12 第3面全測図



土坑1 土層注記
 1. 暗茶褐色粘質土：かわらけ小片、土丹粒、炭化物を含む

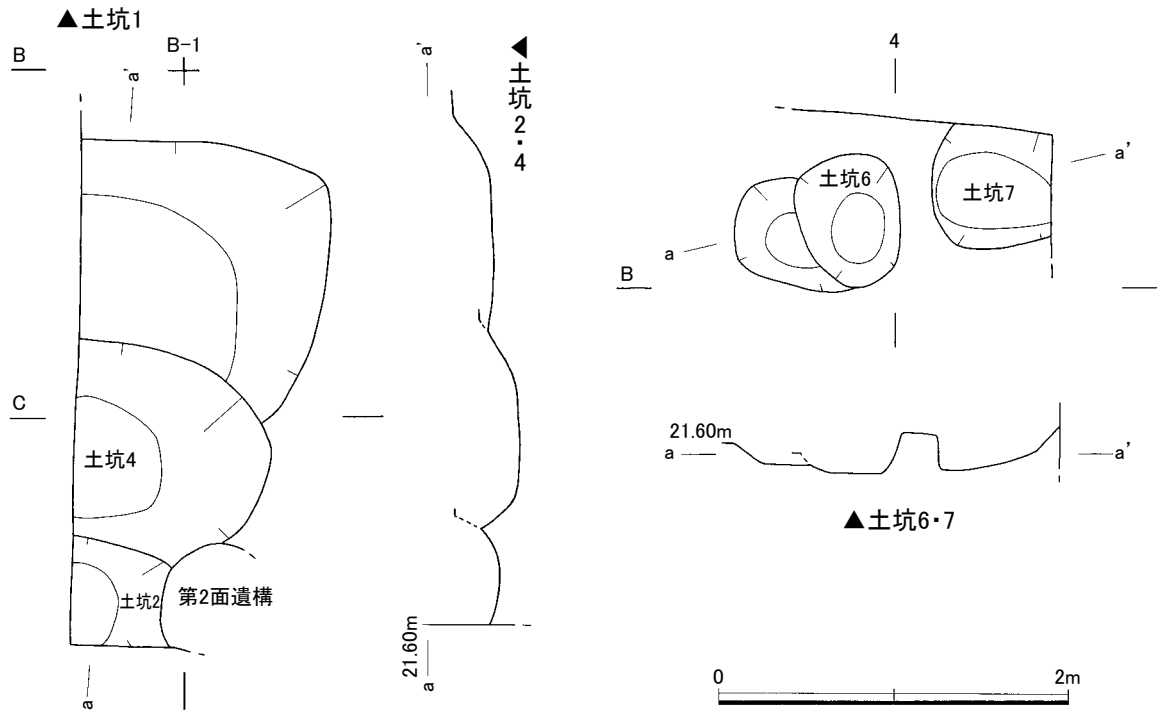


図13 第3面土坑・ピット

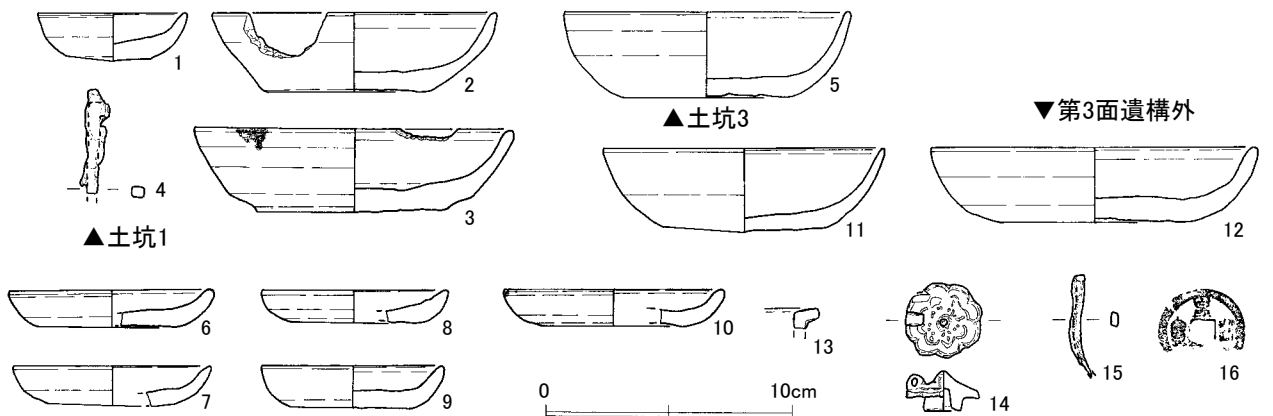


図14 第3面遺構・遺構外出土遺物

ある。覆土はかわらけ小片・炭化物を多く含む締りのない暗褐色土である。土坑 8 は東西径162cm、南北径142cm、深さ25cmを測り、断面皿状の浅い掘り方を呈する。底面の海拔高21.22mである。覆土は締りのない暗茶褐色弱砂質土である。土坑の 3 基は共にかわらけ小片だけで図示可能な遺物は出土しなかった。

土坑 3：調査区北西に位置で北壁に架かり全容不明である。確認した規模は東西径75cm以上、南北径72cm、深さ35cm、楕円形を呈した断面台形状の掘り方中に鎌倉石の破碎片 2 個を検出した。底面の海拔高21.20mである。覆土は 2 層からなり上層が暗褐色粘質土、下層は山砂のような茶褐色砂層の薄い堆積が認められた。図示可能な遺物は 5 のロクロ成形かわらけのみである。

土坑 5：B - 3 杭の位置でピットに削平されて検出した。確認した規模は東西径70cm以上、南北径58cm、深さ15cm、掘り方は楕円形を呈した断面皿状の浅いものである。覆土は炭化物を多量に含んだ暗褐色砂質土である。図示可能な遺物の出土はみられない。

土坑 6・7：B - 4 杭に近接した位置で検出した。土坑 6 は楕円形を呈し、南北径77cm、東西径58cm、深さ33cm程で断面台形状の掘り方である。覆土は粗い砂を多く含む暗褐色砂質土である。土坑 7 は調査区外に拡がり、東西径75cm・南北径72cm以上、深さ30cmを測り、覆土は拳大土丹塊を少量含む暗茶褐色粘質土である。遺物は共に図示不可能なかわらけ小片だけであった。

第 3 面遺構外出土遺物：ここでは第 2 面構築土及び第 3 面上より出土した遺構に伴わない資料を一括

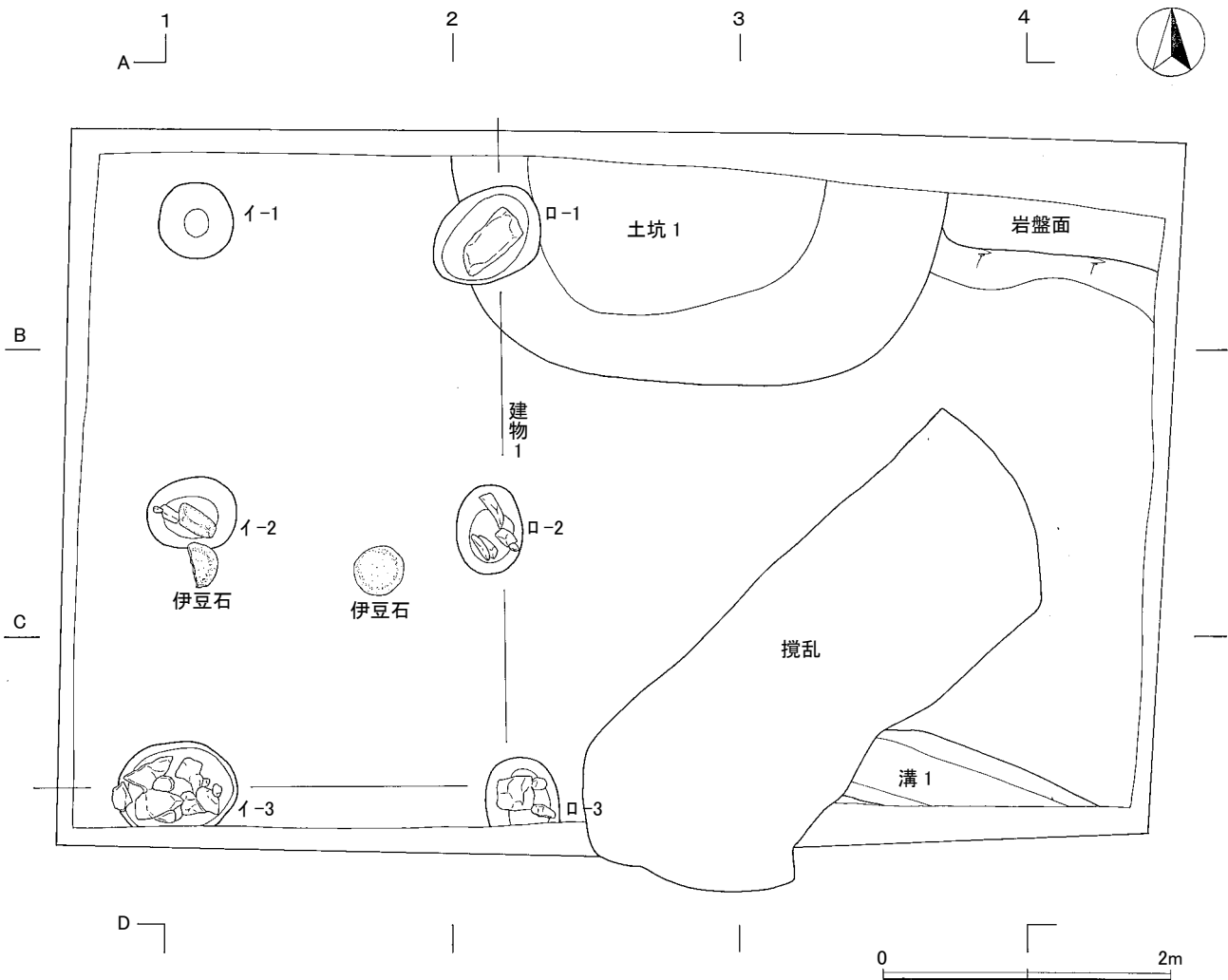


図 15 第 4 面全測図

して述べる。図14-6~12はロクロ成形のかわらけ皿である。小皿は口径が8 cm以上（6・7・10）と、それ以下（8・9）に大別され、11は粉質な胎土で薄手器壁の背高な器形であるのに対し、12は厚手の器壁をもち背低器形である。13・14は舶載磁器の青白磁香炉と水注の蓋、15は鉄釘、16は北宋銭の皇宋通宝（初鑄1038年）である。

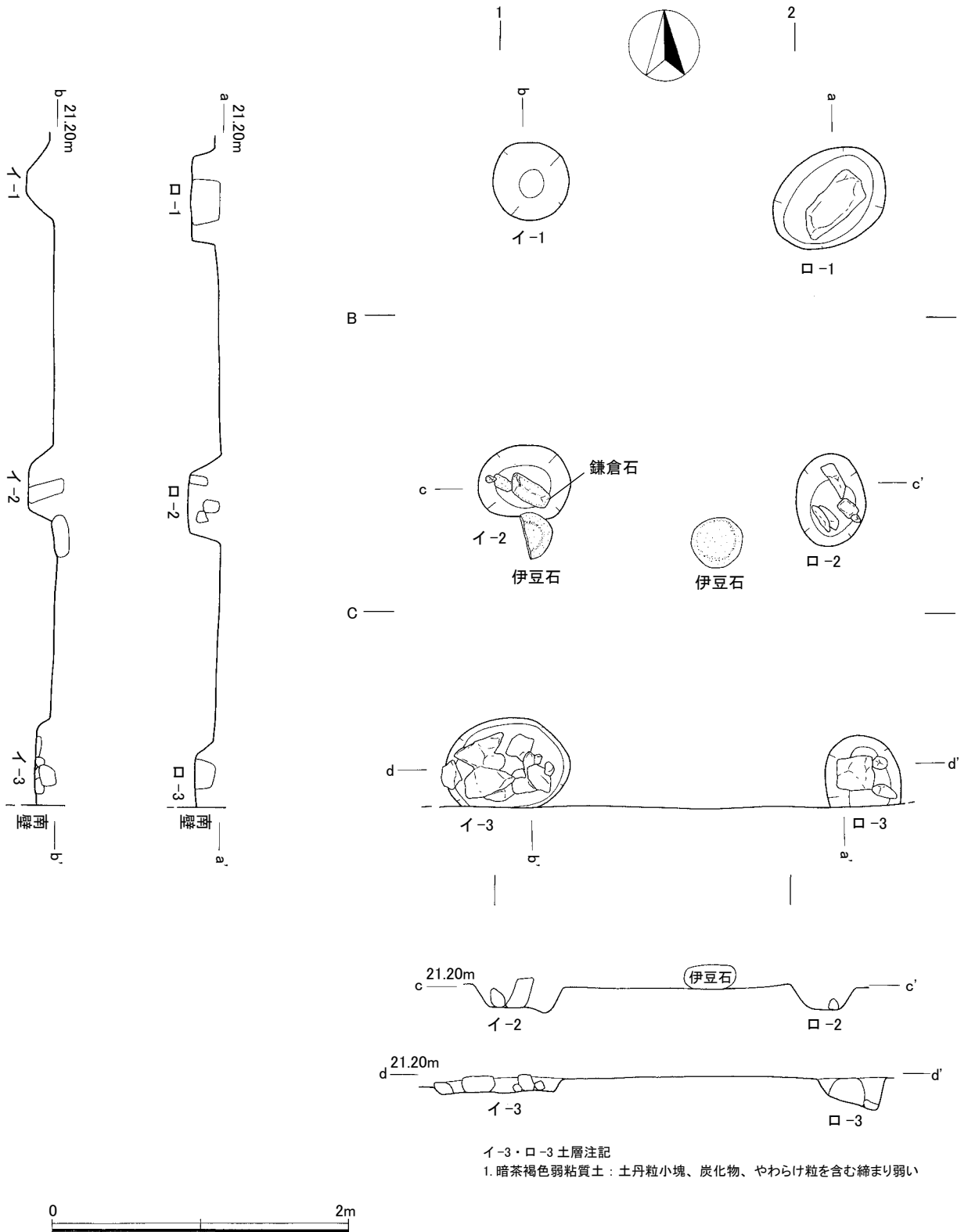


図 16 第4面建物 1

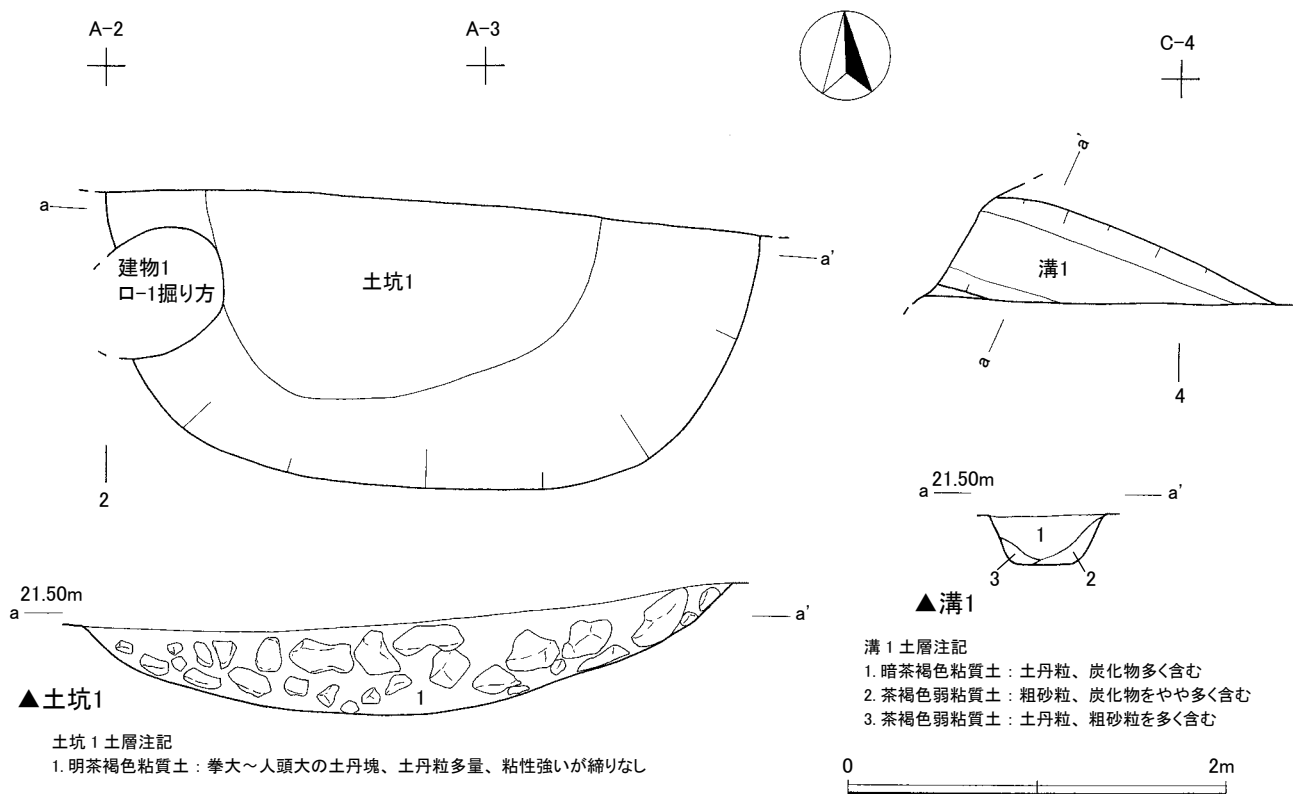


図17 第4面土坑・溝

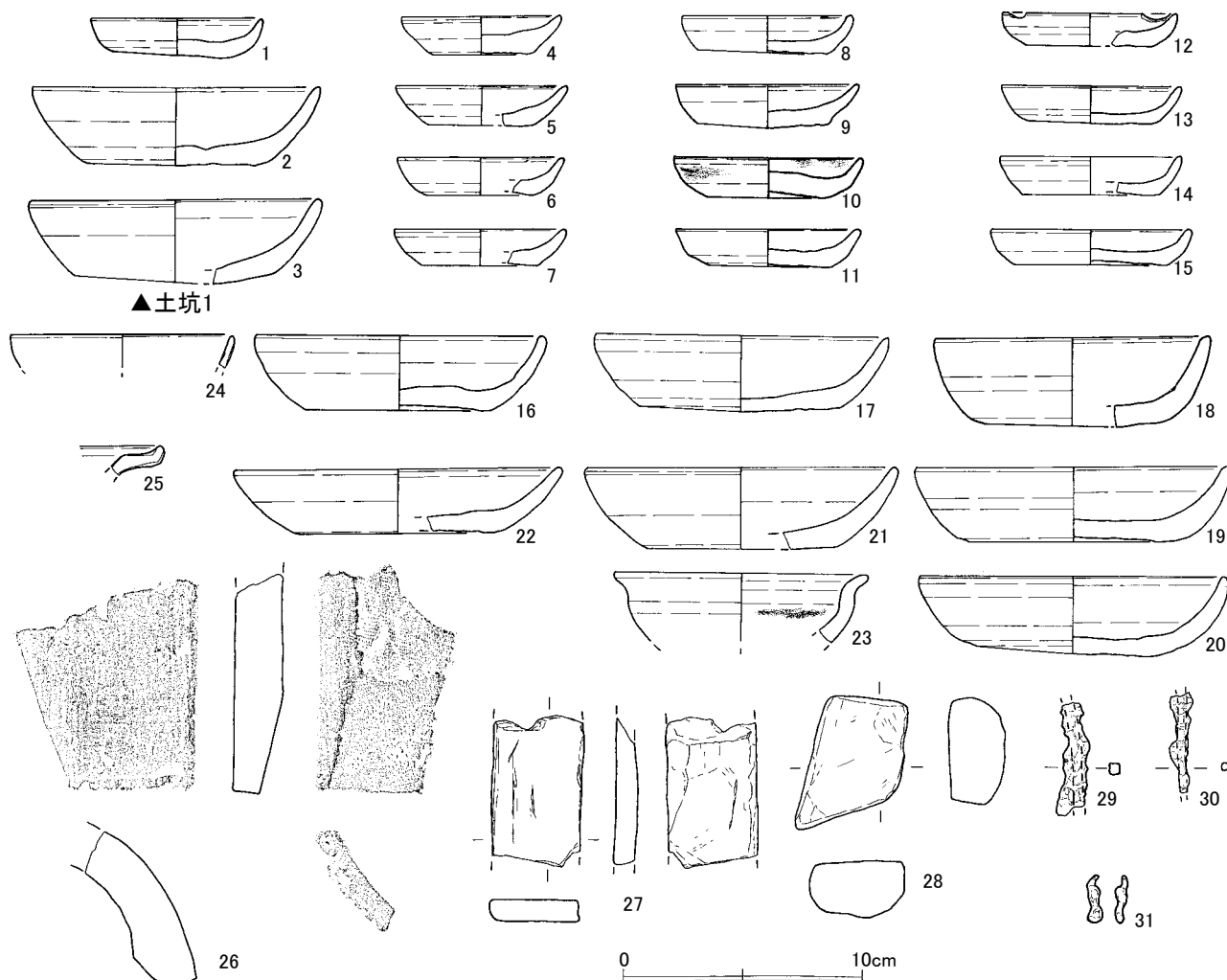


図18 第4面遺構・遺構外出土遺物

e. 第4面の遺構と遺物

第3面を構成していた厚い大小土丹塊の地形層を除くと、茶褐色粘質土で小土丹塊を多めに混ぜた締まりのある平坦面が拡がっており、これを第4面とした。検出された遺構は礎石建物1軒、土坑1基、溝1条などが検出された。出土した遺物は主にかわらけ、少量の貿易陶磁器や国産陶器、瓦類、石・金属製品などである（図15～18）。

建物1：調査区西側で南北二間・東西一間以上を検出した建物であり、柱穴ロ列が東の限界を示しているが、その他は調査区外に拡がっているため全容は不明である。掘り方は全体に浅いもので2口に鎌倉石の切石を伴っており、さらに面上から伊豆石2個も発見されたので礎石建物と推測したいところである。確認した規模は南北二間と東西一間であり、柱間寸法は各掘り方の芯々距離から各198cm（約6.5尺）を測り、主軸方位はN - 2° 20' - Wである。各掘り方は平面形状が楕円～不整円形を呈し、大きさが径45～80cm、深さ12～20cmと浅く平らな底面をもつ掘り方である。掘り方内には栗石と思しき大小土丹塊や鎌倉石片が認められた。底面の海拔高21.05m前後である。なおイ-2掘り方の礎石は正位置な状況で据えられていたものではないが長さ36cm、幅32cm、厚さ15cmの長方形の扁平な鎌倉石を用いていた。この掘り方南肩の位置で半分に割れた伊豆石があり、さらにロ-2掘り方に隣接した位置で径約35cmの円形で扁平な伊豆石も発見されており、これらの伊豆石は礎石建物から抜き取られた礎石の可能性が考えられよう。

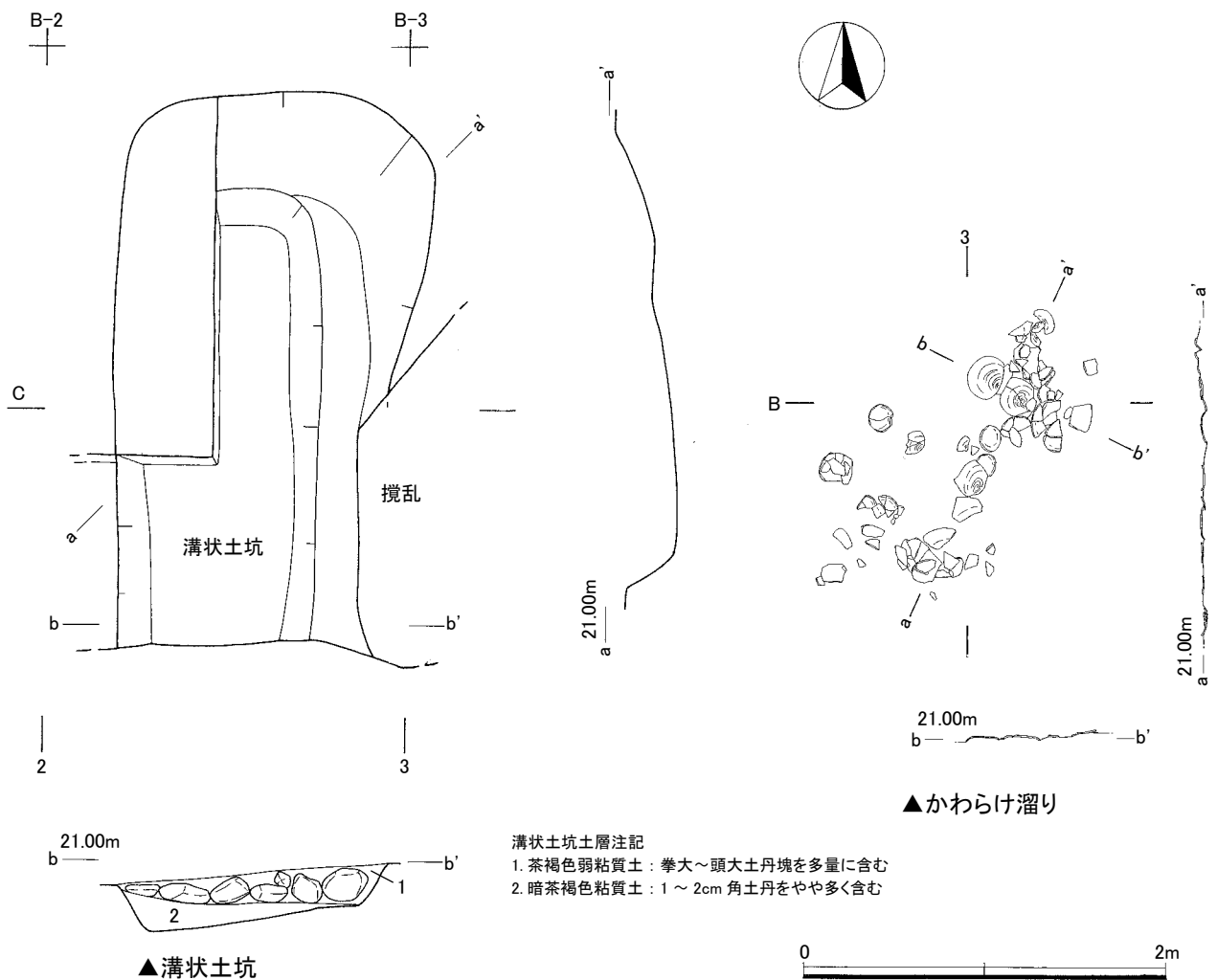


図 19 第5面全測図

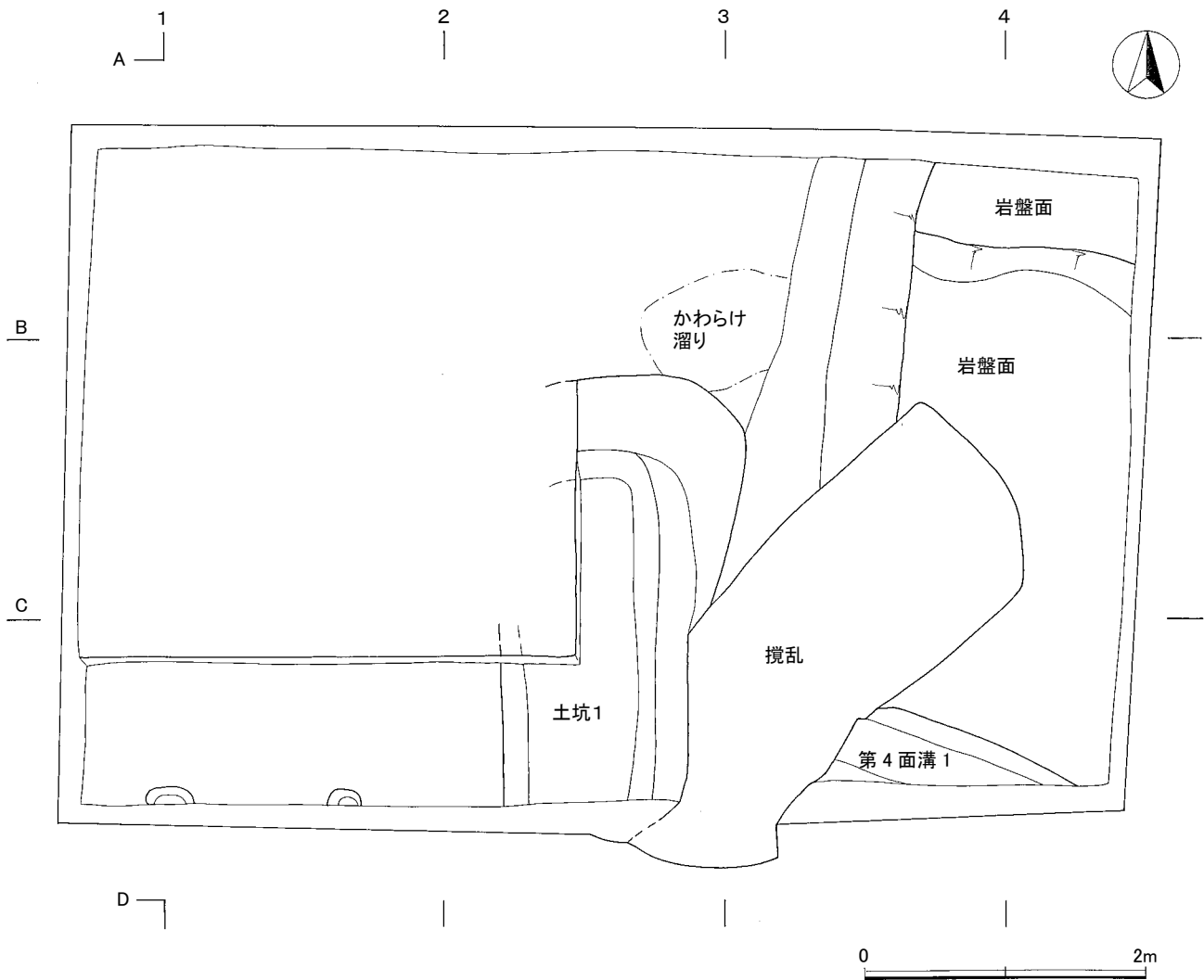


図 20 第5面土坑・かわらけ溜り

土坑1：調査区北壁中央の位置で検出した大型土坑で壁面外へ拡がるため全形は不明である。確認できた規模は東西径346cm、南北径152cm以上、深さ50cm、断面皿状の掘り方を呈し、底面の海拔高21.0m前後である。覆土は拳大～人頭大の大小土丹塊を多く混入した締まりのない茶褐色粘質土であり、遺物は図18-1～3でロクロ成形のかわらけ大小皿が出土した。

溝1：調査区南壁東端の位置で岩盤を掘り込んだ東西位の溝が検出された。東端は調査区外に延びているが、西端は重機掘削の攪乱坑で破壊されていた。確認できた規模は長さ165cm以上、上幅62cm、下幅34cm、深さ28cmで断面台形状を呈し、溝底の海拔高21.1mを測る。覆土は下層が茶褐色弱粘質土（2・3層）、上層は暗茶褐色粘質土で良好な出土遺物はない。

第4面遺構外出土遺物：ここでは第3面構築土及び第4面上から出土した遺構に伴わない資料を一括して述べる。図18-4～22はロクロ成形のかわらけ大小皿である。小皿は主に口径7cm代、器高1.4～1.7cmの背低気味で口径・底径の比率が小さな資料が主体を占めている。大皿は口径11.5～13.2cmと一定してないが、厚手気味の器壁で口径・底径の比率が小さめである。23はかわらけ質の鉢型土製品である。24・25は舶載磁器の青磁碗・折縁皿、26は丸瓦、27・28は砥石、29・30は鉄釘片、31は不明銅製品である。

f. 第5面の遺構と遺物

第4面を構成していた10・11層の地形層を除去すると、調査区北東域が岩盤削平面、南西域が黒褐色粘

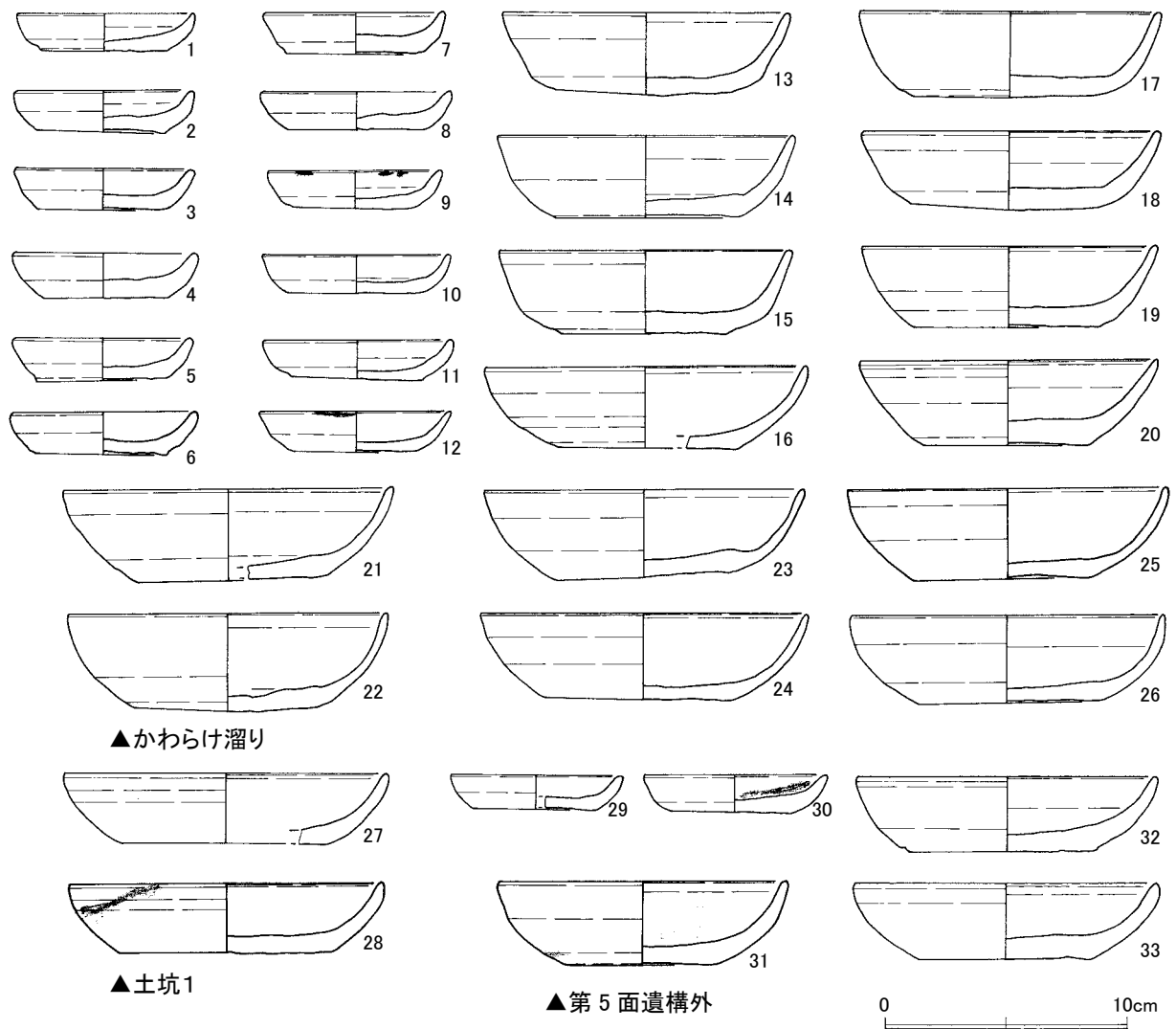


図 21 第5面遺構・遺構外出土遺物

質土の中世基盤層（中世地山）からなる平坦面が広がっていたので、これを第5面とした。遺構確認面の海拔高20.9～21.0mである。検出した遺構は土坑2基、かわらけ溜り1ヶ所、ピット2穴などが認められ、この面に伴う遺物は大半がかわらけで占められていた（図19～21）。

土坑1・2：調査区中央で壁面に架かる重複関係にある大型の土坑2基を検出したが、土坑1は土坑2を壊して掘り込んでいる。土坑1は南北方向に走る溝状の土坑である。確認した規模は南北長250cm以上、幅150cm前後、確認面からの深さ約28cmである。遺構覆土は上下2層からなり、上層が拳大～頭大土丹塊を多く混入した茶褐色弱粘質土、下層は土丹粒を含む暗茶褐色粘質土とともに締りのないもので、出土遺物は図21-27・28のロクロ成形のかわらけである。土坑2は重機掘削の攪乱坑と土坑1で掘り方の大半が掘平された状況であった。大きさは径180cm以上、深さ25cm程で覆土は炭化物を多めに混入した暗茶褐色粘質土である。出土遺物は少量のかわらけ細片だけである。

かわらけ溜り：B-3杭付近で検出したかわらけ溜りである。かわらけ溜りは南北180cm、東西110cm程の範囲に不規則な上下の位置関係でかわらけが認められた。出土状況の観察から少なくとも26個体以上が面上に一括廃棄されたものと想定された。出土遺物の1～26はすべてロクロ成形のかわらけである。小皿は口径7.1～7.8cmとやや小口径の背低の器形となる傾向を示しており、大皿は口径12.0～13.6cm、やや背高気味の内彎した器形が主体を占めていた。

第5面遺構外出土遺物：29～33はロクロ成形のかわらけである。小皿は口径7.1cm・7.6cm、底径5.2cm前後、器高1.4cm・1.6cmで小さめの口径で背低の器形を呈し、大皿は口径12.0～12.6cmとやや小口径で内彎した器形である。

表2 I 地点遺物観察表(1)

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			〈長さ〉	〈幅〉	〈高さ〉	
7-1	第1面遺構外	かわらけ	7.2	4.7	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c. 橙色 e. 良好
7-2	"	かわらけ	(7.7)	(5.1)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒粗土 c. 黄橙色 e. 良好
7-3	"	かわらけ	(7.3)	(5.2)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 口縁部に煤付着し灯明皿
7-4	"	かわらけ	(7.5)	(5.2)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
7-5	"	かわらけ	(7.2)	(5.3)	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
7-6	"	かわらけ	(7.5)	(5.3)	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
7-7	"	かわらけ	(7.9)	(5.1)	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 黄橙色 e. 良好
7-8	"	かわらけ	(8.9)	(6.1)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
7-9	"	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 黄橙色 e. 良好
7-10	"	かわらけ	(9.2)	(5.0)	2.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 橙色 e. 良好 f. 口唇部の一部打ち欠き・煤付着 灯明皿
7-11	"	かわらけ	(12.4)	(6.1)	3.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少ない 良土 c. 橙色 e. 良好
7-12	"	かわらけ	(12.1)	(8.0)	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 口縁部に煤付着 灯明皿
7-13	"	瀬戸 入子	口縁部			a. ロクロ b. 精良緻密 c. 灰色 d. 口縁部に緑灰色の斑な自然降灰 e. 良好
7-14	"	鏡瓦 (軒丸瓦)				a. 瓦当部印籠付 瓦当面離れ砂 b. 灰白色 砂粒 黒色粒 やや粗土 e. 良好 硬質 f. 外区に連珠文と圏線 三巴文と考えられる
7-15	"	女瓦 (平瓦)	厚 1.1 ~ 1.4			a. 凸型一枚造り 凹面布目痕 離れ砂付着 端縁へラ削り 凸面斜格子叩目痕 離れ砂付着 b. 灰色 砂粒 小石粒 粗土 c. 灰褐色 e. 良好 f. 永福寺Ⅲ期瓦と同類
7-16	"	女瓦 (平瓦)	厚 1.2 ~ 1.4			a. 凸型一枚造り 凹面糸切痕 凸面斜格子状叩目痕 凹凸面離れ砂付着 側面へラ削り後ナデ b. 灰色 砂粒 小石粒 粗土 c. 暗灰色 e. 良好 f. 永福寺Ⅲ期瓦と同類
7-17	"	女瓦 (平瓦)	厚 1.7 ~ 1.9			a. 凸型一枚造り 凹面 端縁へラ削り 凸面斜格子叩目痕 凹凸面離れ砂付着 b. 淡赤橙色 砂粒多い 粗土 c. 暗灰褐色 e. 良好 f. 永福寺Ⅲ期瓦と同類
7-18	"	男丸 (丸瓦)	厚 1.8 ~ 2.0			a. 凸面縄目叩きをナデ磨り消す 凹面糸切痕 布目痕 b. 淡赤橙色 小石粒 砂粒 やや粗土 c. 暗灰褐色 e. 不良
7-19	"	銅製品 飾金具	長 2.9 上端 1.5 下端 1.3			a. 薄板を筒状に折り曲げる 上端山形に細工下端に向け窄まる器形 目釘穴 f. 蓮華唐草文毛彫り 筒内に腐食した木製柄が残存
7-20	"	銅製品 環状	径 2.8 断面径 0.3			a. 断面丸棒状 環状に丁寧な折り曲げ加工
11-1	第2面土坑1	かわらけ	(7.5)	(5.1)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒粗土 c. 黄橙色 e. 良好
11-2	第2面土坑3	かわらけ	(12.9)	(7.1)	3.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 赤色粒少なめ やや良土 c. 橙色 e. 良好
11-3	第2面P-2	かわらけ	(7.4)	(5.5)	1.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂多め 海綿骨 赤色粒 やや粗土 c. 赤橙色 e. 良好
11-4	第2面遺構外	かわらけ	(13.5)	(7.5)	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少なく 良土 c. 橙色 e. 良好
11-5	"	かわらけ	(13.3)	(8.2)	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少なめ やや良土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部に煤付着 灯明皿
11-6	"	かわらけ	(7.3)	(4.4)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
11-7	"	かわらけ	(7.6)	(4.8)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや多め粗土 c. 黄橙色 e. 良好
11-8	"	かわらけ	(7.7)	(4.4)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 灯明皿
11-9	"	常滑甕	肩部			a. 輪積技法 b. 暗黄灰色 白色粒 黒色粒 砂粒 小石粒 やや粗土 c. 暗赤褐色 f. 肩部外面に叩き目痕
11-10	"	東播系甕	胴部			a. 輪積技法・外面格子目叩き痕 内面横位丁寧なナデ b. 灰色 白色粒 黒色粒 砂粒 小石粒 c. 表面暗灰色

表3 I 地点遺物観察表(2)

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
11-11	第2面遺構外	男瓦(丸瓦)	厚 1.5 ~ 1.8			a. 凸面縄目叩き痕後に縦位ナデで磨り消す 凹面布目痕 布絞り目痕 玉縁部端縁は幅広へら削り b. 砂粒 小石粒多め やや粗土 c. 灰色(暗灰色) e. 良好 f. 玉縁段部に竹管文押印
11-12	"	男瓦(丸瓦)	厚 1.5 ~ 1.8			a. 凸面縄目叩き痕後に縦位ナデで丁寧に磨り消す 凹面布目痕 引き紐の痕跡 b. 灰色 砂粒 小石粒多め 粗土 c. 表面灰黒色 e. 良好
11-13	"	鉄釘	残長 6.8 幅 0.5 厚 0.5			a. 鍛造 f. 断面四角形
11-14	"	鉄釘	残長 8.5 幅 0.6 厚 0.3			a. 鍛造 f. 断面四角形
14-1	第3面土坑1	かわらけ	(6.0)	(3.7)	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c. 黄橙色 e. 良好
14-2	"	かわらけ	11.4	6.6	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 口縁一ヶ所U形に打ち欠き
14-3	"	かわらけ	12.9	7.8	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 海綿骨芯 微砂 赤色粒多め 粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 煤付着 口唇部打ち欠き 灯明皿か
14-4	"	鉄釘	残長 3.7 幅 0.5 厚 0.4			a. 鍛造 f. 断面四角形
14-5	第3面土坑3	かわらけ	11.6	6.7	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
14-6	第3面遺構外	かわらけ	(8.3)	(6.0)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒やや多め やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
14-7	"	かわらけ	(8.0)	(5.2)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少なめ 良土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 器表面荒れる
14-8	"	かわらけ	(7.5)	(5.1)	1.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
14-9	"	かわらけ	7.4	5.0	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂少なめ 海綿骨芯 良土 c. 黄橙色 e. 良好
14-10	"	かわらけ	(8.9)	(5.9)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
14-11	"	かわらけ	(11.5)	(6.7)	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少なく やや良土 c. 橙色 e. 良好
14-12	"	かわらけ	(13.2)	(7.6)	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや多く 粗土 c. 橙色 e. 良好
14-13	"	青白磁 香炉	口縁部			a. 口縁上端で外方へ張り出す b. 灰白色 精良堅緻 d. 明灰青色透明 やや厚手施釉 気泡あり f. 二次焼成受け器表荒れる
14-14	"	青白磁 水注 蓋	3.0	1.5	1.6	a. 型押し成形作り 輪花形 b. 灰色 精良堅緻 d. 明緑青灰色半透明 やや厚手施釉 気泡多い f. 天部蓮華文と蓋 環状部あり
14-15	"	鉄釘	残長 4.2 幅 0.3 厚 0.6			a. 鍛造 f. 断面四角形
14-16	"	銅銭	外径 2.36 内径 1.86 孔径 0.6 厚 1.2			f. 文字配置や書体から皇宋通寶と推定 北宋 初鑄年 1038
18-1	第4面土坑1	かわらけ	7.2	5.2	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
18-2	"	かわらけ	(12.1)	(7.1)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
18-3	"	かわらけ	(12.1)	(8.5)	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
18-4	第4面遺構外	かわらけ	(6.7)	(4.3)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
18-5	"	かわらけ	(7.3)	4.6	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
18-6	"	かわらけ	(7.1)	(4.6)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 海綿骨芯 微砂 赤色粒多め やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部に煤付着 灯明皿
18-7	"	かわらけ	(7.2)	(4.9)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
18-8	"	かわらけ	7.2	5.5	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 煤付着
18-9	"	かわらけ	7.8	5.6	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 砂質粗土 c. 黄橙色 e. 良好
18-10	"	かわらけ	(7.9)	(4.9)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少なく 良土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 口縁部に煤付着 灯明皿
18-11	"	かわらけ	7.7	5.2	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 斑に橙色 e. 良好

表4 I 地点遺物観察表(3)

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
18-12	第4面遺構外	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 打ち欠き痕あり
18-13	"	かわらけ	7.5	5.3	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
18-14	"	かわらけ	(7.6)	(5.8)	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒多め やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
18-15	"	かわらけ	(8.3)	(6.2)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
18-16	"	かわらけ	(12.2)	(7.8)	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多い 海綿骨芯 赤色粒 砂質粗土 c. 黄橙色 e. 良好
18-17	"	かわらけ	(12.2)	(8.1)	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒多め 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
18-18	"	かわらけ	(12.3)	(7.3)	3.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
18-19	"	かわらけ	(12.7)	(8.7)	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂少なめ 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 赤橙色 e. 良好
18-20	"	かわらけ	(13.0)	(7.1)	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質粗土 c. 黄橙色 e. 良好
18-21	"	かわらけ	(12.9)	(7.9)	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
18-22	"	かわらけ	(13.6)	(8.2)	2.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや粗土 c. 赤橙色 e. 良好
18-23	"	かわらけ質 鉢形	口径 (10.6)			a. ロクロ 口縁部外反気味 b. 微砂少量 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 外面 橙色 内面黄橙色 e. 良好
18-24	"	龍泉窯青磁 無文碗	口径 (9.4)			a. ロクロ 小型碗 b. 灰白色 黒色粒含むが良胎 d. 淡灰緑色半透明 厚手施釉 e. 堅致
18-25	"	龍泉窯青磁 折縁皿	口縁部			a. ロクロ 折縁で端部上方へつまみ上がる b. 灰白色 精良堅緻 d. 緑褐色不透明 厚手施釉
18-26	"	男瓦(丸瓦)	厚 1.4 ~ 2.3			a. 凸面縄目叩きを横位ナデで磨り消す 凹面布目痕 口端縁幅広のへら削り 側縁幅広のへら削り b. 赤色粒 小石粒 粗土 c. 灰色 e. 良好
18-27	"	砥石	残長 6.3 残存幅 3.8 厚 0.8 ~ 0.9			a. 長方形板状 砥面は上下面 両側面は刃物切断痕 c. 黄色味灰白色 f. 京都鳴滝産 仕上砥
18-28	"	砥石	長 5.7 幅 3.8 厚 2.3			a. 砥面 4 面使用痕 c. 赤味灰色と黄灰色の斑状 d. 凝灰岩質 f. 中砥 長崎県天草産と思われる
18-29	"	鉄釘	残長 4.1 幅 0.4 厚 0.4			a. 鍛造 f. 断面四角形
18-30	"	鉄釘	残長 3.8 幅 0.3 厚 0.3			a. 鍛造 f. 断面四角形
18-31	"	銅製品	長 2.0 幅 0.7 厚 0.3			f. 用途不明 二次焼成で融解ものか
21-1	第5面 かわらけ溜り	かわらけ	7.1	5.0	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c. 内面: 橙色 外面: 黄橙色 e. やや甘い
21-2	"	かわらけ	7.3	5.5	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c. 黄橙色 e. 良好
21-3	"	かわらけ	7.2	5.4	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
21-4	"	かわらけ	7.4	5.3	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 橙色 e. 良好
21-5	"	かわらけ	7.3	5.4	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 内面: 橙色 外面: 黄橙色 e. 良好
21-6	"	かわらけ	7.5	5.4	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 砂質粗土 c. 橙色 e. 良好
21-7	"	かわらけ	7.4	5.5	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質良土 c. 黄橙色 e. 良好
21-8	"	かわらけ	7.8	5.8	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂少なく 海綿骨芯 やや良土 c. 橙色 e. 良好
21-9	"	かわらけ	7.1	5.2	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少量 やや良土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
21-10	"	かわらけ	(7.6)	5.9	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
21-11	"	かわらけ	7.6	5.5	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 黄橙色 一部橙色 e. 良好
21-12	"	かわらけ	(7.8)	(5.5)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少なめ やや粉質良土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿

表5 I 地点遺物観察表 (4)

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
21-13	第5面 かわらけ溜り	かわらけ	(12.0)	(7.6)	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 多め 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
21-14	"	かわらけ	(12.3)	8.0	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 砂質粗土 c. 黄橙色 e. 良好
21-15	"	かわらけ	(12.2)	(6.9)	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
21-16	"	かわらけ	13.4	7.6	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質粗土 c. 黄橙色 e. 良好
21-17	"	かわらけ	12.4	7.8	3.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. やや甘い
21-18	"	かわらけ	12.3	7.8	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
21-19	"	かわらけ	12.2	7.7	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
21-20	"	かわらけ	12.4	6.9	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
21-21	"	かわらけ	13.6	8.0	3.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 粉質良土 c. 橙色 e. 良好
21-22	"	かわらけ	(13.2)	(7.6)	4.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
21-23	"	かわらけ	13.4	7.3	3.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
21-24	"	かわらけ	13.6	8.0	3.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. やや不良
21-25	"	かわらけ	13.3	7.4	3.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂少なく 海綿骨芯 良土 c. 黄橙色 e. 良好
21-26	"	かわらけ	13.0	7.5	3.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質気味良土 c. 橙色 e. 良好
21-27	第5面 土坑1	かわらけ	(13.4)	(8.6)	2.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好
21-28	"	かわらけ	(13.1)	(8.8)	2.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 煤付着 灯明皿
21-29	第5面遺構外	かわらけ	(7.1)	(5.3)	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
21-30	"	かわらけ	7.6	5.2	1.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 内壁面に煤付着 灯明皿か
21-31	"	かわらけ	(12.0)	(6.2)	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 内外面煤付着
21-32	"	かわらけ	(12.4)	(7.8)	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. 良好
21-33	"	かわらけ	(12.6)	(7.2)	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好

2. II地点の遺構と遺物

a. 層序と生活面

調査地点は大谷戸の開口部近くで東側の支谷に位置しており、壇状に造成された宅地内の一画にあたる。大谷戸の中央を南北に走る道路の海拔高をみると、谷戸入口の高徳院付近が海拔高約 13.5 m、調査地点の支谷前の辺りが海拔高約 14.5 m、谷戸奥に近い先年度報告地点（図 2 - 1 地点）が海拔高 19.5 m を測り、高徳院東側から長谷大谷戸の信号に向かって緩やかな傾斜で上って行くのが窺える。調査地点付近の海拔高 23.00 m 前後で現況地形で道路付近から見ると、約 7.8 m 近くと一段高くなる地形に造成されている。

II地点調査では、I地点の調査結果を踏まえて現地地表下約 70～90cm までの近・現代客土や耕作土などを重機で除去した後、中世遺構の検出調査を実施した。調査区各壁面堆積土層の状況は図 22 で示したように遺構覆土を除くと、表土・耕作土以下が 1 層の中世遺物包含層から最下層の岩盤削平面と中世地山上面（中世基盤層＝黒褐色粘質土）まで概ね 8 層に区分され、少なくとも 5 時期以上の生活面が確認されている。調査では表土や攪乱を除去した後、海拔高 21.9～22.0 m において I 地点と同じく、小土丹塊を多く内含した締りの強い明茶褐色弱粘質土の第 1 面が検出された。なお 1 層は中世遺物包含層であるが、土層観察か

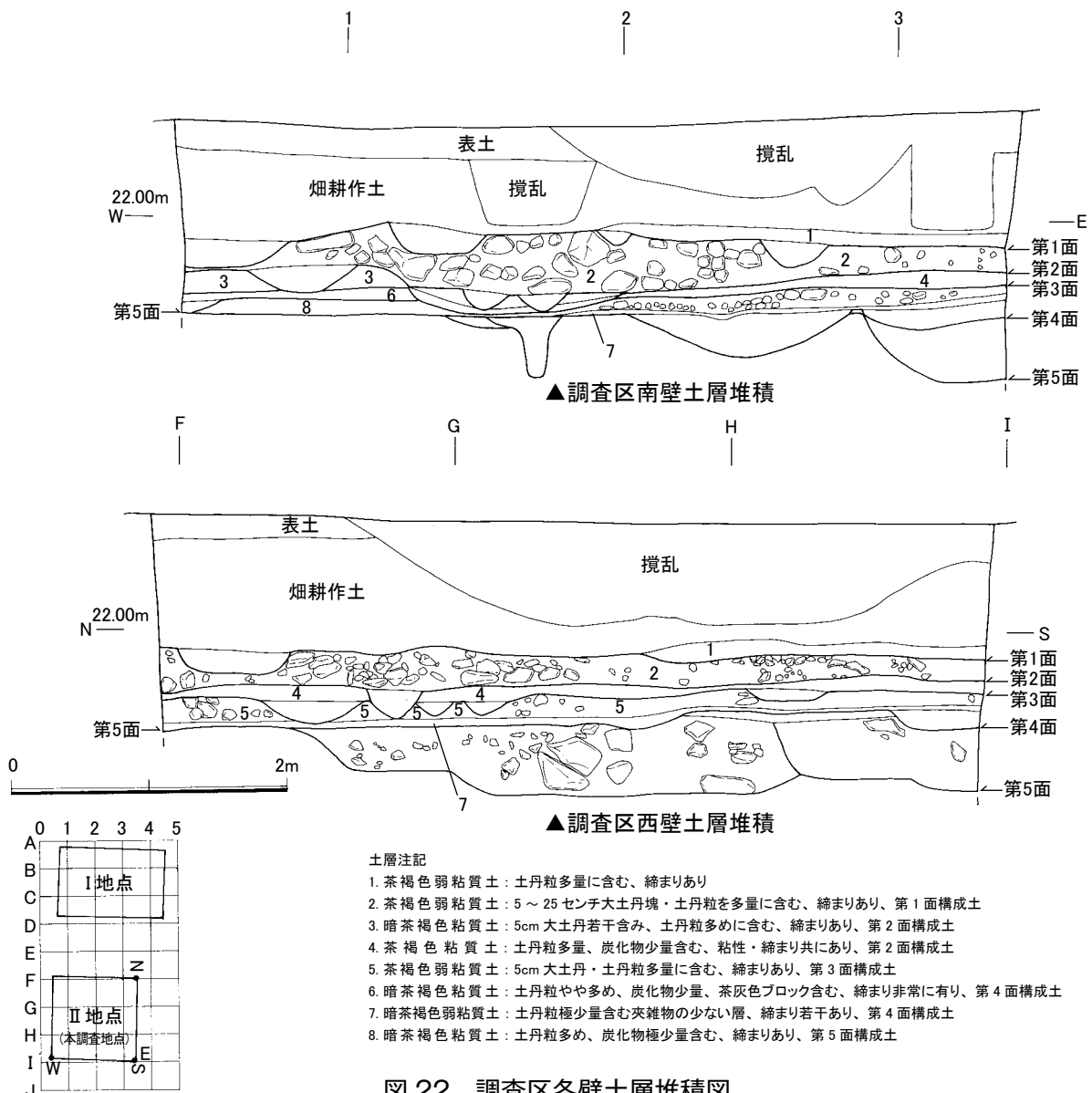


図 22 調査区各壁土層堆積図

らこの時代以降の生活面の殆んどは近世・近代の耕作により既に削平されていたことが窺える。

第1面を構成する厚さ15～35cmの2層を掘り下げると、包含層を挟まずに海拔高21.65m前後において第2面が表出された。第2面は締りのある茶褐色粘質土で構成される生活面で、調査区西側においては3層の土丹粒を多く含んで硬化した暗茶褐色粘質土の地形層が貼り増しされている。第2面の構成土である3・4層直下となる海拔高21.5m前後において第3面となる。破碎した土丹小塊や土丹細粒を茶褐色粘質土に混ぜて突き固めた地形層で強く締まる生活面である。次の生活面である第4面は、暗茶褐色粘質土で小土丹塊を少なめに混ぜた締まりのある構成土を取り除くと海拔高21.25m前後で中世基盤土層となる無遺物層の黒褐色粘質土（第5面）が検出された。以下、検出した遺構・遺物については確認された生活面の調査確認順に従い上層の第1面から主たる遺構について述べる事にしたい。

b. 第1面の遺構と遺物

第1面を構成する2層は25～40cm前後の厚さをもつ大小土丹塊による大規模な盛り土造成を施した整地土層であり、第2面とは調査区内の様相が一変する土地利用の変革、画期を窺わせた。この状況はI地点においても認められたので同時期に支谷内の大造成を行ったと推測される。検出した遺構は土坑6基、建物を構成しないピット28穴などであり、出土した遺物はかわらけ、瓦類、金属製品などで遺構外の資料に

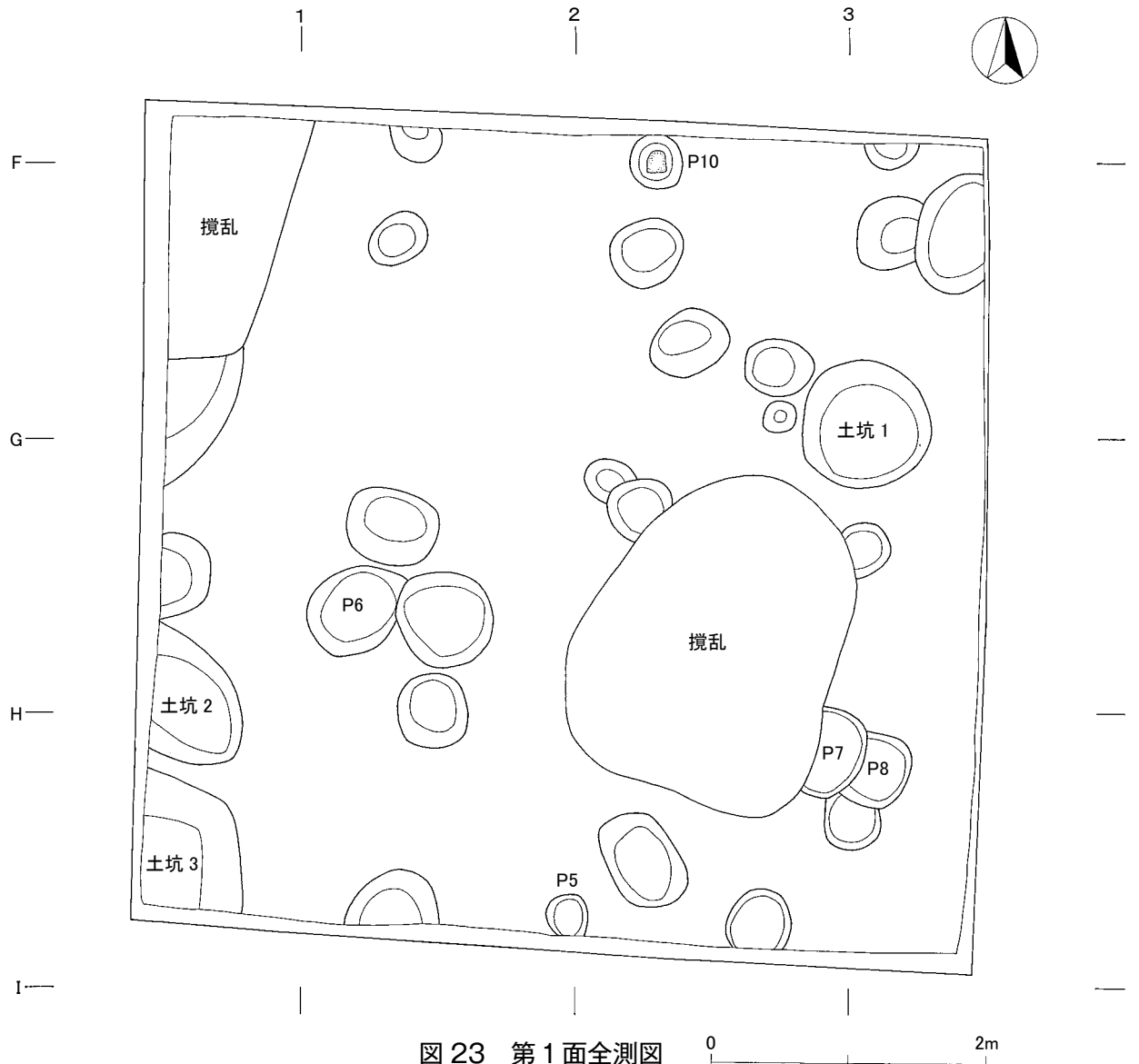


図 23 第1面全測図

については後世の削平や攪乱の影響で面上や包含層などの資料は細片が主体であった（図 23～25）。

土坑 1：G-3 杭の位置で検出した。平面形状は円形を呈し、径 90cm 程、深さ 23cm で底面の平らな断面皿状の掘り方、底面の海拔高 21.70 m を測る。覆土は拳大土丹塊や土丹細粒を多く含む明茶褐色弱粘質土である。遺物はかわらけ細片だけで図示可能な資料の出土はない。

土坑 2・3：調査区南西の位置で西壁に架かるように検出された。土坑 2 は長径 90cm 以上、短径 80cm、深さ 15cm で断面皿状の掘り方を呈し、覆土は 2 層から構成され、上層が締まりのない明茶褐色弱粘質土、下層が土丹細粒・炭化物を含むやや締りのある明茶褐色土であり、良好な出土遺物はない。土坑 3 は土坑 2 の南隣に位置し、調査区外に拡がるため全容は不明である。確認した規模は南北径 115cm・東西径 70cm 以上、深さ 28cm 程で底面平らな掘り方で海拔高 21.05 m である。覆土は上層が締まりのない薄い堆積の明茶褐色弱粘質土、下層がやや締りのある明茶褐色粘質土である。

ピット：検出したピットは柱穴並びの確かなものは認められず、掘立柱建物や柵列などの柱穴列を復元できるには柱穴を復元するには至っていない。ここでは出土遺物を伴う例や残りのよい例について簡単に触れる。P 5 は I-2 杭北側に位置する。楕円形を呈し、長径 35cm 以上、短径 28cm、深さ 25cm と浅い掘り方である。覆土は 5cm 大土丹小塊を多めに含む締りのある茶褐色粘質土である。P 7 は近代攪乱で彫り方一部が壊された P 8 より新しい遺構である。P 7 は長径 65cm、短径 35cm 以上深さ 12cm、P 8 は長径 56cm、

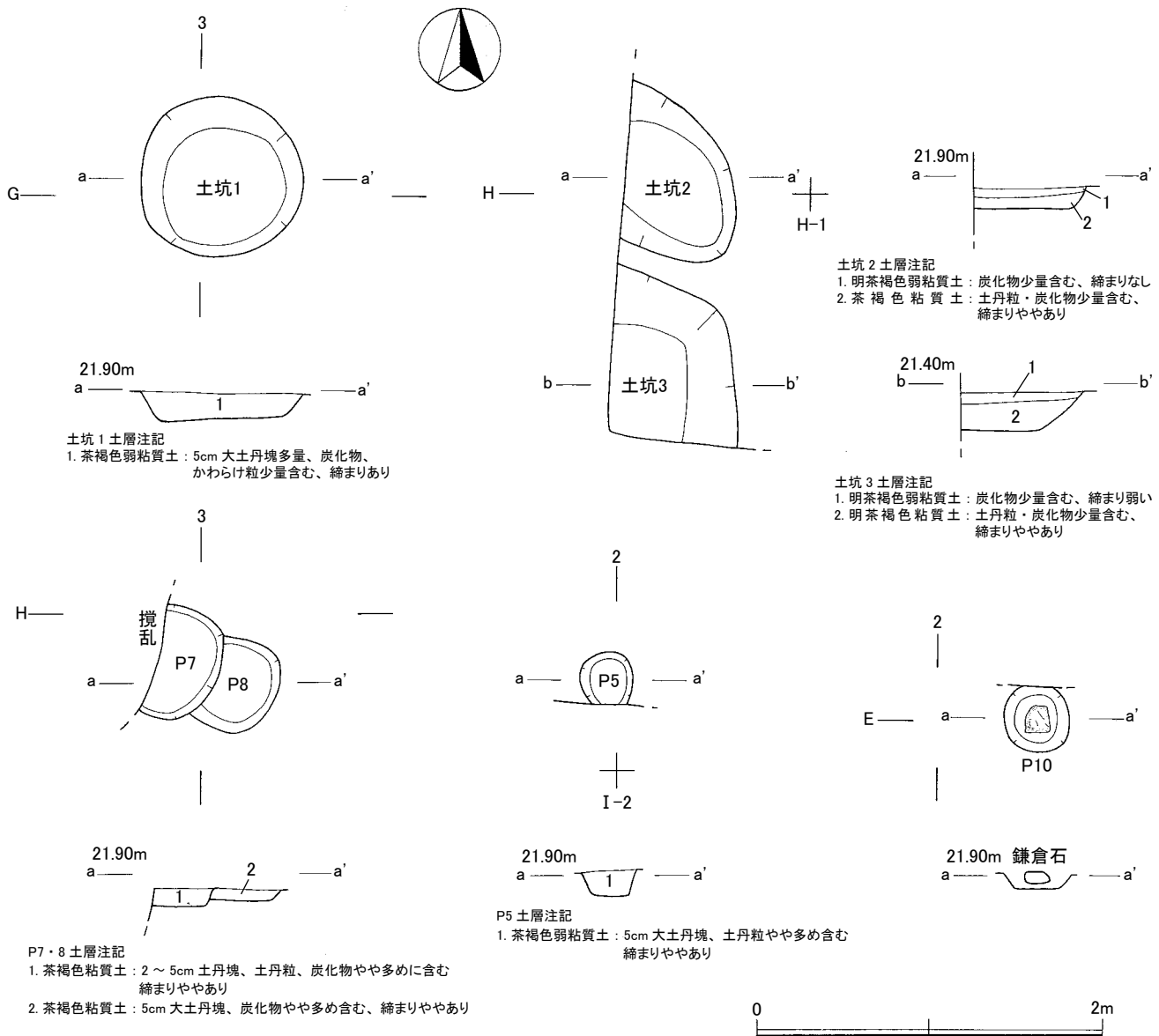
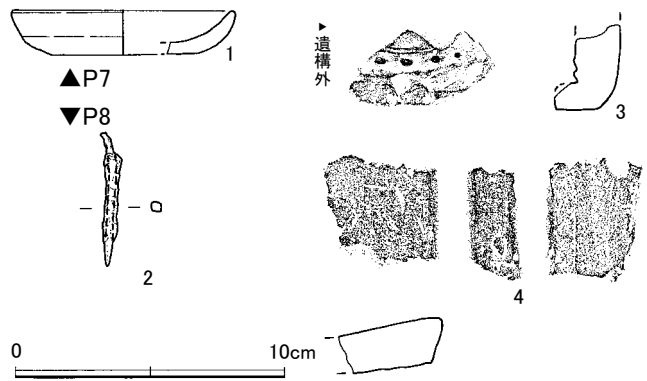


図 24 土坑・ピット

短径 34cm 以上、深さ 10cm と浅い掘り方を呈し覆土は共にやや締りのある茶褐色粘質土であった。図 25 - 1 のかわらけ小皿が P 7 より 2 の鉄釘が P 8 に伴い出土した。P 10 は E - 2 近接した位置である。円形を呈し径約 40cm、深さ 10cm で中央に方形状の鎌倉石切り石片が据えられていた。



第 1 面遺構外出土遺物：ここに述べる遺物は 1 層から出土した資料である。図 25 - 3

図 25 第 1 面遺構・遺構外出土遺物

巴文軒丸瓦と思われ、内外区を圏線が巡り、外区内縁に珠文を配するもの。4 は平瓦である。

c. 第 2 面の遺構と遺物

第 2 面は締りのある茶褐色粘質土を基盤にして調査区西側においては 3 層の土丹粒を多く含んで硬化した暗茶褐色粘質土の地形層が貼り増しされており、一段高くなる基壇状の造成が施していた。発見した遺

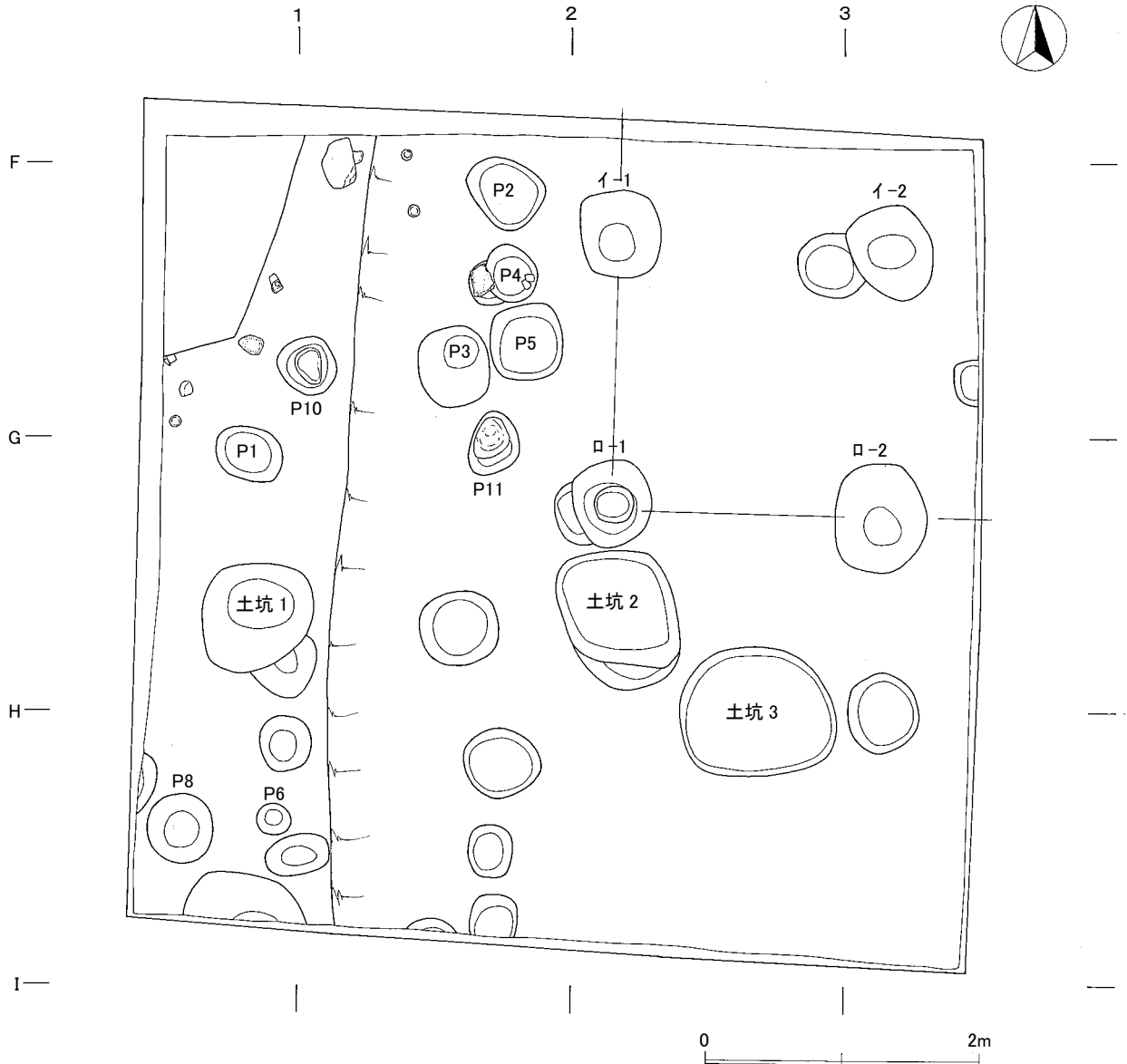


図 26 第 2 面全測図

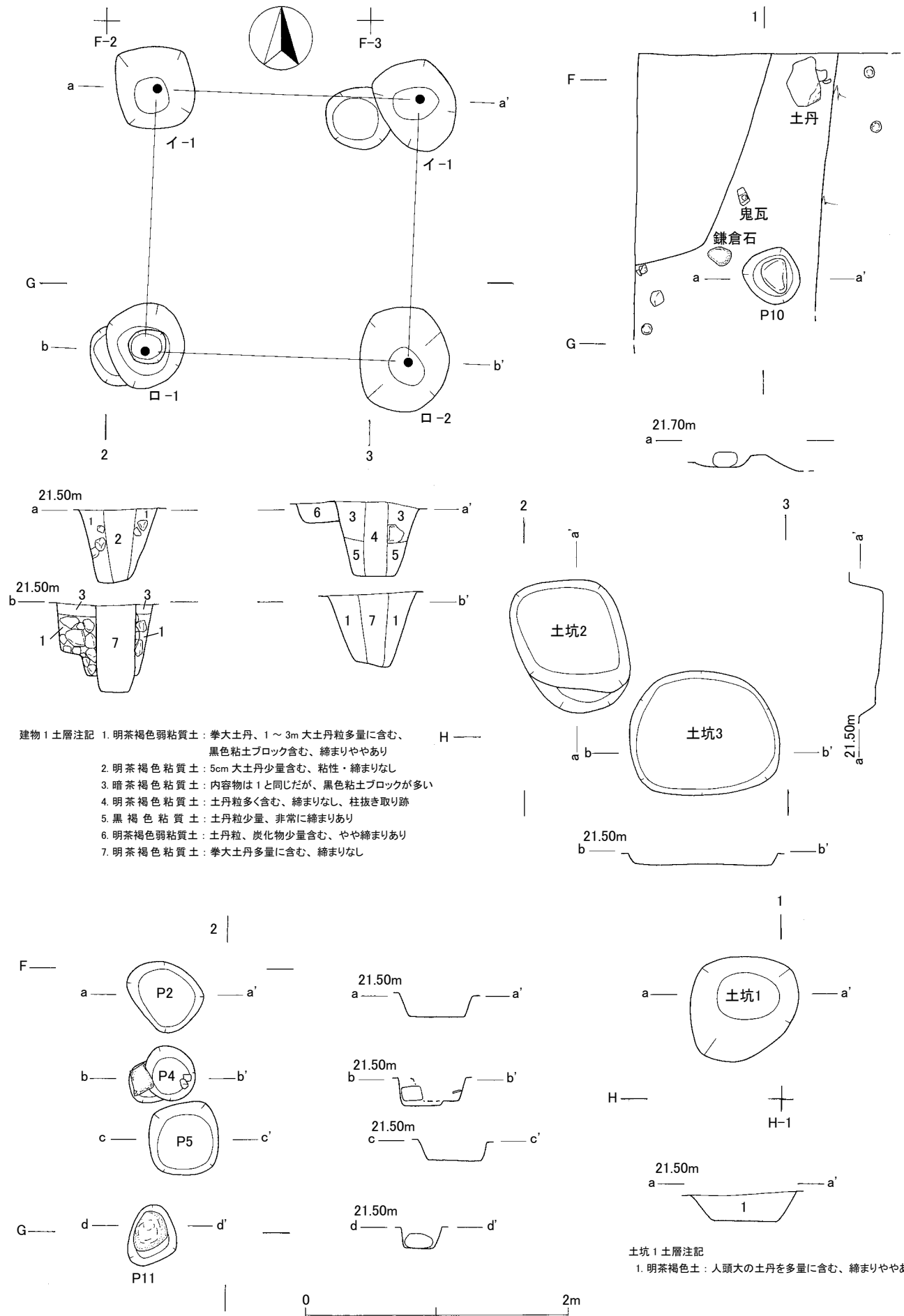


図 27 第 2 面 建物・土坑・ピット

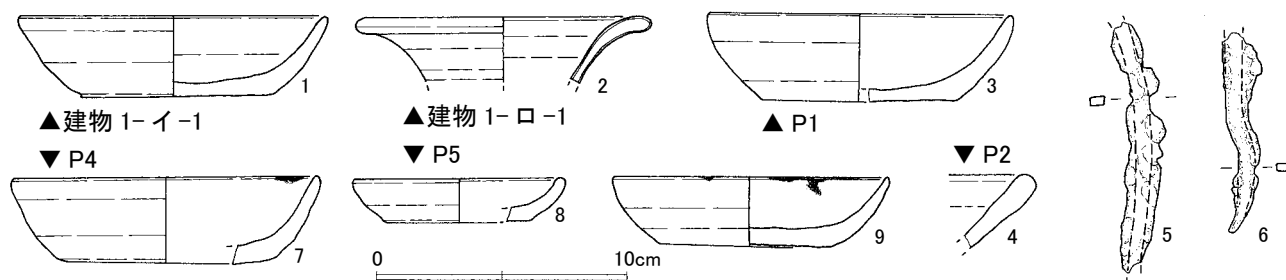


図 28 第 2 面遺構出土遺物

構は掘立柱建物 1 軒、土坑 5 基、建物を構成しないピット 25 穴などである。遺物はかわらけをはじめ、貿易磁器、常滑窯製品、瓦類、鉄釘などであり（図 26～29）、この面に伴う遺物の出土数量をみると、総数 202 点で全体出土数量（805 点）の 25% の出土比率を占めていた（表 11）。

建物 1：調査区北東側の位置において東西一間×南北一間以上の掘立柱建物を確認しており、調査区外に拡がるために全容は不明である。一間の柱間寸法は真々距離で各 198cm（約 6.5 尺）である。建物の主軸方位は N - 2° 40' - W を測り、I 地点の第 2 面や第 4 面で検出した礎石建物にほぼ近い主軸方位を示している。柱穴掘り方は径 40～65cm の隅丸方形または楕円形を呈し、深さは柱穴イ - 1・2、ロ - 2 が 55cm 前後、ロ - 1 が 68cm と深めになる。柱穴内には角柱材の建ち腐れた状況や抜き取り痕を思わす痕跡を平面と土層断面で観察できた。覆土は暗茶褐色粘質土であり、ロ - 1 柱穴のように柱周りには 5cm 角～拳大土丹小塊を栗石として詰め込んでいた。遺物はイ - 1 柱穴から図 28 - 1 のロクロ成形かわらけ大皿、ロ - 1 柱穴からは 2 の青磁花瓶が出土した。

土坑 1：H - 1 杭の北側で検出した。平面形状は不整円形を呈し、径 80cm 前後、深さ 23cm 程で底面の平らな断面逆台径状の掘り方、底面の海拔高 21.2 m を測る。覆土は土丹塊を多く含む明茶褐色弱粘質土である。遺物はかわらけ細片だけで図示可能な資料の出土はない。

土坑 2・3：調査区中央東寄りに位置する。土坑 2 は楕円形を呈し、長径 105cm、短径 80cm、深さ 30cm で断面皿状の掘り方である。覆土は拳大土丹塊を少量含み締まりのない茶褐色弱粘質土、良好な出土遺物はない。土坑 3 は楕円形を呈し、東西径 115cm、南北径 95cm、深さ 10cm を測る。覆土は土丹粒を多めで締りのない茶褐色砂質土である。

ピット：検出したピットは建物 1 以外に建物や柵列などを復元するに至らなかった。ここでは出土遺物を伴う例や礎石を伴うなど特徴のある例について簡単に触れる。P 1 は基壇状の貼増し面に位置し、大きさは長径 52cm、短径 40cm、深さ 38cm の楕円形を呈した掘り方の底面には腐食した礎版の痕跡が見られた。覆土は拳大土丹塊や土丹粒が多めの茶褐色弱粘質土、遺物は図 28 - 3 のロクロ成形かわらけ大皿である。P 2 は大きさが長径 57cm、短径 45cm、深さ 20cm の楕円形を呈し、茶褐色砂質土の覆土中からは 4 の常滑窯片口鉢 I 類、5・6 の鉄釘の遺物がある。P 5 は長さ 50～55cm、深さ 18cm の隅丸方形を呈し、覆土は拳大土丹塊を多量に交えた茶褐色弱粘質土、8・9 のロクロ成形のかわらけ皿である。P 10・11 は伊豆石の礎石を伴う柱穴である。P 10 は楕円形を呈した長径 46cm、短径 40cm、深さ 12cm の掘り方内に長径 30cm 程の扁平な伊豆石（河原石）を据えている。P 11 は不整円形を呈した長径 45cm、短径 35cm、深さ 15cm の掘り方内に河原石の扁平な伊豆石が置かれていた。

第 2 面遺構外出土遺物：ここでは第 1 面構築土中と第 2 面上からの遺物で遺構と共伴しない資料を一括している。図 29 - 1～12 はロクロ成形の回転糸切底のかわらけ皿である。13 は型捺し作りの青白磁印花文小皿、14 は白磁口元皿で口縁部が外反気味のもの、15 は常滑窯甕の底部片である。16～18 は鍛造で断面

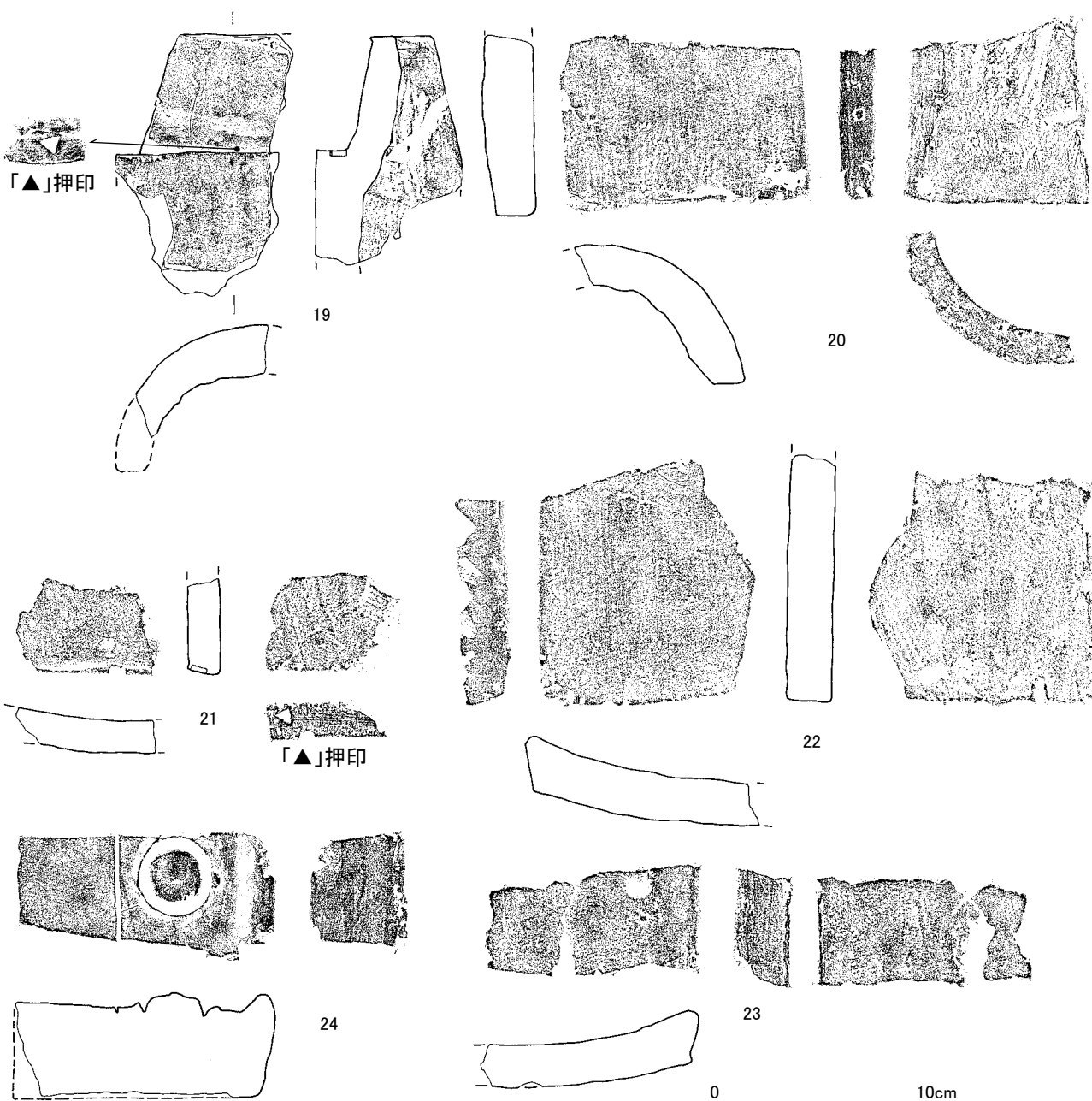
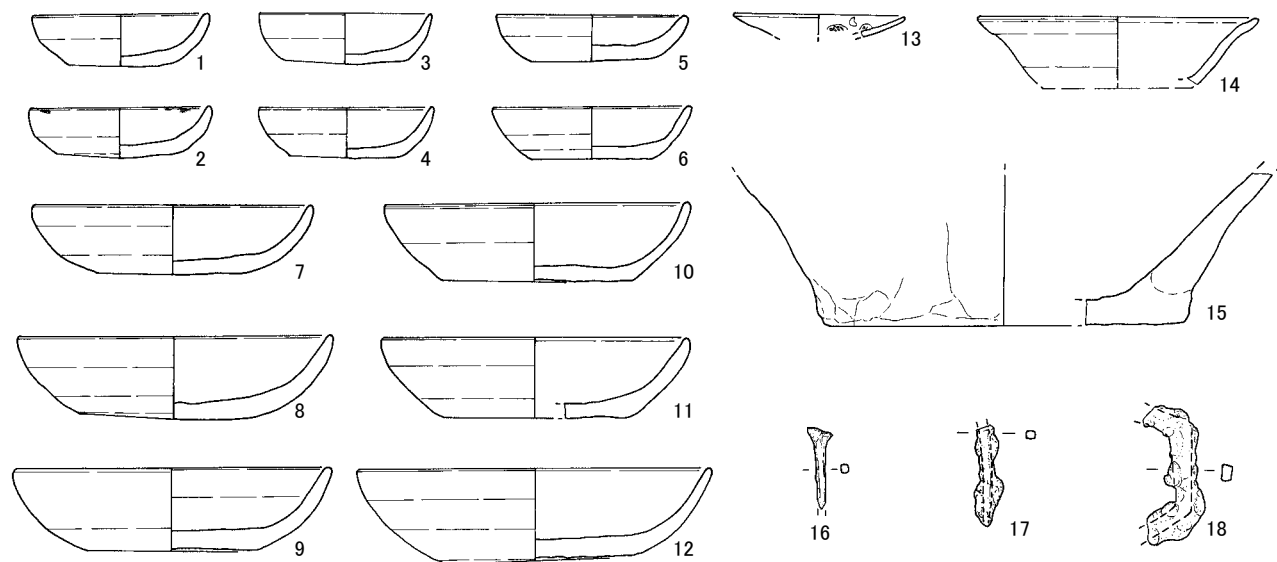


图 29 第 2 面遺構外出土遺物

四角形の鉄釘である。19～24は瓦類である。19・21は丸瓦の玉縁有段部と、平瓦の端面に「△」を押印する。永福寺Ⅱ期瓦(寛元・宝治年間の修理)を中心に鎌倉極楽寺・多宝寺創建瓦に見られる三角文と同じ押印であり、I地点出土丸瓦の竹管文を施した資料も含めて同一の瓦工房製品であろう。24は鬼瓦の右袖部分である。

d. 第3面の遺構と遺物

第2面の構築土である3・4層直下の海拔高21.55mにおいて検出したのが第3面である。この面は多めの破碎した土丹小塊や土丹細粒を茶褐色粘質土に混ぜて突き固めて整地した平坦な生活面である。発見した遺構は土坑4基、溝1条、ピット8穴などが認められ、遺物はロクロ成形のかわらけ、青磁碗、常滑窯甕、砥石、鉄釘などが出土している。

土坑1：F-1杭付近でかわらけを廃棄した土坑を検出した。掘り方は一部が近代の掘削で壊され、大半が調査区北壁外に拡がり全容は不明である。確認した大きさは東西径58cm・南北径27cm以上、深さ10cmを測り、底面平らな浅い掘り方である。覆土は締りのない茶褐色弱粘質土で上層からはかわらけの完形品を中心に12個体以上が発見されている(図32-1～12)。廃棄されていたかわらけは全て回転糸切底の資料で口径6.6～7.2cm、底径4.2～4.9cm、器高2cm前後とやや高め器高で薄手器壁の小皿が中心であり、灯明皿の出土比率が高いのが特徴である(1～3・5・9・10・12)。13は常滑窯片口鉢I類で貼付高台である。

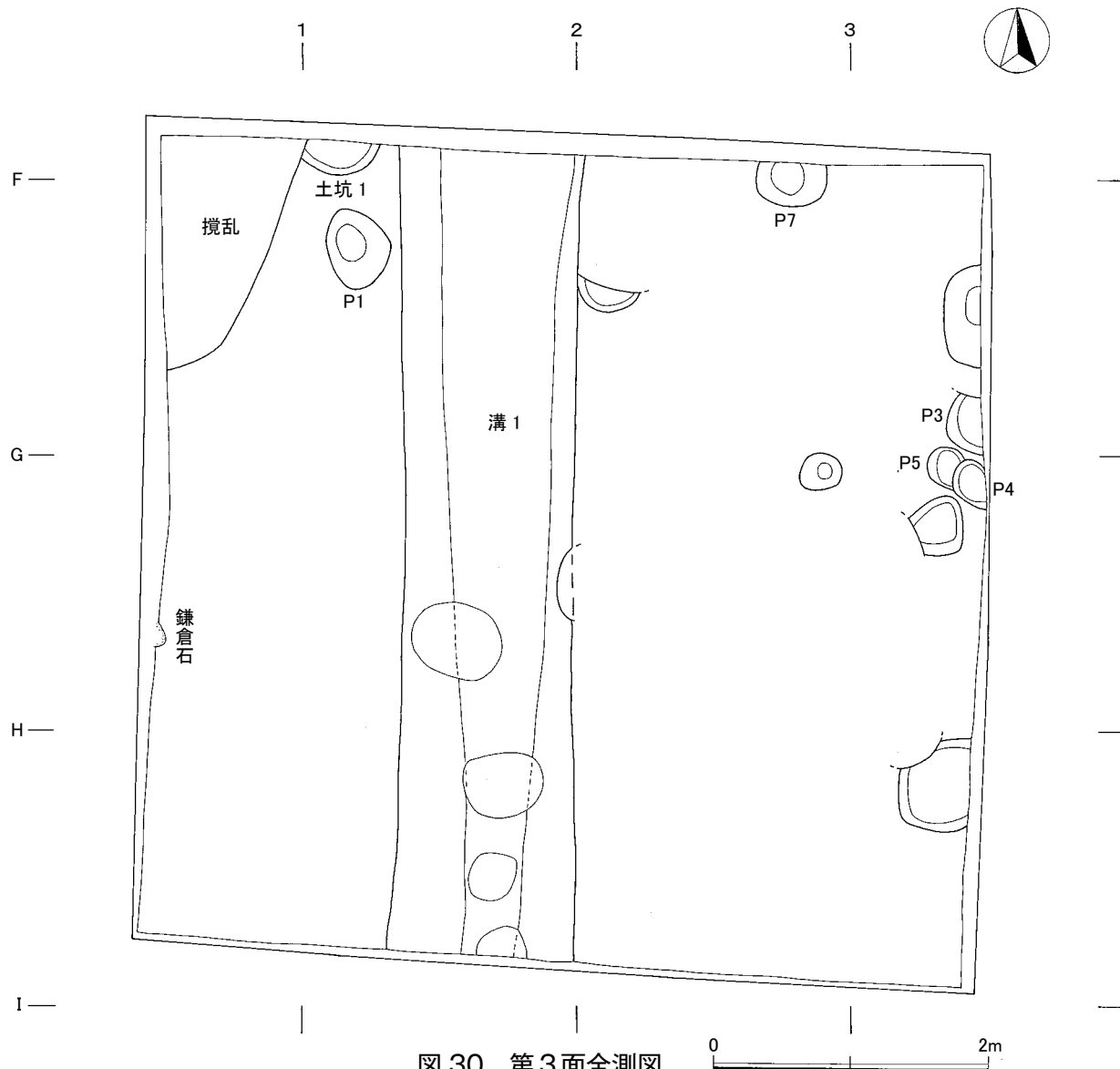


図30 第3面全測図

土坑2・3：土坑2はG-3杭の北側に位置し、調査区壁に架かり全体形は不明である。確認した規模は南北径75cm・東西径25cm以上、深さ32cmを測り、断面形状は摺鉢型を呈する。覆土は5cm程の土丹塊、かわらけ細片を含む茶褐色粘質土である。土坑3はH-3杭の東側に位置し、調査区壁に架かり全体形は不明である。確認した規模は南北径68cm、東西径50cm以上、深さ20cmを測り、断面形状は底面の平らな皿状を呈する。覆土は土丹細粒、かわらけ細片を含む茶褐色弱粘質土である。

溝1：調査区中央西寄りの位置で2ラインに沿って南北に走る溝を検出した。調査区内で確認できた長さ5.9m以上、上幅120～135cm・下幅40～92cm、深さ20cm前後、溝底面の海拔高は北端21.4m、南端21.3mを測り、北から南へ向かって緩やかな傾斜を示している。覆土は上層が炭化物・土丹細粒を少量混入した茶褐色砂質土と、下層が土丹細粒を多量に含む締りの弱い茶褐色砂質土である。出土遺物は図32-15～20のロクロ成形のかわらけであるが、大皿の出土比率が圧倒的に高い数値を示していた。

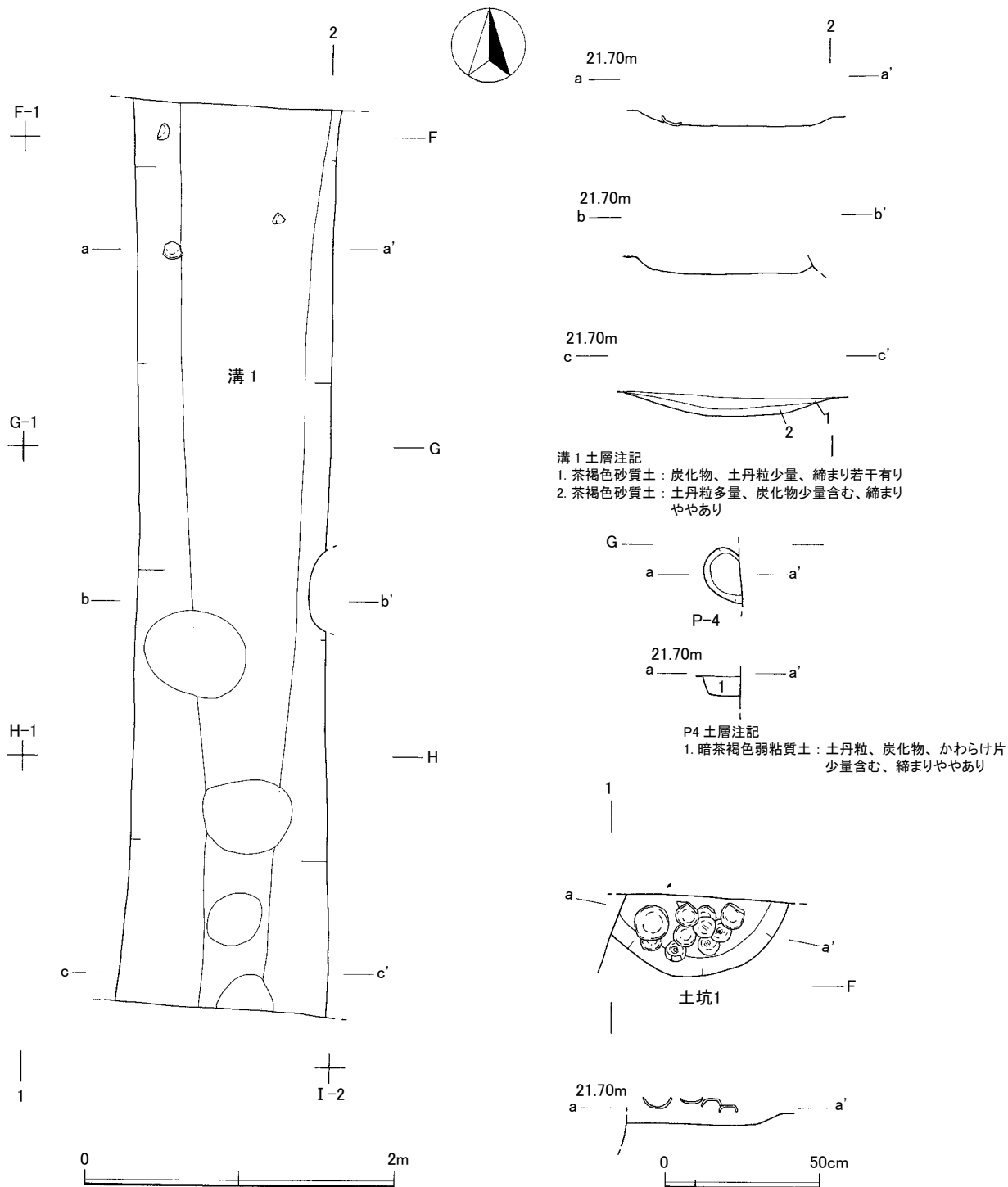


図31 第3面土坑・溝・ピット

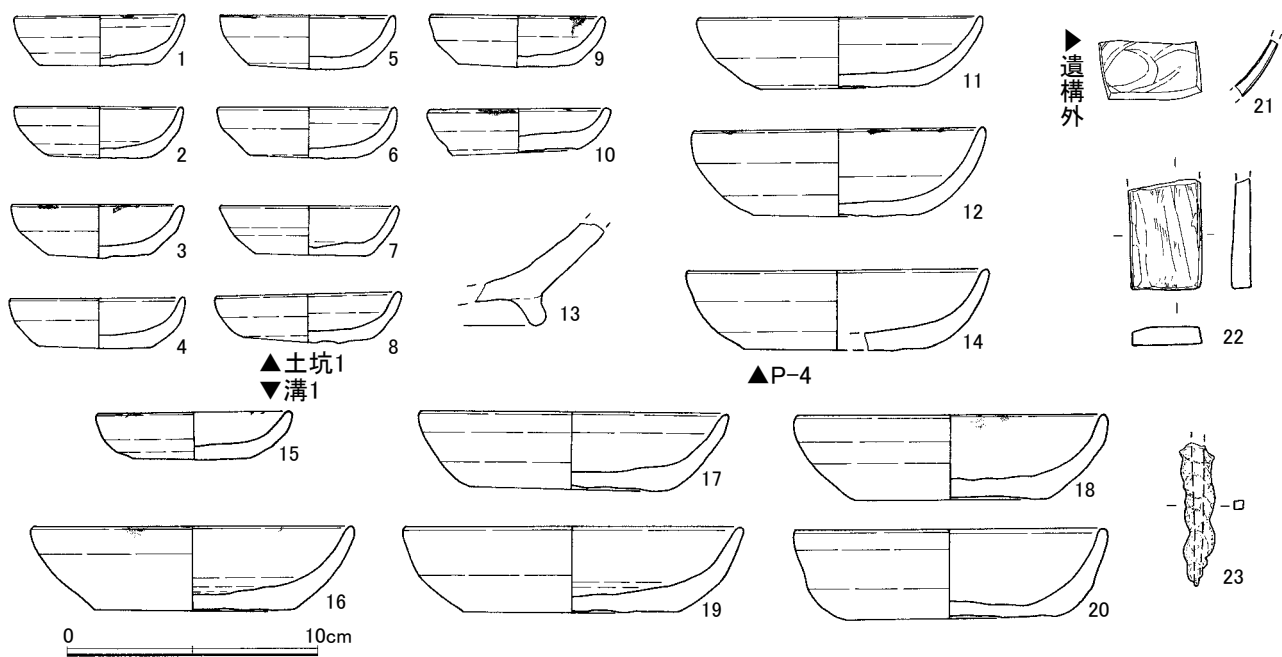


图 32 第3面遺構・遺構外出土遺物

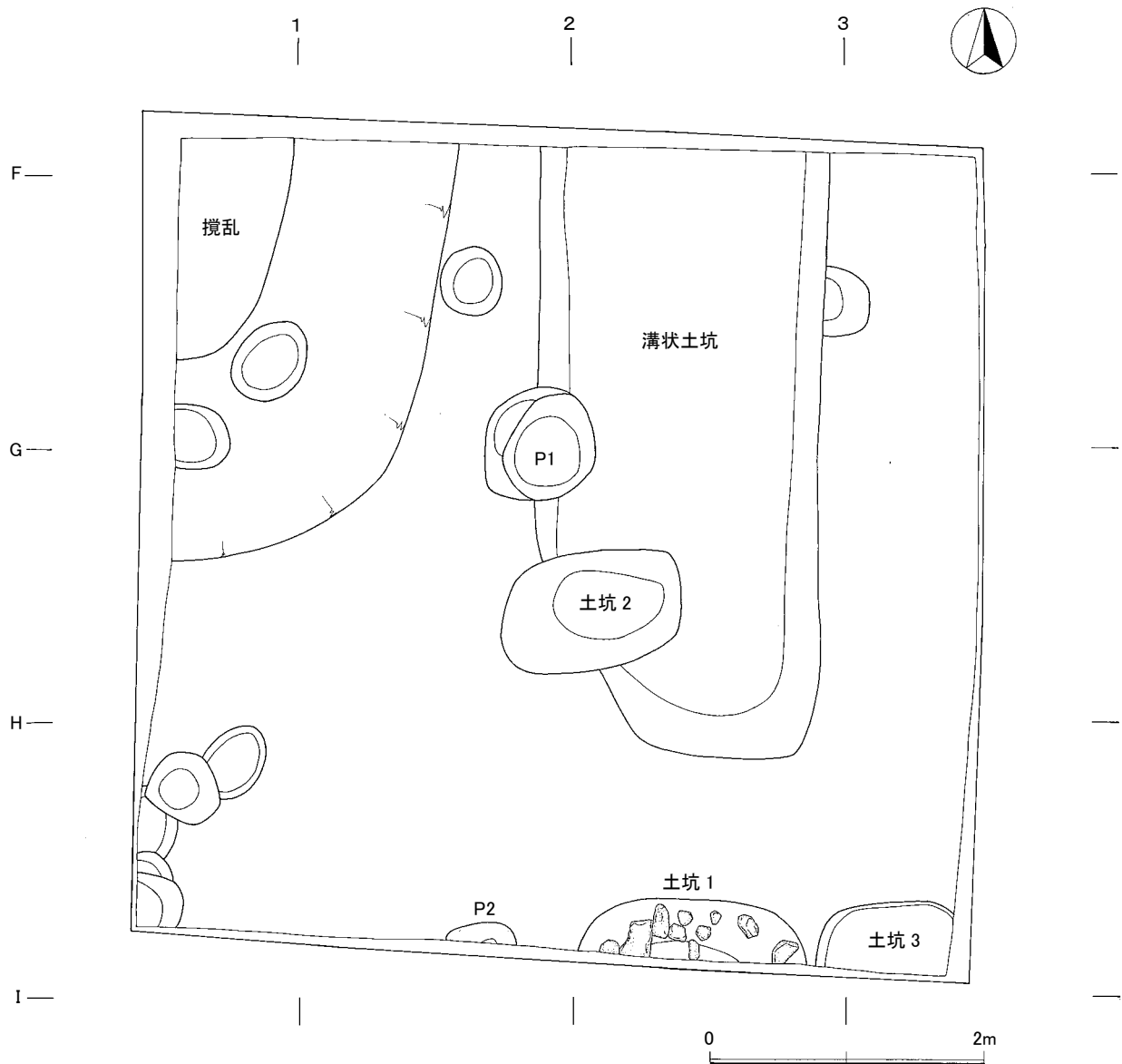


图 33 第4面全測圖

ピット：P 1は土坑1の南側に位置する。大きさは長径 60cm、短径 40cm、深さ 38cm の不整形円形を呈した掘り方の底面には腐食した礎版の痕跡が見られた。覆土は拳大土丹塊や土丹粒が多めの茶褐色弱粘質土である。P 4・5は土坑2の南側に位置し、新旧関係はP 5よりP 4が新しい。P 5の掘り方は楕円形を呈し、径 35cm 以上、深さ 36cm を測り底面の平らな作り、P 4の掘り方は長径 50cm 以上、短径 35cm、深さ 42cm の楕円形を呈し、壁面が垂直気味で平らな底面には2枚の腐食した礎版の痕跡が見られた。

第3面遺構外出土遺物：21は龍泉窯青磁劃花文碗で内面に片切り彫り施文、22は薄板状の砥石で京都鳴滝産のもの、23は鍛造した断面四角形の鉄釘である。

e. 第4面の遺構と遺物

第3面を構成していた5層直下の海拔高 21.35 m前後において検出したのが第4面である。この面は6層の地形層からなり、多めの土丹細粒と茶灰色粘質土ブロックに混ぜて突き固めた締りの強い平坦な生活面であり、海拔高 21.45 m前後である。遺構は土坑4基、ピット 10 穴などが発見され、遺物はロクロ成形のかわらけをはじめ、白磁皿、瀬戸・常滑窯製品、火鉢、瓦、滑石鍋、砥石、鉄製品などが出土した。

溝状土坑：F～H-2・3の位置で調査区に拡がる南北位の大型土坑で土坑2・P 1よりも古いものである。確認した規模は南北長 440cm 以上、幅 205cm、深さ 25cm と浅い掘り方で底面の海拔高 21.05 mを測る。覆土は拳大～5 cm 角をやや多めに混入した茶褐色弱粘質土の単一層である。遺物は図 35 - 1～11 がかわらけである。小皿の特徴をみると口径 7.8～8.4cm、底径が 6 cm 代で 2 cm 以下の器高をもつ資料が主体を占め

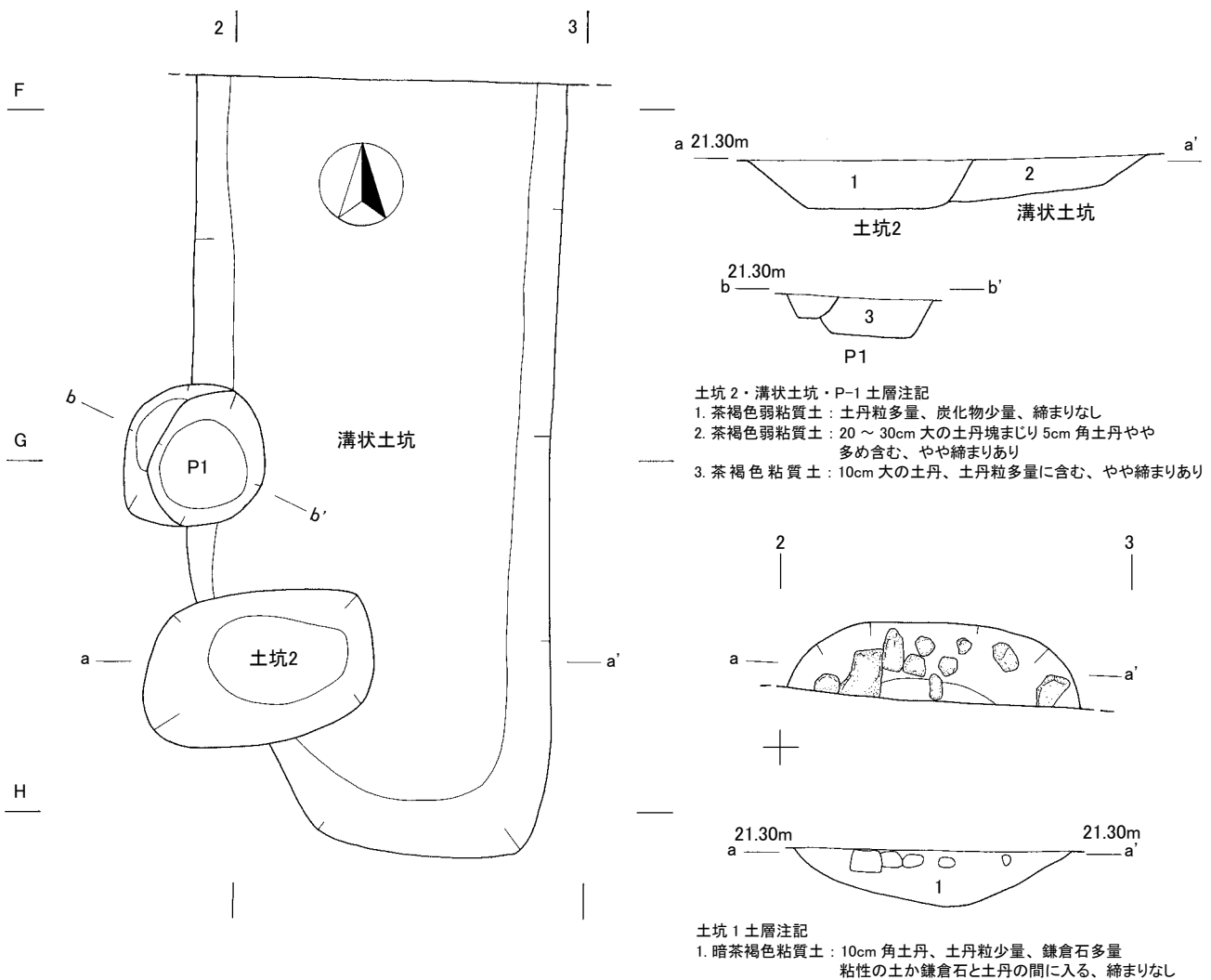


図 34 第4面土坑・ピット

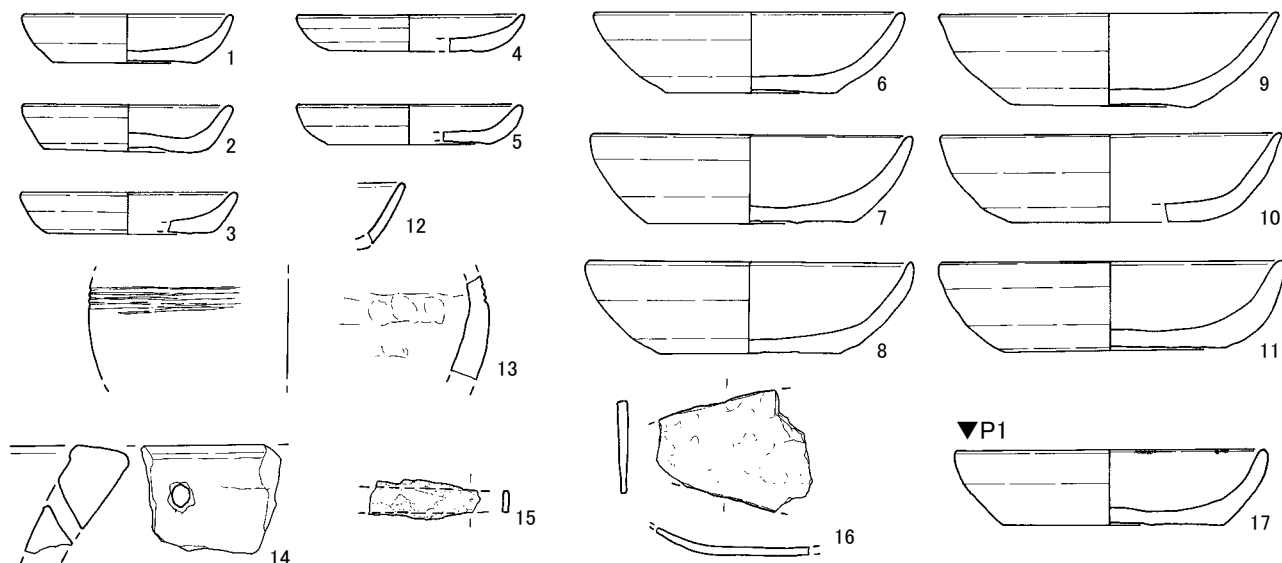
いた。12は白磁口元皿、13は瀬戸窯四耳壺、14は土器質の鉢形火鉢、15・16は鉄製品で刀子と薄板状の用途不明のものである。

土坑1：調査区南壁に架かり規模は不明である。大きさは東西径168cm・南北径45cm以上、深さ33cmを測り、底面の中央部が深くなる掘り方の覆土中からは大小様々な形状の多数の鎌倉石片が発見された。

土坑2：H-2杭付近で溝状土坑を壊して掘り込むもの。平面形は楕円形を呈し、東西径135cm、南北径86cm、深さ32cmで平らな底面で断面台形の掘り方、覆土は多量の土丹細粒を含んだ茶褐色土である。

土坑3：土坑1の東隣で調査区外に拡がっている。大きさは東西径100cm・南北径53cm以上、深さ33cmの底面が平らで急な壁面をもつ掘り方、覆土は土丹細粒を多量に混入した茶褐色弱砂質土である。

ピット：P1は溝状土坑を掘削して掘り込む新しいもの。楕円形を呈し、径65～75cm、深さ32cmと浅い平らな底面には礎板の痕跡が認められた。覆土は拳大の土丹塊を多めに混じる茶褐色粘質土である。図35-17のかわらけ灯明皿が出土した。



▲溝状土坑

▼遺構外

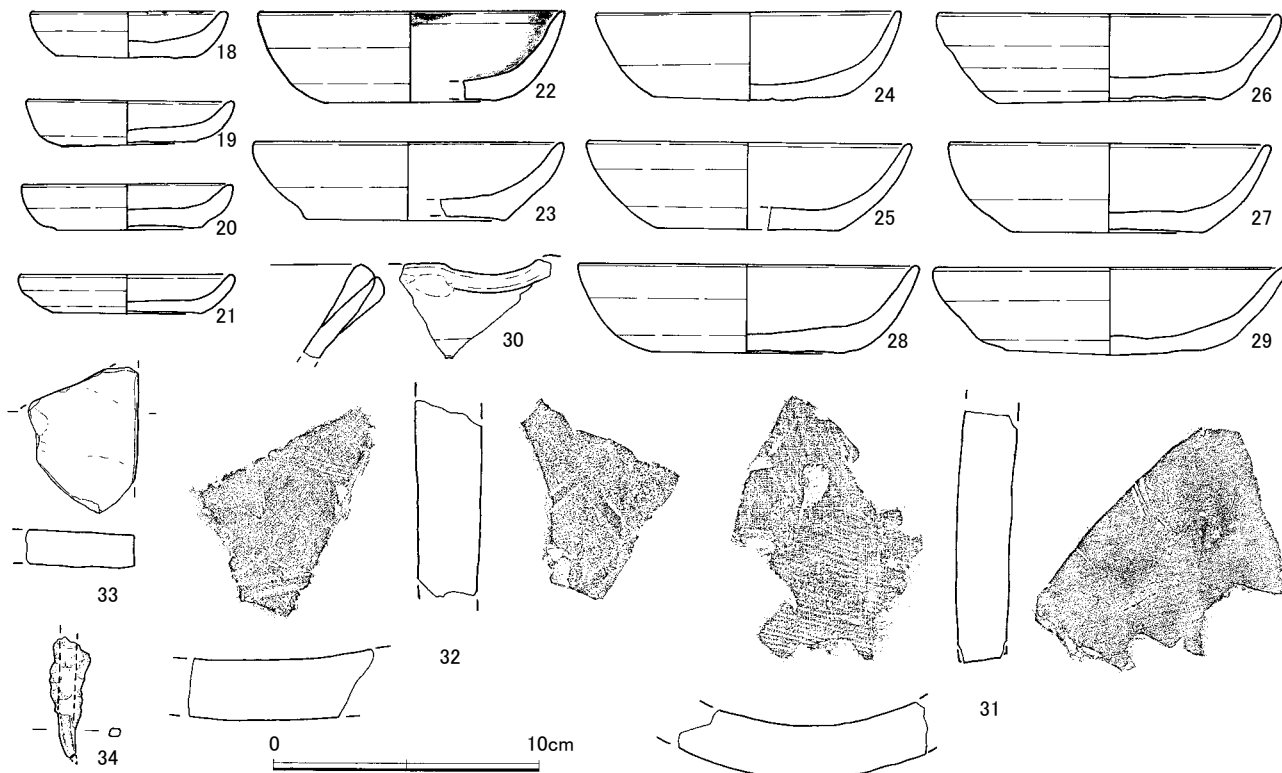


図35 第4面遺構・遺構外出土遺物

第4面遺構外出土遺物：図35 - 18 ~ 34は第4面の整地層中や面上に伴って出土した遺物である。かわらけは18 ~ 21の小皿と22 ~ 29の大皿、30は常滑片口鉢工類口縁部、31・32は平瓦、33は京都鳴滝産の仕上砥、34は鉄釘である。

f. 第5面の遺構と遺物

第4面の構成土を除去すると、黒褐色~暗茶褐色粘質土の中世基盤層（中世地山）とその上に堆積する暗茶褐色粘質土（8層）の地形層で構成された平坦な生活面を検出されたので、これを第5面として調査を行った。海拔高21.25 m程である。検出した遺構は土坑6基、建物を構成しないピット約15穴があり、出土遺物はロクロ成形のかわらけを中心に火鉢、釘など量的に少なめである。

土坑1・3・5・6：調査区東壁に架かる状態で重複関係を有する4基の土坑を検出した。土坑1は南北径180cm・東西径120cm以上、深さ40cmを測り、底面の中央部が深くなる断面皿状を呈しており、覆土は拳大の土丹塊を多めに含む茶褐色粘質土である。遺物は図38 - 1の滑石製鍋の胴部下部片である。土坑3は土坑6より新しい。確認した規模は南北径142cm・東西径86cm以上、深さ43cm前後を測り、覆土は茶褐色粘質土で少量の小土丹塊、多量の土丹細粒を混入しており、土坑4掘り方の大半を削平している。土坑5

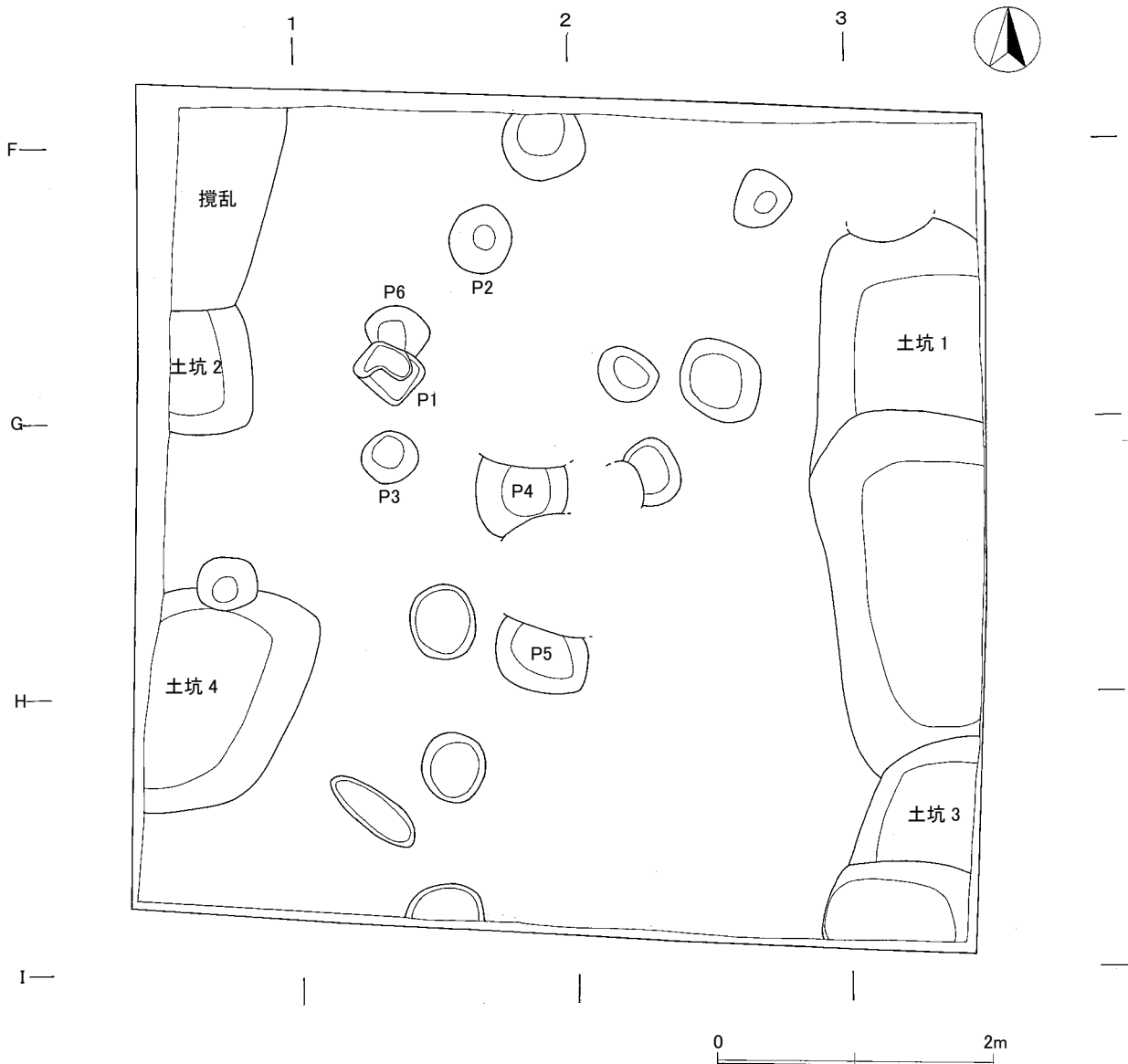


図36 第5面全測図

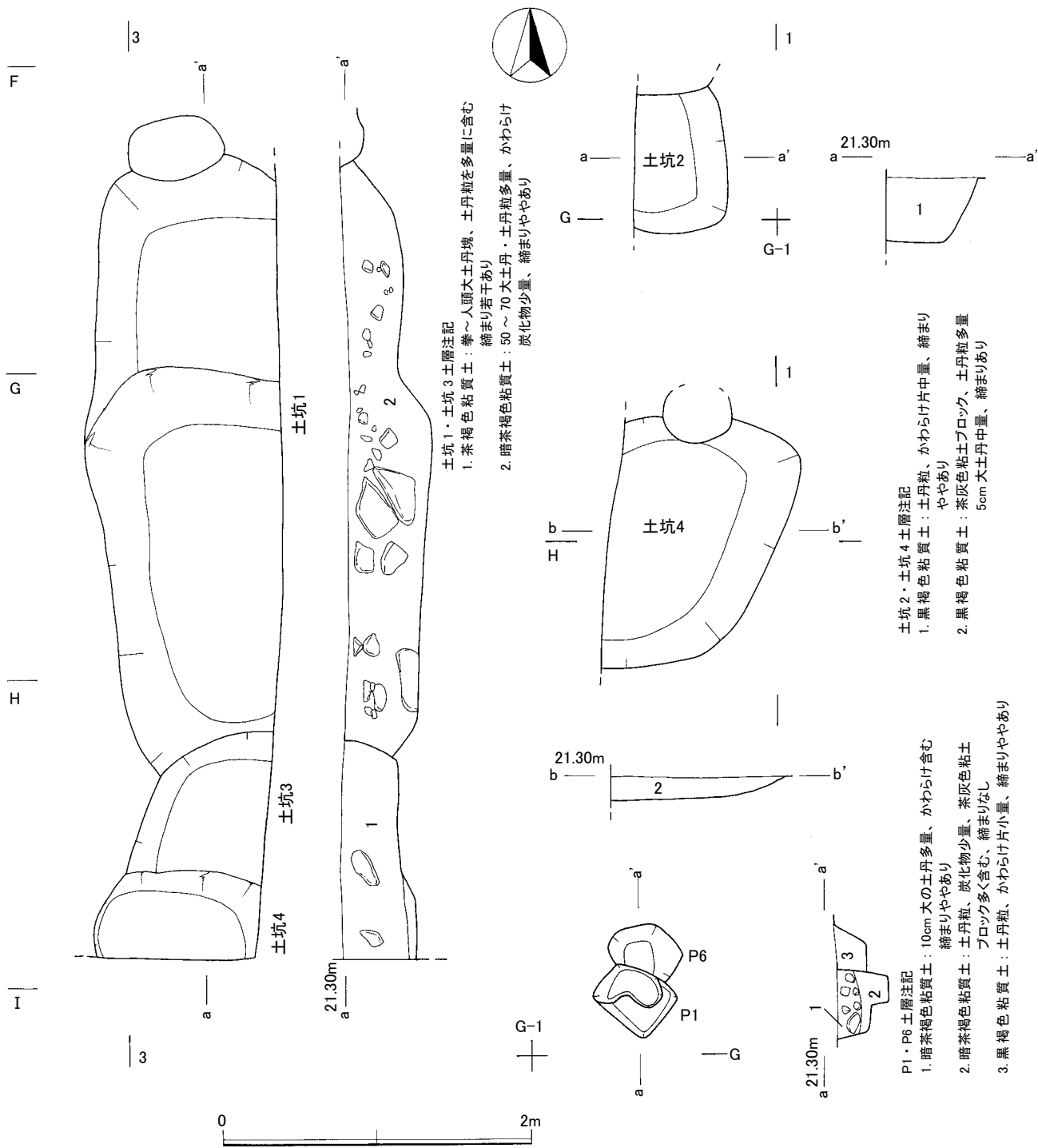


図 37 第5面土坑・ピット

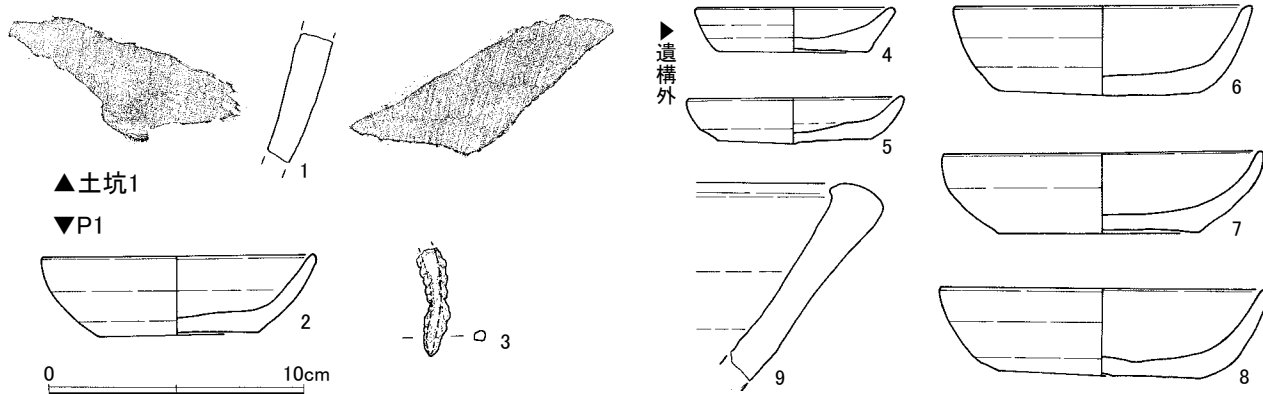


図 38 第5面遺構・遺構外出土遺物

は土坑1・3に掘り方の一部を壊されている。確認できた規模は南北径260cm・東西径130cm以上、深さ52cm程で断面台形状の平らな底面をもつ。覆土は50～70cm大土丹塊・土丹細粒を多量に混入した暗茶褐色粘質土であるが、それに伴う遺物はかわらけ細片だけであった。

土坑2・4：調査区西壁に架かる土坑である。土坑2は南北径92cm・東西径62cm以上、深さ42cm程の平らな底面の掘り方であり、覆土は土丹細粒やかわらけ細片を含んだ黒褐色粘質土である。土坑4は南北径165cm・東西径118cm以上、深さ15cmの浅い掘り方で覆土は土丹細粒・茶灰色粘土ブロックを多量に含んだ黒褐色粘質土である。両土坑からは図示可能な遺物の出土はない。

第5面遺構外出土遺物：図38-4～8は第4面の整地層中や中世地山面上に伴って出土した遺物である。かわらけはロクロ成形の回転糸切底で小皿が口径7.7・8.3cm、底径6.0cm、器高1.8cmと器高低めのもの、大皿は口径が11.7～12.7cm、底径8cm前後、器高3.4cm前後でやや厚手の器壁をもつ資料である。9は瓦質鉢形火鉢で器壁は薄手の造りだが口縁部は肥厚し、肥厚した口唇端部が内側に引き出されている。外面は櫛搔き状の成形痕を残している。

表6 II地点遺物観察表(1)

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
25-1	第1面P7	かわらけ	(8.1)	(5.4)	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 黄橙色 e. やや不良
25-2	第1面P8	鉄釘	残長 5.0 幅 0.3 厚さ 0.3			f. 鍛造 断面四角形
25-3	第1面遺構外	鏡瓦 (軒丸瓦)	厚さ 1.7			a. 瓦当文は圈線巡る左廻り巴文か 瓦当面離れ砂 b. 灰白色 白色粒 白色石粒 粗土 c. 表面黒灰色燻焼風 e. 不良 f. 永福寺Ⅲ期鏡瓦 YA II 08 と類似
25-4	"	女瓦(平瓦)	厚さ 1.6			a. 凹面: 離れ砂付着 凸面: 縦位指ナデ 離れ砂付着 b. 灰白色 粗土 c. 表面黒灰色燻焼風 e. 不良気味 f. 永福寺Ⅲ期女瓦と類似
28-1	第2面建物 1-イ-1	かわらけ	12.1	7.6	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なめ 良土 c. 橙色 e. 良好
28-2	第2面建物 1-ロ-1	龍泉窯青磁 花瓶	(11.0)	—	—	a. ロクロ 口縁肥厚し外反 b. 灰白色 精良堅乳 d. 灰緑色不透明 厚手施釉 大小貫入あり
28-3	第2面P1	かわらけ	(12.0)	(7.8)	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
28-4	第2面P2	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部			a. 輪積技法 口縁端部丸味をもつ b. 灰色 黒色粒 長石粒多い粗土 e. 良好
28-5	"	鉄釘	残長 11.0 幅 0.6 厚さ 0.4			f. 鍛造 断面四角形
28-6	"	鉄釘	残長 8.0 幅 0.6 厚さ 0.3			f. 鍛造 断面四角形
28-7	第2面P4	かわらけ	(12.1)	(8.7)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少量 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 口縁部に煤付着 灯明皿か
28-8	第2面P5	かわらけ	(8.2)	(5.9)	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
28-9	"	かわらけ	11.0	6.9	2.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部に煤付着 灯明皿
29-1	第2面遺構外	かわらけ	6.9	4.6	2.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 橙色 e. 良好
29-2	"	かわらけ	7.1	4.9	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
29-3	"	かわらけ	6.9	4.8	2.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 橙色 e. 良好
29-4	"	かわらけ	7.0	4.6	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 橙色 e. 良好
29-5	"	かわらけ	7.6	5.0	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
29-6	"	かわらけ	(7.8)	(4.9)	2.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 淡橙色 e. 良好
29-7	"	かわらけ	(11.1)	6.0	2.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 暗褐色 e. 不良 f. 内外面に共に黒ずみ焼成不良
29-8	"	かわらけ	12.3	7.6	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
29-9	"	かわらけ	(12.4)	6.7	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄橙色部分的に橙色 e. 焼きムラあり不良
29-10	"	かわらけ	(12.2)	7.7	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少量 やや粉質良土 c. 橙色 e. 良好
29-11	"	かわらけ	(12.2)	(7.4)	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 淡黄橙色 e. 良好
29-12	"	かわらけ	13.7	7.6	3.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 やや粉質良土 c. 橙色 e. 良好
29-13	"	青白磁 小皿	口縁～体部			a. 型捺し作り 薄手小皿 b. 白色緻密 d. 水青色透明 薄手施釉 f. 内面花葉文
29-14	"	白磁 口元皿	口縁部～底部			a. ロクロ 口縁部外反気味 b. 灰白色 精良 d. 灰色不透明 口唇部釉薬剥ぎ取り
29-15	"	常滑 甕	底部			a. 輪積技法 底部脇横位ナデ b. 灰褐色 白色粒多量 c. 暗赤褐色 f. 内面使用による摩耗著しい 捏鉢に転用か
29-16	"	鉄釘	残長 3.2 幅 0.3 厚さ 0.4			f. 鍛造 断面四角形
29-17	"	鉄釘	残長 4.0			f. 鍛造 断面四角形
29-18	"	鉄釘	残長 5.0 幅 0.4 厚さ 0.6			f. 鍛造 断面四角形
29-19	"	男瓦(丸瓦)	玉縁長 7.3 筒部厚さ 2.2			a. 凸面縄目叩き後縦位ナデ消し 凹面布目痕 離れ砂付着 玉縁端縁を幅広へラ削り b. 灰赤色 白色粒多量 赤色粒少量 やや粗土 c. 表面灰黒色 燻焼風 e. やや不良 f. 玉縁段部に「△」三角文押印

表7 II地点遺物観察表(2)

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
29-20	第2面遺構外	男瓦(丸瓦)	厚 2.1			a. 凸面: 縄目叩き 縦位ナデ消し 凹面糸切痕・布目痕 端面幅広へラ削り b. 白橙色 白色粒 赤色粒 やや粗土 c. 表面灰黒色 燻焼風 e. やや不良
29-21	"	女瓦(平瓦)	厚 1.5			a. 凹面指ナデ 離れ砂付着 凸面斜格子叩き目 離れ砂付着 b. 灰白色 微砂 小石粒多め粗土 c. 黒灰色 e. やや不良 f. 端面に「△」三角文押印
29-22	"	女瓦(平瓦)	厚 2.1			a. 凹面: 丁寧な指ナデ 凸面: 縦位指ナデ 叩き目不明 離れ砂付着 側縁角丸く指ナデ仕上げ b. 暗灰色 小石粒 砂粒含むやや良土 c. 灰白色 e. やや不良
29-23	"	女瓦(平瓦)	厚 2.0			a. 凹面: 指ナデ 凸面: 指ナデ叩き目不明 離れ砂付着 側縁角丸く指ナデ仕上げ b. 白橙色 白色粒 小石粒 赤色粒 粗土 c. 灰褐色 e. 不良
29-24	"	鬼瓦	厚 4.1 珠文径 2.9			a. 右袖部分 板状の成形 外縁に隆起帯、珠文は円形型の貼付け施文 篋掻きで陰刻界線で珠文帯と面を分ける b. 暗灰色 白色粒 赤色粒 砂粒 やや粗土 c. 暗灰色 e. 甘い
32-1	第3面土坑1	かわらけ	6.7	4.8	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁一部煤付着 灯明皿
32-2	"	かわらけ	6.8	4.2	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂少なめ 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
32-3	"	かわらけ	6.8	4.2	2.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部微量の煤付着 灯明皿
32-4	"	かわらけ	6.9	4.6	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質土 c. 橙色 e. 良好
32-5	"	かわらけ	6.9	4.6	2.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂少なめ 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
32-6	"	かわらけ	7.0	4.8	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質土 c. 橙色 e. 良好
32-7	"	かわらけ	7.1	4.7	2.0	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質土 c. 橙色 e. 良好
32-8	"	かわらけ	7.2	4.9	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色細粒 やや良土 c. 橙色 e. 良好
32-9	"	かわらけ	7.1	4.5	2.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
32-10	"	かわらけ	7.1	5.0	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部微量の煤付着 灯明皿
32-11	"	かわらけ	(11.4)	(6.9)	2.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c. 橙色 e. 良好
32-12	"	かわらけ	11.7	6.8	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
32-13	"	常滑片口鉢I類	底部			a. 輪積技法 貼付高台 b. 灰色 長石粒 砂粒 粗土 e. 良好 f. 内底面摩耗
32-14	第3面P4	かわらけ	(12.1)	(7.3)	3.2	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質気味やや粗土 c. 橙色 e. やや不良 f. 再火で表面剥離
32-15	第3面溝1	かわらけ	(7.8)	4.7	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 橙色 e. やや不良 f. 口縁部煤付着 灯明皿
32-16	"	かわらけ	(12.6)	8.0	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 粉質粗土 c. 黄橙色～橙色 e. やや不良 f. 内外面剥離気味 口縁部内外煤付着
32-17	"	かわらけ	12.1	8.1	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 暗橙色 e. 良好
32-18	"	かわらけ	(12.1)	8.2	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 黒色粒 土丹粒 砂質粗土 c. 暗橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
32-19	"	かわらけ	(13.3)	8.7	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c. 橙色 e. 良好
32-20	"	かわらけ	(12.4)	8.3	3.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多く 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c. 暗黄橙色 e. 良好
32-21	第3面遺構外	龍泉窯青磁劃花文碗	体部			a. ロクロ b. 灰白色 黒色粒微量 精良堅緻 d. 灰緑色不透明 薄手施釉 貫入あり f. 片切り彫りの劃花施文
32-22	"	砥石	残長 4.5 幅 2.8 厚 0.7			a. 上下面が砥面 両端面・木口は切断痕 c. 黄味灰泊色 f. 仕上砥 京都鳴滝中山産系
32-23	"	鉄釘	残長 5.6 幅 0.4 厚 0.4			f. 鍛造 断面四角形
35-1	第4面溝状土坑	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 内外面薄く煤付着 灯明皿
35-2	"	かわらけ	7.8	6.0	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 白色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好

表8 II地点遺物観察表(3)

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
35-3	第4面溝状土坑	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なく やや粉質 やや良土 c. 橙色 e. 良好
35-4	"	かわらけ	(8.4)	(6.0)	1.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少なく やや良土 c. 橙色 e. 良好
35-5	"	かわらけ	(8.3)	(6.2)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 軟質で器表荒れる
35-6	"	かわらけ	11.5	6.5	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少なめ 粉質良土 c. 淡黄橙色 e. 良好
35-7	"	かわらけ	(11.9)	(7.8)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
35-8	"	かわらけ	(12.1)	(6.8)	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒・土丹粒少量 やや良土 c. 黄橙色 e. 良好
35-9	"	かわらけ	(12.6)	6.9	3.6	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 白色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
35-10	"	かわらけ	(12.7)	(7.4)	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
35-11	"	かわらけ	12.7	8.3	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 微砂・赤色粒少なめ やや良土 c. 暗橙色 e. 良好
35-12	"	白磁 口兀皿	口縁部			b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰白色 内面:半透明 外面:不透明 やや薄手施釉 貫入あり f. 口唇部の釉薬剥ぎ取りで露胎
35-13	"	瀬戸 四耳壺	肩～体部 径(15.0)			a. 輪積技法 内面:指ナデ 外面:沈線4～5条巡る b. 灰白色 やや橙色がかかる 黒色粒微量 e. 良好 f. 自然釉
35-14	"	火鉢	口縁部			a. 輪積技法 ナデ b. 微砂 灰白色 c. 灰白色～橙色 f. 穿孔あり f. 土器質火鉢
35-15	"	刀子	残長4.3 幅1.0 厚0.3			f. 茎部片
35-16	"	鉄製品 不明	(5.9)	(4.5)	0.4	a. 用途不明 f. 土圧で変形するが、片刃風の鎌になるか
35-17	第4面P1	かわらけ	11.6	8.3	2.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 砂質粗土 c. 暗橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
35-18	第4面遺構外	かわらけ	7.3	5.4	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
35-19	"	かわらけ	7.6	5.4	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
35-20	"	かわらけ	7.8	5.4	1.7	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多い 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味粗土 c. 黄橙色一部橙色 e. 良好
35-21	"	かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 白色粒 やや砂質粗土 c. 橙色 e. 良好
35-22	"	かわらけ	(11.4)	(6.4)	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め やや粗土 c. 淡黄灰色 e. 良好 f. 口唇部に煤付着 灯明皿
35-23	"	かわらけ	(11.4)	(7.5)	2.9	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 淡黄橙色 e. 良好 f. 口縁部に歪みあり
35-24	"	かわらけ	(11.3)	7.4	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め やや粗土 c. 暗橙色 e. 良好
35-25	"	かわらけ	(12.1)	(6.7)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 やや良土 c. 黄橙色 e. 良好 f. 内底面に薄く煤付着
35-26	"	かわらけ	12.8	8.4	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 白色粒少量 土丹粒 砂質 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好 f. 内外面剥離あり
35-27	"	かわらけ	(11.9)	(7.2)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 白色粒少量 やや粗土 c. 外面:黄灰色 内面:黄橙色 e. やや甘い
35-28	"	かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め 粗土 c. 橙色 e. 良好
35-29	"	かわらけ	13.1	8.0	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒多め やや粗土 c. 橙色 e. 良好
35-30	"	常滑 片口鉢I類	口縁部			a. 輪積技法 口唇部丸味をもつナデ仕上げ b. 灰色 白色粒 黒色粒 砂粒 c. 灰色 d. 白黄色 自然釉 e. 良好 f. 摩耗著しく成形痕みえない
35-31	"	女瓦(平瓦)	厚2.1			a. 凹面:糸切痕 布目痕 凸面:縦指ナデ 叩き目磨り消し b. 灰白色 白色粒 砂粒含むが良土 c. 表面灰黒色 燻焼風 e. 良好
35-32	"	女瓦(平瓦)	厚2.3			a. 凹面:糸切痕 細かな布目痕 凸面:斜格子叩き目 黒色微砂 b. 灰白色 砂粒 小石粒 c. 表面:明褐色 e. 不良
35-33	"	砥石	5.5	4.1	1.3	a. 砥面上下面 c. 暗褐色 f. 京都鳴滝産
35-34	"	鉄釘	残長4.5 幅0.4 厚0.3			f. 鍛造 断面四角形

表9 II地点遺物観察表(4)

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
			(c m)	(c m)	(c m)	
38-1	第5面土坑1	滑石鍋	胴部片			a. 外面にノミ状工具の削り加工 f. 内面擦痕
38-2	第5面P1	かわらけ	10.6	6.4	3.1	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質土 c. 黄橙色 e. 良好
38-3	"	鉄釘	残長 4.2 幅 0.4			f. 鍛造 断面四角形
38-4	第5面遺構外	かわらけ	7.7	6.0	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 少なめ やや良土 c. 黄橙色 e. やや不良
38-5	"	かわらけ	8.3	6.0	1.8	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質土 c. 黄橙色 e. 良好
38-6	"	かわらけ	11.7	7.9	3.5	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 少量 土丹粒 やや砂質土 c. 橙色 e. 良好
38-7	"	かわらけ	12.7	7.9	3.3	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
38-8	"	かわらけ	12.6	8.0	3.4	a. ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 多く 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質土 c. 橙色 e. 良好
38-9	"	火鉢	口縁～体部			a. 口縁部肥厚 内面口唇部引き出る b. 灰橙色 微砂 白色粒 小石粒 c. 灰白色 f. 瓦質鉢形

第四章 まとめ

長谷大谷戸周辺の発掘調査は主にやぐら・横穴墓などに限られ、各支谷での調査事例や文献史料など殆んど見られず、中世当時の様相は不明な点が多い地域にあたる。ここではⅠ・Ⅱ調査地点の各生活面で発見した遺構・遺物についての所見と、遺物組成についても簡単に触れてまとめにかきたい。

1. Ⅰ地点

検出した生活面は第1面から第5面の中世地山上面や岩盤削平面まで含め4時期が確認された。Ⅰ期は第5面は東側が岩盤削平面とその上層に施されていた踏み固められて硬化した地形層、西側は中世基盤土層の上面で構成された海拔高20.9～21.0mの生活面であり、この面に伴う遺構は軸方向に統一性のない土坑2基、かわらけ溜り1ヶ所、ピット2穴と低い密度を示していた。出土遺物は13世紀中頃まで遡りえる資料を含みつつも、概ね13世紀中～後葉の時期とみてよさそうである。Ⅱ期は第4面が相当する。第4面では礎石建物や溝などのある一定の規模と規則性をもった遺構が発見された。遺物の出土数量もかわらけを主体に44%（合計421点）と高い出土比率を示していた。遺構・遺物の様相からⅠ期とは平場の土地利用に変化があったことを窺わせるが、出土遺物から知りうるこの生活面の年代観も13世紀後葉を中心した時期に構築されたと考えられる。Ⅲ期は第3・2面で発見された礎石建物、土坑やピットなどの高い密度の遺構で構成されており、前代からの同一軸方位を踏襲した遺構群と捉えられる。本期を出土遺物から観察すると、13世紀末葉から14世紀前半頃までの資料であると考えたいところである。次にⅣ期は第1面が相当する。検出した遺構には土坑、溝、ピットであるが、遺構の大半が浅い掘り込みで恐らく後世の削平による影響と考えられた。出土遺物からの年代観は概ね14世紀代までに収まる時期と捉えたいところである。

2. Ⅱ地点

Ⅱ地点調査では、Ⅰ地点の調査結果を踏まえて中世基盤層上面へ至るまで5面の4時期を確認した。Ⅰ期は第5面の黒褐～暗茶褐色粘質土の中世地山面に相当し、海拔高21.25m程であった。この面に伴う遺構は軸方向に統一性もなく殆んど遺物を伴わない土取り穴を思しき土坑や浅いピットで占められる。出土遺物は概ね13世紀後葉の時期とみてよさそうである。Ⅱ期は第4面が相当する。第4面では礎石建物や溝などのある一定の規模と規則性をもった遺構である。遺物はかわらけが出土総数の52%以上と高い出土比率を占める。Ⅰ期とは平場の土地利用に変化があったことを窺わせるが、出土遺物から知りうるこの生活面の年代観も13世紀後葉を中心した時期に構築されたと考えられる。Ⅲ期は第3・2面で発見された掘立柱建物、土坑、溝、ピットなどの密度の高い遺構で構成されており、前代からの同一軸方位を踏襲した遺構群と考えられる。出土遺物から13世紀末葉から14世紀前葉頃までの資料であると考えたいところである。次のⅣ期（第1面）へはⅠ地点と同じ様相で大規模な盛土造成を施して前代とは土地利用が一変した画期を窺わるものであった。出土遺物からの年代観は14世紀代までと捉えたいところである。

次に表10・11に示した両地点における遺物の出土数量・比率を観察すると、Ⅰ地点はコンテナ箱で6箱分で接合後の破片数956点、Ⅱ地点はコンテナ箱5箱で破片数809点が得られた。内訳をみると、大多数を占めるのがロクロ成形かわらけで両地点とも8割5分近い出土比率を示し、手捏ねかわらけは1点だけである。陶磁器類では常滑窯の甕・片口鉢41点（1.5・3.3%）と最も多く、次に貿易磁器21点（0.6・1.7%）だが瀬戸窯品4点づつ（各0.2%）と低い比率を示す。さらに第1～4面では廃棄さ

表 10 I 地点分類別出土数量・比率表

出土地種類		1面	2面	3面	4面	5面	5面下	個数	比率(%)
かわらけ	ロクロ	116	67	134	395	124	1	837	87.6
	青磁	0	0	0	2	0	0	2	0.2
	白磁	1	0	0	0	0	0	1	0.1
舶載陶磁器	青白磁	1	0	2	0	0	0	3	0.3
	瀬戸	2	0	0	0	0	0	2	0.2
	常滑	4	3	4	3	0	0	14	1.5
瓦質製品	東播磨系	0	2	0	0	0	0	2	0.2
	瓦	7	3	1	1	0	0	12	1.3
土製品	火鉢	2	0	0	1	0	0	3	0.3
	その他	0	1	0	1	0	0	2	0.2
石製品	砥石	0	0	0	3	0	0	3	0.3
	滑石	0	0	1	0	0	0	1	0.1
	その他	0	0	0	2	1	0	3	0.3
金属品	銭	0	0	1	0	0	0	1	0.1
	釘	3	7	5	4	0	0	19	2
	銅製品	2	2	0	1	0	0	5	0.5
	その他	0	0	0	0	1	0	1	0.1
自然遺物	骨	1	0	0	0	0	0	1	0.1
	貝	1	0	0	0	0	0	1	0.1
	玉石	8	9	11	8	1	0	37	3.9
近世	その他	5	0	1	0	0	0	6	0.6
合計		153	94	160	421	127	1	956	100
比率(%)		16	10	17	44	13	0.1	100	

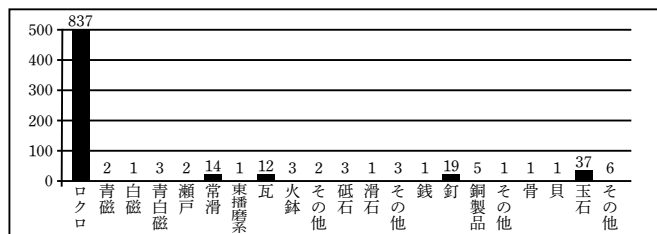
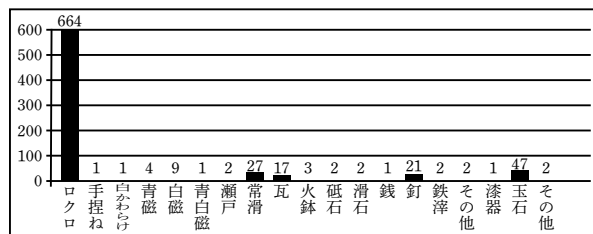


表 11 II 地点分類別出土数量・比率表

出土地種類		1面	2面	3面	4面	5面	個数	比率(%)
かわらけ	ロクロ	7	165	71	347	74	664	83
	手捏ね	1	0	0	0	0	1	0.1
	白かわらけ	0	0	0	0	1	1	0.1
舶載陶磁器	青磁	0	2	1	0	1	4	0.5
	白磁	0	1	0	8	0	9	1.1
	青白磁	0	1	0	0	0	1	0.1
国産陶器	瀬戸	0	1	0	1	0	2	0.2
	常滑	11	7	2	4	3	27	3.3
瓦質製品	瓦	6	8	0	3	0	17	2.1
土製品	火鉢	0	0	0	1	2	3	0.4
石製品	砥石	0	0	1	1	0	2	0.2
	滑石	0	0	1	0	1	2	0.2
金属品	銭	0	0	1	0	0	1	0.1
	釘	1	8	2	7	3	21	2.6
	鉄滓	0	2	0	0	0	2	0.2
	その他	0	0	0	2	0	2	0.2
漆器	漆器	0	0	0	1	0	1	0.1
自然遺物	玉石	4	6	16	18	3	47	5.8
	その他	0	1	0	1	0	2	0.2
合計		30	202	95	394	88	809	100
比率(%)		4	25	12	48	11	100	



れた瓦類が客土に混じって合計 29 点 (1.3・2.1%) と多めに出土したのが両地点の遺物特徴となろう。地点 2 (松葉・菊川 2010) では 1 号やぐら内出土の中世瓦が 14 世紀後半から 15 世紀前半にかけて廃棄された様子が窺え、周辺に瓦葺き建物の存在が推測されている。しかし高德院境内では中世瓦の出土は殆んど知られておらず、堂舎の屋根は葺棟も含めて瓦葺きを用いない可能性が高いのは興味深い。

大谷戸中央を南北に走る道路の海拔高をみると、谷戸入口に近い付近が海拔高約 13.5 m、調査地点の支谷前の北寄りに位置した地点 7 (宮田 2006) の海拔高約 16.3 m、谷戸奥に近い先年度報告の地点 1 (原 2013) が海拔高 19.5 m を測り、高德院東側から長谷大谷戸の信号に向かって緩やかな傾斜をもち、上って行くことが窺える。調査地点は海拔高 23.0 m 前後を測り、現況地形でみると道路面より約 7 m ほど高い位置でひな壇状の地形造成された平坦面上段に立地している。今回の両地点の調査成果から中世前半期における支谷内の土地利用は、周囲の丘陵 (土丹層) を切り崩して岩盤削平面として、その際に発生した岩塊や土で谷を埋め立てて平坦地を拡張していく一繋がり of 整地造成を行っていた。こうした丘陵裾部の岩盤掘削や、それに伴う土の移動などの土木工事はかなりの経済的な負担を伴うものと思われる。この調査地点も鎌倉時代中頃以降から寺院や武家などによる経済・政治的な基盤もつ何らかの権力が介在していた土地利用の様子が推測されるのである (馬淵 1992)。大谷戸は、大仏が鎮座する高德院背後に立地する南北に長く延びた谷戸にも係わらず中世期に関する文献史料にはほとんどその姿を現さず、歴史像を言及することはできていない。しかし調査地点 1・7 の平場や、調査地点 2～4 のやぐらの存在などの発掘調査成果から概ね 13 世紀中頃以降から 15 世紀前半を主体とした時期の廃寺や高德院に関連した塔頭域であった可能性も想定されよう。今後とも大谷戸内での調査継続によって、この谷戸の土地利用を含めて次第に明らかにされていくものと考えられよう。

【引用・参考文献一覧】 ※引用・参考文献は本報告全体に共通する。

赤星直忠 1959『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館

大三輪龍彦・田代郁夫 1986『高德院周辺遺跡(やぐら)発掘調査報告書』高德院周辺遺跡(やぐら)発掘調査団

上本進二 2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧敷戸遺跡(逗子市 N.100)』東国歴史考古学研究所

鎌倉市教育委員会編 1990「としよりのはなし」『鎌倉市文化財資料 第7集』

五味文彦「大仏再建—中世民衆の熱狂—」『講談社選書メチェ 56』講談社

木村美代治・田代郁夫 1991「桑ヶ谷療病院跡(No.294)長谷三丁目 630 番 17 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』
鎌倉市教育委員会

宗臺秀明 2002「14世紀のかわらけ」『かながわの中世—鎌倉から小田原へ—』神奈川考古学会

宗臺富貴子 2008「南関東の陶磁器流通」『中世東国の世界 2 南関東』浅野晴樹・齋藤慎一編 高志書院

鈴木庸一郎・菊川英政 2001『〈古都鎌倉〉を取り巻く山稜部の調査』神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会(財)かな
がわ考古学財団

菊川英政・瀬田哲夫ほか 1999『大仏切通周辺詳細分布調査報告書 国指定史跡「大仏切通」に関わる古道および城郭
遺構発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

斎木秀雄・宗臺秀明 1989『長谷一丁目 290 番—1 地点—高德院周辺遺跡群内、グランフォルム鎌倉建設に伴う中世遺
跡の発掘調査報告書—』高德院周辺遺跡発掘調査団

汐見一夫 2001「2 石製品の流通 砥石と硯の流通」『図解 日本の中世遺跡』小野正敏編 東京大学出版会

清水真澄 1979『鎌倉大仏—東国文化の謎—』有隣堂

瀬田哲夫 2007『長谷小路周辺遺跡(No.236)発掘調査報告書—長谷三丁目 633—2 の一部他7筆地点—』(株)齋藤建設

田代郁夫・原 廣志 1991「桑ヶ谷療病院跡(No.294)長谷三丁目 630 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』
鎌倉市教育委員会

玉林美男 1988「5. 長谷小路周辺遺跡(No.327)長谷一丁目 284 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』
鎌倉市教育委員会

中野晴久 2012「常滑窯の展開」『シンポジウム「中世渥美・常滑焼をおって」』日本福祉大学知多半島総合研究所

貫 達人・川副武胤『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館

原 廣志 2013「高德院周辺遺跡(No.327)長谷五丁目 387 番 7 の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29(第
1分冊)』鎌倉市教育委員会

2002「第4章 出土瓦について」『永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係わる発掘調査報告書—遺
物編・考察編—』鎌倉市教育委員会

福田 誠・松島義章・鈴木 茂・平尾良光ほか 2002『鎌倉大仏周発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

松葉 崇・菊川 泉・鈴木絵美 2010『長谷大谷やぐら群 平成 20・21 年度鎌倉市急傾斜地(長谷佐助地区)崩壊対策
工事に伴う発掘調査』かながわ考古学財団調査報告 257 ※筆者注 1 号やぐら内出土瓦は鎌倉永福寺・
極楽寺資料例からみて鎌倉時代後期的な様相で小型規格から屋根の棟を覆った葺棟や熨斗棟の使用が
想定される。

馬淵和雄 1992「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉 第 69 号』鎌倉文化研究会

1995『高德院周辺遺跡—長谷四丁目 548 番 4 他地点—』高德院周辺遺跡発掘調査団

1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社

宮田 眞 2006『高德院周辺遺跡発掘調査報告書(鎌倉市長谷五丁目 341 番 10 の一部ほか 2 筆地点)』(株)博 通

山本信夫ほか 2000「大宰府条坊跡 X V—陶磁器分類編—」『大宰府市の文化財 第 49 集』大宰府市教育委員会



◀ a.
I区第1面全景(北から)



▶ b.
I区第1面全景(南から)



◀ c.
II区第1面全景(南から)

I 地点



◀ a. I区第2面全景(南から)



▶ b. I区第2面全景(東から)



◀ c. II区第2面全景(東から)

I 地点

図版3



◀ a. I区第3面全景(南から)



▶ b. I区第3面土坑1(南から)



◀ c. II区第3面全景(南から)

I 地点



◀ a. I区第4面全景(南から)



▶ b. II区第4面全景



◀ c. II区第4面岩盤掘削面
溝1・削平面・攪乱坑

I 地点

図版5

▼ b. I区第5面トレンチ (北から)



調査区南壁堆積土層



▲ a. I区第5面下トレンチ (西から)

▼ e. II区第5面下トレンチ (北から)



5・6は岩盤落込の確認トレンチである

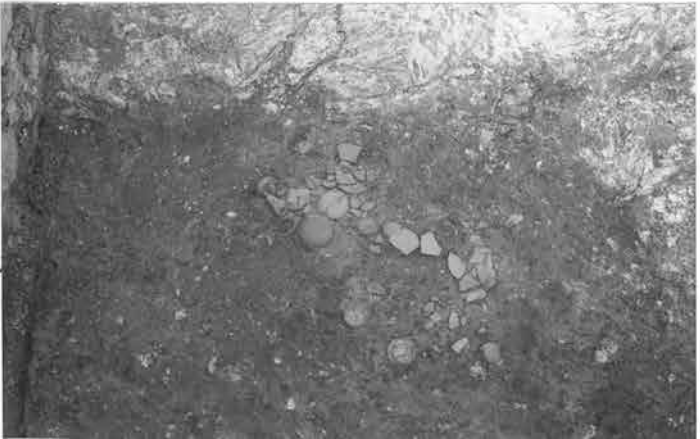


▲ c. II区第5面全景 (東から)

▼ f. II区第5面下トレンチ (東から)



▼ d. II区第5面かわらけ溜り(北から)



I 地点



▲ a. II区東壁堆積土層



▲ b. II区北壁土層堆積



岩盤掘削攪乱坑のバックフォアのバケツ爪跡

▲ c. II区産業廃棄物攪乱坑



▶ d. 同上攪乱坑

屋瓦・タイル・塩化ビニール管等の多量廃棄



◀▼ e. 攪乱坑の廃棄物堆積状況



I 地点

▼ 第1面遺構外



図7-1



図7-2



図7-11



図7-3



図7-7



図7-12



図7-4



図7-8



図7-19



図7-5



図7-9



図7-6



図7-10



図7-13



図7-27



図7-20



※写真掲載のみ



※写真掲載のみ



※写真掲載のみ
見やすいように
拡大しています



※写真掲載のみ



図7-15



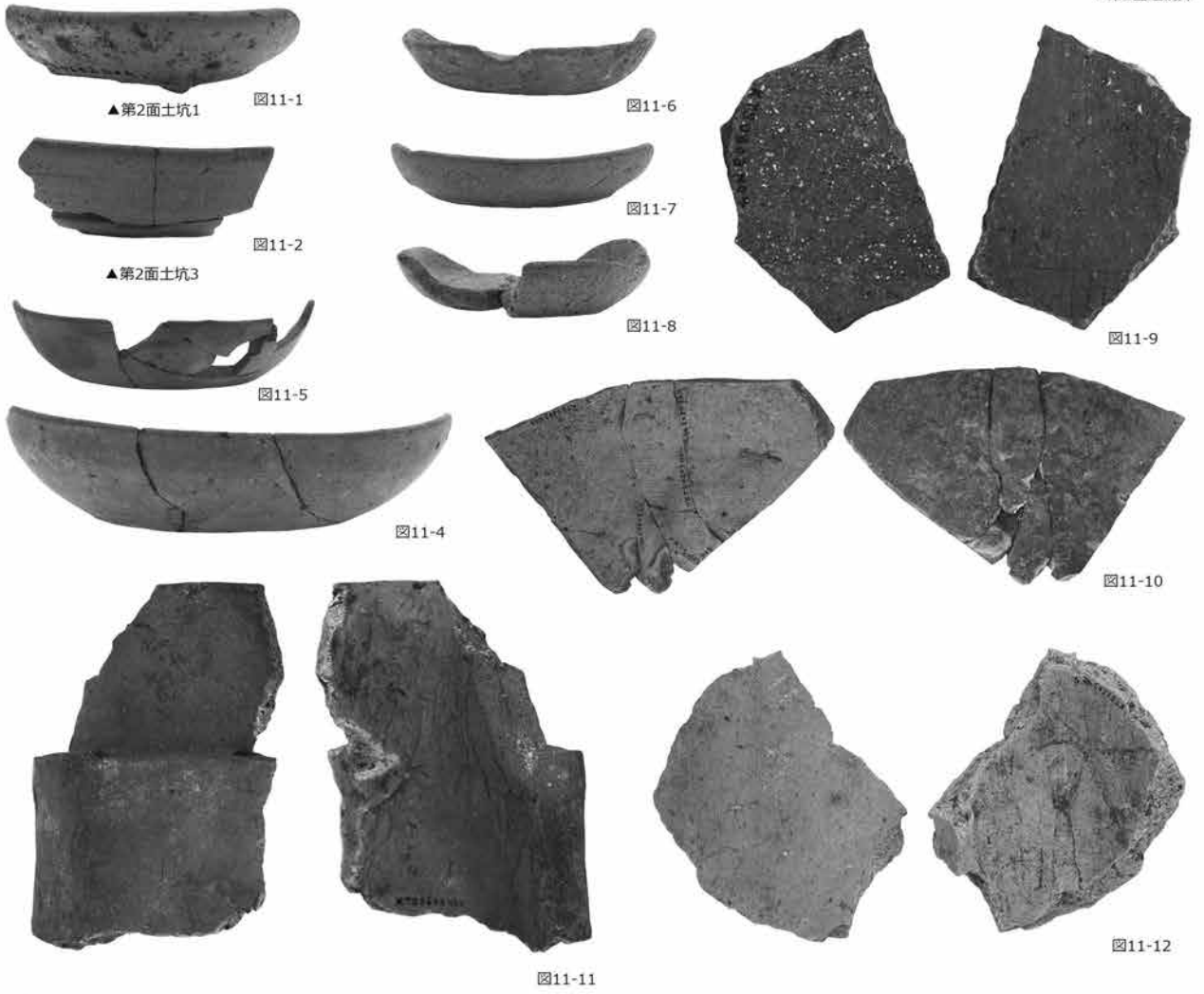
図7-14



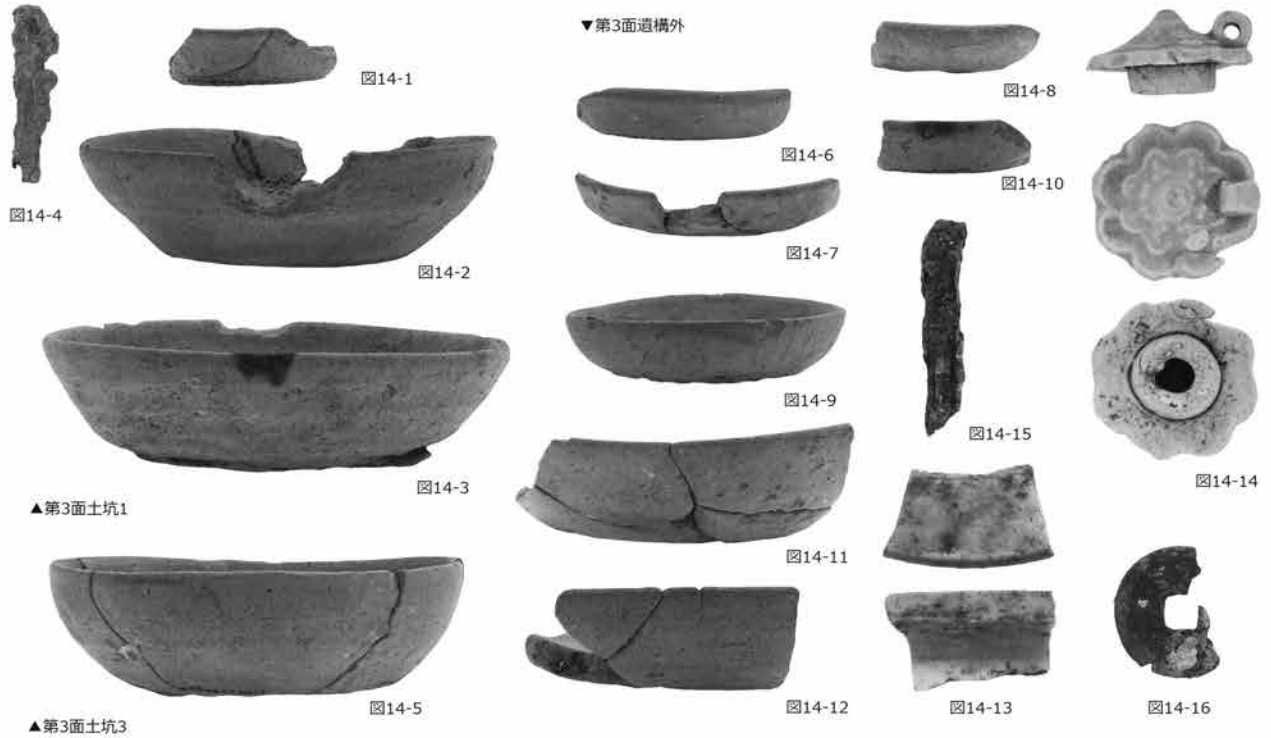
図7-16

I地点

▼第2面遺構外

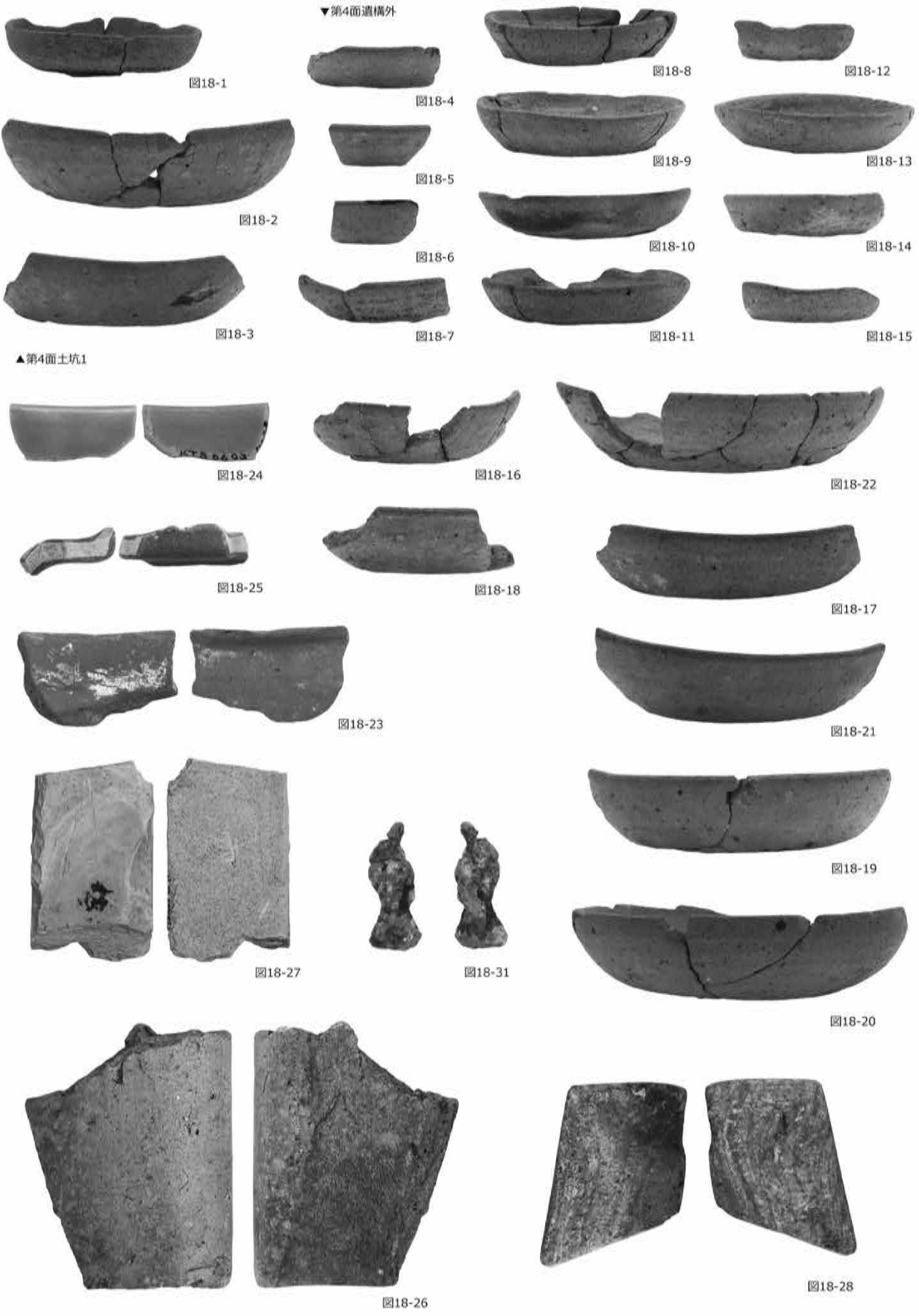


▼第3面遺構外

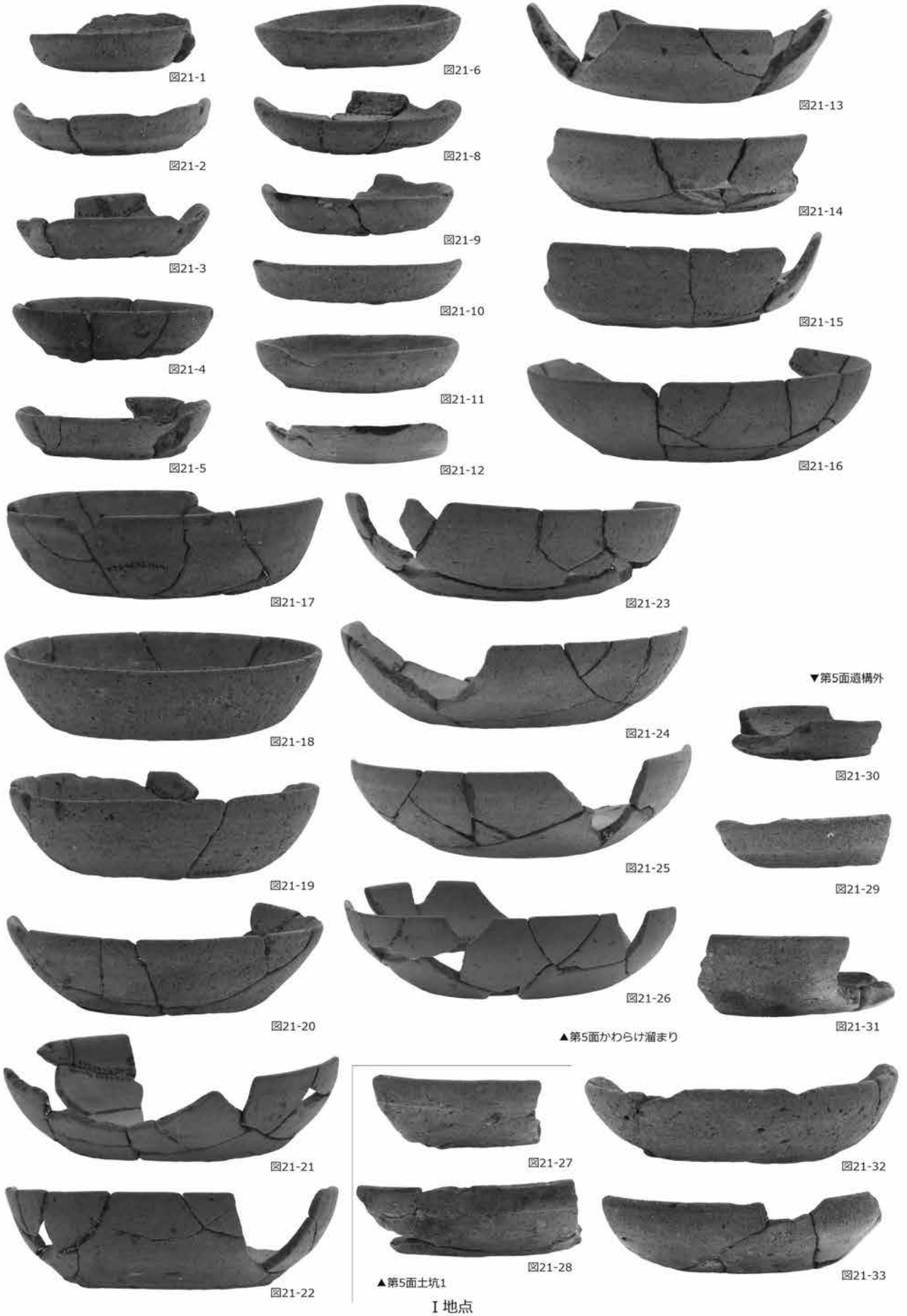


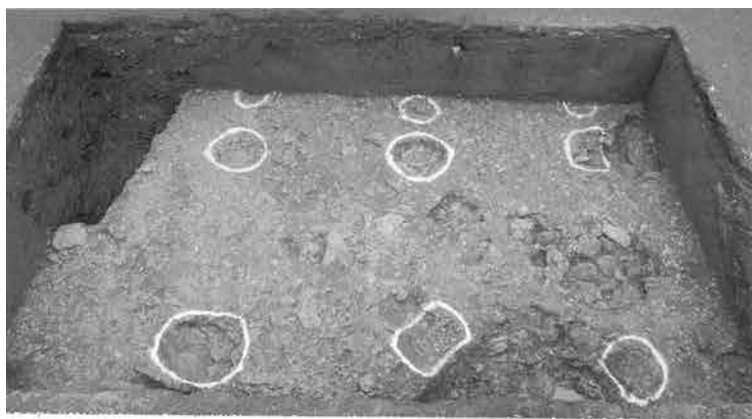
I 地点

图版9



I 地点





◀ a. I区第1面全景 (南から)

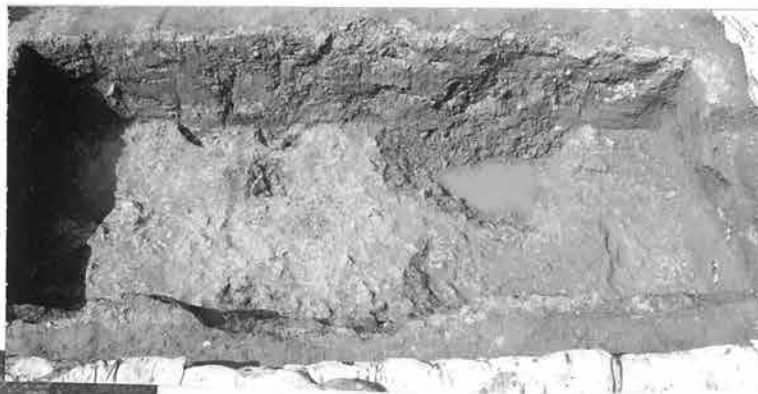


◀ c. II区第1面全景 (東から)

▼ b. I区第1面全景 (西から)



▼ b. II区第1面全景 (南から)



◀ e. 第1面土坑2

II地点



▲ a. I区第2面全景（西から）



▲ b. I区第2面全景（南から）



▲ c. II区第2面全景（南から）



▶ d. II区第2面全景（東から）



▲ e. 建物1-口-2柱穴



▲ f. 鬼瓦出土状況

II地点



▲ a. I区第3面全景（西から）



▲ b. I区第3面全景（南から）



▲ c. II区第3面全景（南から）



▲ d. II区第3面全景（東から）



▲ e. 溝1底面



▲ f. 土坑1遺物出土状況

II地点



▲ a. I区第4面全景（西から）



▲ b. I区第4面全景（南から）



▲ c. II区第4面全景（南から）



▲ d. II区第4面全景（東から）



▲ e. 第4面土坑2土層堆積



▶ f. 第4面上出土かわらけ

II地点



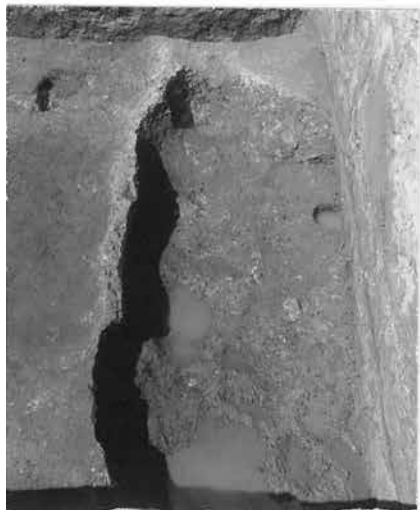
▲ b. I区第5面全景（西から）



▲ a. I区第5面全景（南から）



▲ c. II区第5面全景（東から）



▲ e. 第5面土坑 1



▲ d. II区第5面土坑 1・3



▲ f. I区南壁堆積土層



▲ g. I区東壁堆積土層

II地点



◀ a. I区北壁堆積土層



▲ c. II区東壁堆積土層



▲ b. II区南壁堆積土層



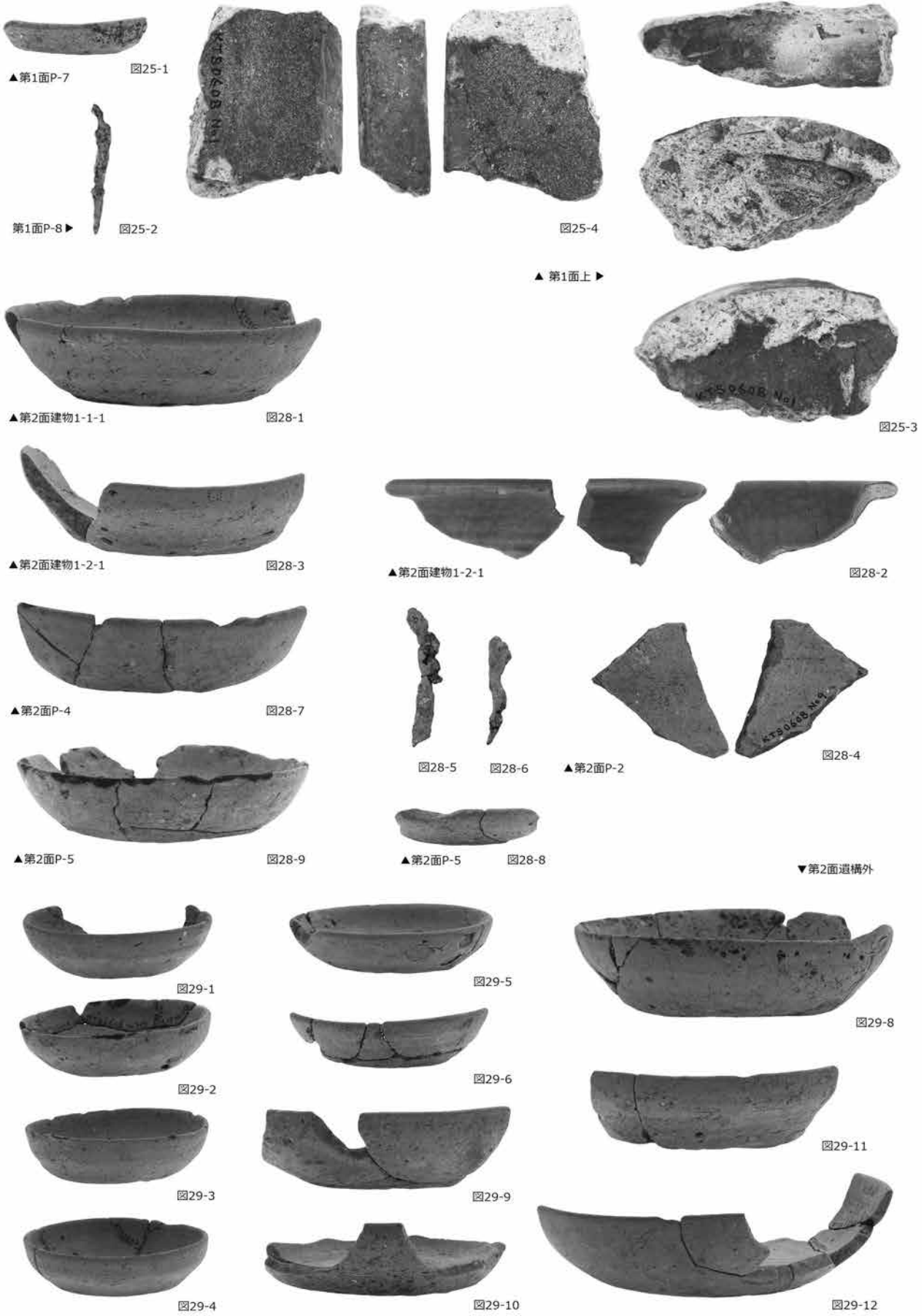
▲ e. II区西壁堆積土層



▲ d. II区西壁堆積土層

II 地点

图版 17



II 地点



图29-13



图29-16



图29-15



图29-21



图29-14



图29-19



图29-19 押印



图29-20



图29-24



图29-22

▲第2面遺構外

▼第3面土坑1



图32-5



图32-8



图32-1



图32-3



图32-6



图32-9



图32-2



图32-4



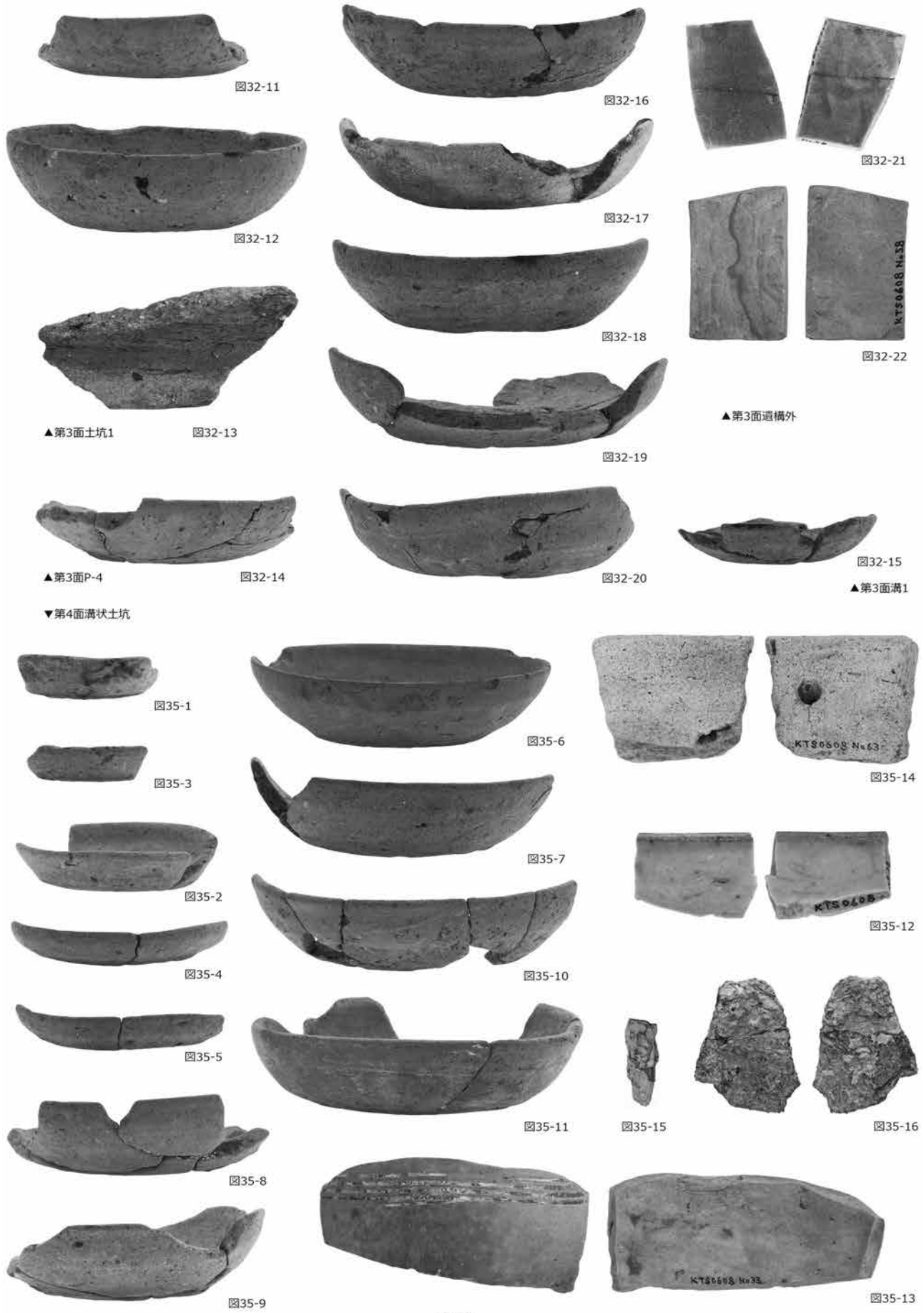
图32-7



图32-10

II地点

图版 19



II地点

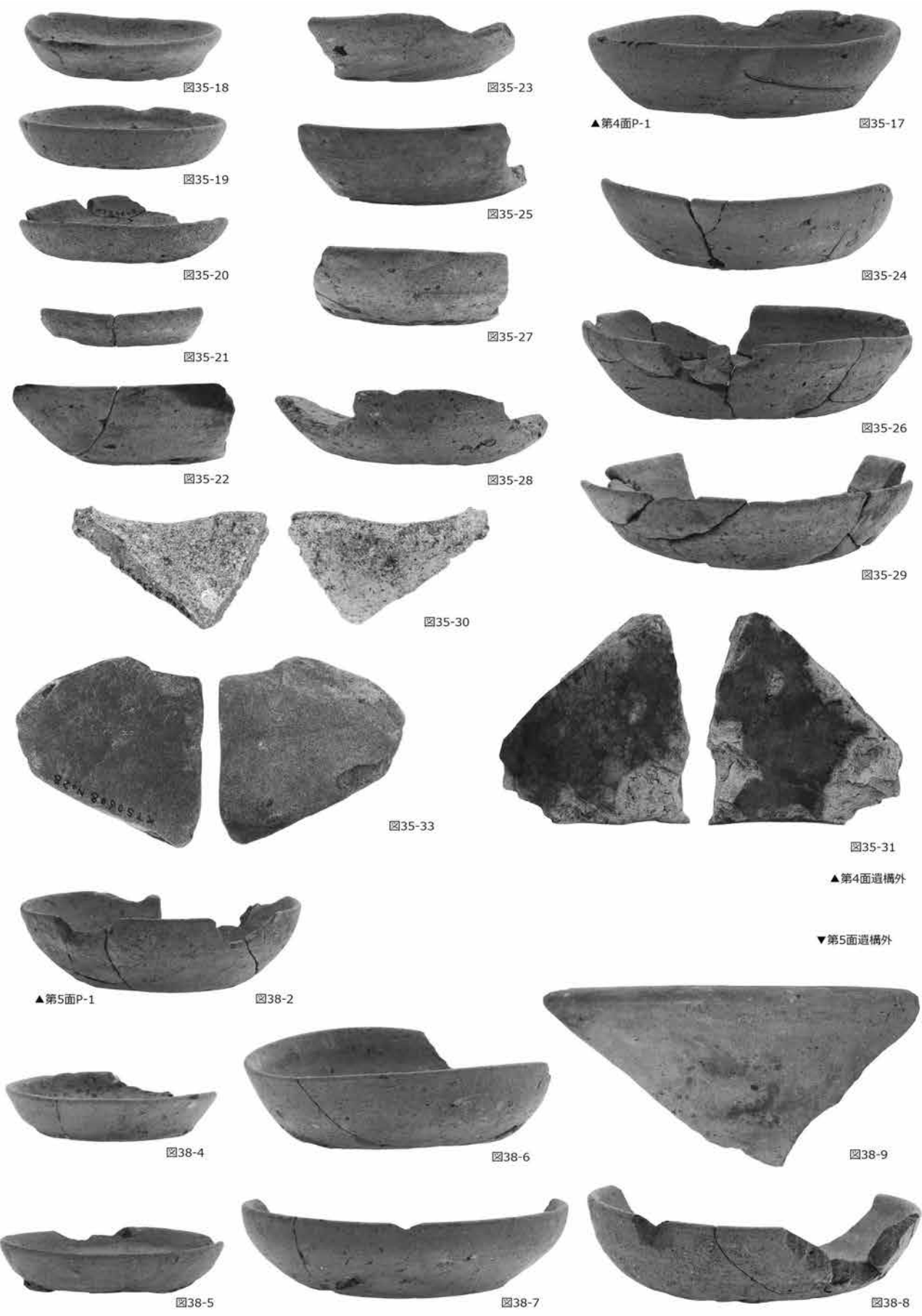


图35-18

图35-23

图35-17

图35-19

图35-25

▲第4面P-1

图35-20

图35-27

图35-24

图35-21

图35-28

图35-26

图35-22

图35-30

图35-29

图35-33

图35-31

▲第4面遺構外

▲第5面P-1

图38-2

▼第5面遺構外

图38-4

图38-6

图38-9

图38-5

图38-7

图38-8

II地点

由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (No. 372)

由比ガ浜二丁目 1014 番 57 地点

例 言

1. 本報は鎌倉市由比ガ浜二丁目 1014 番 57 地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は個人専用住宅に係る建築範囲 52.5㎡を対象とし、平成 18 年 6 月 28 日から 18 年 8 月 7 日にかけて実施した。
3. 現地での調査体制は以下の通り。

担当者	伊丹まどか
調査員	宇都洋平・鈴木絵美・本城裕
作業員	天野隆男・小口照男・清水政利・鈴木秀彦（(社) 鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本報作成は以下の分担で行った。

遺物実測	田畑衣理
観察表	田畑衣理
遺構写真	宇都洋平
遺物写真	須佐仁和
遺物図版作成	田畑衣理
遺構図版作成	田畑衣理
写真図版作成	田畑衣理
原稿執筆	伊丹まどか・田畑衣理
編集	伊丹まどか・田畑衣理
5. 出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が管理している。
6. 本報図版の遺構・遺物の縮尺は次のとおりである。

遺構全測図	： 1 / 6 0	個別遺構図	： 1 / 4 0	実測遺物図	： 1 / 3	銭	： 1 / 1
-------	-----------	-------	-----------	-------	---------	---	---------

なお各挿図にはスケールを表示してある。
7. 遺構に付した番号は、調査時に便宜的に付した番号であり、遺構の新旧を表すものではない。
8. 検出した遺構の計測値・実測遺物観察表および、実測できなかった遺物の破片数は表にまとめて掲載した。
9. 出土した遺物及び、調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査及び報告書作成に関しては下記の方々よりご教授、ご協力を賜りました。記して深く感謝いたします。（敬称略・五十音順）
宇賀神雅子・沖元道・汐見一夫・樋泉岳二（貝：早稲田大学）・原廣志・福田誠・松尾宣方
馬淵和雄・宮田眞・森孝子

本文目次

第一章 調査の概要	169
1. 歴史的環境	
2. 調査地の位置とグリッド配置	
3. 土層堆積	
第二章 発見した遺構と遺物	176
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
3. 第3面の遺構と遺物	
4. 第4面の遺構と遺物	
5. 最終トレンチ位置と出土遺物	
第三章 まとめ	190
遺物観察表	
遺構計測表	
遺物破片数表	
貝分類表	

挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡図	170
図2 遺跡位置図・国土座標・グリッド配置図	173
図3 調査区堆積土層図	174
図4 第1面全測図	176
図5 第1面個別遺構図	178
図6 第1面出土遺物	179
図7 第2面全測図	179
図8 第2面個別遺構図	180
図9 第1面～第2面構成土出土遺物	182
図10 第3面全測図・個別遺構図・出土遺物	183
図11 第4面全測図	184
図12 第4面個別遺構図(柱穴列)	185
図13 第4面個別遺構図・出土遺物	186
図14 最終トレンチ位置図	187
図15 最終トレンチ出土遺物	188
図16 表採・攪乱出土遺物	189
図17 堆積土層模式図	190

図 版 目 次

図版 1	196
第 1 ～第 2 面全景（南から）	
第 2 面・遺構 10（東から）	
図版 2	197
第 3 面全景（東から）	
第 4 面全景（東北から）	
図版 3	198
第 1 面出土遺物	
第 1 ～第 2 面構成土出土遺物	
第 3 面出土遺物	
第 4 面出土遺物	
図版 4	199
最終トレンチ出土遺物	
表採・攪乱出土遺物	
図版 5	200
出土貝各種（写真のみ）	

第一章 調査の概要

1. 歴史的環境 (図 1)

本調査地は、鎌倉市街地南に広がる相模湾に形成される由比ガ浜の後背砂丘の頂部に位置する。調査地西には鶴岡八幡宮前から由比ガ浜まで延びる若宮大路が南北に走り、東には市街地北東部から蛇行しながら相模湾に注ぐ滑川が南北に延びる。現地表の標高は 9.50 m である。

現在は滑川から市街地南東の稲瀬川付近までを由比ガ浜と呼んでいるが、中世前期には、さらに西の稲村ヶ崎から貞永元年(1232)に由比ガ浜東端に玉石積みをした人工築港の和賀江島(飯島津)の港までの海岸線全域を指していた。この海岸線域は「前浜」とも呼称されていた地域である。『極楽寺律要文録』『足利尊氏書状案』によると、和賀江島を含めた前浜一帯は忍性以来極楽寺が管領下にあったことが知られている。和賀江島近くの材木座海岸一帯は、日蓮宗や一向宗等の鎌倉新仏教の活動の場でもあり、前浜一向堂の名が「新田義貞証判軍忠状」(元弘3年6月14日)に見える。遺跡地南(地点1)および、東南部(地点25)では遺跡名の由来ともなった、獣骨を含む大型の集合墓や、単独葬・集積葬の土坑墓が密集する墓域が広がる。また本遺跡地の南に隣接する地点7では倉庫と考えている方形竪穴建築址や掘立柱建物、道路、柵状遺構などが墓址とともに発見され、遺跡地一帯は、葬地としてだけでなく、生活の場としても活発に利用されていた。

2. 調査地の位置とグリッド配置 (図 2)

調査を開始するにあたっては調査区にほぼ平行した任意の方眼軸を設け、P1と見返り点P2を設定。後日鎌倉市4級基準点を用いて光波測量機によるトラバース測量を行い、P1と見返り点P2に国土座標上の数値を移動した。測量軸は2m方眼による軸線を用い、南北軸線には北から算用数字の1～5、東西軸線には西からアルファベットA～Fとした。南北軸線は真北に対して50°13'35"西にずれる。現地調査では日本測地系(座標AREA9)の国土座標数値を使用した。本報告作成に当たって国土地理院が公開する座標変換ソフト「web版TKY2JGD」で世界測地系第IX系に変換した。

< 国土座標値 >

(P-1) X-76246.9496 Y-25862.5148 (P-2) X-76241.5410 Y-25869.0125

3. 土層堆積 (図 3)

表土(標高約9.50m)から約1m下方までは重機によって掘削した。その際、調査員が立ち会うことなく作業が行われたため、表土から遺構検出面までの堆積状況は不明となってしまった。

調査地は砂丘頂部に位置する。調査地を含む砂丘上で発見される遺跡は、基本的に客土を用いた地業面を検出することはなく、自然堆積の風成砂層上に生活面が構築される。本調査では遺構を検出・確認した層で生活面を分けた。表土を除いた標高約8.40mで第1面を確認した。第1面構成土は灰白色砂質土・黄褐色砂・炭化物を含む。第2面は遺構の切り合いで第1面と分けて示した。確認面は標高約8.20m。第1面確認レベルの約50cm下方で、第3面を検出した(標高約7.90m)。第3面構成土は灰褐色砂質土・灰白色砂・炭化物を含む。第4面は標高7.70mで検出した。第4面構成土は暗褐色砂質土・貝砂・炭化物を含む。掘削深度の制限により、第4面下層はトレンチ調査によって生活層があることを確認した。確認レベルは標高約7.50m。

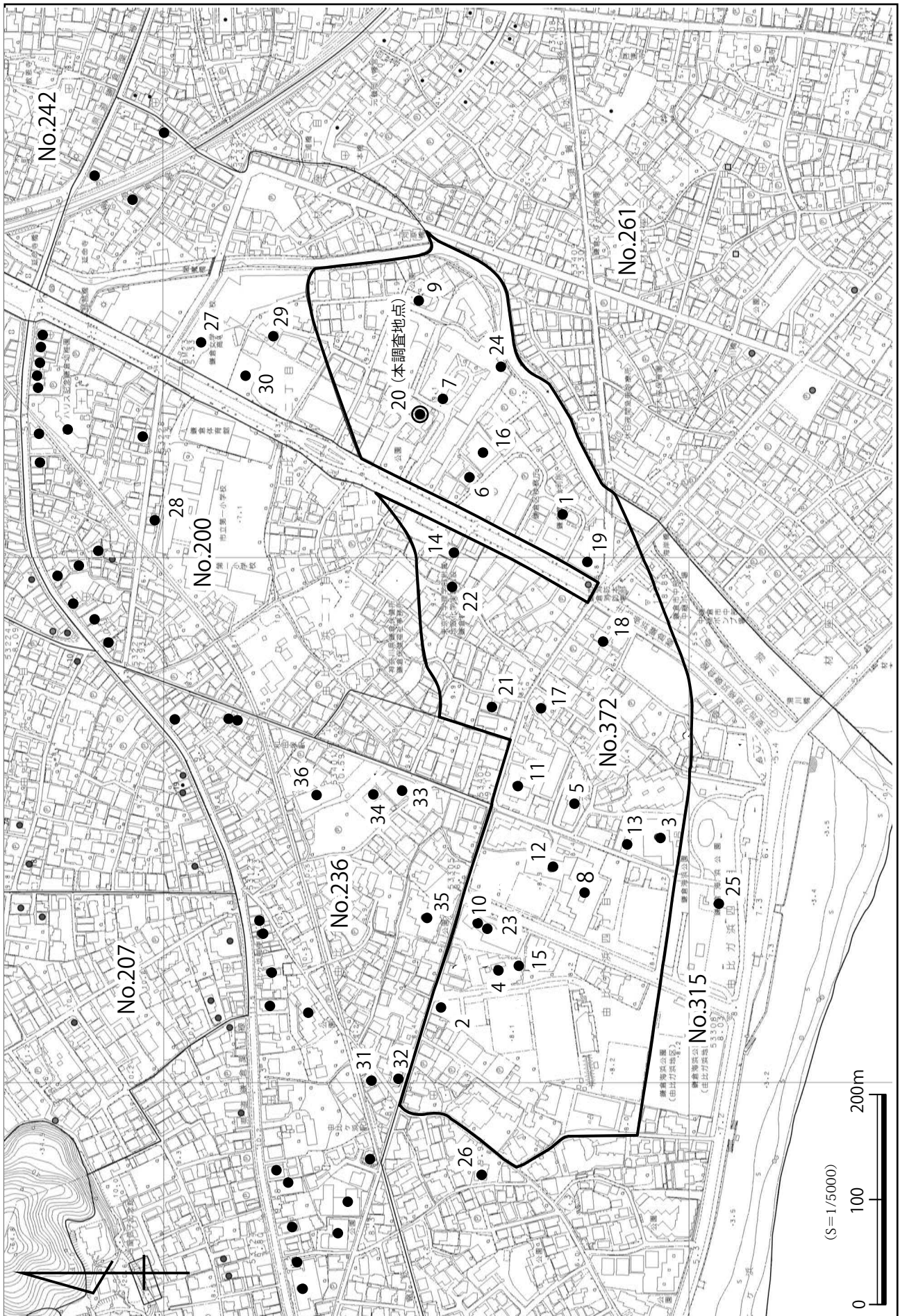


図1 調査地点と周辺の遺跡図

調査地点一覧

○由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (No.372)

1. 由比ガ浜二丁目 1023 番地点 (1次:1953年5月調査・2次:1956年3月調査) 鈴木尚ほか 1956『材木座遺跡』岩波書店
2. 由比ガ浜四丁目 1181 番地点 (1977年10月調査) 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』鎌倉市教育委員会
3. 由比ガ浜四丁目 1142 番 1 地点 (1982年8月調査) 玉林美男 1984『鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡 - 特殊養護老人ホーム鎌倉静養館 -』鎌倉市教育委員会
4. 由比ガ浜四丁目 1171 番 3 地点 (1986年7月調査) 斉木秀雄 2001『鎌倉市遺跡調査会調査報告書 22 集 由比ガ浜中世集団墓地遺跡』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会
5. 由比ガ浜四丁目 1134 番 1 地点 (1986年8月調査) 大河内勉 1996『由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 (第1分冊・古代編)』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
6. 由比ガ浜二丁目 1015 番 29 地点 (1989年10月調査) 大河内勉 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』鎌倉市教育委員会
7. 由比ガ浜二丁目 1034 番 1 地点 (1990年10月調査) 原廣志ほか 1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会
8. 由比ガ浜四丁目 1136 番 11 地点 (1991年8月調査) 大河内勉ほか 1997『由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 (3分冊の第1・2分冊)』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
9. 由比ガ浜二丁目 1037 番 1 地点 (1992年2月調査) 原廣志 1992『鎌倉考古 22』鎌倉考古学研究所
10. 由比ガ浜四丁目 1170 番 1 地点 (1992年12月調査) 斉木秀雄ほか 1994『由比ガ浜 4 - 6 - 9 地点発掘調査報告』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
11. 由比ガ浜四丁目 1130 番外地点 (1999年6月調査) 大河内勉 1999『貿易陶磁研究集会 鎌倉大会資料集 - 相模国・鎌倉市街地における中世前期の貿易陶磁』貿易陶磁研究会・鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所
12. 由比ガ浜四丁目 1136 番 11 地点 (1997年2月調査) 斉木秀雄ほか 1997『由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 (3分冊の第3分冊)』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
13. 由比ガ浜四丁目 1142 番 12 地点 (1996年11月調査) 宮田真ほか 1996『由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書』鎌倉考古学研究所
14. 由比ガ浜二丁目 1203 番 20 地点 (2000年3月調査) 原廣志ほか 1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会
15. 由比ガ浜四丁目 1179 番 1 地点 (2000年5月調査) 大河内勉ほか 2001『鎌倉市遺跡調査会調査報告書 22 集 由比ガ浜中世集団墓地遺跡』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団・(有) 鎌倉遺跡調査会
16. 由比ガ浜二丁目 1015 番 23 地点 (2000年7月調査) 2005『由比ガ浜中世集団墓地遺跡』玉川文化研究所
17. 由比ガ浜四丁目 1133 番 1 外地点 (2002年7月調査) 宗臺秀明ほか 20042005『第14回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』『鎌倉の埋蔵文化財 8 平成14・15年度』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
18. 由比ガ浜四丁目 1107 番 32 地点 (2005年9月調査) 森孝子ほか『神奈川県埋蔵文化財調査報告 51』神奈川県教育委員会

19. 由比ガ浜二丁目 1015 番 1 外地点(2005 年 11 月調査)齊木秀雄ほか 2001『由比ガ浜中世集団墓地遺跡』
(有) 鎌倉遺跡調査会
20. 由比ガ浜二丁目 1014 番 57 地点 (本調査地点)
21. 由比ガ浜二丁目 1235 番 4 地点 (2007 年 6 月調査) 未報告
22. 由比ガ浜二丁目 1203 番 42、44、46 地点 (2009 年 1 月調査) 宮田眞ほか 1996 『『由比ガ浜中世集団
墓地遺跡 (No.372) 発掘調査報告書』 (有) 博通
23. 由比ガ浜四丁目 1170 番 1 地点 (2011 年 10 月調査) 未報告
24. 由比ガ浜二丁目 1015 番 25 他 2 筆地点 (2011 年 11 月調査) 未報告
- 由比ガ浜南遺跡 (No.315)
25. 由比ガ浜四丁目 1102 番 2 外地点 (1995 ~ 1997 年調査) 齊木秀雄ほか 2002 『由比ガ浜南遺跡』 由
比ガ浜南遺跡発掘調査団
26. 長谷二丁目 188 番 2 外(1994 年 2 月調査)瀬田哲夫ほか 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11(第
1 分冊)』 鎌倉市教育委員会
- 下馬周辺遺跡 (No.200)
27. 由比ヶ浜二丁目 1011 番 1 地点 (1989 年 5 月調査) 大河内勉 1998 『下馬周辺遺跡発掘調査報告書』
下馬周辺遺跡発掘調査団
28. 由比ヶ浜二丁目 39 番 14 地点 (2004 年 5 月調査) 原廣志 2010 『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告書 26(
第 1 分冊)』 鎌倉市教育委員会
29. 由比ヶ浜二丁目 1058 番 5 地点 (2008 年 2 月調査) 宮田眞ほか 2009 『神奈川県埋蔵文化財調査報告
54』 神奈川県教育委員会
30. 由比ヶ浜二丁目 1075 番地点 (2010 年 6 月調査) 植山英史ほか 未報告
- 長谷小路周辺遺跡 (No 236)
31. 由比ヶ浜三丁目 194 番 40 地点(1990 年 11 月調査)大河内勉 1997『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』
長谷小路周辺遺跡発掘調査団
32. 由比ヶ浜三丁目 1175 番 2 地点 (1992 年 9 月調査) 馬淵和雄 1994 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告
書 10(第 2 分冊)』 鎌倉市教育委員会
33. 由比ヶ浜三丁目 1262 番 2 他地点 (1998 年 1 月調査) 田代郁夫ほか 2002 『東国歴史考古学研究所調
査研究報告第 31 集 長谷小路周辺遺跡 (N o 236)』 東国歴史考古学研究所
34. 由比ヶ浜三丁目 1262 番 6 地点(1999 年 4 月調査)宮田眞ほか 2000『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』
長谷小路周辺遺跡発掘調査団・宮田事務所
35. 由比ヶ浜三丁目 254 番 15 地点 (1999 年 6 月調査) 福田誠ほか 2001 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報
告書 17(第 1 分冊)』 鎌倉市教育委員会
36. 由比ヶ浜三丁目 1256 番外地点(2004 年 2 月調査)宮田眞ほか 2005『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』
株式会社 博通

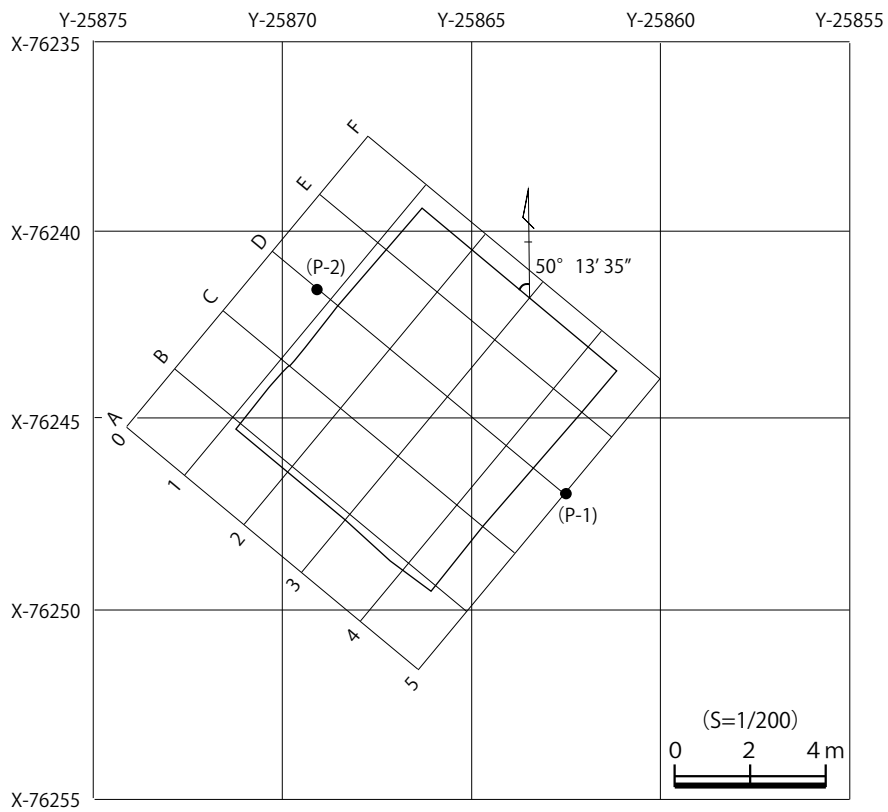
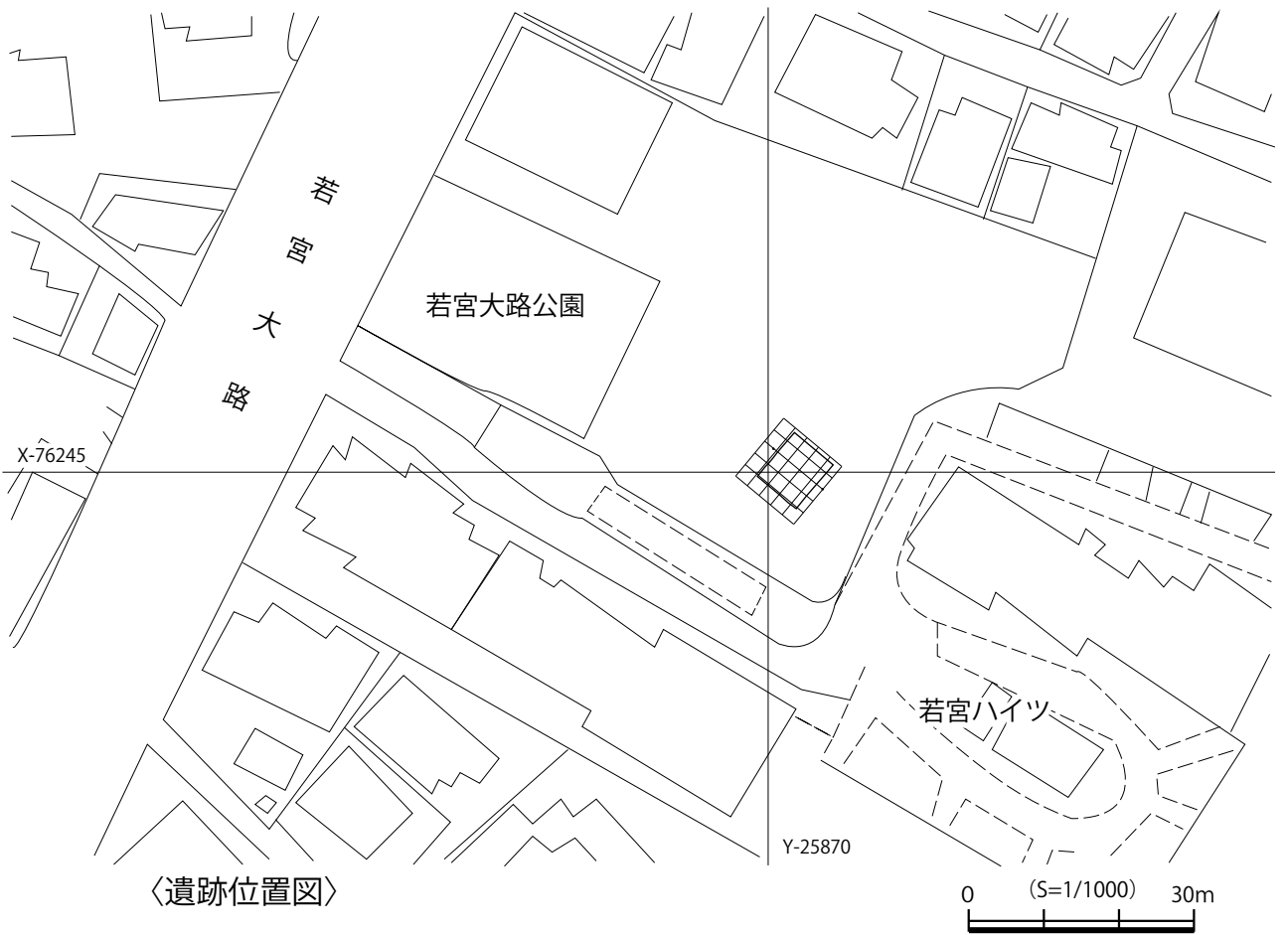


図2 遺跡位置図・国土座標・グリッド配置図

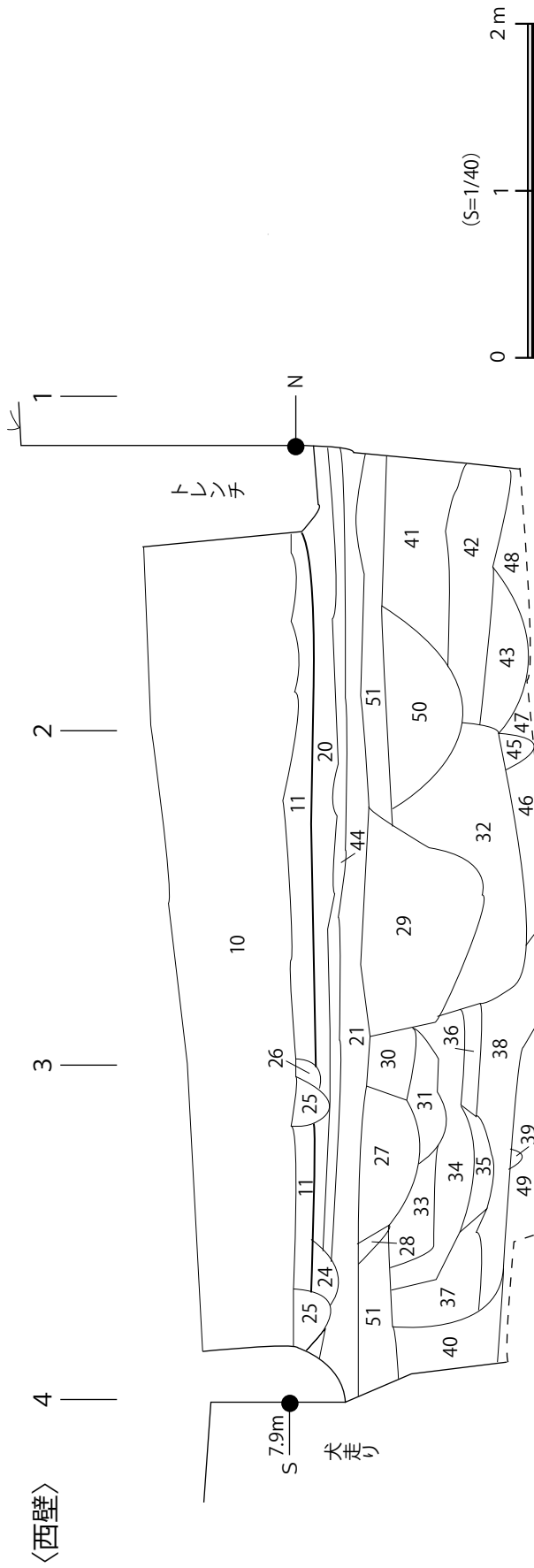
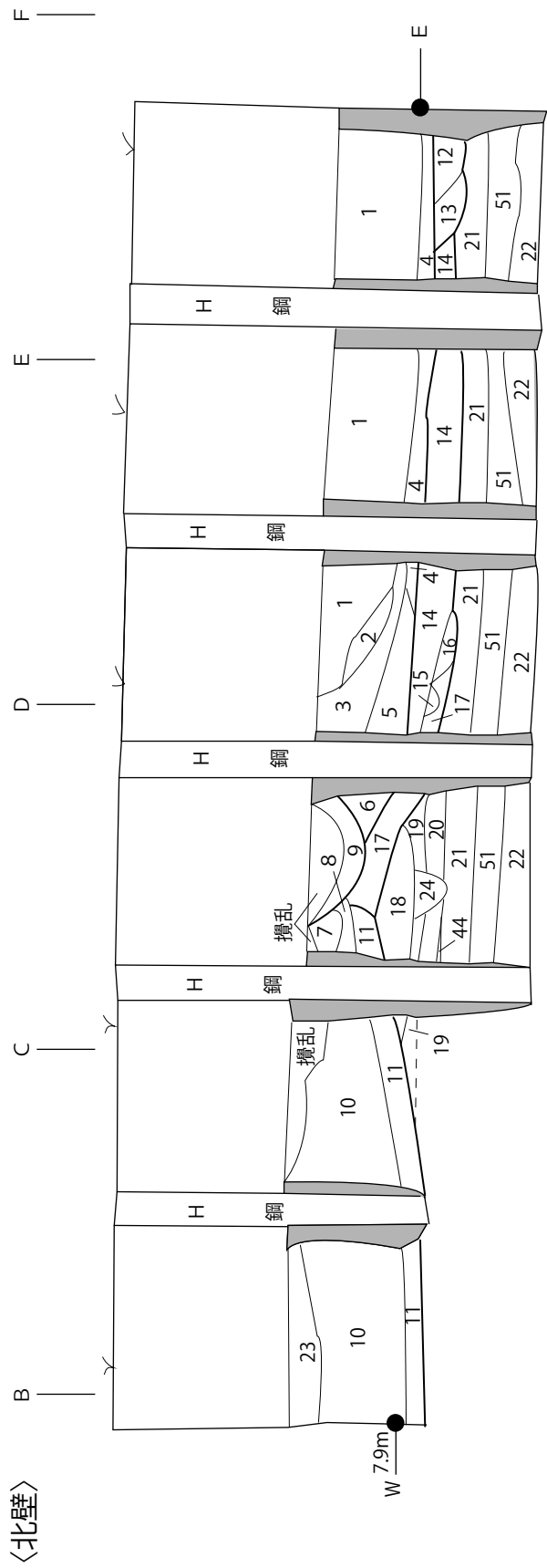


図3 調査区堆積土層図

土層注記（図3）

1. 褐色砂質土：灰白色砂質土多量、炭化物少量。
（近世飛砂）
2. 褐色砂質土：灰白色砂質土少量。（遺構10覆土）
3. 灰色砂質土：黄灰色砂少量、炭化物微量。（遺構10覆土）
4. 灰色砂質土：暗茶褐色砂質土、炭化物少量。（遺構10覆土）
5. 灰色砂質土：暗茶褐色砂質土少量。（遺構10覆土）
6. 暗茶褐色砂質土：灰白色砂質土、炭化物少量、
黒褐色粘土微量。（遺構10覆土）
7. 暗灰色砂質土：灰白色砂質土中量。
8. 灰褐色砂質土：暗灰色砂少量、炭化物微量。
9. 暗茶褐色砂質土：暗灰色砂質土・灰白色砂質土
中量、貝砂・炭化物微量。（遺構6覆土）
10. 明黄灰色砂質土：貝砂・暗灰色砂質土少量。
（遺構12覆土）
11. 灰褐色砂質土：貝砂・暗灰色砂質土中量、炭化
物微量。（遺構12覆土）
12. 暗茶褐色砂質土：暗灰色砂質土少量、炭化物微
量。
13. 茶褐色砂質土：暗灰色砂質土中量、炭化物・貝
砂少量。
14. 暗茶褐色砂質土：暗灰色砂質土中量、炭化物少
量。（遺構46覆土）
15. 暗灰色砂質土：灰褐色砂質土少量。（遺構46
覆土）
16. 暗灰色砂質土：灰褐色砂質土中量、貝砂少量。
（遺構46覆土）
17. 暗灰色砂質土：暗茶灰色砂質土中量・炭化物微
量。（遺構46覆土）
18. 灰褐色砂質土：灰色砂質土少量。
19. 暗灰色砂質土：暗茶褐色砂質土、炭化物少量。
20. 暗茶褐色砂質土：暗灰色砂少量、炭化物・貝砂
微量。
21. 暗褐色砂質土：貝砂中量、炭化物少量。
22. 暗褐色砂質土：21と同質、炭化物・貝砂微量。
23. 明灰色砂質土：粗砂多量。（遺構12覆土）
24. 茶灰色砂質土：黒褐色粘土中量、炭化物微量。
25. 明茶褐色砂質土：黄茶色・暗褐色粘土多量。
26. 明茶褐色砂質土：25と同質、炭化物微量。
27. 茶褐色砂質土：貝砂中量、炭化物少量。
28. 明茶褐色砂質土：貝砂中量、泥岩粒・炭化物微量。
29. 茶褐色砂質土：貝砂・炭化物中量、泥岩粒微量。
30. 明茶褐色砂質土：貝砂中量、泥岩粒・炭化物微量。
31. 暗灰色砂質土：茶褐色砂質土多量、貝砂・炭化
物微量。
32. 暗茶褐色砂質土：貝砂中量、灰色砂質土少量・
炭化物微量。
33. 暗茶褐色砂質土：貝砂中量、炭化物少量。
34. 茶褐色砂質土：貝砂多量、暗灰色砂質土・炭化
物少量。
35. 明黄灰色砂質土：暗茶褐色砂質土・炭化物・貝
砂少量。
36. 暗褐色砂質土：貝砂・炭化物微量。
37. 明茶灰色砂質土：暗褐色砂質土・炭化物少量。
38. 暗褐色砂質土：暗灰色砂質土少量、泥岩粒・炭
化物微量。
39. 暗褐色砂質土：暗灰色砂質土・炭化物少量。
40. 茶灰色砂質土：暗褐色砂質土中量。
41. 茶褐色砂質土：貝砂・泥岩粒・炭化物少量。
42. 茶褐色砂質土：41と同質、泥岩粒含まない。
43. 灰色砂質土：黄褐色砂中量、貝砂・炭化物少量。
44. 暗灰色砂質土：43と同質、炭化物中量。
45. 黄灰色砂質土：炭化物微量。
46. 暗黄灰色砂質土：貝砂多量・炭化物微量。
47. 暗灰色砂質土：貝砂・炭化物少量。
48. 暗灰色砂質土：47と同質、炭化物微量。
49. 暗灰色砂質土：貝砂中量。
50. 暗茶灰色砂質土：貝砂・炭化物・小石粒少量。
51. 暗褐色砂質土：暗灰色砂少量・炭化物微量。

第二章 発見した遺構と遺物

本調査では現地表から約 100cm下まで重機によって表土掘削を行い、その後人力によって遺構の発見・記録をした。調査地堆積土が砂地という脆弱な地盤条件の調査であったため調査区壁には H 鋼が設置され、第 1 面確認面までの調査区土層堆積は未確認となった。調査区は南北に 7.70m・東西に約 6.70m のほぼ正方形を呈する。本報告では 4 面に分けて遺構を報告しているが、発見した順での報告であり、地業上で確認した遺構ではない。発見遺構は土坑・ピット・方形竪穴建築址の他に、自然地形とも考えられる落ち込み状の遺構を確認している。出土遺物は遺物整理箱数にして総数 5 箱と少量であり、大半は破片での出土であったため報告した遺物は少ない。発見した遺構は上層から下層にと、発見した順に報告している。調査地現地表レベルは標高 9.50m であった。

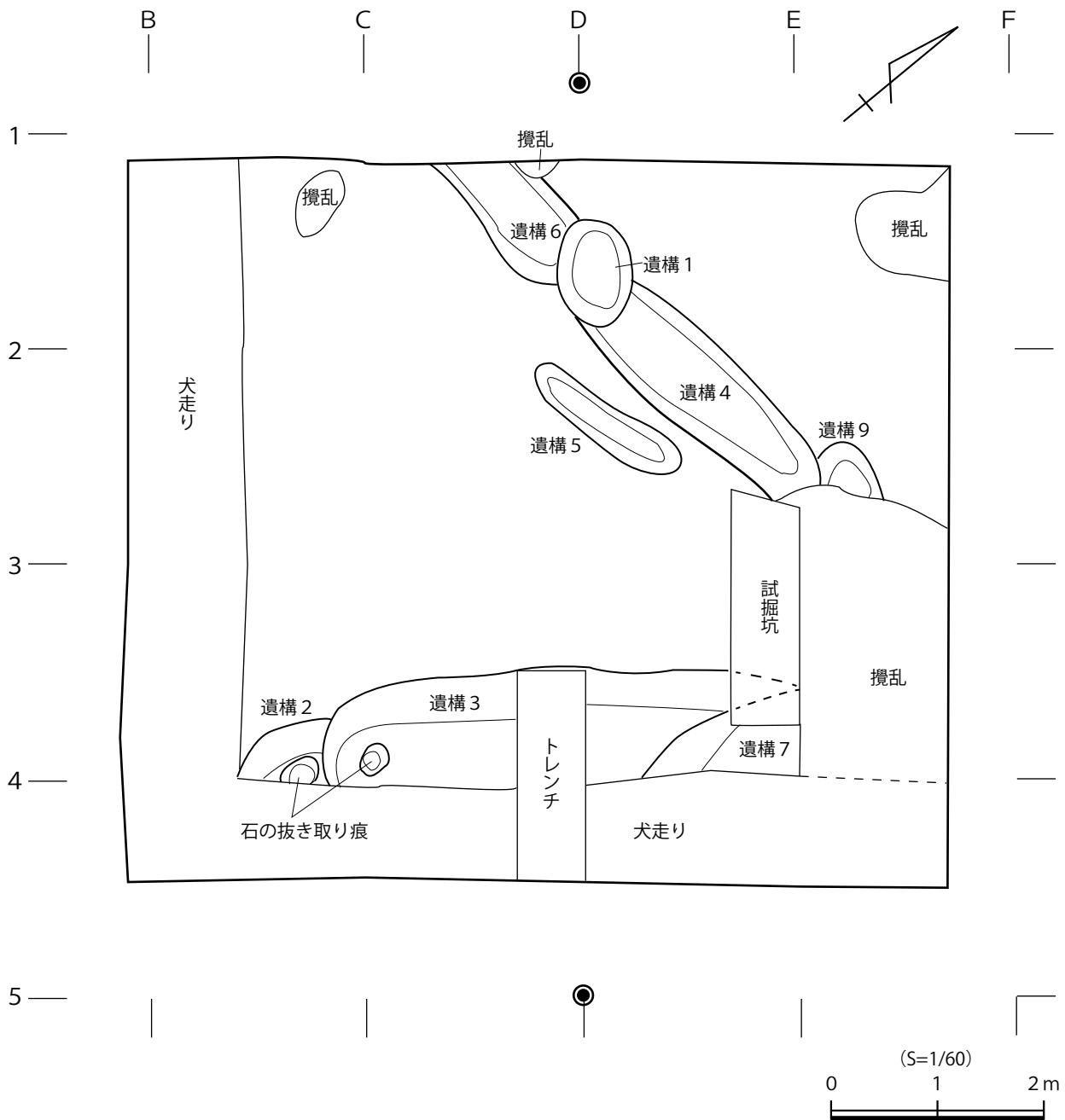


図 4 第 1 面全測図

1. 第1面の遺構と遺物（図4～図6）

調査担当者不在のまま、重機による表土掘削およびH鋼の設置が行われたため、第1面上層の土層堆積を観察、記録することができなかった。第1面は硬く締まった明灰色砂質土上で遺構を発見した。発見した遺構は溝状土坑3基・土坑3基・竪穴状遺構3基である。2時期以上の遺構が混在する。また調査区北側で発見した遺構はほぼ東西方向に遺構が延びているが、調査区南部で発見した遺構は北東から南西へと遺構が延び、軸方位を全く異にしている。上層の堆積状況が不明となったため遺構の新旧を確認することができず、また出土遺物からも判断できなかった。遺構確認レベルは標高約8.40m。

遺構1（図4）

楕円形の土坑である。溝状遺構（遺構4・遺構6）を切る。幅101cm×67cm・深さ21cm。覆土は茶褐色砂質土・褐色砂・炭化物・貝砂を含む。個別の図面は掲載していない。

遺構2（図4・図5）

竪穴状遺構である。後述する遺構3に切られ、遺構の大半は調査区外に延びてしまっている。残存値で幅(75)cm×(43)cm・深さ(71.5)cm。覆土は茶褐色砂質土・炭化物・貝砂を含む。石の抜き取り痕と考えられるピットが遺構端に遺存する。土層堆積の観察から掘り方（図5-12・13層）を持つ遺構であったことを確認した。平面での遺構確認時点では遺構3との切りあい不明であったため遺物を詳細に分けることができず、出土遺物は遺構3覆土に一括した。

遺構3（図4～図6）

竪穴状遺構である。前述した遺構2と同様に遺構の大半は調査区外に延びてしまい、正確な形状・規模は不明となった。残存値で幅(440)cm×(102)cm・深さ約65cm。石の抜き取り痕と考えられるピットを遺構端で確認した。また、土層堆積の観察から遺構2と同様に掘り方（図5-9・10層）を持つ遺構であったことも確認した。

・出土遺物（図6）

1・2は常滑片口鉢Ⅱ類。3は女瓦。その他に破片で、大・小のかわらけ、青磁無文碗・瀬戸播鉢、常滑片口鉢Ⅰ類・Ⅱ類、常滑甕、瓦、火鉢、鞆の羽口、砥石、鉄滓が出土している。

遺構4（図4・図5）

東西に延びる溝状遺構である。遺構1に切られ規模不明。幅(235)cm×80cm・深さ26.5cm。覆土は茶褐色砂質土・炭化物・泥岩粒・貝砂を含む

遺構5（図4・図5）

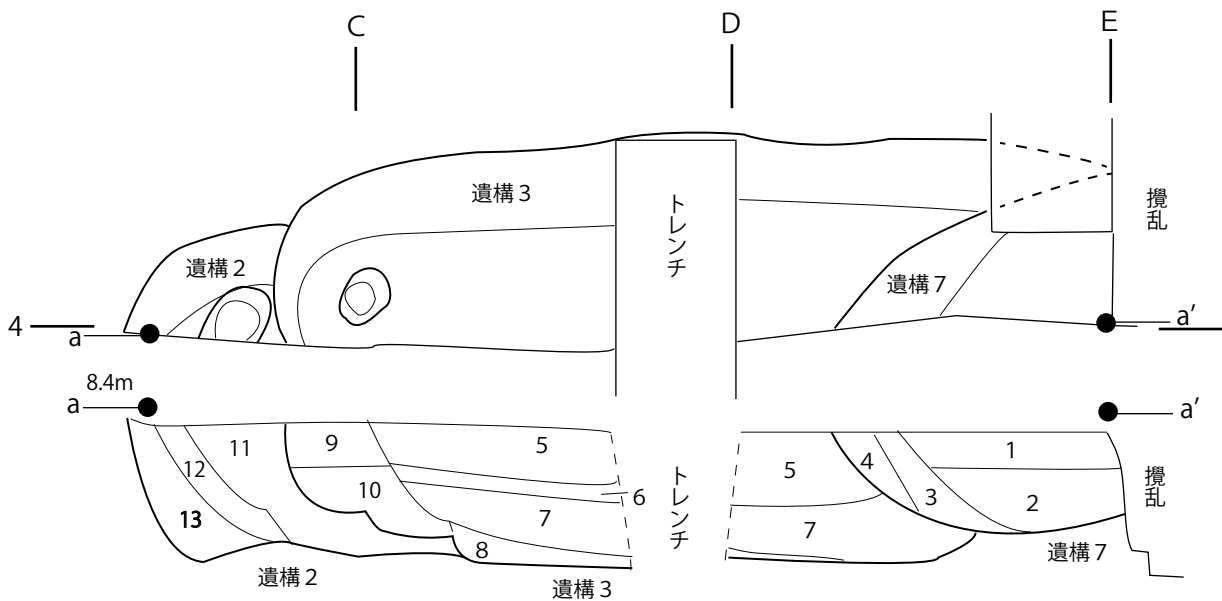
土坑である。幅157×35cm・深さ10cm。覆土は褐色砂質土・貝砂を含む。

遺構6（図4・図5）

東西に延びる溝状遺構である。東は調査区外に遺構が延び、西は遺構1に切られ、正確な形状・規模は不明。幅(145)cm×72cm・深さ42cm。暗褐色砂質土・炭化物・貝砂を含む。

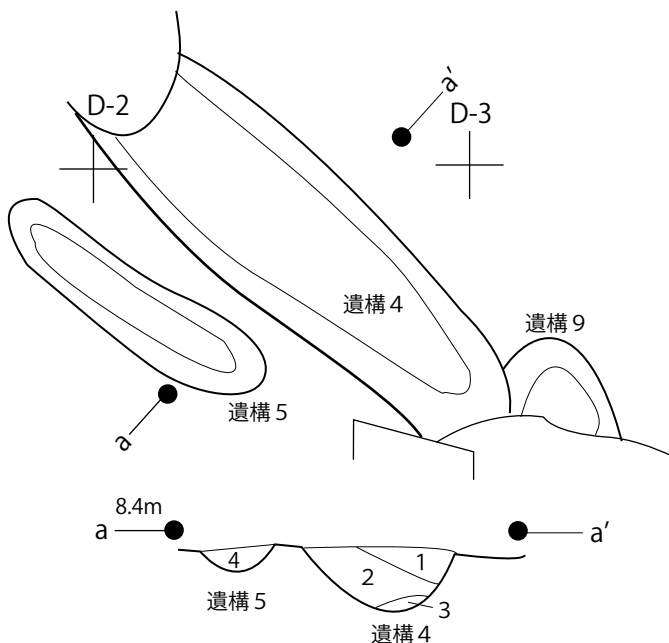
遺構7（図4・図5）

遺構の大半が現代の攪乱によって切られており、正確な形状・規模は不明。残存値で幅(160)cm×(84)cm・深さ62.5cm。遺構2・3同様に掘り方（図5-3・4層）を持ち、竪穴状遺構だと考えている。覆土は暗褐色砂質土・炭化物・貝砂を含む。



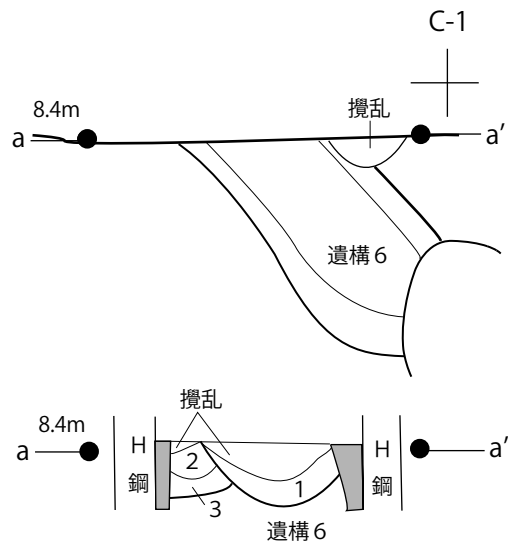
〈遺構2・3・7〉

- | | | | |
|------------|------------------|------------|---------------------------|
| 1. 暗褐色砂質土 | 炭化物・貝砂微量。 | 8. 暗褐色砂質土 | 黄褐色粘質土が下層に少量。 |
| 2. 茶褐色砂質土 | 炭化物微量、貝砂細砂。 | 9. 暗褐色粘質土 | 炭化物・貝砂少量。(掘り方) |
| 3. 茶褐色砂質土 | 炭化物少量。(掘り方) | 10. 茶褐色砂質土 | 貝砂・黄褐色砂少量、炭化物微量。
(掘り方) |
| 4. 茶褐色砂質土 | 暗褐色砂質土少量混入。(掘り方) | 11. 茶褐色砂質土 | 細砂少量、炭化物微量。 |
| 5. 茶褐色砂質土 | 貝砂少量、炭化物が下層に少量。 | 12. 茶褐色砂質土 | 貝砂・褐色砂少量。(掘り方) |
| 6. 暗茶褐色砂質土 | 黄褐色粘質土が下層に少量。 | 13. 茶褐色砂質土 | 細砂・貝砂・炭化物微量。(掘り方) |
| 7. 茶褐色砂質土 | 細砂、暗褐色砂質土が下層に少量。 | | |



〈遺構4・5〉

- | | |
|------------|----------------|
| 1. 茶褐色砂質土 | 貝砂少量、炭化物微量。 |
| 2. 暗茶褐色砂質土 | 炭化物・小石粒・泥岩粒微量。 |
| 3. 灰褐色砂質土 | 暗灰色砂少量、炭化物微量 |
| 4. 褐色砂質土 | 貝砂少量。 |



〈遺構6〉

- | | |
|-----------|------------------------------|
| 1. 暗褐色砂質土 | 暗灰色砂質土・灰白砂質土中量、
貝砂・炭化物微量。 |
| 2. 暗灰色砂質土 | 灰白色砂質土中量。 |
| 3. 灰褐色砂質土 | 暗灰色砂少量、炭化物微量。 |

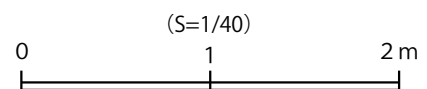


図5 第1面個別遺構図



図6 第1面出土遺物

遺構9 (図4・図5)

現代の攪乱に切られ、正確な形状・規模不明。土坑である。残存値で幅(96)cm×(65)cm・深さ30cm。覆土は褐色砂質土・炭化物・貝砂を含む。

第1面面上出土遺物(図6)

4は常滑甕胴部片。花文(桜か)と格子文の叩き目が残る。

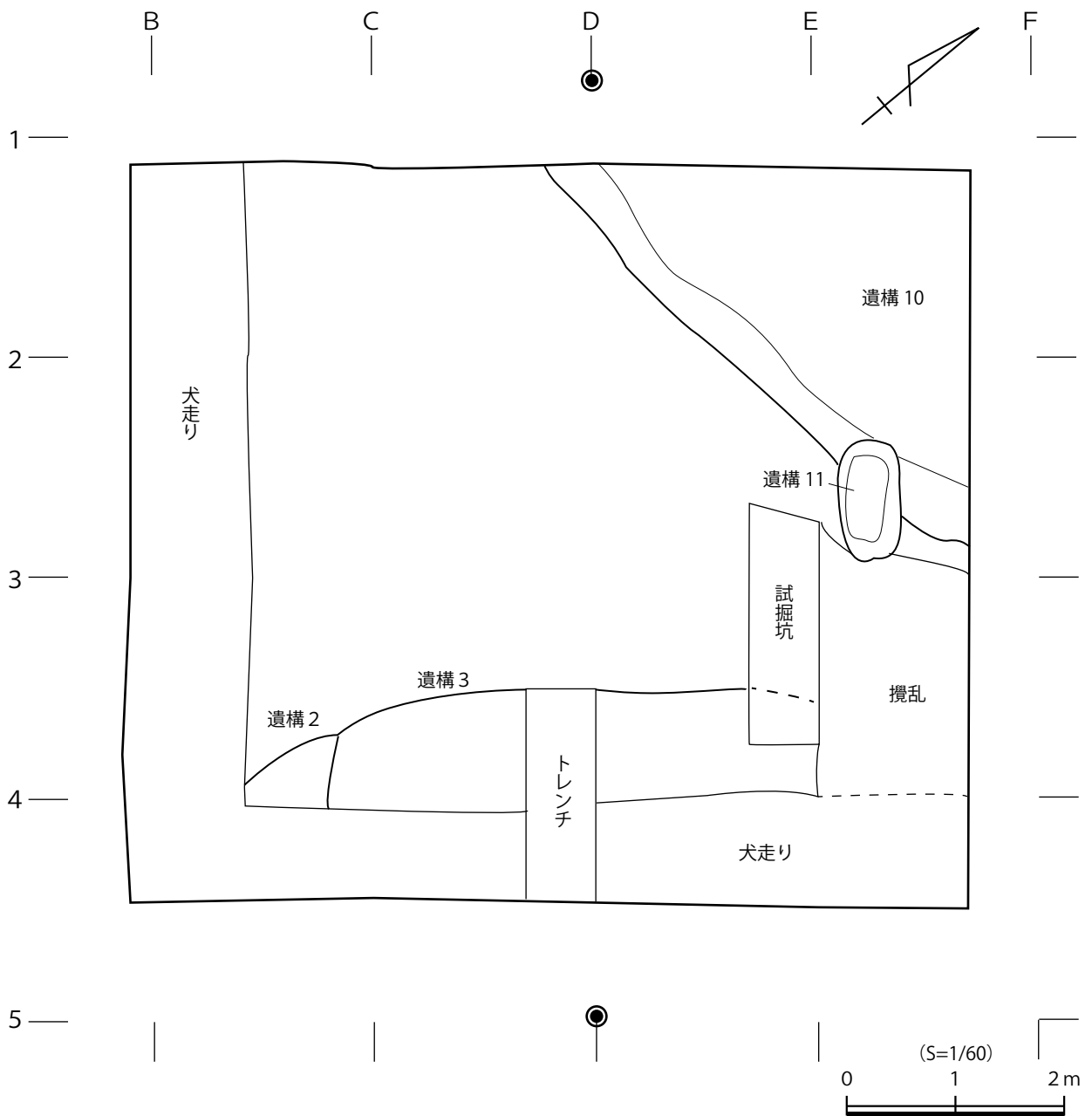
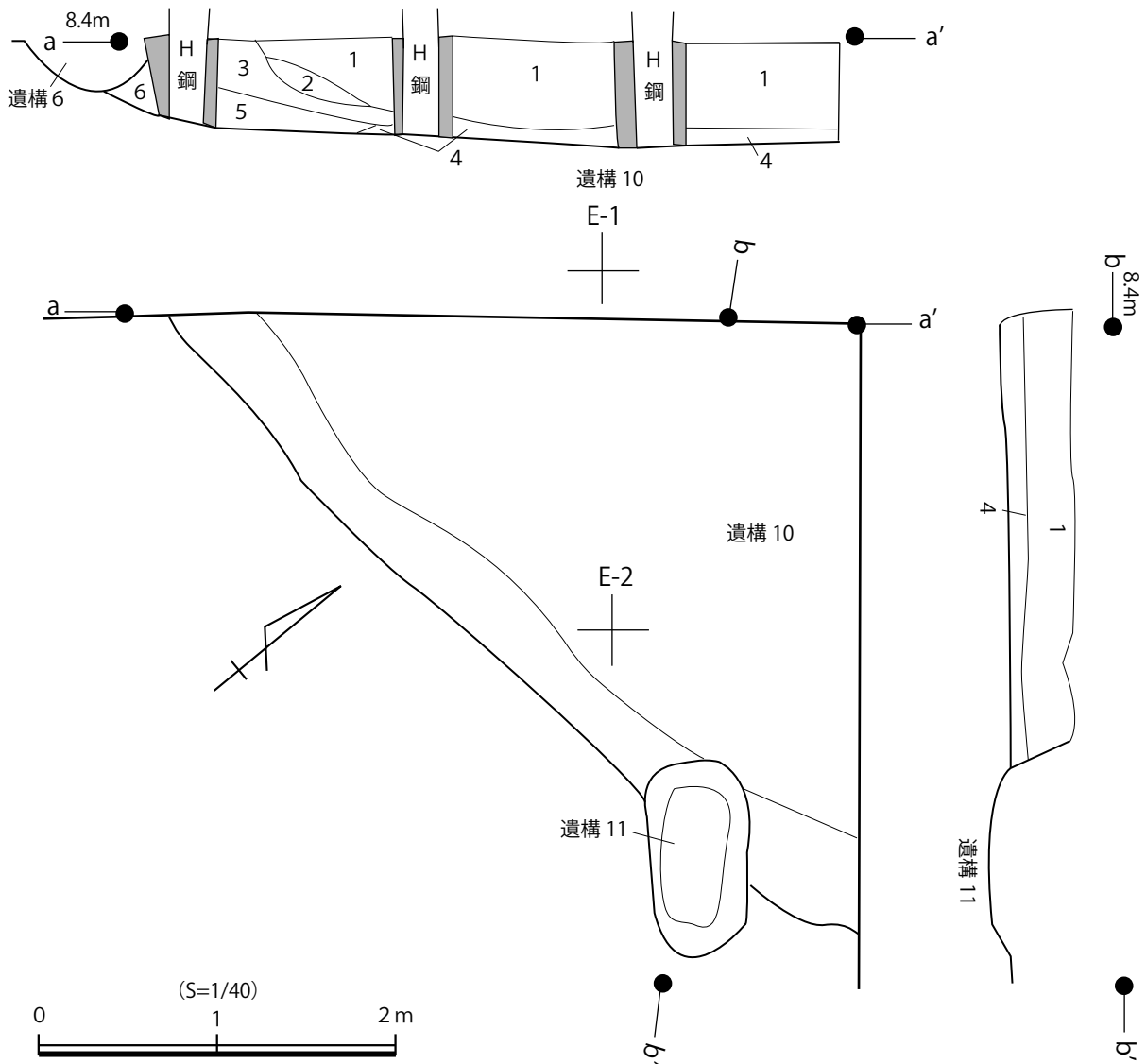


図7 第2面全測図

2. 第2面の遺構と遺物 (図7・図8)

第2面で発見した遺構は土坑1基・落ち込み状遺構1基である。第1面で発見した溝状遺構(遺構4・6)との切り合いで分け、第2面として報告している。遺構確認レベルは標高約8.20m。



〈遺構10〉

- | | | | |
|----------|-----------------------|------------|---------------------------|
| 1. 褐色砂質土 | 灰白色砂質土多量、炭化物少量。(近世飛砂) | 4. 灰色砂質土 | 暗茶褐色砂質土・炭化物少量。 |
| 2. 褐色砂質土 | 灰白色砂質土少量。 | 5. 灰色砂質土 | 暗茶褐色砂質土少量。 |
| 3. 灰色砂質土 | 黄灰色砂少量、炭化物微量。 | 6. 暗茶褐色砂質土 | 灰白色砂質土・炭化物少量、
黒褐色粘土微量。 |

図8 第2面個別遺構図

遺構10 (図7・図8)

落ち込み状の遺構である。調査区外に遺構が延びてしまっている為に正確な形状、規模は不明。残存値で東西方向に(580)cm・南北方向に(270)cm・深さ60cm。覆土は褐色砂質土・灰白色砂・炭化物を含む。遺構ではなく自然に形成された窪みと考えている。

遺構11 (図7・図8)

楕円形の土坑である。幅105cm×57cm。深さ47.5cm。覆土は茶褐色砂質土・炭化物・貝砂を含む。発見した遺構10・遺構11は報告書に掲載した遺物はないが、遺構10はかわらけ(大)10・かわらけ(

小) 1・鉄滓3。遺構11はかわらけ(大)6・瀬戸平碗1・常滑甕1が破片で出土している。

第1面～第2面構成土出土遺物(図9)

第1面と第2面は、地業や生活層の違いから面を分けて報告したわけではなく、遺構の切り合いで分けたため、第1面と第2面検出後、後述する第3面に至るまでの層から出土した遺物を、第1面・第2面構成土出土遺物として一括した。

1～27はかわらけ。1・2は内底横ナデの後見込み周囲を回転ナデ。外底部の整形雑。3～6は内底横ナデ痕あり。4は外側面に焼成時の煤痕か。6は外側面に糸切りの回転時引き上げ痕が残る。7・9は内底に強い横ナデ痕。10は外側面に強く稜が残る。内底弱い横ナデ痕。器壁内外面に煤痕か。11～13は内底強く横ナデ痕。14はやや外反して器壁立ち上がる。内底弱い横ナデ痕。15は内底弱い横ナデ痕。16は内底やや強い横ナデ痕。外側面黒く変色、煤痕か。17は内底やや強い横ナデ痕。18は内底弱い横ナデ痕。小石粒を含む粗い胎土。19は内底にやや強い横ナデ痕。20は内外面ともに雑な整形。内底に横ナデ痕。21・22は内底に弱い横ナデ痕。22は外側面に粗く回転成形の稜が残る。23は内底にやや強い横ナデ痕。24・25は内底に弱い横ナデ痕。26は外側面口唇部近くに、工具によるケズリが見える。27は白かわらけ底部片。28は白磁口元皿口縁部片。29～31は瀬戸窯製品。29は鉄釉仏華瓶胴部片。30は平碗口縁部片。31は折縁深皿口縁部片。32は山茶碗口縁部片。33～35は常滑窯製品。33は片口鉢Ⅰ類口縁部片。34は片口鉢Ⅱ類口縁部片。35は甕胴部片。格子文の叩き痕。36は鬼瓦。文様は粘土を盛り上げて成形し周縁の珠文を円形の範型で一部型作りしている。裏面の糸切痕顕著であった。小片である。37・38は砥石小片。37は鳴滝産仕上砥。38は伊予産中砥。39・40は鉄製品・釘。41は銭・嘉定通寶。42は骨製品・筭。黒色に変色している。

3. 第3面の遺構と遺物(図10)

締まりのある灰褐色砂質土上で確認した。発見した遺構は落ち込み状遺構1基・ピット3穴である。南に向かってなだらかに落ち込む遺構12の底面でピットを発見した。遺構確認レベルは標高7.90m。

遺構12(図10)

落ち込み状の遺構である。調査区外に遺構が延びてしまっているために形状・規模は不明。残存値で南北に(476)cm、東西に(645)cm・深さ26cm。覆土は褐色砂質土・炭化物・有機質土・飛砂に似た灰白色砂を含む。第2面遺構10と同様に、遺構ではなく自然に形成された窪みか。破片ではあるが底面上(図10-8層)に遺物を多く含む。後述するピットは遺構底面で発見しているが、遺構12との関係性は不明である。

・出土遺物(図10)

1はかわらけ。薄手で硬質な胎土。2は渥美甕口縁部片。

遺構13(図10)

ピットである。幅33cm×28cm・深さ15cm。覆土は褐色砂質土・炭化物・有機質土を含む。個別に図面は掲載していない。破片でかわらけが出土している。後述する遺構16・遺構18と、東西方向に並んで発見されたピットである。それぞれのピットの芯芯間距離は60cmである。

遺構15(図10)

円形のピットである。径20cm・深さ13cm。覆土は褐色砂質土・炭化物・貝砂を含む。個別に図面は

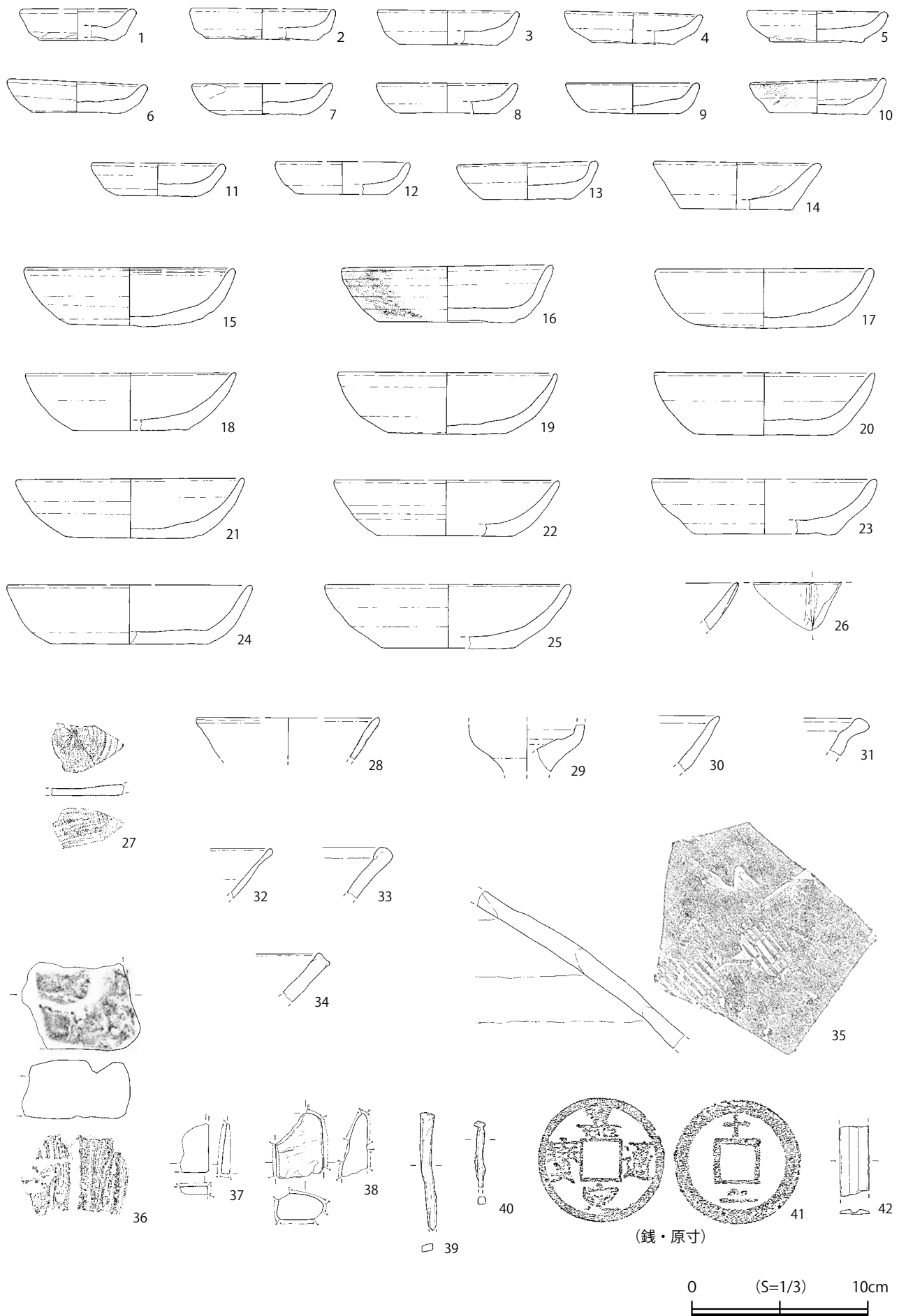
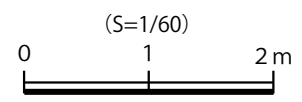
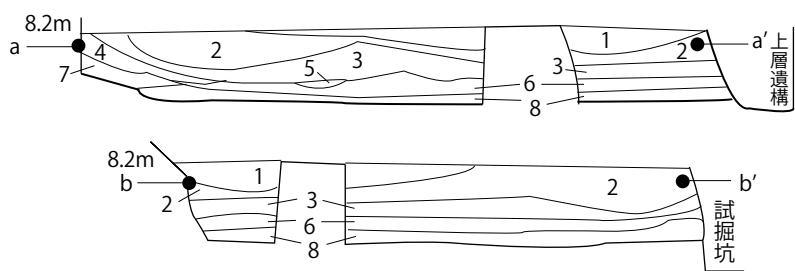
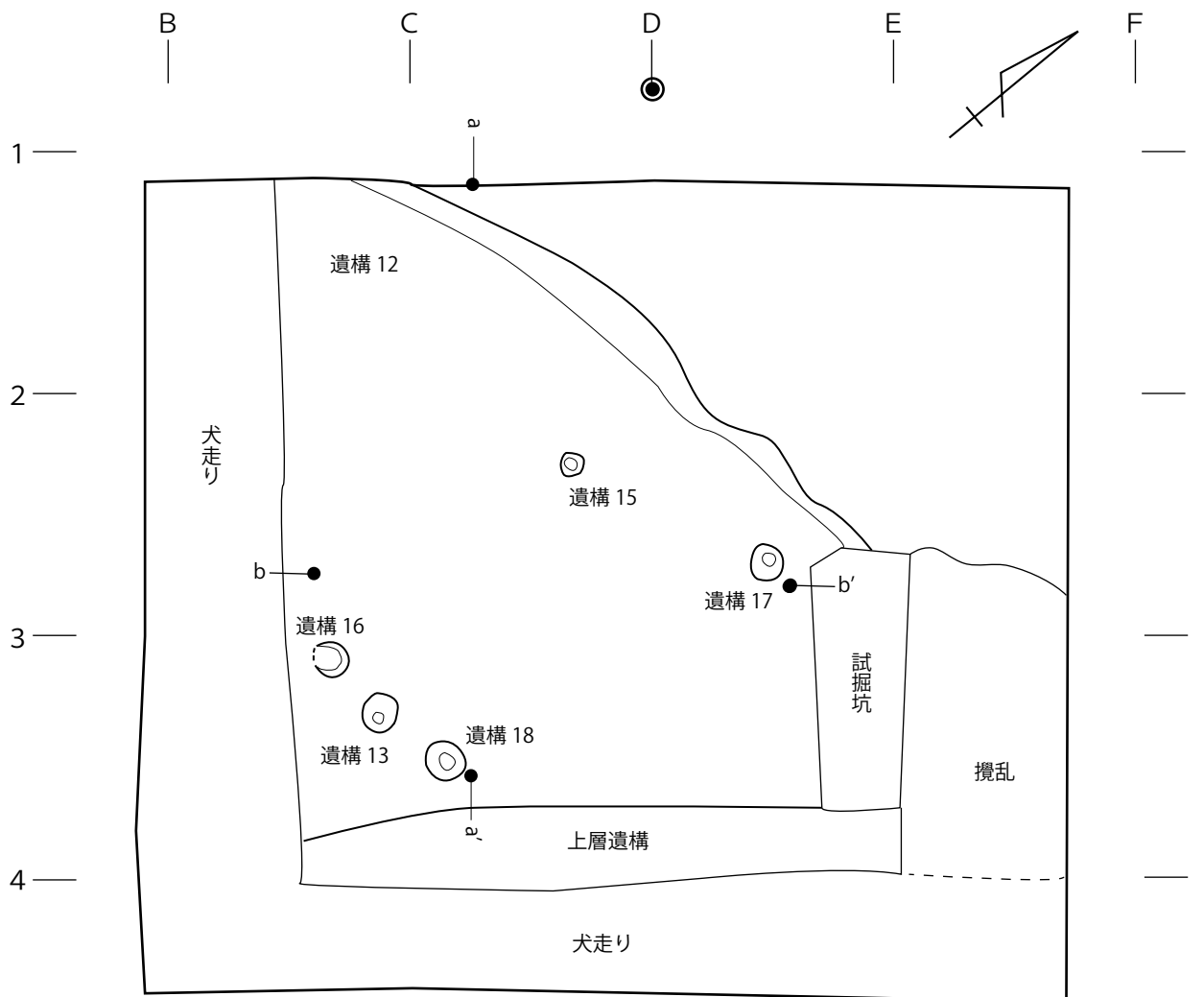


図9 第1～第2面構成土出土遺物



〈遺構 12〉

- 1. 明灰色砂質土 粗砂・海砂多量。
- 2. 黄灰色砂質土 粗砂・海砂多量。
- 3. 明黄灰色砂質土 粗砂・海砂中量、暗灰色砂質土少量。
- 4. 灰褐色砂質土 粗砂・海砂中量、暗灰色砂質土中量。
- 5. 灰褐色砂質土 粗砂・海砂中量、斑状に灰色砂質土中量。
- 6. 灰褐色砂質土 粗砂・海砂中量、暗灰色砂質土少量、炭化物・黄灰色粘土微量。
- 7. 灰色砂質土 粗砂・海砂多量、暗灰色砂質土中量。
- 8. 灰褐色砂質土 粗砂・暗灰色砂質土少量・炭化物微量。

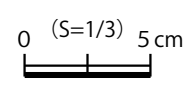
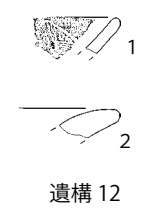


図 10 第 3 面全測図・個別遺構図・出土遺物

掲載していない。破片でかわらけ・常滑片口鉢Ⅱ類が出土している。

遺構 16 (図 10)

ピットである。上層の遺構に切られる。残存値で幅 32cm × (8.5)cm ・ 深さ 12cm。覆土は褐色砂質土・炭化物を含む。個別に図面は掲載していない。出土遺物はない。

遺構 17 (図 10)

ピットである。幅 38cm × 33cm ・ 深さ 13cm。覆土は褐色砂質土。個別に図面は掲載していない。出土遺物はない。

遺構 18 (図 10)

ピットである。幅 32cm × 30cm ・ 深さ 12.5cm。覆土は褐色砂質土・炭化物を含む。個別に図面は掲載していない。破片でかわらけが出土している。

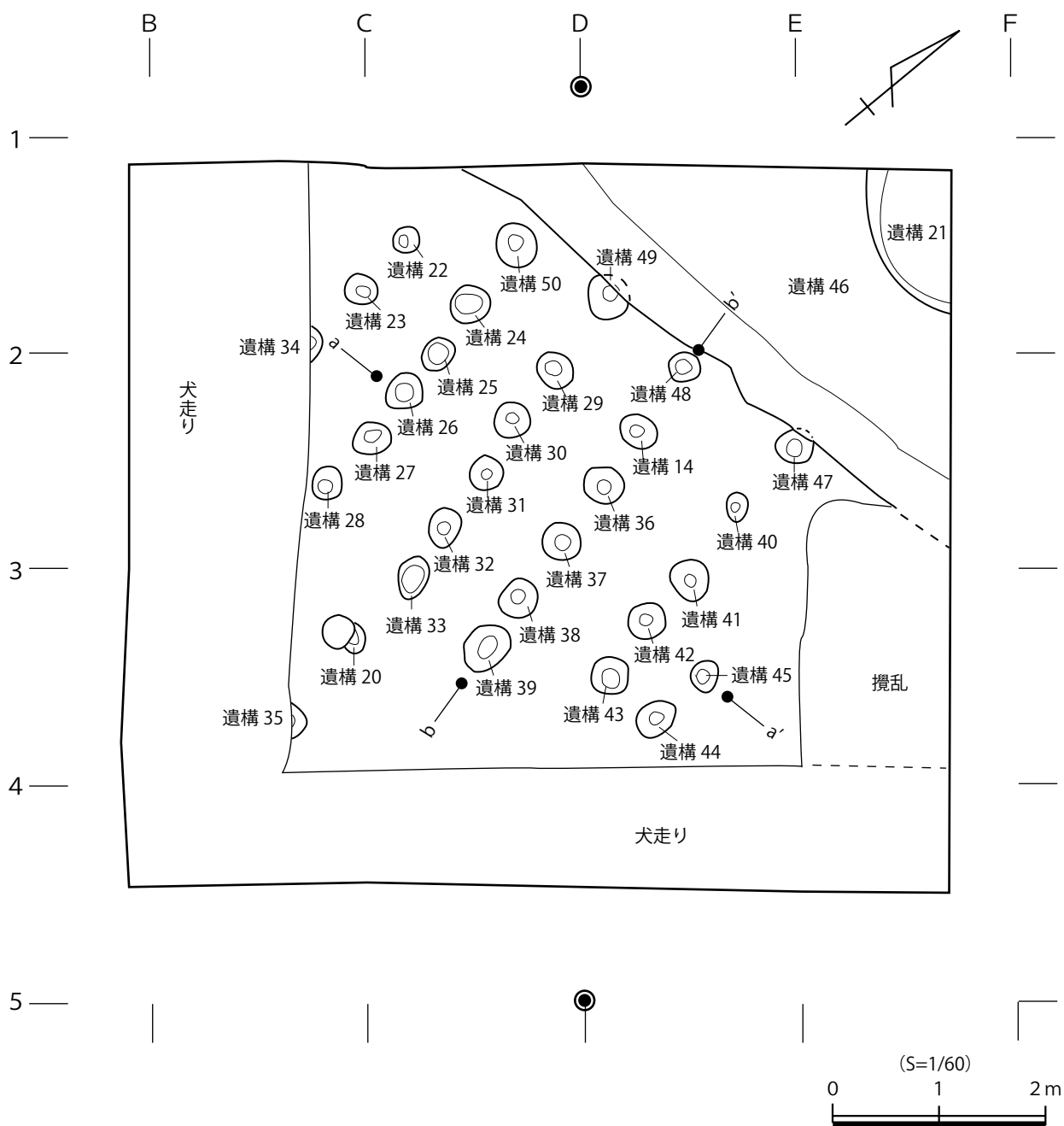


図 11 第 4 面全測図

4. 第4面の遺構と遺物 (図11～図13)

第4面は締まりのある暗褐色砂質土上で確認した。発見した遺構は落ち込み状遺構1基・土坑1基・ピット30穴である。発見したピットは南北・東西に平行に並び、芯芯間距離は南北に約60cm、東西に100～110cmと規則性を持って並んでいた(図12)。遺構確認レベルは標高7.70m。

遺構21 (図11・図13)

落ち込み状遺構(遺構46)底面で発見した土坑である。調査区外に遺構が延びてしまっていたために形状・規模は不明。覆土は褐色砂質土・炭化物・貝砂を含む。残存値で幅(113)cm×(75)cm・深さ18cm。

遺構36 (図11・図12・図13)

ピットである。覆土は茶灰色砂質土・黒色粘土・炭化物を含む。幅38cm×37cm・深さ19cm。
・出土遺物(図13)

1はかわらけ。内底弱い横ナデ痕。器壁が摩耗している。

遺構37 (図11・図12・図13)

ピットである。覆土は茶灰色砂質土・黒色粘土・炭化物を含む。幅37cm×34cm・深さ15cm。
・出土遺物(図13)

2は瀬戸美濃袴腰形香炉底部片。

遺構44 (図11・図13)

ピットである。覆土は茶灰色砂質土・黒色粘土・炭化物を含む。幅40cm×30cm・深さ30cm。
・出土遺物(図13)

3は瀬戸卸皿口縁部片。4は鉄製品・釘。

遺構46 (図11・図13)

落ち込み状遺構である。調査区外に遺構の大半が延びてしまっているために、形状・規模は不明。覆土は暗茶褐色砂質土・炭化物・貝砂・灰褐色砂を含む。残存値で東西方向に(550)cm・南北方向に(287)cm・深さ36cm。北に向かって落ち込む。

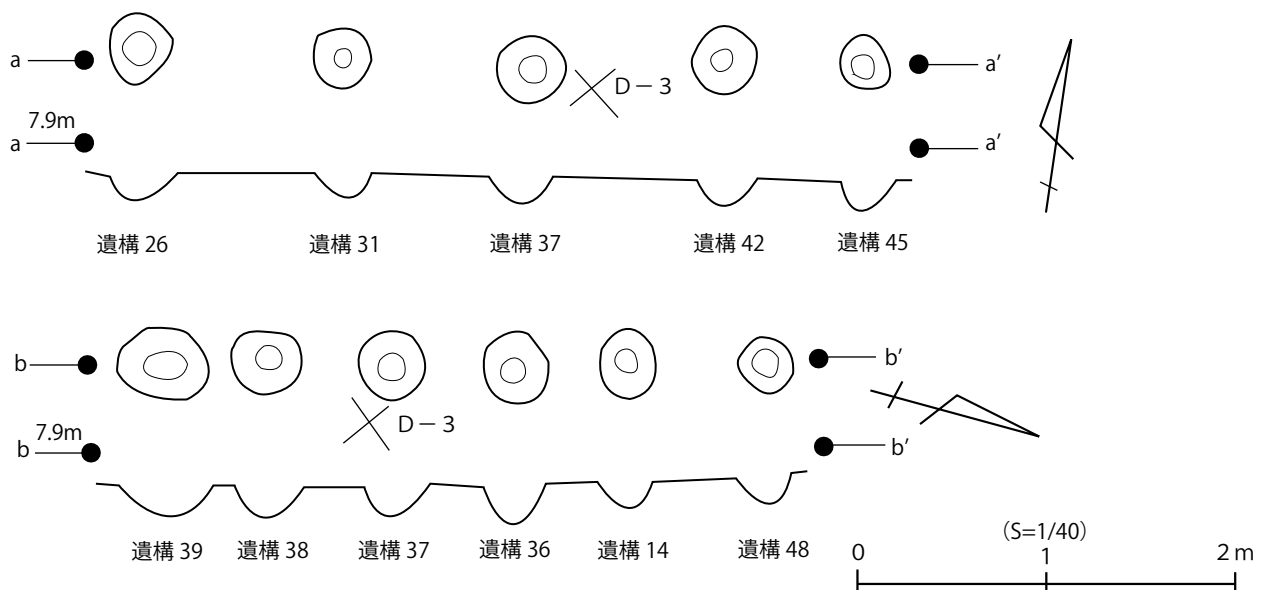
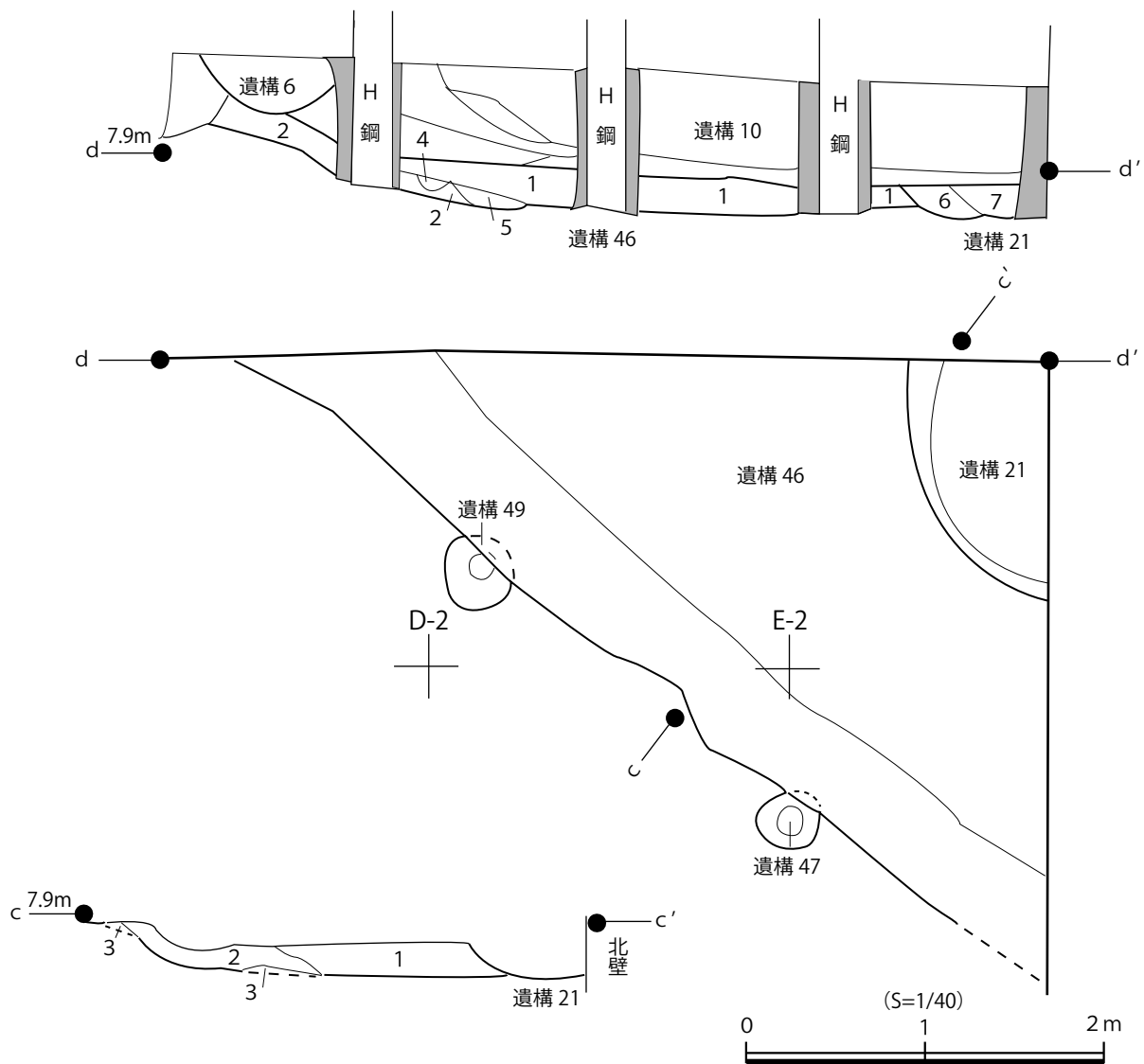


図12 第4面個別遺構図(柱穴列)



〈遺構 46〉

- | | | | |
|------------|------------------|------------|--------------------|
| 1. 暗茶褐色砂質土 | 暗灰色砂質土中量、炭化物少量。 | 5. 暗灰色砂質土 | 灰褐色砂質土中量、貝砂少量。 |
| 2. 暗灰色砂質土 | 暗茶灰色砂質土中量、炭化物微量。 | 6. 茶褐色砂質土 | 暗灰色砂質土中量、炭化物、貝砂少量。 |
| 3. 暗褐色砂質土 | 貝砂中量、炭化物微量。 | 7. 暗茶褐色砂質土 | 暗灰色砂質土少量、炭化物、貝砂少量。 |
| 4. 暗灰色砂質土 | 灰褐色砂質土少量。 | | |

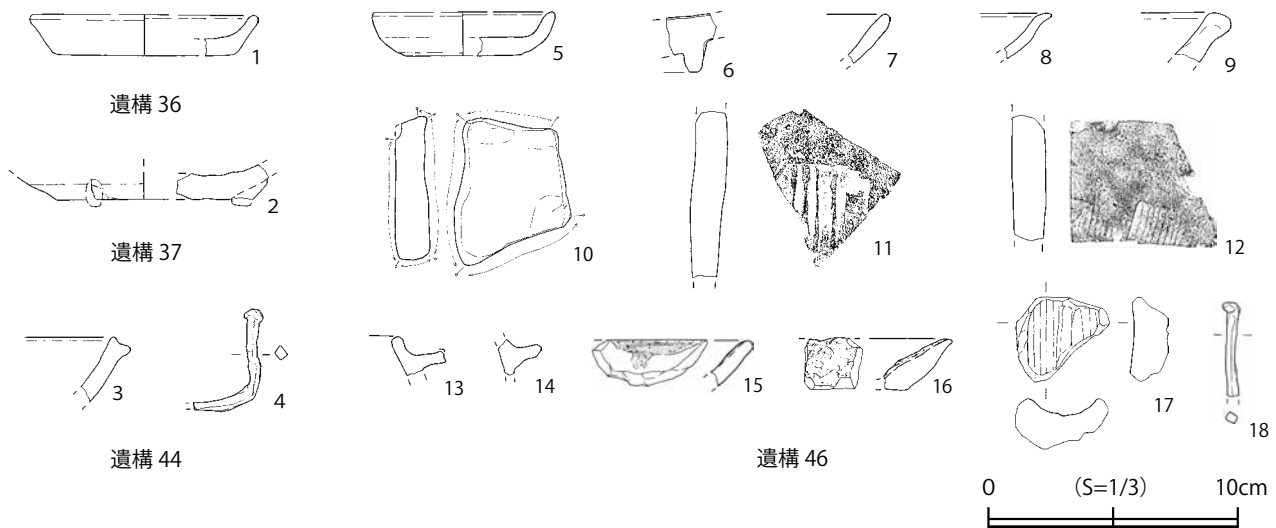


图 13 第 4 面個別遺構図・出土遺物

・出土遺物 (図 13)

5 はかわらけ。内底弱い横ナデ痕。6 は青磁碗底部。高台部、外底面露胎。7・8 は瀬戸窯製品。7 は縁釉小皿口縁部片。8 は端反皿口縁部片。9～12 は常滑窯製品。9 は片口鉢Ⅱ類口縁部片。10 は甕転用品。断面を含めて全体に磨耗している。11・12 は甕胴部片。11 は格子文の叩き痕。12 は不鮮明な格子文の叩き痕。13・14 は鍔釜口縁部小片。15・16 は埴塙・かわらけ転用品。17 は土器質製品。鋳型か。18 は鉄製品・釘。

遺構 47 (図 11・図 13)

ピットである。遺構 46 に切られる。残存値で幅 40cm × (38)cm・深さ 13cm。覆土は茶灰色砂質土・黒色粘土・炭化物を含む。

遺構 49 (図 11・図 13)

円形のピットである。径 46cm・深さ 17cm。落ち込み状遺構 (遺構 46) に切られる。覆土は茶灰色砂質土・黒色粘土・炭化物を含む。

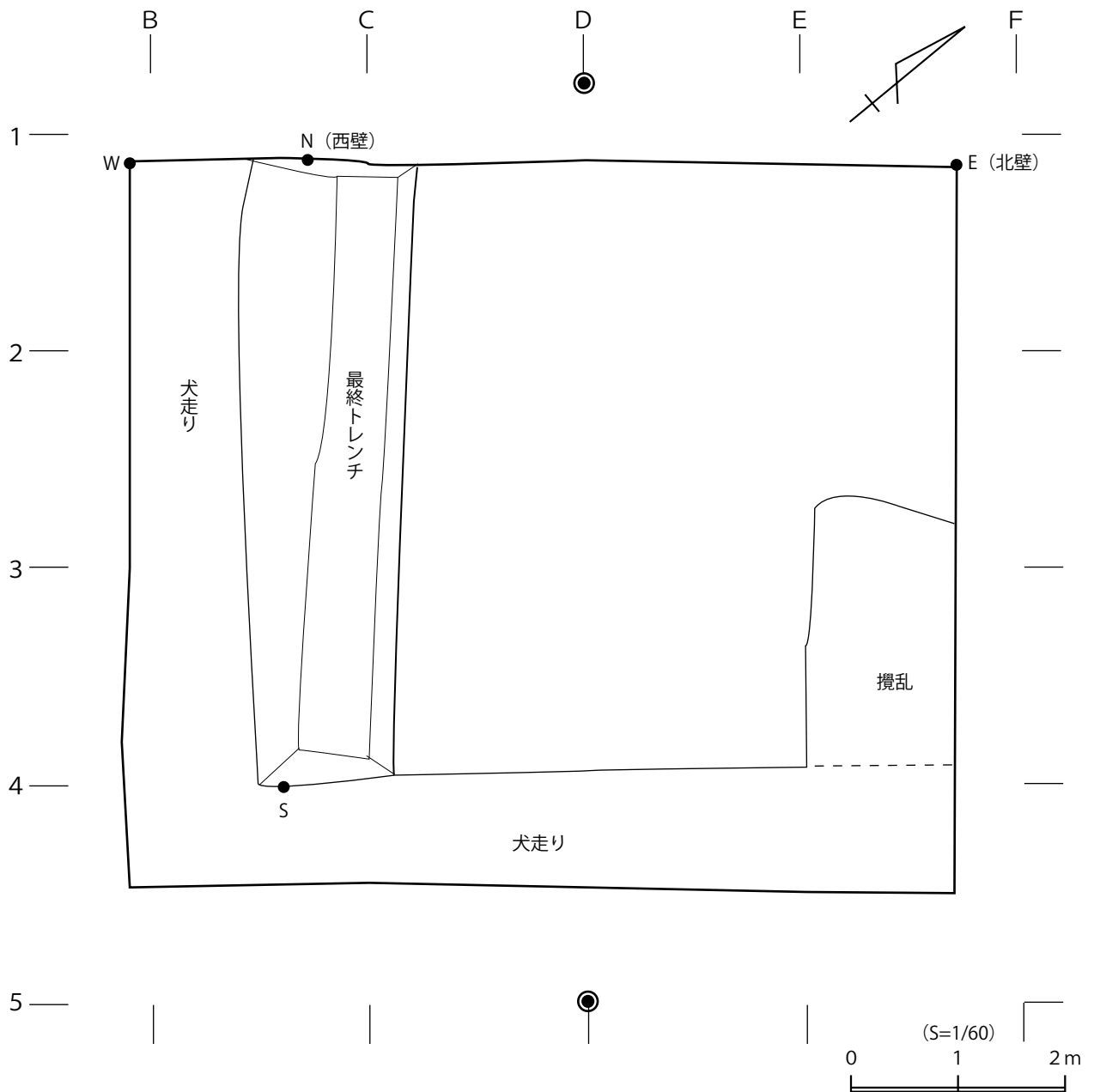


図 14 最終トレンチ位置図

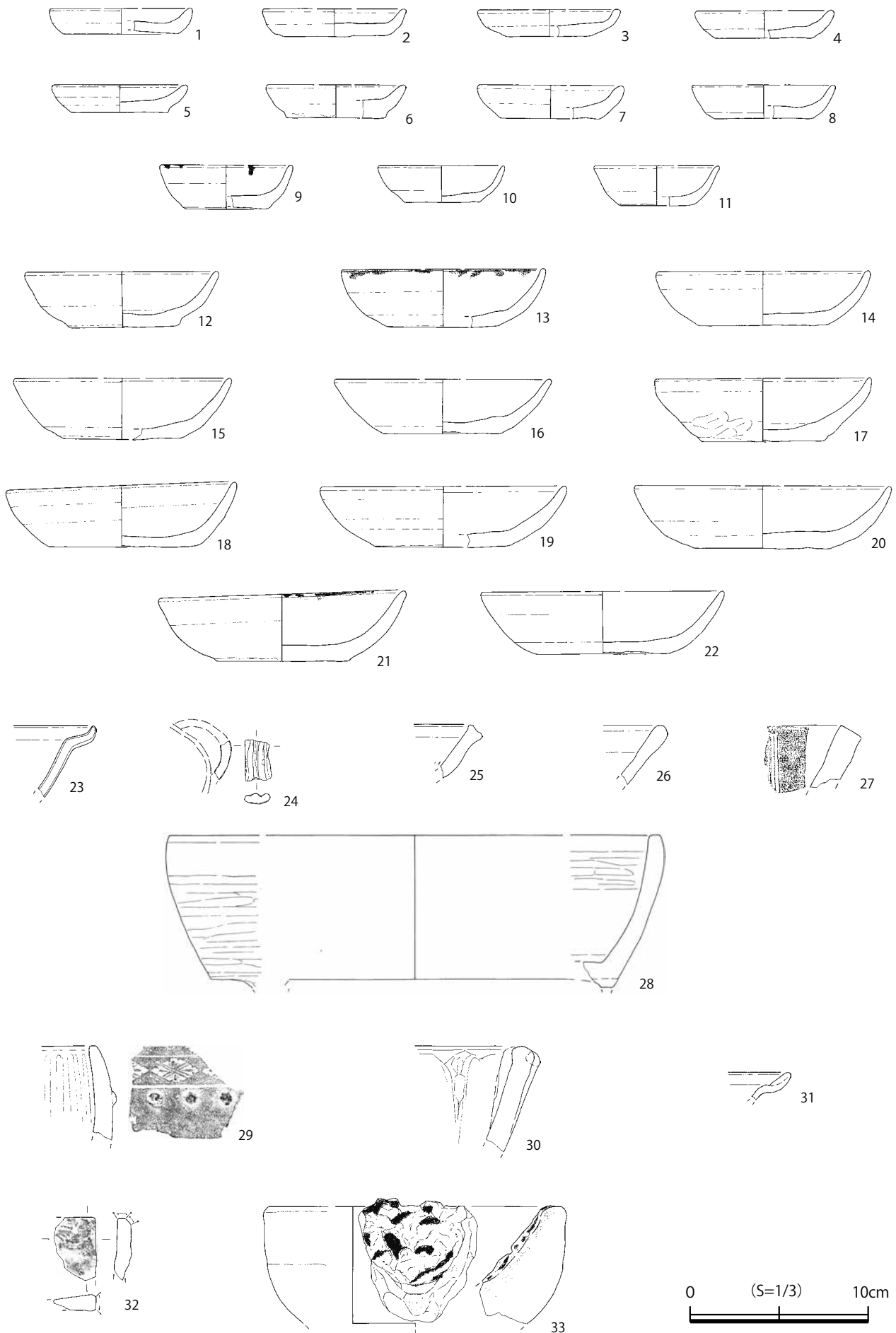


図 15 最終トレンチ出土遺物

5. 最終トレンチ位置と出土遺物 (図 14・図 15)

掘削深度制限の為、調査区西壁に沿ってトレンチを掘って第4面下層の遺構を確認した。トレンチ西壁堆積土層から下層に土坑・竪穴状土坑を発見している。また、トレンチ底面では数基の土坑プランが遺存しており、下層に生活面が広がることを確認した。トレンチ内からは破片を含めて多くの遺物が出土した。遺構確認レベルは標高約 7.50m。

最終トレンチ出土遺物 (図 15)

1～22 はかわらけ。1～3 は内底横ナデ痕。4～6 は内底やや強めの横ナデ痕。7 は火熱を受けたためか、外側面器壁が剥離している。8 は内底横ナデ痕。9 は内底横ナデ痕。内外口唇部に油煤痕が残る。器壁はやや内湾して立ちあがる。10 は内底横ナデ痕。器壁は薄く、内湾して立ちあがる。11 は内底弱い横ナデ痕。薄い器壁を持つ。12 は内底弱い横ナデ痕。13 は内外面口唇部に油煤痕。内底弱い横ナデ痕。14・15 は内底弱い横ナデ痕。16 は内底横ナデ痕。17 は内底強い横ナデ痕。18 は雑な整形。内底横ナデ痕。19・20 は内底横ナデ痕。21 は内外面口唇部と内面見込みに油煤痕。内底面弱い横ナデ痕。22 は内底横ナデ痕。23 は竜泉窯系青磁無文鉢口縁部片。24 は青白磁小型水注の耳部分。25 は瀬戸窯・卸皿口縁部片。26 は常滑窯・片口鉢 I 類口縁部片。27 は備前窯・播り鉢口縁部片。28～30 は瓦器質・火鉢。28 は内外面口縁部近くの器壁剥離。29 は外側面に花菱文のスタンプ。連珠文の貼り付け。30 は輪花型。31 は南伊勢系土鍋。32 は滑石製スタンプ。菊花文様か。33 は土製品・埴塙。内側に鉄滓付着。

表採・攪乱出土遺物 (図 16)

調査前、現地表で採集した遺物と、調査時、現代攪乱覆土内から採集した遺物である。

1～3 は表採。1 は青磁・折縁碗口縁部片。2 は石製品・石皿か。3 は女瓦。4～8 は攪乱出土。4 は瀬戸窯・播鉢。5 は備前窯・播鉢。6 は砥石・中砥。7 はチャート。火打石として使用か。8 は加工骨・未製品。

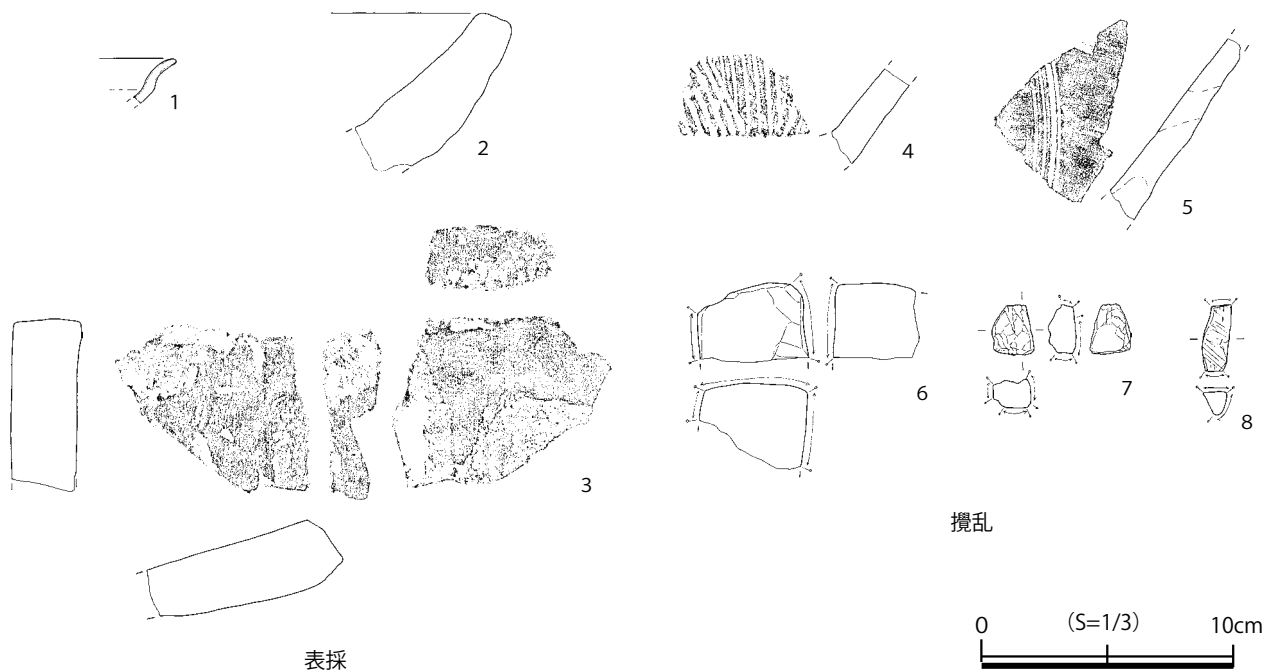


図 16 表採・攪乱出土遺物

第三章 まとめ

本遺跡地は鎌倉市街地の南に位置し、遺跡地南に広がる由比ガ浜の後背砂丘頂部に立地する。現地表面の標高は約9.50mである。本調査では4面に分けて遺構面を報告したが、いずれも客土を用いた地業面からの発見ではなく、自然堆積の風成砂上に構築された遺構を、上層から発見した順に分けて報告している。発見した遺構は、ピット・土坑・溝状土坑・落ち込み遺構である。第1面から第3面で発見した土坑・ピットなどの遺構は出土遺物の傾向を観察しても、用途不明の遺構である。第4面で検出したピット列も、柱穴列として報告しているが具体的な用途は推定できない。

堆積土層模式図(図17)で本調査地南に位置する周辺の遺跡と比較してみると、最終トレンチで確認した下層の遺構が検出された標高で、概ね14世紀代の年代が比定されており、地点6では本調査地の第4面に相当する標高で検出した生活面が戦国期と報告されている。

本遺跡の年代は、第1面から第3面までは、概ね14世紀代に比定される遺物が出土し、年代が下る遺物の出土を見なかったが、第4面の遺構37から袴腰型香炉(図14-2)が、同面遺構46からも破片ではあるが大窯瀬戸製品である挟み皿が出土していることから、本調査地で発見した遺構は15世紀を下ると考えられる。砂丘の形成とともに生活面の構築が行われたために遺物の年代に混乱が生じたものと考えている。

本調査地の最終トレンチで出土した遺物の年代は14世紀代を示しており、第4面下層には周辺の遺跡地と同様に中世鎌倉の浜地で見える遺構が広がっていたと考えられる。

出土遺物の総量は整理箱5箱と少量であり、内1箱は貝であった(貝種別分類表参照)。出土遺物が少量の為に復元できそうなもの、口縁部片の形が分かるものは小片であっても極力実測している。

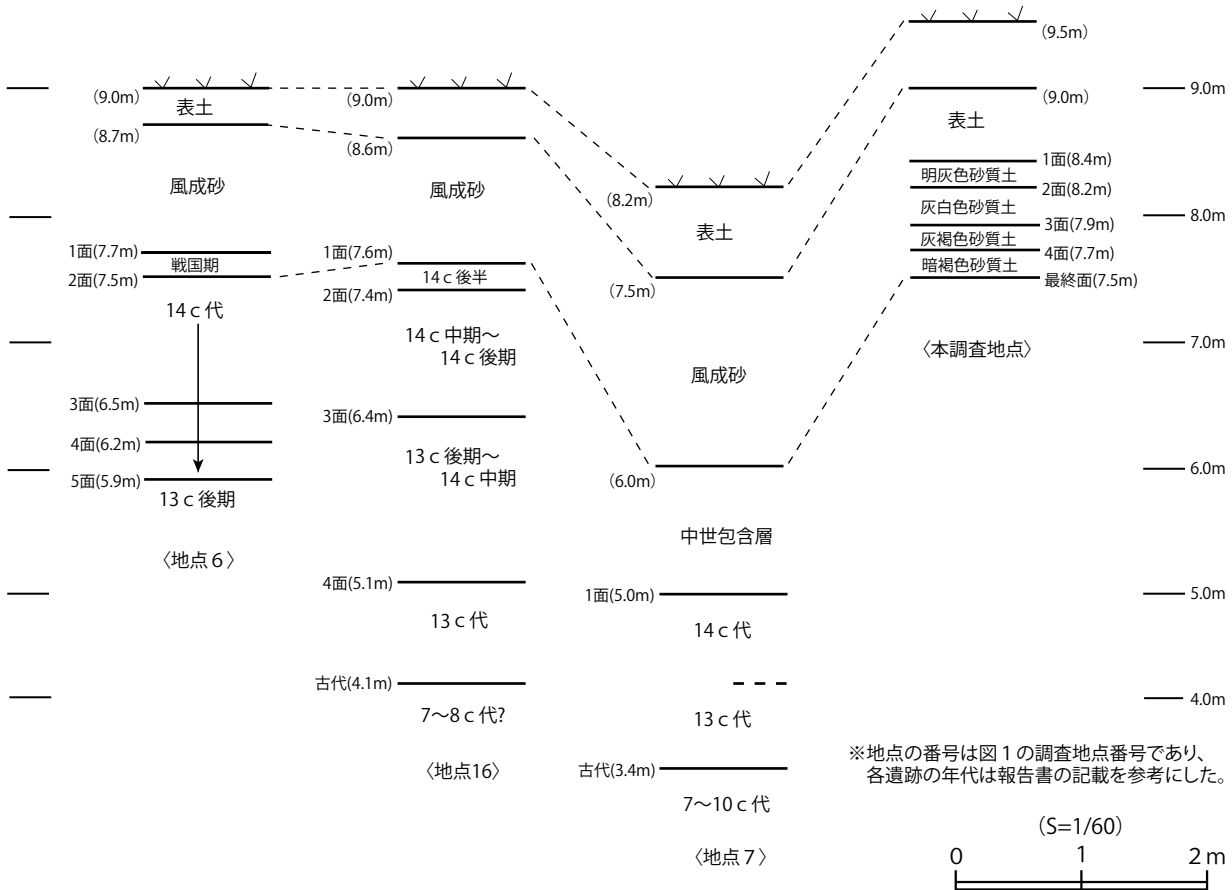


図17 堆積土層模式図

遺物観察表

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ 底径/幅 器高/厚			観察内容
			単位: cm () は復元値			
図 6-1	1面 遺構 3	常滑 片口鉢Ⅱ類				a: 成形・調整 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 遺存値 g: 備考 a: 輪積み b: 色調と共に赤褐色 砂粒・白色粒・長石・石英・小石粒 e: 良好・硬質 f: 口縁部小片 g: 中野編年 10 型式(大窯移行期)?
-2		常滑 片口鉢Ⅱ類				a: 輪積み b: 灰褐色 砂粒・白色粒・長石・石英・小石粒 c: 灰色 e: 良好・硬質 f: 口縁部小片 g: 中野編年 10 型式(大窯移行期)?
-3		女瓦			2.4	a: 凸面叩き目・ナデ不明・離れ砂 凹面ナデ・離れ砂 側面ケズリ b: 色調と共に黄褐色～淡褐色 粗砂・小石粒多・気泡を含む粗土 e: 良好・硬質 g: 永福寺 D 類(Ⅱ期)
-4	1面上	常滑 甕				a: 輪積み b: 黄灰色 砂粒・長石・石英・小石粒 c: 暗褐色 e: 良好・硬質 f: 肩部小片 g: 花文+格子文の組み合わせスタンプ文
図 9-1	1～2面 構成土	かわらけ	(6.2)	(4.6)	1.7	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む砂質気味良土 c: 橙色 e: 良好 f: 1/4 程度
-2		かわらけ	(8.0)	(6.5)	1.7	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒多を含む粉質気味粗土 c: 黄灰色 e: やや不良 f: 1/4 程度
-3		かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.9	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒多・海綿骨芯多を含む砂質気味良土 c: 橙色 e: 良好 f: 1/2 程度
-4		かわらけ	(7.6)	(4.8)	1.7	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/4 程度 g: 器表面は黒く変色・煤痕?
-5		かわらけ	(7.7)	(5.4)	1.7	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯を含む砂質気味良土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/3 程度
-6		かわらけ	7.7	5.0	1.7	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 2/3 程度
-7		かわらけ	(7.8)	(4.6)	1.7	a: ロクロ・内底ナデ強・外底回転系切+板状圧痕強 b: 微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含む砂質気味粗土 c: 黄灰色 e: やや甘い f: 口縁部付近に強い指頭圧痕あり f: 1/3 程度
-8		かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.7	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味粗土 c: 黄灰色 e: やや不良 f: 1/4 程度
-9		かわらけ	7.4	5.3	1.7	a: ロクロ・内底ナデ強・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 淡黄褐色 e: 良好 f: 3/4 程度
-10		かわらけ	7.4	5.6	1.8	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: ほぼ完形 g: 器表面は黒色箇所あり・煤痕?
-11		かわらけ	(7.4)	(4.6)	1.8	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味粗土 c: 黄灰色 e: やや甘い f: 1/4 程度
-12		かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.7	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味良土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/4 程度
-13		かわらけ	7.7	5.1	1.55	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: やや不良 f: ほぼ完形
-14		かわらけ	(9.2)	(6.4)	2.6	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 橙色 e: 良好 f: 1/4 程度
-15		かわらけ	11.7	7.0	3.2	a: ロクロ・内底ナデ強・外底回転系切+板状圧痕強 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯多・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 橙色 e: 良好 f: ほぼ完形 g: 内外口縁部付近に細かい状線あり
-16		かわらけ	11.8	7.8	3.2	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: ほぼ完形 g: 器表面は黒色箇所あり・煤痕?
-17		かわらけ	12.0	8.8	3.3	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/4 程度
-18		かわらけ	(11.9)	(6.6)	3.2	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c: 橙色 e: 良好 f: 1/4 程度
-19		かわらけ	(12.2)	(6.7)	3.5	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味粗土 c: 暗褐色 e: 良好 f: 1/4 程度
-20		かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.5	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒多を含む砂質気味粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/4 程度
-21		かわらけ	12.7	7.6	3.3	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/2 程度
-22		かわらけ	(12.6)	(7.8)	3.1	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/4 程度
-23		かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.6	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 橙色 e: 良好 f: 1/4 程度
-24		かわらけ	(13.8)	(8.8)	3.3	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・小石粒・土丹粒を含む粉質気味粗土 c: 橙色 e: 良好 f: 1/4 程度
-25		かわらけ	(13.8)	(7.6)	3.6	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/4 程度
-26		かわらけ				a: ロクロ b: 微砂・雲母・赤色粒を含む粉質気味良土 c: 淡褐色 e: 良好 f: 口縁部小片 g: 口縁部をへら状工具で押し込み一輪花状か?
-27		白かわらけ				a: ロクロ b: 色調と共に淡黄白色 微砂を含む緻密精良土(瀬戸窯胎土近似) e: 良好・硬質 f: 底部片 g: 内底面に桜文 外底面回転系切+板状圧痕(回転へら調整よく見える)
-28		白磁 口元皿	(10.2)			a: ロクロ b: 灰白色 少量の黒色粒を含む精良緻密 d: 青味がかった乳白色不透明釉を施す・ツヤなし e: やや堅緻 f: 口縁部小片
-29		瀬戸 鉄袖仏華瓶	胴口径 6.5			a: ロクロ b: 淡黄色 砂粒・白色粒を含む粉質気味良土 d: 暗褐色鉄釉を漬け掛け? e: 良好・硬質 f: 胴部片 g: 藤澤編年中期Ⅲ項
-30		瀬戸 平碗				a: ロクロ b: 淡黄色・砂粒 d: 灰釉淡黄色 刷毛塗り e: 良好 やや軟質 f: 口縁部小片 g: 後期前半?
-31		瀬戸 折縁深皿				a: ロクロ b: 淡黄色 砂粒・黒色粒・粉質気味やや粗胎 d: 灰釉淡黄色 薄く刷毛塗り e: 良好 やや軟質 f: 口縁部小片 g: 中期Ⅱ期?
-32		北部系 山茶碗				a: ロクロ b: 色調と共に淡灰色 砂粒・黒色粒・白色粒・石英を含む緻密良土 e: 良好・硬質 f: 口縁部小片 g: 東濃型明和 7 型式
-33		常滑 片口鉢Ⅰ類				a: 輪積み b: 色調と共に灰色 黒色粒・白色粒・長石・小石粒 e: 良好・硬質 f: 中野編年 6a 型式
-34		常滑 片口鉢Ⅱ類				a: 輪積み b: 灰褐色 砂粒・白色粒・長石・小石粒 c: 暗赤褐色 e: 良好・硬質 f: 口縁部小片 g: 中野編年 7 型式
-35		常滑 甕				a: 輪積み b: 灰色 砂粒・白色粒・長石 c: 褐色 e: 良好・硬質 f: 肩部片 g: 縦長正方形のスタンプ文
-36		鬼瓦	(4.7)	(6.1)	2.5～3.3	a: 文様は粘土を盛り上げて成形・周縁の珠文を円形の范型で一部型作り・界線なし 裏面は糸切痕顯著 b: 色調と共に灰黒色～赤褐色 粗砂・小石粒を含む粗土 d: やや不良・硬質 f: 袖の一部分 g: 永福寺 YO Ⅱ 02 類
-37		砥石 仕上砥	(2.75)	1.6	0.45	a: 砥面は表面のみ、裏面は剥離して使用痕跡不明 小口・側面は削り出し痕(生産地加工痕) b: 凝灰岩(頁岩) c: 黄白色 g: 鳴滝産中山?
-38		砥石 中砥	(3.6)	2.65	1.5	a: 砥面は小口以外の 4 面使用 b: 流紋岩質粗粒凝灰岩 c: 白い斑点のある黄色 g: 伊予産
-39		鉄製品 釘	(6.7)	0.6	0.4	a: 四角形状に鍛造 f: 先端部欠損 g: 錆の付着が激しい
-40		鉄製品 釘	(3.8)	0.4	0.45	a: 四角形状に鍛造 f: 先端部欠損 g: 錆の付着が激しい
-41		銅銭	外径 2.3	内径 1.9	孔径 0.7	f: 完形 g: 表面「嘉定通寶」裏面「十二(背文)」 初辨年 1208 年 南宋 楷書

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ 底径/幅 器高/厚			観察内容
			単位: cm ()		は復元値	
図 9-42	1~2面 構成土	骨角製品 弁	(3.9)	1.65	0.25	a: 片面中央に溝を掘る、両面共に丁寧な研磨で光沢あり b: 鹿の角 c: 黒色 (断面も黒色を呈する、土の成分がしみ込んだ為か?理由不明) e: 良好 f: 上下欠損
図 10-1	3面 遺構 12	かわらけ				a: ロクロ b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質気味良土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 口縁部小片 g: 内面に線刻あり
-2		渥美 甕				a: 輪積み b: 灰色 砂粒・白色粒・長石粒を含む緻密土 c: 淡灰色~暗褐色 (自然釉部分) e: 良好 硬質 f: 口縁部小片
図 13-1	4面 遺構 36	かわらけ	(10.8)	(7.2)	1.6	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 暗黄褐色 e: 良好 f: 1/4程度
-2	4面 遺構 37	瀬戸美濃 袴腰形香炉		(7.0)		a: ロクロ・外底回転系切痕 b: 灰色 微砂・黒色粒・白色粒を含む良土 d: 茶褐色鉄釉を薄く施釉 e: 良好 硬質 f: 底部 1/4程度 g: 後期
-3	4面 遺構 44	瀬戸 銅皿				a: ロクロ成形 b: 黄灰色 砂粒・白色粒を含むやや粗土 d: 淡灰黄緑色の灰釉を薄く施釉刷毛塗り? (二次焼成によりただれる) e: やや不良 硬質 f: 口縁部小片 g: 後期
-4		鉄製品 釘	(6.0)	0.45	0.55	a: 四角形状に鍛造 f: 先端部欠損 g: 錆の付着が激しい
-5	4面 遺構 46	かわらけ	(6.9)	(4.6)	1.7	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・白色粒・赤色粒・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/6程度
-6		青磁碗				a: ロクロ b: 灰色 黒色粒・白色粒を含む精良緻密土 d: 灰緑色半透明釉をやや厚く施釉 e: 堅緻 f: 底部片 g: 恐らく内底面に草花文あり 碗I類
-7		瀬戸 緑釉小皿				a: ロクロ b: 淡灰色 砂粒 良土 d: 淡灰黄緑色灰釉を薄く刷毛塗り e: 良好 硬質 f: 口縁部小片 g: 後期
-8		瀬戸 端反皿				a: ロクロ b: 淡黄色 砂粒・白色粒を含む粉質気味良土 c: 灰黄色灰釉を刷毛塗り 貫入あり e: 良好・硬質 f: 口縁部小片 g: 大窯第2段階 (16c代)
-9		常滑 片口鉢II類				a: 輪積み b: 灰色 砂粒・長石・石英・小石粒を含む粗土 c: 赤褐色 e: 良好・硬質 f: 口縁部小片 g: 中野編年5~6型式
-10		常滑 常滑製転用 磨り常滑				a: 輪積み b: 灰白色 黒色粒若干混じる緻密良土 c: 淡黄灰色 e: 良好・堅緻 f: 口縁部小片 g: 表裏面・破断面に磨耗痕
-11		常滑 甕				a: 輪積み b: 灰色 砂粒・長石・石英・小石粒を含む粗土 c: 褐色 e: 硬質 f: 胴部片 g: 縦長格子文+斜線の組み合わせスタンプ文
-12		常滑 甕				a: 輪積み b: 色調と共に灰褐色 砂粒・長石・石英・小石粒を含む粗土 e: 硬質 f: 胴部片 g: 不鮮明な縦長格子文のスタンプ
-13		土製品 鍔釜				b: 微砂・雲母・赤色粒・白色粒を含む砂質気味やや粗土 c: 肌色 (胎芯は灰黒色) e: 良好 硬質 f: 鍔部小片 g: 土窯I類 伊勢系タイプと類似
-14		土製品 鍔釜				b: 微砂・雲母・白色粒・小石粒を含むかわらけ質胎土 c: 暗肌色 e: 良好 硬質 f: 鍔部小片 g: 土窯II類 伊勢系タイプと異なる
-15		かわらけ転用 埴塀				a: ロクロ b: 微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む砂質気味良土 c: 灰色 全体的に火を受ける f: 口縁部小片
-16		かわらけ転用 埴塀				a: ロクロ・外底回転系切 b: 微砂・雲母・白色粒・海綿骨芯を含む粉質粗土 c: 灰黒色~灰色 e: 不良 f: 口縁~体部片 g: 鋳造品の埴塀に転用の為、内面器表に炉融物が付着
-17		土器質 鍔型? 鉄製品 釘	(3.3)	(3.7)	0.9~1.5	b: かわらけ質 微砂・雲母・赤色粒・小石粒を含む粉質気味粗土 c: 黄褐色 g: 内面に竹筒のような繊維痕がのこる
-18		鉄製品 釘	(3.7)	0.4	0.3	a: 四角形状に鍛造 f: 先端部欠損 g: 錆の付着が激しい
図 15-1	最終トレンチ	かわらけ	(7.6)	(6.4)	1.4	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: やや甘い f: 1/4程度
-2		かわらけ	(7.8)	5.6	1.5	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 2/3程度
-3		かわらけ	(7.8)	(4.8)	1.5	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/4程度
-4		かわらけ	(7.5)	(5.6)	1.5	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c: 淡黄褐色 e: 良好 f: 1/4程度
-5		かわらけ	7.3	5.4	1.5	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: やや甘い f: 1/2程度
-6		かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.8	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/4程度
-7		かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.8	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c: 橙色~赤褐色 e: 良好 焼き締まる f: 1/4程度 g: 外側面器壁剥離
-8		かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.8	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・白色粒を含む砂質気味良土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/4程度
-9		かわらけ	(7.2)	(4.8)	2.4	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母多・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味粗土 c: 暗褐色 e: 良好 f: 1/4程度 g: 口唇部に油煤痕付着
-10		かわらけ	6.95	4.2	2.0	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒を含む粉質気味良土 c: 橙色 e: 良好 f: 1/2程度 g: 薄手丸深型
-11		かわらけ	(6.8)	4.2	2.2	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・赤色粒を含む粉質気味良土 c: 淡褐色 e: 良好 f: 1/4程度 g: 薄手丸深型似
-12		かわらけ	10.7	6.1	3.05	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 2/3程度
-13		かわらけ	(11.2)	(6.4)	3.2	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・赤色粒多・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 橙色 e: 良好 f: 1/4程度 g: 口唇部に油煤痕付着
-14		かわらけ	(11.8)	(7.2)	3.0	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味良土 c: 橙色 e: 良好 f: 1/3程度
-15		かわらけ	(12.0)	(6.4)	3.4	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/4程度
-16		かわらけ	(12.0)	(6.4)	3.0	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 淡褐色 e: 良好 f: 1/3程度
-17		かわらけ	(12.0)	(7.0)	3.5	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕不明瞭 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 1/3程度
-18		かわらけ	12.7	8.6	3.4	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕強 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味粗土 c: 橙色 e: 良好 f: 2/3程度 g: 器表面に鉄分付着
-19		かわらけ	(13.6)	(7.6)	3.4	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土 c: 暗褐色 e: 良好 f: 1/3程度
-20		かわらけ	(14.2)	(7.6)	3.45	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味良土 c: 橙色 e: 良好 f: 1/4程度
-21		かわらけ	13.6	7.5	3.65	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕 b: 微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c: 黄褐色 e: 良好 f: ほぼ完形 g: 口唇部に油煤痕付着
-22		かわらけ	(13.4)	7.5	3.45	a: ロクロ・内底ナデ・外底回転系切+板状圧痕強 b: 微砂・雲母・赤色粒・白色粒・貝を含む砂質気味良土 c: 黄褐色 e: 良好 f: 器表面に鉄分付着 f: 2/3程度
-23		竜泉窯系 青磁無文鉢				a: ロクロ b: 灰白色 黒色粒を含む精良緻密土 d: 淡灰緑色不透明釉をやや厚く施釉 貫入あり e: 堅緻 f: 口縁部小片
-24		青白磁 小型水注				a: ロクロ b: 白色 黒色粒を含む精良緻密土 d: 水青色不透明釉を薄く施釉 e: 堅緻 f: 耳部分 g: 少し形が異なるのは、把手をとりつける際にねじれて変形している為か?
-25		瀬戸 銅皿				a: ロクロ b: 淡黄色 砂粒・黒色粒・白色粒・小石粒を含む粉質気味良土 e: 良好・硬質 f: 藤澤編年中期II~III頃
-26		常滑 片口鉢I類				a: 輪積み b: 色調と共に灰色 黒色粒・白色粒・長石・石英 e: 良好・硬質 f: 口縁部小片 g: 中野編年6a型式

図版 番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ 底径/幅 器高/厚			観察内容
			単位：cm () は復元値			
図 15-27	最終トレンチ	備前 播鉢				a: 成形・調整 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 遺存値 g: 備考 a: 輪積み b: 砂粒・黒色粒・白色粒・石英・小石粒を含む暗灰色 c: 暗褐色 d: 黒褐色 (自然釉) e: 良好・硬質 f: 口縁部小片 g: 中世2期b頃の口縁端部が平らで四角いタイプ
		瓦器質 火鉢	(19.4)			a: 輪積み 内外面体部に横位のミガキ+炭素吸着黒色処理 体部外面スタンプ+連珠文は省略 外 底面砂底 b: 暗灰色 砂粒・白色粒・小石粒を含む粗土 c: 黒灰色 d: 良好・硬質 f: 口縁部 底部片 g: 内外面口縁部付近器壁剥離 IV A類が退化する14c後半頃?
		瓦器質 火鉢				a: 輪積み 内外面共にミガキ+炭素吸着黒色処理 b: 明灰色 砂粒・雲母・小石粒 c: 黒褐色 d: 良好・やや軟質 f: 口縁部小片 g: 胴部外面に花菱文スタンプ+連珠文貼り付け
		瓦器質 輪花型火鉢				a: 輪積み 内外面体部に縦位のミガキ+炭素吸着黒色処理 b: 暗灰色 砂粒・白色粒・小石粒を 含む粗土 c: 黒灰色 d: 良好・硬質 f: 口縁部片 g: 貫通しない穴あり
		南伊勢系 土鍋				a: 輪積み 口縁部折り返し b: 淡黄灰色 微砂・赤色粒・小石粒 c: 淡黄灰色 e: 良好 やや硬質 f: 口縁部小片 g: 伊藤編年第2～3段階
		滑石製 スタンプ	(3.45)	2.35	0.9	c: 銀灰色 g: 植物文スタンプ 滑石鍋転用品
		土製品 埴埴	(16.4)			b: かわけ質 微砂・雲母・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粗土 c: 橙色 f: 口縁部小片 g: 内面は被火で黒く変色+融着物(鉄滓)付着 口径に不安あり
図 16-1	表探	青磁 折縁碗				a: ロクロ b: 白色 黒色粒を含む精良緻密土 d: 淡灰緑色不透明釉をやや厚く施釉 e: 堅緻 f: 口縁部片 g: 使用によるキズなし
-2		石皿				b: 安山岩系 口縁部片 g: 内面に使用によるマメツ痕あり
-3		女瓦	(7.1)	(8.1)	2.6	a: 凸面丁寧なナデ 凹面布目痕→縦方向のナデ 側面ヘラケズリ b: 色調と共に橙色～赤褐色 (二 次焼成) 微砂・黒色粒・赤色粒を含むものの良土 (八幡宮瓦の胎土に似ている) e: 軟質で二次焼 成をうける g: 静岡県菊川市皿山窯か?
-4	攪乱	瀬戸 播鉢				a: ロクロ b: 黄橙色 砂粒・赤色粒・小石粒 d: 黒褐色錆釉 e: 良好 硬質 f: 体部小片 g: 大窯期
-5		備前 播鉢				a: 輪積み b: 砂粒・黒色粒・白色粒・小石粒を含む淡褐色 c: 橙褐色 e: 良好・硬質 f: 体部 小片 g: 条線6本
-6		砥石 中砥	(3.1)	4.2	3.3	a: 砥面は表面+側面の3面使用、裏面は剥離して使用痕跡不明 b: 流紋岩質粗粒凝灰岩 c: 白色 味強い黄色 f: 伊予産
-7		チャート	1.9	1.6	1.1	b: 石英質 c: 白色不透明 g: 火打石として使用か?
-8		加工骨 未製品	2.6	0.95	0.9	g: 断面三角形を呈し、2面ケズリあり (うち1面は細かい刃物によるキズあり)、上下は面切断し て丁寧なケズリ

遺構計測表 単位cm

面	遺構 No.	長さ	幅	深さ	面	遺構 No.	長さ	幅	深さ
1	1	100	68	25	4	27	36	30	18
1	2	(78)	(60)	66	4	28	31	30	25
1	3	(372)	(107)	67	4	29	35	30	19
1	4	(240)	79	29	4	30	33	32	22
1	5	156	38	15	4	31	31	31	21
1	6	(132)	79	28	4	32	35	29	19
1	7	(140)	(50)	54	4	33	38	27	16
1	9	(60)	(48)	29	4	34	(37)	(10)	5
2	10	(510)	不明	39	4	35	(32)	(14)	17
2	11	109	58	15	4	36	38	31	21
3	12	(460)	不明	25	4	37	35	34	15
3	13	33	33	15	4	38	37	34	18
3	15	20	19	22	4	39	49	37	16
3	16	(29)	28	12	4	40	28	20	16
3	17	47	46	11	4	41	37	35	19
3	18	32	30	14	4	42	35	32	20
4	14	35	27	14	4	43	35	35	17
4	20	26	13	4.5	4	44	39	31	31
4	21	(90)	(73)	20	4	45	29	27	18
4	22	23	23	20	4	46	(450)	不明	38
4	23	30	25	22	4	47	35	33	14
4	24	35	33	13	4	48	30	28	16
4	25	32	25	13	4	49	40	40	17
4	26	38	32	17	4	50	41	38	16

※調査区外に遺構が延びていたもの、他の遺構に切られていたものについては、遺存値を()で表記した。

遺物破片数表

			1面上	1面遺構	2面遺構	1～2面 構成土	3面遺構	4面上	4面遺構	最終 トレンチ	表採・攪乱	合計	%	
舶載陶磁器	青磁	蓮弁文碗				2						2	0.0	
		無文碗		1								1	0.0	
		皿	1									1	0.0	
		折縁鉢									1	1	0.0	
	不明										1	1	0.0	
	白磁	壺								1			1	0.0
		口元皿				1							1	0.0
青白磁	梅瓶		1				1					2	0.0	
	水注										1	1	0.0	
国産陶磁器	瀬戸	仏華瓶				1						1	0.0	
		小壺				1						1	0.0	
		折縁深皿	2			3	3		3			1	12	0.3
		御皿		1		1	1		1	1			5	0.1
		天目茶碗				1	1						2	0.0
		平碗			1	2				1			4	0.1
		縁釉小皿								2			2	0.0
		播鉢	1	1		1	1					1	5	0.1
		挟み皿								1			1	0.0
	端反皿								1			1	0.0	
	瀬戸美濃	袴腰形香炉								1		1	0.0	
	渥美	甕				3	1						4	0.1
		片口鉢Ⅰ類		4		10	1		2	2	1		20	0.4
	常滑	片口鉢Ⅱ類	1	8		2	2		3	1	2		19	0.4
		甕	14	38	2	93	13	6	31	17	17		231	4.9
		擦り常滑								3			3	0.1
	備前	播鉢				1					1	2	0.0	
山茶碗	北部系				1							1	0.0	
	南部系							1	1			2	0.0	
土器・ 土製品類	かわらけ	ロクロ	32	230	17	1173	249	186	810	425	54	3176	67.2	
		手捏ね				2				1	37		40	0.8
		白(ロクロ)				1							1	0.0
		擦りかわらけ								3			3	0.1
	瓦		2		1						1	4	0.1	
	瓦器	碗				1						1	0.0	
	火鉢		4		9	1		2	4	1		21	0.4	
	土鍋	伊勢系・鍔釜				6	1		18	1	1	27	0.6	
土器質	甕の羽口		2		7	11		4	2			26	0.6	
	埴埴					1			3			4	0.1	
	埴型							1				1	0.0	
石製品	砥石		1		3						1	5	0.1	
	硯				2							2	0.0	
	滑石スタンプ				1					1		2	0.0	
	軽石					1		3			1	5	0.1	
	石皿										1	1	0.0	
	チャート										1	1	0.0	
金属製品	鉄釘				1		2	10	1			14	0.3	
	銅銭				4							4	0.1	
	その他		1	1	2	12						16	0.3	
鉄滓		13	3	27	8	3	25	5			84	1.8		
骨角製品				2						1	3	0.1		
自然遺物	骨	獣骨・魚骨	3	4		43	2		10	11	5	78	1.7	
	貝	別図参照	14	122	6	345	50	24	126	105	44	836	17.7	
漆喰					1			4				5	0.1	
古代以前	土師器坏・甕		1		16	6			9			32	0.7	
近世以降											3	3	0.1	
合計			69	434	30	1770	366	222	1077	619	137	4724	100.0	
%			1.46	9.19	0.64	37.47	7.75	4.70	22.80	13.10	2.90	100.00		

貝分類表

生息環境	貝類群	1面上	1面遺構	2面遺構	1～2面構成土	3面遺構	4面上	4面遺構	最終トレンチ	表採・攪乱	合計
内湾砂泥底干潟群集	ウミニナ				1		1				2
	イボウミニナ				1		2			1	4
	ウミニナ類	1		3	2						6
	オオノガイ				1						1
内湾砂底群集	イボキサゴ		5		16	1		1	6		29
	ツメタガイ				2	1			2	1	6
	アカニシ	4	19	2	36	11	1	21	8	11	113
	バイガイ	2	7		12	3		4	2		30
	アサリ		1		1						2
	ハマグリ	1	27		137	20	10	58	57	10	320
	カガミガイ			1	1			3			5
	シオフキガイ		2					1		1	4
	サルボウガイ		3		1						4
内湾砂礫底群集	イワガキ					1	1	1			3
	イタボガキ				1					1	2
内湾潮間帯～岩礁性群集	コシダカサザエ				2			1			3
	レイシガイ		1					1			2
	イシタダミガイ									1	1
	スガイ		6		2	2					10
	オオヘビガイ				1			1			2
	ツノマタナガニシ				1						1
沿岸砂底群集	サトウガイ				1	1		2			4
	ベンケイガイ								1		
	コタマガイ					2		1			3
	ダンベイキサゴ		4		54	1		11	2	3	75
	チョウセンハマグリ	2	7		12	3	1	7	4	3	39
沿岸砂泥底群集	イタヤガイ						1			1	
外海岩礁性群集	サザエ	1	3		12	4	5	5	3	2	35
	クボガイ							1			1
	マダカアワビ	1	3		28		1	7	17	4	61
	イガイ								3		3
	マイマイ	1	25		14					4	44
	不明	1	9		6		1			2	816
	合計	14	122	6	345	50	24	126	105	44	836

<参考文献>

- 貝が語る縄文海進－南関東、+2°Cの世界 増補版 松島義章 平成18年12月20日 有隣新書
- 学研生物図鑑 貝Ⅰ〈巻貝〉 渡部忠重・奥谷喬司 学研
- 学研生物図鑑 貝Ⅱ〈二枚貝・陸貝・イカ・タコほか〉 渡部忠重・奥谷喬司 学研



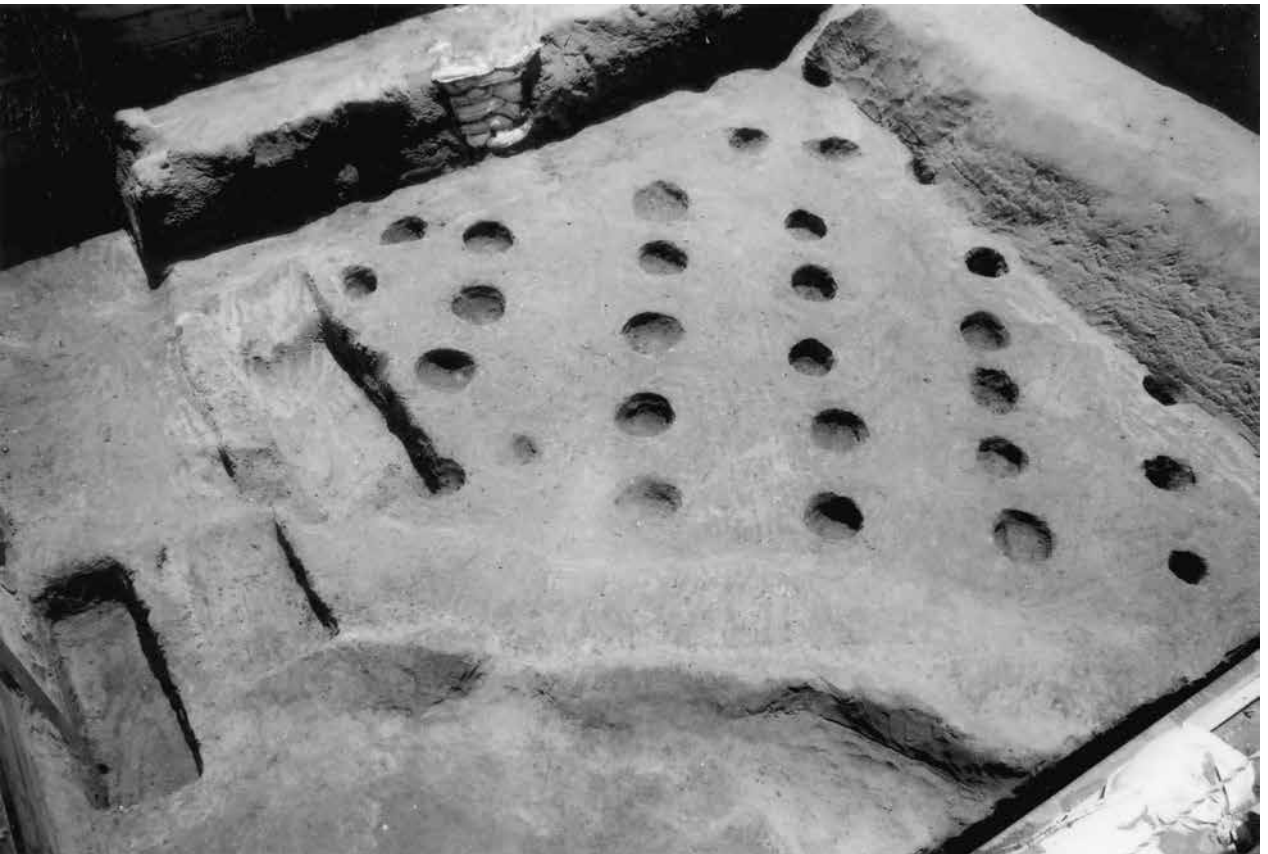
▲第1～第2面全景（南から）



▲第2面・遺構10（東から）



▲第3面全景（東から）



▲第4面全景（東北から）

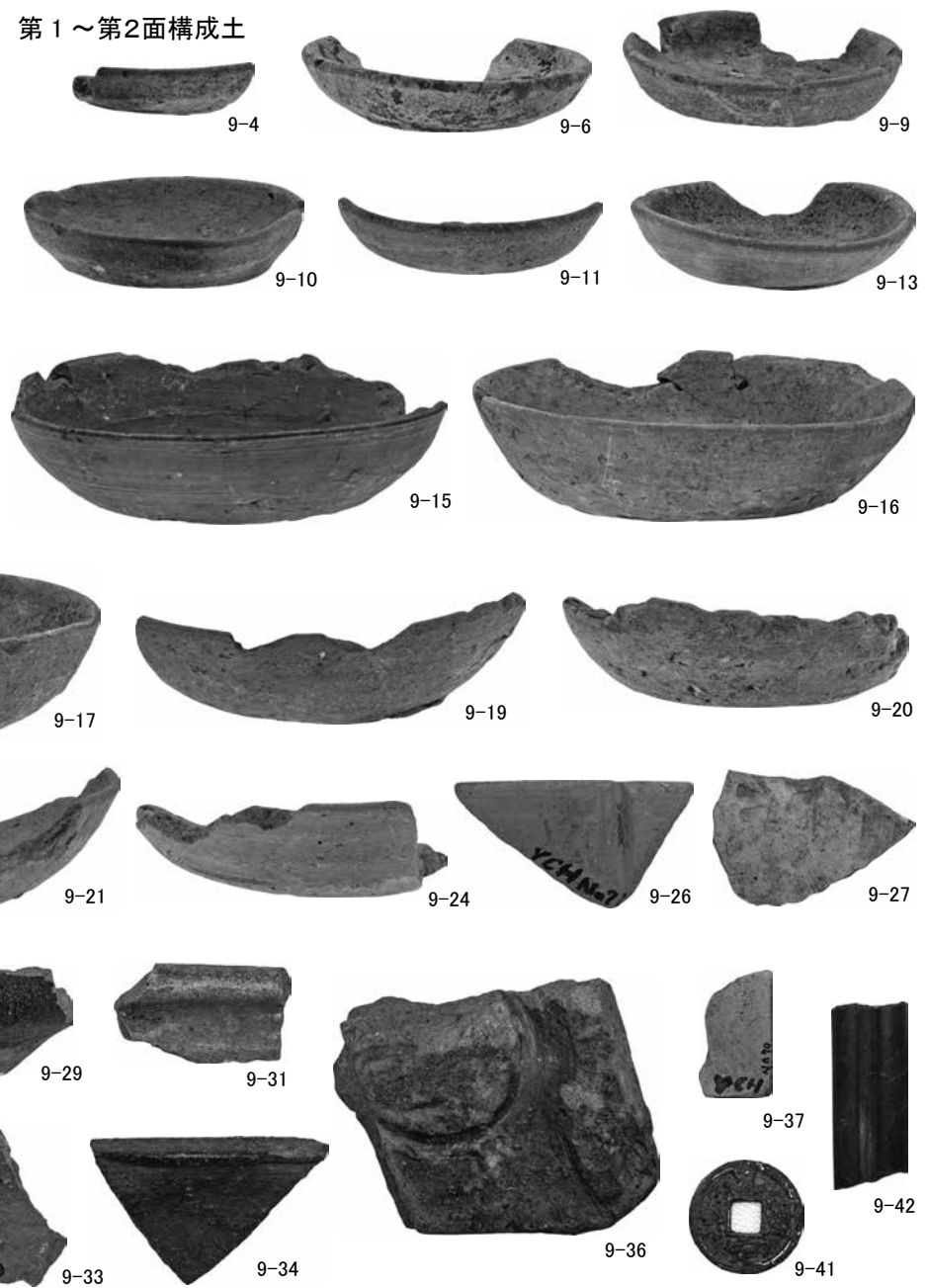
図版3

第1面

▽遺構1



第1～第2面構成土



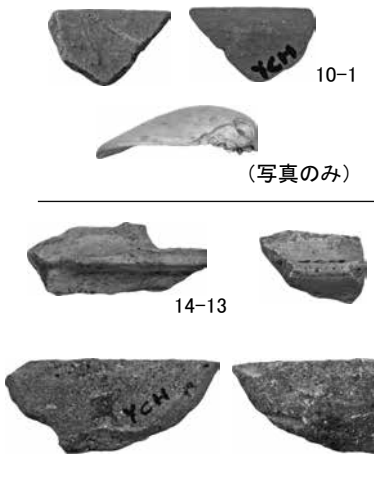
第3面

▽遺構12

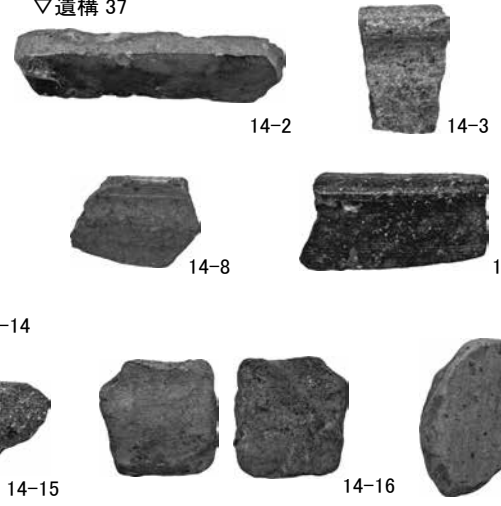


第4面

▽遺構37



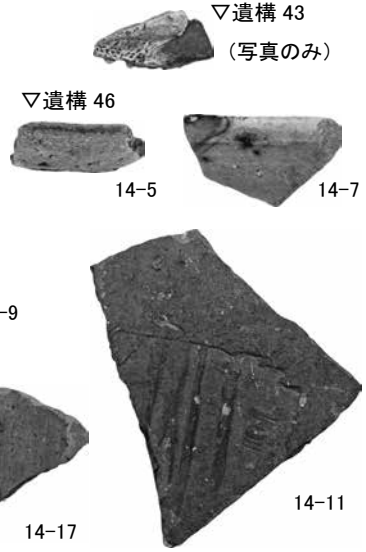
▽遺構44



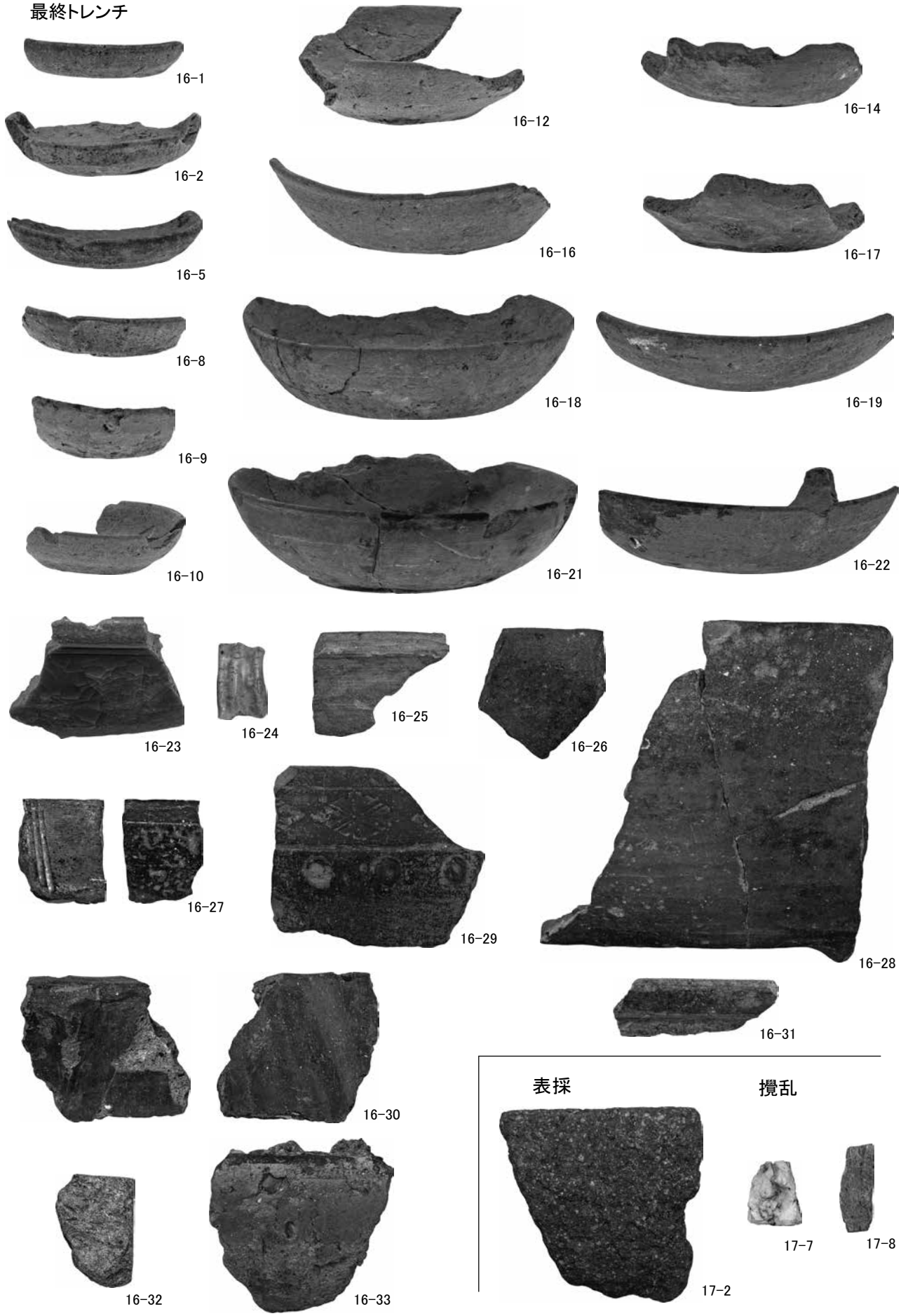
▽遺構43

(写真のみ)

▽遺構46

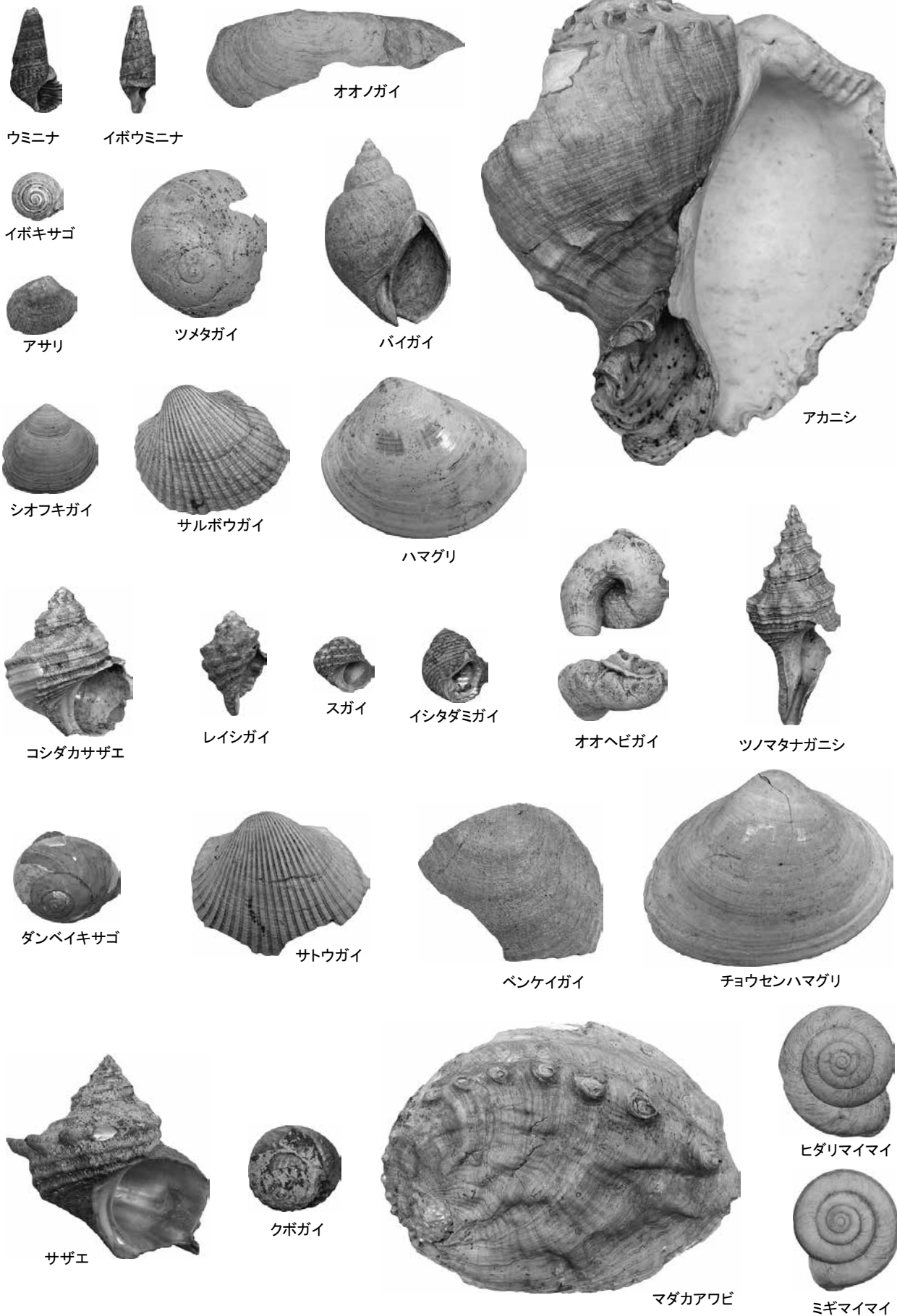


最終トレンチ



図版5

貝類各種 (写真のみ)



大楽寺跡 (No. 262)

浄明寺四丁目 181 番 12 外地点

例 言

1. 本報は、「大楽寺跡」(No.262)内、浄明寺四丁目181番12外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 調査期間 2007年(平19)5月7日～2007年(平19)6月29日
3. 調査面積 45.00m²
4. 略 称 DJ4181
5. 調査体制
 - 担 当 者 馬淵和雄
 - 調 査 員 鍛冶屋勝二・松原康子・岩崎卓司(資料整理)・沖元道(同前)・本城裕(同前)
 - 調査補助員 若松慶・佐藤千尋(資料整理)・田中聡(同前)・畑野愛(同前)
 - 作 業 員 秋田公佑・石井清司・杉浦永章・佐野吉男(以上(社)鎌倉市シルバー人材センター)
6. 本報作成分担
 - 遺構図整理 馬淵・沖元
 - 遺物実測 岩崎・沖元
 - 同墨入れ 岩崎
 - 同観察表 岩崎・沖元
 - 同計量表 沖元・佐藤(千)
 - 同写真撮影 馬淵
 - 図版作成 馬淵・沖元
 - 原稿執筆 馬淵
 - 編 集 馬淵・沖元
7. 整理段階において、遺物の分類及び編年は以下を参考にした。
 - 土師器皿：馬淵和雄 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
 - 瓦 瓦：原 廣志 2002「第4章 出土瓦について」『永福寺跡－遺物・考察編－』鎌倉市教育委員会
 - 瀬 戸：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
 - 常 滑：中野晴久 2012『愛知県史別編窯業3 中世・近世常滑系』愛知県
 - 貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編－』

本報告作成に際し、次の方々の御教示を得た。記して感謝したい。

汐見一夫・原廣志

目 次

第一章 調査地点概観	205
1. 位置と地勢	
2. 歴史的環境	
3. 大楽寺について	
第二章 調査の概略	212
1. 調査にいたる経緯	
2. 調査方法	
3. 調査の経過	
第三章 調査結果	214
第1節 概略	
1. 層序と面の概要	
第2節 遺構各説	
1. 1面	
2. 1b面	
3. 2面	
4. 3面	
5. 4面	
6. 5面	
7. 6面	
8. 7面	
9. 8面	
10. 採集遺物	
第四章 まとめ	242

挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡	207	図12 II区大型泥岩層出土遺物	226
図2 調査区設定図	213	図13 3面, 溝3立面図	227
図3 土層断面図	215	図14 溝3出土遺物	228
図4 1面, 同遺構、同出土遺物	218	図15 3面出土遺物	229
図5 土坑4, 同出土遺物	219	図16 4面, 同出土遺物	230
図6 土坑4出土遺物(2)	220	図17 溝4出土遺物	231
図7 1b面, 同遺構, 同出土遺物	221	図18 5面, 同出土遺物	231
図8 1b面小穴出土遺物	222	図19 6面, 同出土遺物	232
図9 2面, 同溝2出土遺物	223	図20 7面	233
図10 2面遺物集中1・2	224	図21 8面	234
図11 遺物集中1・2出土遺物	225	図22 採集遺物	234

表 目 次

表 1	出土遺物観察表 (1) ……………	235	表 5	出土遺物観察表 (5) ……………	239
表 2	出土遺物観察表 (2) ……………	236	表 6	出土遺物観察表 (6) ……………	240
表 3	出土遺物観察表 (3) ……………	237	表 7	出土遺物計量表 ……………	241
表 4	出土遺物観察表 (4) ……………	238			

図 版 目 次

図版 1 ……………	243	図版 4 ……………	246
1 - 1	調査地点近景①	4 - 1	4 面全景 (西から)
1 - 2	調査地点近景②	4 - 2	5 面全景 (西から)
1 - 3	大楽寺跡やぐら①	4 - 3	6 面全景 (西から)
1 - 4	大楽寺跡やぐら②	4 - 4	8 面全景 (西から)
1 - 5	1 面全景 (西から)	4 - 5	西壁土層断面
図版 2 ……………	244	図版 5 ……………	247
2 - 1	1 b 面土坑 4 上層 (北から)	5 - 1	Ⅱ 区北壁土層断面
2 - 2	1 b 面土坑 4 上層 (北から)	5 - 2	Ⅱ 区南壁土層断面
2 - 3	2 面全景 (南から)	図版 6 ……………	248
2 - 4	2 面遺物集中 1・2 (北東から)	6 - 1	I 区南壁土層断面①
2 - 5	2 面遺物集中 1 (西から)	6 - 2	I 区南壁土層断面②
2 - 6	2 面溝 2 西岸大型礎石 (東から)	図版 7 ……………	249
図版 3 ……………	245	7 - 1	I 区北壁土層断面
3 - 1	3 面全景 (南から)	7 - 2	I 区東壁土層断面
3 - 2	3 面溝 3 (北から)	図版 8	出土遺物 1 …………… 250
3 - 3	3 面溝 3 (北から)	図版 9	出土遺物 2 …………… 251
3 - 4	3 面溝 3 (南から)	図版 10	出土遺物 3 …………… 252
3 - 5	3 面溝 3 (東岸)		

第一章 調査地点概観

1. 位置と地勢

調査地点の位置

調査地点は鎌倉市浄明寺四丁目 181 番 12 に所在する。浄明寺は滑川中上流域に形成された谷間の集落で、北は二階堂、東は十二所、南は大町と逗子市久木（旧三浦郡久野谷村）、西は雪ノ下に接し、中央を県道金沢・鎌倉線、通称六浦道が通じる。鎌倉五山の一つである浄妙寺の所在地であるところから、漢字一字を違えた地名が生じた。近世には常明寺とも書かれた。村内に延福寺・大休寺・泰安寺といった禅宗の廃寺がある。

「六浦道」は滑川に開析された谷間を進む道である。鶴岡八幡宮を起点にこの道を東進すると、臨済宗浄妙寺の参道入口の先で緩やかな上り坂となり、微高地となる。その先は 100m ほどで再び下り始め、約 500m 先の泉水橋で滑川の蛇行に沿って大きく左に曲がる。この間の左手奥の山裾には胡桃ケ谷という狭い谷が南北に開析されている。大楽寺はこの谷の入口にあった寺である。胡桃ケ谷に入るとすぐ右側の山裾に鎌倉時代後期の墳墓窟である「やぐら」が 3 基開口しているのが見える。この一帯から谷奥にかけてが神奈川県遺跡台帳の「大楽寺跡」(No. 262) になる。調査地点はここから約 30 m 北の左側にある。

胡桃ケ谷前面の東半部は南北朝～室町時代前期の関東の首府「鎌倉府」の跡である。この一角にはそれに由来するとみられる「御所ノ内」の字名がある。この鎌倉府比定地とその西隣りの平地部分を囲むように東西の小道が通じ、これを「稲荷小路」と称する。稲荷小路は、浄妙寺参道東側の六浦道から入ると稲荷社の下で山裾に当たって右（東）に大きく折れ、200m ほどで北に入る狭い谷（「胡桃ケ谷」）の入口と丁字形に接したあと、平地のへりを囲むように巡って、「青砥橋」の先で再び六浦道に出てくる。稲荷小路の西北角には「鎌足稲荷」と呼ばれる稲荷社があるので、小路名はそれに由来するのであろう。小路に囲まれた場所は東西約 500m、南北（奥行き）約 180 m で、調査地点はその北側隣地にあたる。稲荷小路に囲まれた区域の西半部はかつて「稲荷耕地」と呼ばれていた（『鎌倉町土地宝典』1930 など）

地勢

地勢上からみれば、調査地点は東の朝比奈山塊を下ってきた滑川が、十二所付近の狭い谷間を抜けて両岸に形成した河岸段丘、もしくは山麓平野の上に位置する。段丘平野は平坦ではなく、ほぼ二か所の微高地とその前後の低地から成る。調査地点付近の六浦道に沿っていえば、いわゆる「青砥橋」付近から下流に向かって徐々に高くなっていき、最高位で標高 19 m ほどの微高地となるが、ここを過ぎて次の微高地である杉本寺前面まで、長さ 500 m にわたって、最大幅 300m ほどの低平な平坦面が形成されている。調査地点はこの微高地上にある。一帯の現地表の標高は 24.1 ～ 24.3m である。

2. 歴史的環境

縄文時代

縄文時代については、本地点と最も近いところでいえば、直線距離で約 1km 西に位置する荏柄天神社の参道脇地表下約 3 m ・標高 9 m 前後の層から、前期の諸磯 b 式土器が採集されたことがあるが（赤星 1959）、本地点付近での報告例はまだない。縄文海進絶頂期の汀線が現在の海拔で 15 m ～ 20 m だとすると、採集地点の離水時期や遺跡形成時期、あるいは出土層の性格などについて、あらためて検討されなければなるまい。

弥生時代

滑川沿い中上流付近の平坦面は広くはないが、弥生時代中期には早くも開けていたらしい。本地点西500mにある杉本寺周辺遺跡では、この辺の基盤層である黒褐色粘質土上に弥生時代の住居址らしい落ち込みが検出され、中期後半頃の遺物も数点採集されている（馬淵ほか2002）。もう少し西に行けば、本地点から1.2kmほど離れた大倉幕府周辺遺跡群で、住居址数10軒と方形周溝墓で構成される中期後半～後期にかけての集落が報告されている（馬淵1998・1999／斎木ほか2007）。川沿いでは点々と弥生時代中期後半以降の土器が採集されているので（地点23－大河内1996／地点25－未報告、筆者実見）、本地点周辺でもその頃から人の往来があったとみるべきだろう。本地点西北800mの横小路周辺遺跡では、西遠江の系譜を引く後期後半の高坏が出土している（野本ほか1999）。

古墳時代

前期の遺構は、鎌倉市内で今のところ山稜部と海岸部でしか発見されていない。六浦道沿道では、大倉幕府周辺遺跡群のうち鎌倉時代の大倉幕府東南角に当たる地点で、弥生時代末期～古墳時代初期の土師器甕が1点見つかっているのみで、本地点近在では報告例がない。しかし、逗子市と葉山町の境の山上に4世紀代の2基の前方後円墳が築かれていることから（「長柄・桜山古墳群」）、古墳時代前期、鎌倉地方にきわめて有力な豪族が蟠居していたことは間違いない。当然、広範な集落の存在も予想されよう。なお2基の前期古墳の位置は、後の律令時代では鎌倉と御浦の郡境にあたり、また奈良時代の古東海道に臨む場所でもあるのは、この地が早くから交通の要衝であったことを示唆している。『古事記』には、倭建命の子足鏡別王が「鎌倉別」などの祖と記されている。大和王権とつながりの深い「ワケ」が鎌倉にいたとすれば、当地が王権にとって東国経営の重要な場所であったことが想像できよう。

後期になるといっきに情報が増える。周辺丘陵地のいたるところで集落が発見され、横穴墓も少なくない。海岸地帯にあったといわれる古墳群（「向原古墳群」）も、この時期のものであろう。本地点西1kmの大倉幕府周辺遺跡群の一角では、東御門川旧流路とその周辺から当該期の土師器が多数出土しており（馬淵1993）、西御門山麓の横穴墓の点在と併せて考えれば、近隣に集落の存在することが十分に予想できる。

律令時代（奈良時代～平安時代前期）

この時代、当地方は相模（摸）国八郡の一つ「鎌倉郡」に属していた。鎌倉郡はいくつかの郷からなり、律令時代では、尺度・荏草・鎌倉・沼浜・方瀬（天平七年735『相模国封戸租交易帳』／天平勝宝元年749「正倉院古裂」）の五郷が見える。平安時代中期承平五年（935）成立の『倭名類聚抄』には、上記に加えて梶原・尺度・大島が現れており（方瀬を除く）、これらもあるいはもっと早くから存在した地名であった可能性はあろう。

郷それぞれの範囲ははまだ確定的ではないが、調査地点付近は荏草郷に属していた可能性が高い。「荏草」の読みは、多くの写本を残す『倭名類聚抄』のうち那波道円の元和古活字本では、「エカヤ」と振られている。『新編相模国風土記稿』は、これがのちに現在の大倉東側一帯に残る字「エガラ」に変わったのであろうというが、根拠は示されていない。「エカヤ」と振られているのは元和古活字本の他になく、「荏草」郷の範囲についても議論を要する。おそらく後世の「大倉」以東で（高柳1959）、六浦道を中心とした地域を指すのであろう。

さて、大化改新直後、五畿七道制が施行され、初期東海道は鎌倉を通過する。鎌倉郷への入り方については後世の大仏坂からと稲村ヶ崎からの二説あり、郷内での経路等についても確定的ではないが、おおむね海岸寄りを通っていたとみて間違いない。初期東海道は鎌倉郡内では鎌倉郷からおそらく小坪を

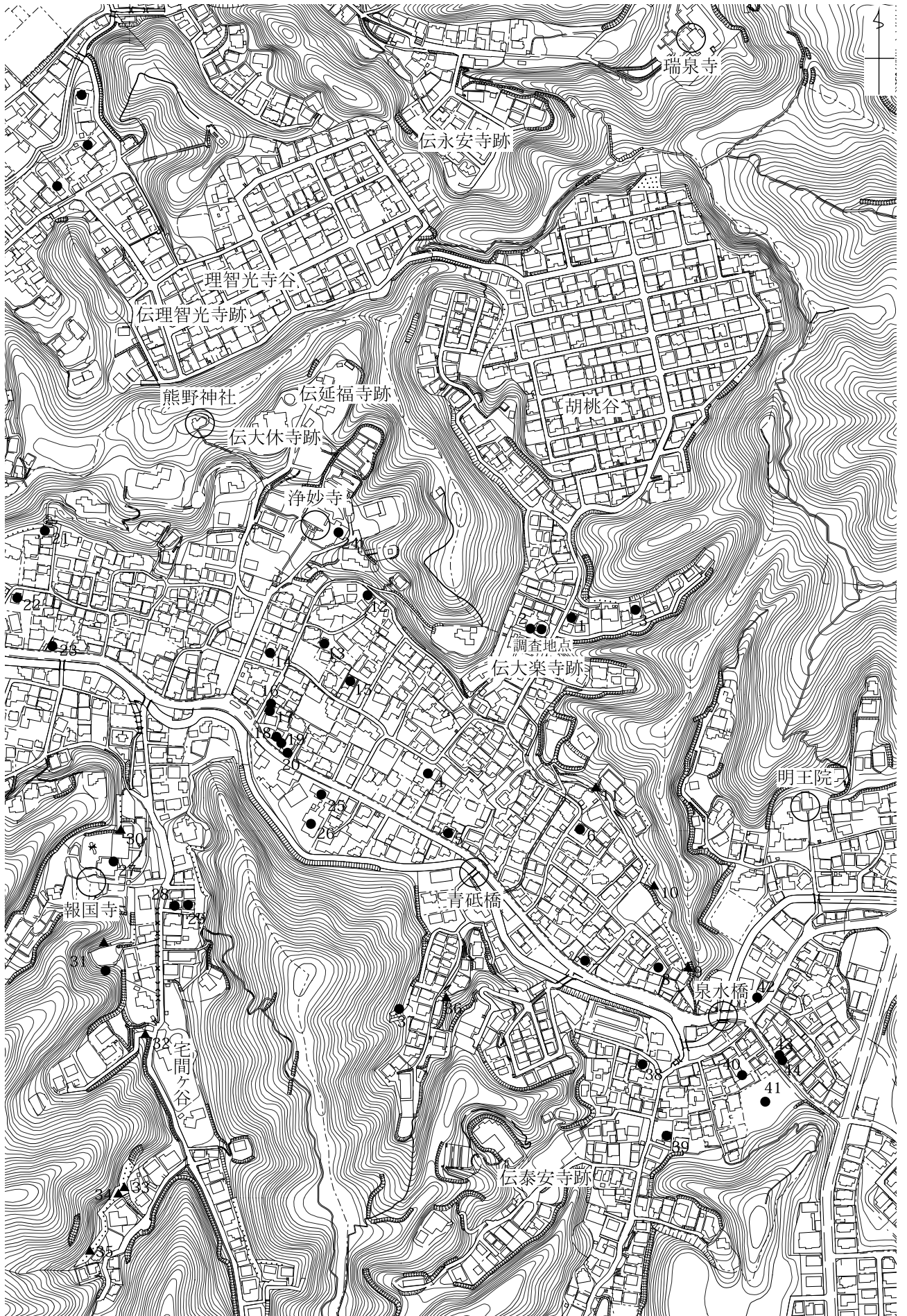


図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡

図 1 調査地点名

凡例 1. 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』 → 『市緊急報告書』

2. 『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』 → 『市調査年報』

3. 神奈川県→県

4. 調査主体が鎌倉市教育委員会の場合はこれを省略した

5. 調査主体が発掘調査団で、団の名称に遺跡名が含まれている場合は「調査団」とのみ記した

大楽寺跡 (No. 262) 浄明寺四丁目 181 番 12 (本調査地点) 1. 浄明寺四丁目 246-1 (2005 滝澤) 滝澤 2010 『市緊急報告書』 26-2 2. 浄明寺四丁目 181 番 (2006 田代) 3. 浄明寺字胡桃ヶ谷 251-1 (1988 ? 田代)

公方屋敷跡 (No. 268) 4. 浄明寺三丁目 143 番 2 (1992 原) 原・橋場 1994 『市緊急報告書』 10-1 5. 浄明寺三丁目 151 番 1・4 (1994 宮田) 宮田ほか 1996 『公方屋敷跡』 調査団 6. 浄明寺四丁目 273 番 (2003 熊谷) 熊谷 2006 『市緊急報告書』 22-2 7. 浄明寺四丁目 292 番 1 (2012 伊丹) 8. 浄明寺四丁目 297 番 12 外 9. 浄明寺 271 番 1 (1988 田代) 原 1990 『昭和 63 年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』 公方屋敷跡内やぐら発掘調査団 10. 11. 浄明寺四丁目 273 番 1 (1991 田代・原) 継ほか 『平成 3 年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』 公方屋敷跡内やぐら発掘調査団

浄妙寺旧境内遺跡 (No. 408) 12. 浄明寺三丁目 126 番 (2002 原) 原ほか 2005 『市緊急報告書』 21-2 13. 浄明寺三丁目 122 番 1・2 (2004 馬淵) 馬淵・松原 2011 『市緊急報告書』 27-1 14. 浄明寺字向小路 90 番 1 (1989 田代・原) 田代・原 『市緊急報告書』 7 15. 浄明寺字稻荷小路 129 番 2 (1984 原) 原ほか 1985 『市緊急報告書』 1 16. 浄明寺三丁目 119 番 (2002 瀬田) 2004 『県埋蔵文化財調査報告』 46 県教育委員会 17. 浄明寺三丁目 101 番 13 (2003 齋木) 齋木ほか 2006 『市緊急報告書』 22-2 18. 浄明寺三丁目 115 番 3 (2006 齋木) 齋木・鯉淵 2008 『浄妙寺旧境内遺跡』 鎌倉遺跡調査会 19. 浄明寺三丁目 115 番 14 外 (2005 熊谷) 熊谷 2010 『市緊急報告書』 26-2 20. 浄明寺三丁目 115 番 2 (1997 田代) 松山 1999 『市緊急報告書』 15-2 21. 浄明寺三丁目 16 番 1 (2000 継) 宗臺 2002 『市緊急報告書』 18-2 22. 浄明寺三丁目 3 番 2 (2003 福田) 福田ほか 2007 『市緊急報告書』 23-1 23. 浄明寺三丁目 6 番 3 外 (1994 大河内) 大河内 1996 『市緊急報告書』 12-2

国指定史跡浄妙寺旧境内 24. 浄明寺字向小路 78 番 (1977 齋木) 松尾 1983 『市調査年報』 I

天王館跡 (No. 409) 25. 浄明寺稻荷小路 104-1 (1984 河野) 1986 『県埋蔵文化財調査報告』 28 県教育委員会 26. 浄明寺稻荷小路 105 (1980 河野) 1981 『掘り出された鎌倉』 神奈川新聞社 / 鎌倉考古学研究所

報国寺遺跡(上杉能憲邸) (No. 306) 27. 浄明寺字宅間 533 (1976 田代) 松尾 1983 『市調査年報』 I 28. 浄明寺二丁目 474-12 (2003 原) 小野 2007 『市緊急報告書』 23-1 29. 浄明寺二丁目 474-11 外 (2003 原) 山口 2007 『市緊急報告書』 23-1 30. 浄明寺字宅間 533 (1987 田代) 田代 1988 『報国寺境内やぐら・杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書』 調査団 31. 浄明寺字宅間 520 (1989 田代) 田代・継 1991 『平成元年鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』 発掘調査団

32. 浄明寺字宅間 520-1 外 (1991 武・継) 田代・武 1994 『報国寺遺跡内やぐら発掘調査報告書』 発掘調査団・東国歴史考古学研究所

宅間谷西第 2 やぐら群 (No. 450) 33. 浄明寺二丁目 520-1 (1997 田代・土屋) 宗臺秀・宗臺富 1999 『中世石窟遺構の調査』 III 東国歴史考古学研究所 34. 浄明寺二丁目 519-1 (2001 鈴木庸・宮坂) 鈴木庸・宮坂 2002 『宅間谷西第 2 やぐら群』 II (財) かながわ考古学財団 35. 浄明寺二丁目 519-4 (2000 穴戸・池田) 穴戸・池田 2001 『宅間谷西第 2 やぐら群』 (財) かながわ考古学財団

青砥藤綱邸跡 (No. 269) 36. 浄明寺五丁目 434 番 -4 (2007 鈴木・西谷) 松葉・近藤 2008 『青砥藤綱邸跡内やぐら』 (財) かながわ考古学財団

鎌倉城 (No. 87) 37. 浄明寺五丁目 448 番 1・449 番 (2003 穴戸・櫻井・鈴木次) 鈴木庸 2005 『鎌倉城 (浄明寺五丁目地内)』 (財) かながわ考古学財団

川越重頼邸跡 (No. 270) 38. 浄明寺五丁目 423-1 外 (2010 伊丹) 39. 浄明寺五丁目 318-1 の一部 (2009 森) 40. 浄明寺五丁目 305-イ外 (2002 田代・齋木) 齋木・降矢 2006 『川越重頼邸跡』 鎌倉遺跡調査会 41. 浄明寺五丁目 306-イ他 (2013 齋木・降矢)

積善遺跡 (No. 440) 42. 十二所二ツ橋 4-3 (2004 原) 原 2011 『市緊急調査報告書』 27-1 43. 十二所積善 952-8 (1997 原) 原ほか 1999 『市緊急報告書』 15-1 44. 十二所積善 952-6 (1996 原) 原ほか 1998 『市緊急報告書』 14-2

経て沼浜郷(逗子市)に出で、田越川を河口近くで渡った後御浦郡に抜ける。そして葉山町堀内付近から同町木古庭の地溝帯を通過、東京湾側の馳水(横須賀市走水)から上総に渡り、北上して終点の常陸国府(茨城県石岡市)にいたる道筋をとった。

宝亀二年(771)五畿七道制の改編にともない、それまで東山道であった武蔵国が東海道に入れられ、代わって常陸国が東山道に編入される。これによって、相模国府を出た東海道駅路は相模野台地を北上して武蔵国府(東京都府中市)に行く道筋が変わり、鎌倉から外れることとなった。このことが、後述するように、鎌倉の集落構造に新たな要素を付け加えることになる。それは調査地点付近にも大きな影響を与えずにはいなかったはずである。

王朝国家時代

房総の大乱平忠常の乱(長元元年1028～長元四年1031)を平定するため、源頼義は父頼信とともに

関東に下り、檢非違使平直方に代わってこれを鎮める。頼義は康平五年（1062）、安倍貞任を討って「前九年の役」に勝利し、東国で「武家の棟梁」としての地歩を固めた。頼義は岳父となった直方から鎌倉の所領を譲られ、由比に石清水八幡宮を勧請して瑞籬を営んだ。みずからの拠点に精神的な核を据え、これによって鎌倉は名実ともに東国における清和（河内）源氏の拠点となった。

1世紀後、頼義四代の後裔義朝は、のちの寿福寺の場所に居館「鎌倉之楯」を構えていた。朝比奈峠を越えて鎌倉に入ってきた「六浦道」は、鶴岡八幡宮のまだなかったこのころ、大倉の辺から直線的に義朝の館に向かう。当時「鎌倉之楯」は、いわば六浦道の終点ともいえる場所に位置している。要するに「六浦道」は、鎌倉時代以前、六浦津と義朝邸との往還道だったのである。後世、鎌倉時代の仁治二年（1241）4月5日、執権北条泰時は朝比奈切通しの開鑿を命じるが、これは改修または付け替えとみるべきだろう。かつて直方や頼義は、平忠常の乱に向かう際、鎌倉を兵站基地とした（野口1993・馬淵1994）。房総に渡る彼らの船はどこから出航したのだろうか。かつての東海道駅路の津であった走水は、鎌倉からは現在の単位で30km近くあり（地図により馬淵概測）、当時でも、駅路が廃されてから300年近くを経て衰退の気配すでに濃かったのではないか。このとき、より鎌倉に近い東京湾側の天然の良港であった平潟湾が、代わって津として整備された可能性が高い。六浦は武蔵国久良（岐）郡に属するが、中世には「相州六浦」などと記された史料が散見される。西岡芳文はこの点に関して、「平忠常の乱の追討のために、鎌倉から上総へ通じる六浦が、海上交通の要衝・兵站基地として、事実上相模国の支配下におかれていたのではないだろうか」とし、「実は六浦が鎌倉と一体化して相模国衙の支配下にあった痕跡」である可能性を指摘している（西岡2001, 53頁）。肯ける意見である。

このころ、六浦道に近い調査地点一帯がどういう状況であったかは、伝わらない。律令時代の「荏草」は平安時代のいつかの時点で「荏柄」に転訛した可能性が高いとされるが、今のところ当地点とのかかわりは不明である。

鎌倉時代

平安時代末期から鎌倉時代の初めにかけて、六浦道は三浦一族が要所を固めていた。東の起点である六浦には「和田谷」があって和田氏の本拠とされ（異見もある）、また朝比奈峠には和田義盛三男朝夷奈三郎義秀の伝説が色濃く伝わる。中間の要衝杉本にはここを名字の地とする杉本義宗（三浦大介義明長男、和田義盛父）が住み、のちにおそらく和田に相承されている（馬淵ほか2002）。西の起点義朝の館跡には、平安末期、岡崎義実（義明弟）・土屋義清父子が堂を営んでおり、義朝死後その地を管理していたことがわかる。また、六浦道から指呼の距離にある「荏柄の前にありて御所の東隣たるにより」（『吾妻鏡』建保元年三月二十日条）といわれる場所には、義盛の甥和田胤長の「屋地」もあった。ここにみられる三浦一族の配置には、彼らが「源家累代の家人」を名乗る所以が示されている。六浦道を守る意識の背後には、旧義朝邸が依然として武士団の精神的な拠りどころであり、それに向かう六浦道が集落の基軸と看做されていることがわかる。しばしば指摘されるように、頼朝が大倉に居館（「新亭」「御所」）を構えたのもその認識に立っていたからであろう。

しかし鎌倉時代において、調査地点付近の消息の伝わるのは、後期近く、現在の地名「浄明寺」の元となった臨濟宗寺院浄妙寺が開創されて以後のことである。鎌倉後期から末期にかけて鎌倉中で何度か起きた災害がこの一帯に及んだかどうかはわからない。しかし、弘安三年（1280）の火災や（『鶴岡社務記録』など）、永仁元年（1293）の大地震（『随聞私記』）、乾元元年（1302）の大火（同前）・延慶三年（1310）の火災（『北条九代記』）などは近在での罹災が記録されているので、影響が想定できる。

この一帯では鎌倉末期の文保元年（1317）、律宗の大楽寺が胡桃ヶ谷に開創され、その前後から南北

朝時代にかけて延福寺（臨濟宗）、大休寺（臨濟宗）、泰安寺（宗旨未詳）などが開かれている。

南北朝～室町時代前期

元弘三年（正慶二年，1333）5月、鎌倉幕府が滅ぶ。直後に鎌倉に入った足利尊氏の嫡子千寿王（義詮）は、二階堂の別当坊に居を占めたという。これを『新編相模国風土記稿』では永福寺といているが、高柳光寿は「二階堂の別当坊ということは永福寺の別当坊ということで永福寺そのものではない」といっている（高柳 1959，1972 改訂版 372 頁）。従うべき見解と考えるが、いずれにせよ永福寺のある谷間のどこかであろうから、調査地点とも山一つ隔てた、当地点からそう遠くない場所ということになる。この戦乱の影響については不明である。

延元二年（建武四年，1337）、陸奥の北畠顕家は奥州五十四郡の勢を合わせて 10 万余騎をもって鎌倉に攻め入る。顕家は朝比奈峠から鎌倉に入り、「杉本城」で足利方の大将である斯波三郎家長と戦った（『常楽記』建武四年十二月廿二日条）。このとき自軍の不利を知った足利方は、「城ヲ堅クシ壘ヲ深クスル謀ヲモ事トセス、一万余騎ヲ四手ニ分ケテ、道々ニ出合、懸合懸合、一日支テ、各身命ヲ惜シマス戦」ったという（『太平記』卷十九「追奥勢跡道々合戦事」）。家長は三浦に退いて自刃している（『御的日記』、ただし『常楽記』『鎌倉大日記』は杉本城とする）。「杉本城」とは杉本寺背後の山塊のことであろう。この山塊が「城」と呼ばれるのはこの時期を措いて史料上にないが、赤星直忠は城域を東に広く見て、浄妙寺はもちろん北東の瑞泉寺の裏山付近まで郭の存在を想定している。北畠軍は合戦後東海道を西に向かうが、『太平記』によれば彼らは「無慚無愧の夷ども」で、途中路次の民家を掠奪し神社仏閣を焼き払っている。「城」の範囲内に本地点背後の山も当然含まれていること、また戦いが「道々」でおこなわれた、とあること、そして北畠軍の行状からみて、戦火が調査地点にも及んだ可能性は高い。

建武二年（1335）、権力を得た足利尊氏は、嫡子義詮を鎌倉に置き関東の管理にあたらせる。暦応元年（延元三年 1338）8月に征夷大將軍となった尊氏は、貞和五年（1349）10月、義詮のかわりに5歳の次男基氏を関東の首長として下向させる。彼の居宅を「鎌倉府」・「鎌倉御所」・「関東幕府」（義堂周信『空華日用工夫略集』）・「公方」などと呼んだ（ここでは「鎌倉府」と呼ぶ）。鎌倉府は以後足利五代にわたって存続するが、実質的には四代目持氏の永享十一年（1439）に滅ぶ（永享の乱）。鎌倉府については、調査地点南側のほとんど隣地というに近い場所にあり、その動静が当地点にも直接的影響を与えたことは間違いないので、これについては別に述べる。

さて、鎌倉府の設置により、鎌倉の街構造は大きく変わった。すなわち少なくとも権力者の意識構造の内部においては、石井進のいうように、街路の基軸が鎌倉時代の鶴岡八幡宮と若宮大路からかつての六浦道に戻ったと看做さざるをえない。それは確実に、旧幕府による都市空間を否定する意図に発していたと考えたい。しかし、鎌倉の全体的な顔勢のなかであって、かつての若宮大路一帯のような繁栄が六浦道にもたらされることは、ついになかったであろう。

永享の乱から 10 年後の宝徳元年（1449）、持氏の子成氏（永寿王）が京から下って公方となる。このとき従来の浄妙寺の公方屋敷は焼けていたという（『鎌倉大草紙』）。これがいつの火災によるものかは不明だが、その時には調査地点にも影響が及んだ可能性は高い。享徳三年（1455）、成氏は下総古河に去り、鎌倉府は名実ともに潰えた。以来鎌倉は政治的にも海辺の一集落に戻り、都市的性格を急速に失っていったはずである。高柳光寿によれば、明応の頃（1492～1500）にそれまでの都市区画である丈尺制に基づいた屋地の制はすたれ、かわって坪の制が用いられるようになった、という（高柳 1959）。これは鎌倉内の土地管理制度が、都市のそれから村落のそれに移行したということである。

鎌倉の都市的な場は、鎌倉幕府崩壊後若宮大路周辺から次第に失われていき、14 世紀第 3 四半期以

降の鎌倉府の時代には六浦道沿いに移行していたであろう。しかし、それとてもかつての繁栄には遠くおよばず、鎌倉府の滅亡を待たずして、14世紀後半頃には早くも衰退の気配濃厚だったのではないか。

近世以後

近世に入ると、鎌倉を扱った旅行記・地誌は多く書かれるようになるが、調査地点近辺に関する記述は、杉本寺を除いて目ぼしいものはない。江戸時代も後期になると、相模湾でとれた魚を材木座に集積し、六浦道を経由して金沢（六浦）に運んだあと、船で江戸に向かう搬路が形成されたという（阿部 1958）。六浦道自体の往来はある程度盛んだったことがうかがえる。本章第1項に述べたように、『皇国地誌』によれば、明治初期の浄明寺村が山がちの地形であって、滑川沿いにさほど広くはない田畑があるという状況が見てとれる。

鎌倉府と当地点

調査地点は鎌倉府の東北の隣地にあたり、その動静が当地点に直接的な影響を与えたことは間違いない。あらためてその消長をみて、当地点とのかかわりを探ってみたい。

鎌倉府は関東10カ国を統治する機関で（のち氏満の明德三年1392に12カ国に）、首長は「関東公方」・「鎌倉公方」「鎌倉殿」などと呼ばれ、基氏以下、氏満・満兼・持氏・成氏の五代をいう。補佐役として執事が置かれ、当初義詮の執事として斯波家長があたったが、家長が先述の杉本の戦いで敗死したあと、尊氏は高師冬と上杉憲顕を京都から下した。補佐役の二院制は尊氏と弟直義の二頭政治を反映したもので、観応二年（正平六年1351）まで続く。

観応の擾乱（1350～1352）で直義が滅んだ後、尊氏は配下の畠山国清を基氏の補佐役に置いたが、国清没落後の貞治二年（正平十八年1363）、基氏は隠棲していた旧直義派の憲顕を管領として再び迎えた。関東管領の称が確立されるのはこれ以後である。

基氏没後、公方は次第に京都の将軍と対立するようになり、四代持氏のとき上杉禅秀の乱後将軍を足利義政と競い、六代将軍義教と衝突して永享十一年（1439）乱をおこした（永享の乱）。戦いは幕府方の勝利に終わり、持氏は永安寺で自刃する。これにより鎌倉府は実体を失った。

永享の乱から10年後の宝徳元年（1449）、持氏の子成氏（永寿王）が京から下って公方となる。このとき従来の浄妙寺の公方屋敷は焼けていたので、成氏は山内の龍奥（興）院を経て浄智寺に入った。翌宝徳二年十一月、新第ができてそれに移ったという（『鎌倉大草紙』など）。この「新第」がどこであったかはわからない。しかし成氏も管領上杉憲忠を謀殺して幕府と衝突し、康正元年（1455）下総古河に逃れる。これで鎌倉府は名実ともに消滅した。

（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』27「浄妙寺旧境内遺跡」第一章を加除筆）

3. 大楽寺について

大楽寺は胡桃山千秋大楽寺と号する。室町時代前期の15世紀前半まで胡桃ヶ谷にあって、のち薬師堂ヶ谷の覚園寺境内に移り、その後廃された。もと律院で、江戸時代貞享二年（1685）成立の『新編鎌倉志』によると、開山は公珍だという。公珍は京都泉涌寺六世憲静の高弟である。このことは覚園寺の寺伝である『鎌倉鷲峯法流伝来記』にも「公珍（割注）胡桃谷大楽寺開山」（『金沢文庫紀要』1所収）とある。公珍が憲静の高弟であれば、活動したのは鎌倉時代後期頃ということになる。『新編鎌倉志』にはまた、胡桃谷は浄妙寺の東の谷で、「昔、薬師堂有り、今ハ亡テ礎石ノミアリ、本尊ハ今大楽寺ニアリ」とある。山一つ隔てた西にある薬師堂ヶ谷を奥に向かって進むと、谷口から500mほど先の左手の枝谷に、現在覚園寺参詣者の駐車場となっている幅50m前後、奥行き70～80mの平場がある。寺蔵の「境内絵図」（写）には、この場所に「大楽寺」と註された建物（ママ）が描かれている。永享元年（1429）2月11

日に瑞泉寺門外の永安寺が焼けた際、山を越えて類焼し、伽藍を失った。このときまでは胡桃ヶ谷にあった（『新編鎌倉志』）。旧跡（今回の調査地点）には今も大型のやぐら3基が開口している。のち覚園寺に吸収されて「覚園寺境内絵図」の場所に移った。天保十年（1839）の『五大堂事蹟備考』に、「今猶覚園寺域、不動・薬師・愛染・願行上人ノ肖像ヲ安スル堂を大楽寺と称ス」とあり、堂のみ残っていたことがわかる。明治四年（1872）兼宗廃止令が出たときに廃寺となった。

現在厚木市中依知の浅間神社に大楽寺の梵鐘がある。貞和六年（1350）鋳物師清原宗広によって作られた鐘で、銘文によれば、大楽寺は文保元年（1317）に伽藍を興隆した、という。『新編鎌倉志』によると本尊は鉄不動で、ほかに愛染明王・薬師如来がある。鉄不動は「試みの不動」といい、泉涌寺六世願行房憲静が大山寺（伊勢原市大山）の本尊不動を鋳造するに先立ち、試しに鋳たのでこの名があるという。愛染明王像は運慶作、薬師は願行作、という。二体ともに、現在覚園寺愛染堂に祀られている。なお同じく『新編鎌倉志』によれば、鉄不動を鋳た「鑪場」は、二階堂紅葉ヶ谷にあった理智光寺の「西の方」だったという。

第二章 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

浄明寺四丁目181番12ほかにおいて、地盤の柱状改良工事をとまなう個人専用住宅建設の照会があった。当該地点は神奈川県遺跡台帳に「大楽寺跡」（鎌倉市No.262）として登録されている周知の遺跡の一角であり、鎌倉市教育委員会が試掘調査をおこなった結果、地表下約1mで遺構の存在が確認された。設計図によれば耐震工法として柱状改良を施すため、設計変更は困難なことから、国庫補助事業として発掘調査を実施することとなった。調査は2007年5月7日から開始された。

2. 調査方法

掘削方法

表土層のうち地表下平均70cmまでを重機により掘削、以下を人力によった。掘削深度は安全面への配慮から原則として地表下2mまでとし、それ以下の掘削が必要になった場合、状況に応じた対応を講じることとした。土層の多くが泥岩塊で構成されて崩れやすいため、I区は3面以下で調査区を大きく縮小した。調査面積45㎡を残土置場の確保のため東西で二分割し、前半をI区、後半をII区と称した。残土については、I区の調査時にはII区に置き、II区の調査時にはI区に置いた。I区調査時、II区寄りの発掘区西辺部に大型溝の片側（東側）壁とみられる石組み遺構が良好に検出されたので、反転時にはその部分を埋めないようにして、II区調査時に溝の全体が呈示できるよう配慮した。なおII区において、3面以下は調査区全体が全体が後述する溝3掘り方の範囲に含まれているため、面次数は3面で止まっている。

3. 調査の経過

5月7日（月）機材搬入、調査開始	6月14日（木）	I区調査終了
6月7日（木）3面全景写真撮影、これ以下の面の調査は安全性確保のため、当初の調査区壁から掘削範囲を縮小した。	6月15日（金）	調査区反転、II区調査開始
	6月27日（水）	石組み溝全景写真撮影
	6月29日（金）	機材撤収、調査終了

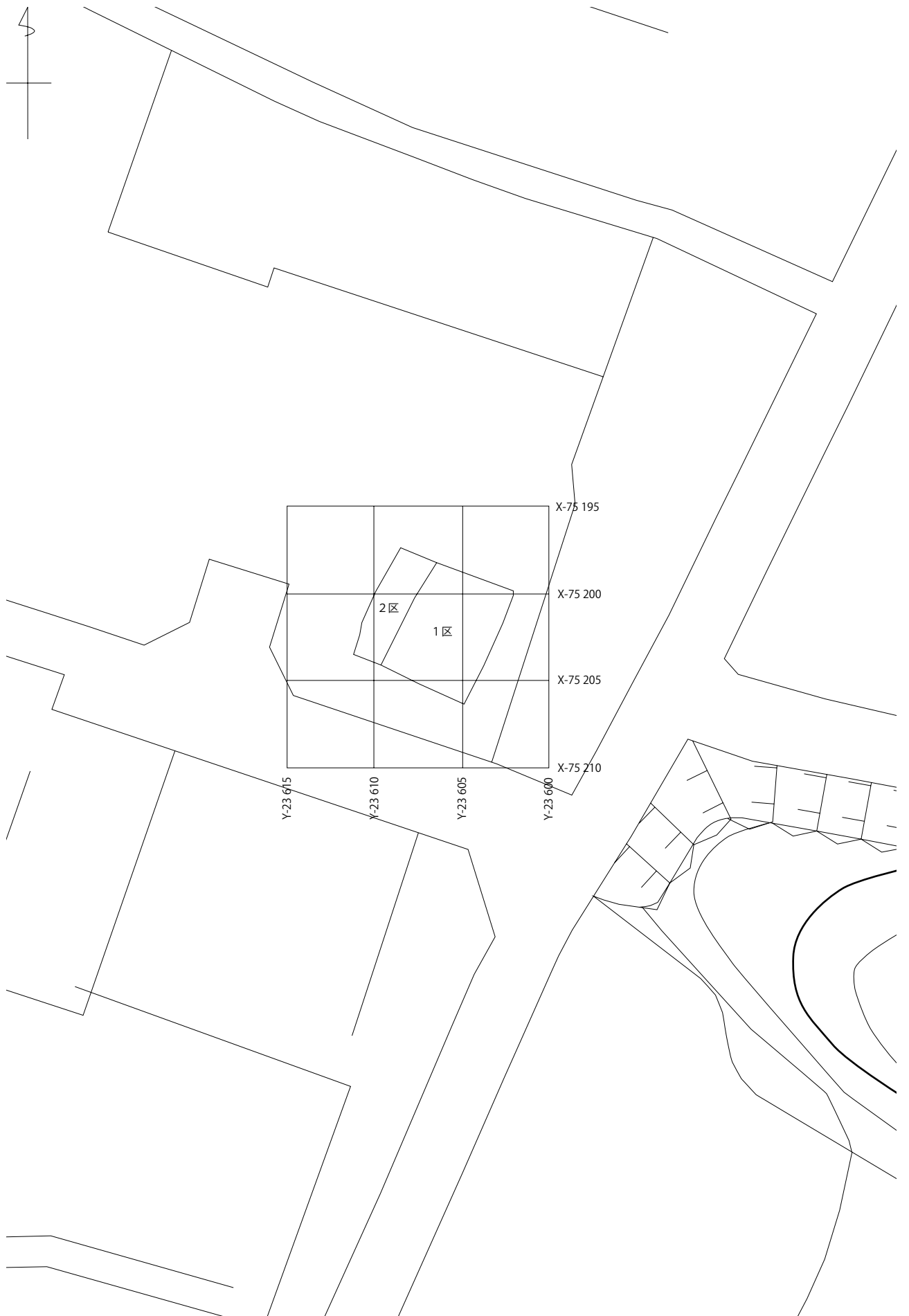


図2 調査区設定図

第三章 調査結果

第1節 概略

1. 層序と面の概要

地表面

谷奥側の北西角が最も高く、標高 24.35 m、南東角が 24.25 m と低くなっているが、全体におおむね平坦といえる。

近世～近代耕作土

23.40 m 前後から 23.75 m 前後にあるざらざらした灰黒色砂質土層。層厚 10～25cm。

1 面

耕作土をめくると早くも中世層が現れる。標高 23.55 (南東角)～23.70 m (北東角)、大型泥岩による地形層で、層厚 10～25cm、全体に堅く締まっているが、表面には大型泥岩塊が散見される。全体に遺物の多い面で、土坑のうちには大量の土器皿の詰まったものもある (土坑 4)。南東角に一段高く積まれた泥岩層があるが、性格は不明。なお前章で述べたように、Ⅱ区において 3 面以下は、全体が後述する溝 3 掘り方の範囲に含まれている。

検出遺構：土坑 5・柱穴様小穴 12

1b 面

1 面から 2 面にいたるまでの泥岩層は二枚に分けられる。下層の上面にはいくつかの落ち込みが認められ、上層との性格の近似性から調査時に「1b 面」とした。独立した面とみることも十分に可能だが、整理の際の混乱を避けるために、調査時の呼称をそのまま使用した。南半部に南の調査区外に伸びる南北方向の細長い土坑があり、ひとまず「溝状土坑」と称した。この遺構は南側を泥岩層に覆われているが、その下はさらに南に続いていく。これは泥岩地形層が途中から積み増しによって補修されているからである。地形層は南に向かって僅かずつ厚くなっていき、本来ならば別の面として分離すべきであるが、面積が狭小であることから一括して扱った。面の標高は 23.15～23.30 m にある。層厚 15～27cm。

検出遺構：溝状土坑 1・溝 1・柱穴様小穴 15

2 面

1b 面の下 20～30cm に拳大～人頭大泥岩版築による地形層があり、上面はきわめて強固で人的痕跡も顕著なためこれを「2 面」とした。面の標高は 23.05～23.15 m にある。層厚は 10～15cm。

検出遺構：溝 1・溝状土坑 1・土師器集中出土 2 群

3 面

2 面を構成する泥岩地形層を除くとさらに別の泥岩版築層があり、上面から遺構が観察されたので 3 面とした。拳大～半人頭大泥岩による地形層で、標高は 23m 前後にある。層厚 20～28cm。この面では、調査区の西半分を占める範囲に南北方向の石組大型溝が検出された。

検出遺構：溝 1

4 面

Ⅰ区では 3 面以下は安全面への配慮から調査区を縮小した。その中で 3 面の泥岩地形層を除くと暗青灰色に還元された泥岩層が現れ、遺構も確認できたので、4 面とした。標高 22.60～22.75m。層厚 5～22cm。泥岩塊は数cm 大～拳大と小さめのものが使われている。

検出遺構：土坑 1

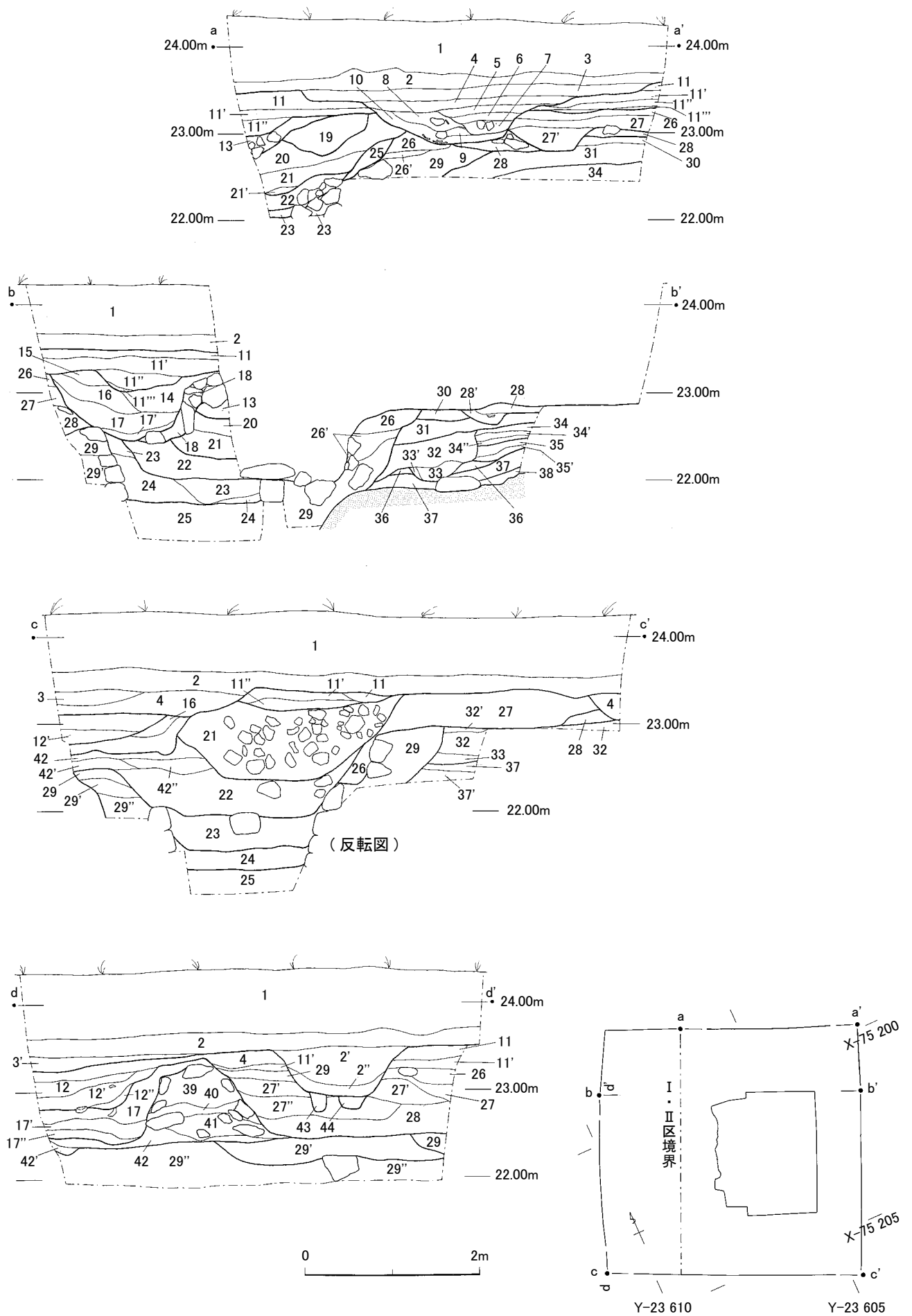


图3 土层断面图

図3 土層説明

1. 表土(客土)
2. 表土(近世～近代耕作土) 灰褐色砂質で、火山灰含む
3. 破碎泥岩層 数cm～拳大泥岩が密に詰まる、明茶褐色粘土・炭化物含む(土坑4埋土上部)
4. 茶褐色弱粘質土 炭化物・土器片やや多い、締まりあり(土坑4埋土上部)
5. 茶褐色弱粘質土 挟雑物やや少ない(土坑4掘り直し)
6. 茶褐色弱粘質土 1・2cm前後～半人頭大泥岩多い、炭化物・土器片含む(土坑4掘り直し)
7. 暗褐色弱粘質土 大量の土師器片・炭化物・半拳大～半人頭大泥岩含む(土坑4掘り直し)
8. 暗褐色弱粘質土 6に似るがやや泥岩塊多い(土坑4埋土)
9. 茶褐色弱粘質土 6とほぼ同質だが土器片は少ない(土坑4埋土)
10. 暗褐色弱粘質土 6とほぼ同質だが下層(土坑4底面)に多量の土器(土坑4埋土)
11. 泥岩地形層 大型泥岩による、炭・土器片やや多い(上面が1面)
 - 11'. 暗茶褐色粘質土 11よりやや泥岩少ない
 - 11''. 暗茶褐色粘質土 11'よりさらに泥岩少ない
 - 11'''. 茶褐色弱粘質土 炭化物多い
12. 茶褐色弱粘質土 数cm大の泥岩塊を多く含む(溝1堆積土)
 - 12'. 暗茶褐色粘質土 多量の炭と土器片含む(溝1堆積土)
 - 12''. 黒褐色炭化層(溝1埋土)
13. 茶褐色弱粘質土 拳大～半人頭大泥岩塊を多量に含む(溝1堆積土)
14. 茶褐色弱粘質土 半人頭大泥岩を多く含む
15. 茶褐色弱粘質土 14に似るが泥岩少ない
16. 茶褐色弱粘質土 15に似るが炭が多い
17. 茶褐色弱粘質土 拳大～大型泥岩多く含む
 - 17'. 茶褐色粘質土 拳大～大型泥岩詰まる(面構成土)
 - 17''. 暗褐色粘質土 粉状の砂岩・凝灰岩を敷いたもの(面構成土)
18. 灰黄色泥岩層 大型泥岩が詰まる
19. 茶褐色弱粘質土 拳大～半人頭大泥岩塊を多量に含み、下層に灰色の粘土が堆積(溝1堆積土)
20. 茶褐色弱粘質土 粒状の凝灰岩と泥岩の層(溝2堆積土)
21. 青灰色弱粘質土 破碎泥岩の層で、空隙に灰色の粘土が詰まる(溝2堆積土)
 - 21'. 青灰色粘質土 粘土質だが泥岩少ない(溝2堆積土)
22. 青灰色砂質土 大量の泥岩を含む砂礫層(溝2堆積土, 埋め戻しか)
23. 暗青灰色砂質土 大量の泥岩・凝灰岩の小円礫を含む砂礫層(溝3堆積土)
24. 灰黒色砂質土 大量の泥岩と凝灰岩の小円礫と砂で構成される砂礫層, 木片・土器片・炭化物を多く含む(溝3堆積土下層)
25. 青灰色砂質土 大量の泥岩と凝灰岩の小円礫と砂で構成される砂礫層, 木片・土器片・炭化物を含む(埋没谷堆積層か)
26. 暗黄褐色弱粘質土 凝灰岩・泥岩の粒多い(1b面構成土)
 - 26'. 青灰色粘質土 少量の泥岩粒と炭化物を含む
27. 茶褐色砂質土 凝灰岩・泥岩の粒多い(2面構成土)
 - 27'. 茶褐色弱粘質土 27より若干粘性強く、炭を多く含むためやや黒っぽい
 - 27''. 茶褐色粘質土 拳大～半人頭大泥岩含む
28. 灰色粘土層 大型の灰黄色泥岩が詰まる(2面構成土)
29. 茶褐色泥岩層 鉄分で固く締まった泥岩層(溝3裏込め)
 - 29'. 青灰色粘質土 粘性強く拳大～半人頭大泥岩を含む, 土器片・炭片を散見する(溝3裏込め)
 - 29''. 青灰色粘質土 29'より粘性さらに強い(溝3裏込め)
30. 泥岩版築層 拳大～人頭大泥岩による地形層(2面構成土)
31. 泥岩版築層 拳大～半人頭大泥岩による地形層. 30よりやや暗い(3面構成土)
32. 暗青灰色砂質土 数cm大～拳大泥岩多く含む, 締まりやや弱い(3面構成土)
33. 黒褐色強粘質土 小粒の泥岩・凝灰岩多く含む
 - 33'. 33より泥岩粒子がやや粗い
34. 暗青灰色泥岩版築層 小粒の泥岩と凝灰岩による地形(4面構成土)
 - 34'. 暗青灰色泥岩版築層 拳大泥岩による地形(4面構成土)
 - 34''. 青灰色泥岩版築層 小粒泥岩による地形(4面構成層)
35. 暗青灰色粘質土 泥岩粒子多く、締まり強い(5面構成土)
 - 35'. 黒褐色粘質土 卵大の泥岩・凝灰岩含む
36. 黒褐色強粘質土 小粒の泥岩・凝灰岩多く含む(6面構成土)
37. 青灰色砂質土 拳大泥岩と砂礫含む(6面構成土)
 - 37'. 37よりやや締まり弱い
38. 灰青色砂質土 37に似るがより締まりがある(7面構成土)
39. 暗茶褐色粘質土 層の外縁部に大型泥岩が多数あり、内側に小礫～拳大泥岩含む, 締まりきわめて強く、版築された可能性あり(土塁または築地状の遺構か)
40. 暗褐色粘質土 締まりきわめて強く、炭・泥岩の粒大量に混じる(土塁または築地状の遺構か)
41. 泥岩層 締まりの強い茶褐色粘質土に大型泥岩が詰まる
42. 茶褐色粘質土 41に比べ締まりが弱い粘性は強い, 数cm～拳大泥岩を含み、土器片と炭、鉄分が多い
 - 42'. 褐色砂泥層 鉄分で固く締まっている, 炭・暗褐色粘土混入
43. 暗褐色粘質土 泥岩・凝灰岩小礫の層で、炭・土器片含む
44. 43と同じ

5面

4面下17～20cmのところにある締まりの強い層で、卵大泥岩塊を多く含む。上面が硬化していたため5面とした。標高は22.38～22.45mにあり、全体的に東から西に傾斜している。層厚は8～13cm。西半部に溝3の掘り方が検出される。

検出遺構：土坑1

6面

5面下10～15cmにある黒褐色粘質土・青灰色砂質土上面の生活面でいずれも強く締まっており、遺物数点が同一層上に乗っていることが確認できたので、6面とした。標高22.12～22.35m、層厚11～22cm。東から西に向かうのと、北に向かうのと二方向になだらかに落ちているが、全体的には下にある岩盤の傾斜を反映して、東から西に傾斜している。調査区内では顕著な遺構は検出されなかった。

検出遺構：なし

7面

岩盤上の堆積土上面に形成された面。7面下8～20cm下にある。北壁にかかる形で差し渡し48cmの大型凝灰岩が岩盤上にあり、その東側に堆積した締まりの強い灰青色砂質土層の上面が硬化しているため7面とした。標高21.98～22.14 m、層厚5～8cm。西半部は岩盤の落ち込みとなる。凝灰岩を除けば、それ以外に遺構らしきものは検出されなかった。

検出遺構：凝灰岩置き石1

8面

岩盤面。7面の時代にすでに西半部に岩盤が現れていたが、東半部の岩盤直上には7面構成土が載っていた。直上にある厚さ5～8cmの7面構成土を除くと全面岩盤になる。この上面には踏まれてきたような硬化面が認められたので、8面とした。面の標高は21.86～22.07 m。7面に記した凝灰岩はこの面の直上に置かれている。

検出遺構：小穴1

第2節 遺構各説

1. 1面 (図4)

1面出土遺物 (図4)

土師器皿口クロ種小型(1)・同大型(2～5) 特記事項・年代：土師器器壁はおおむね外反傾向にあり、14世紀末頃遺構に始まる直線化が完成して以降のものとみられる。一方で15世紀後半以降に顕著になる厚手化には至っていない。すなわち14世紀末～15世紀前半か。

土坑1 (図4)

位置：X - 75 203.57 ～ - 75 204.51 Y - 23 606.18 ～ - 23 607.22 平面形：不整円形または隅丸方形
断面形：皿型 規模：100cm×94cm×深さ25cm 主軸方位：N - 65° - W 重複関係：小穴を切る 出土遺物：土師器片 (図化不能片)

土坑2 (図4)

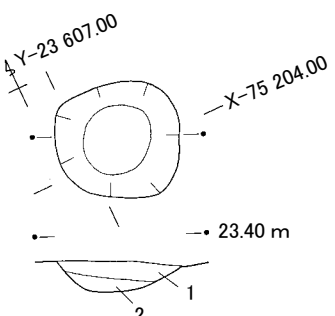
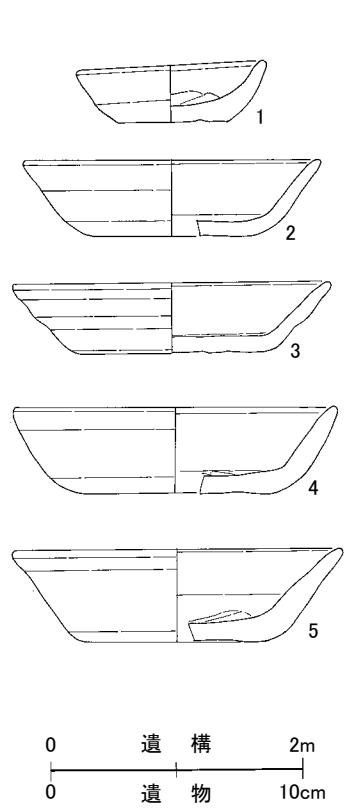
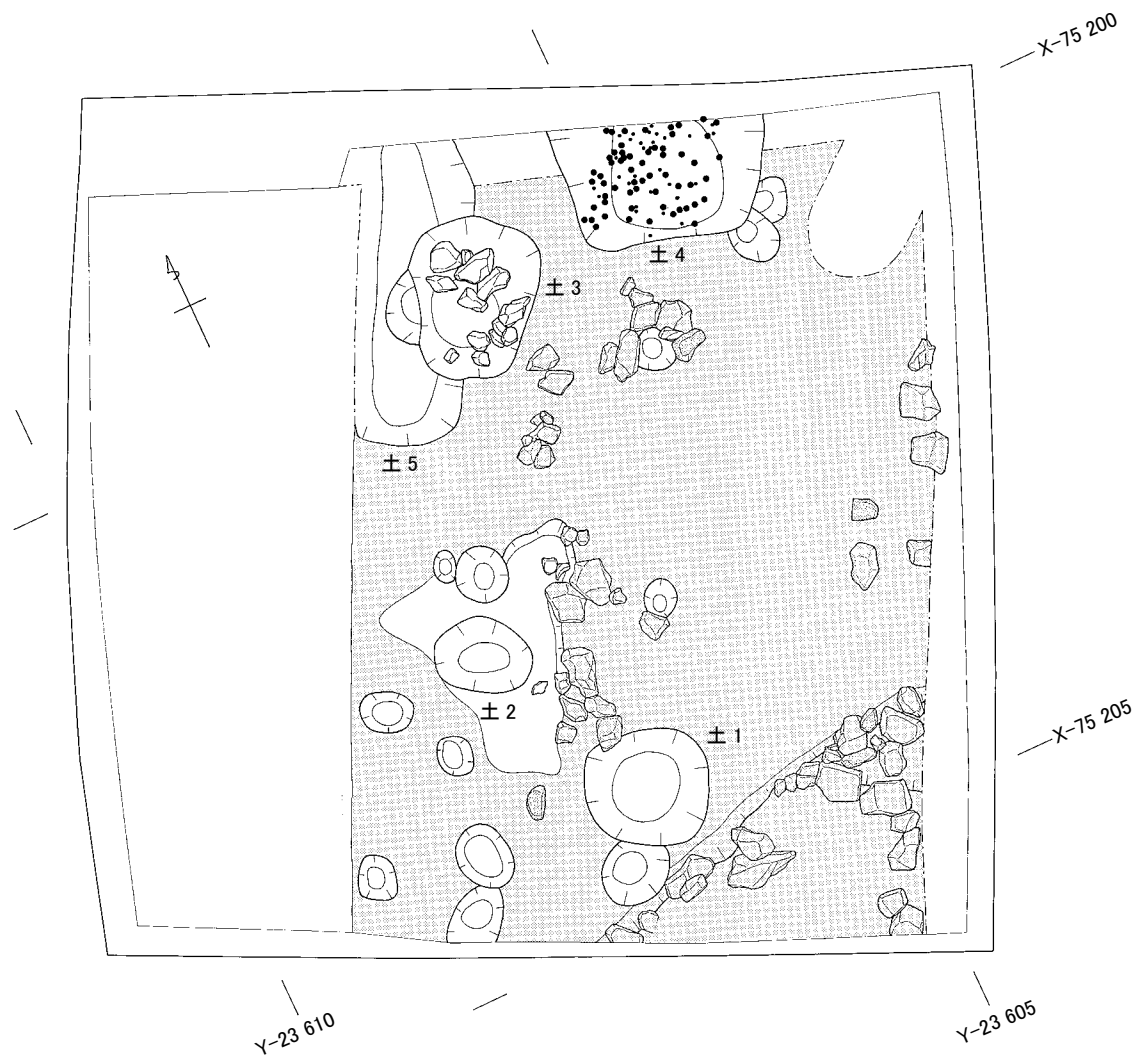
位置：X - 75 202.16 ～ - 75 202.82 Y - 23 607.10 ～ - 23 607.87 平面形：不整円形または楕円形 断面形：皿形 規模：70cm×60cm×深さ19cm 主軸方位：N - 59° - W 重複関係：なし 出土遺物：土師器 (図化不能片)

土坑3 (図4)

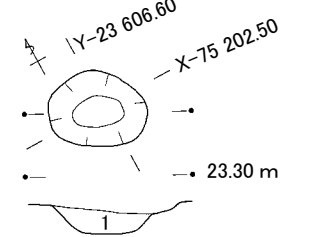
位置：X - 75 199.24 ～ - 75 200.52 Y - 23 605.68 ～ - 23 607.07 平面形：不整隅丸長方形 断面形：皿形 規模：128cm×113cm×深さ20cm 主軸方位：N - 28° - E 重複関係：土坑5を切る 出土遺物：土師器皿口クロ種小型(6)・瀬戸入子(7)・瓦器香炉(8) 特記事項・年代：拳大～半人頭大泥岩が多く詰まる。遺物からみた年代は、7に鎌倉時代後期の様相が認められるが、8に14世紀後半以降の年代観が与えられるため、全体的には14世紀末～15世紀前半としたい。

土坑4 (図5・6)

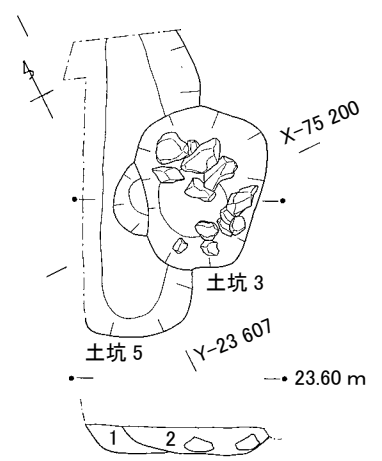
位置：X - (75 198.97) ～ - (75 200.29) Y - (23 603.85) ～ - (23 605.33) 平面形：不整隅丸(長)方形 断面形：皿形 規模：(175)cm×(145)cm×深さ(35)cm 主軸方位：N - 13° - E 重複関係：小穴2口を切る 出土遺物：【上層】土師器皿口クロ種小型(1～27)・同大型(28～54)【中層】土師器皿口クロ種小型(図6-55～60)・同中型(61～64)・同大型(65～71)【下層】土師器皿口クロ種小型(72～78)・同種大型(79～87) 特記事項・年代：大量の土師器が含まれた土坑。一括廃棄の可能性が高い。



- 1. 茶褐色弱粘質土
数cm大までの泥岩片・炭化物・土器片含む
 - 2. 暗茶褐色弱粘質土
数cm大までの泥岩片・炭化物・土器片含む
- 土坑 1



- 1. 茶褐色弱粘質土
数cm大までの泥岩片・炭化物・土器片含む
- 土坑 2



- 1. 茶褐色弱粘質土
数cm大までの泥岩片・炭化物・土器片含む (土坑5)
- 2. 茶褐色弱粘質土
人頭大までの泥岩片・炭化物・土器片含む (土坑3)

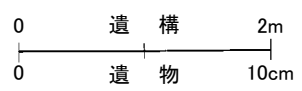
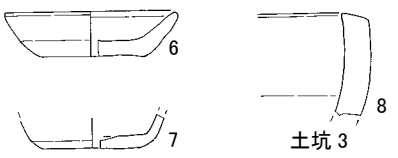


図 4 1面, 同遺構、同出土遺物

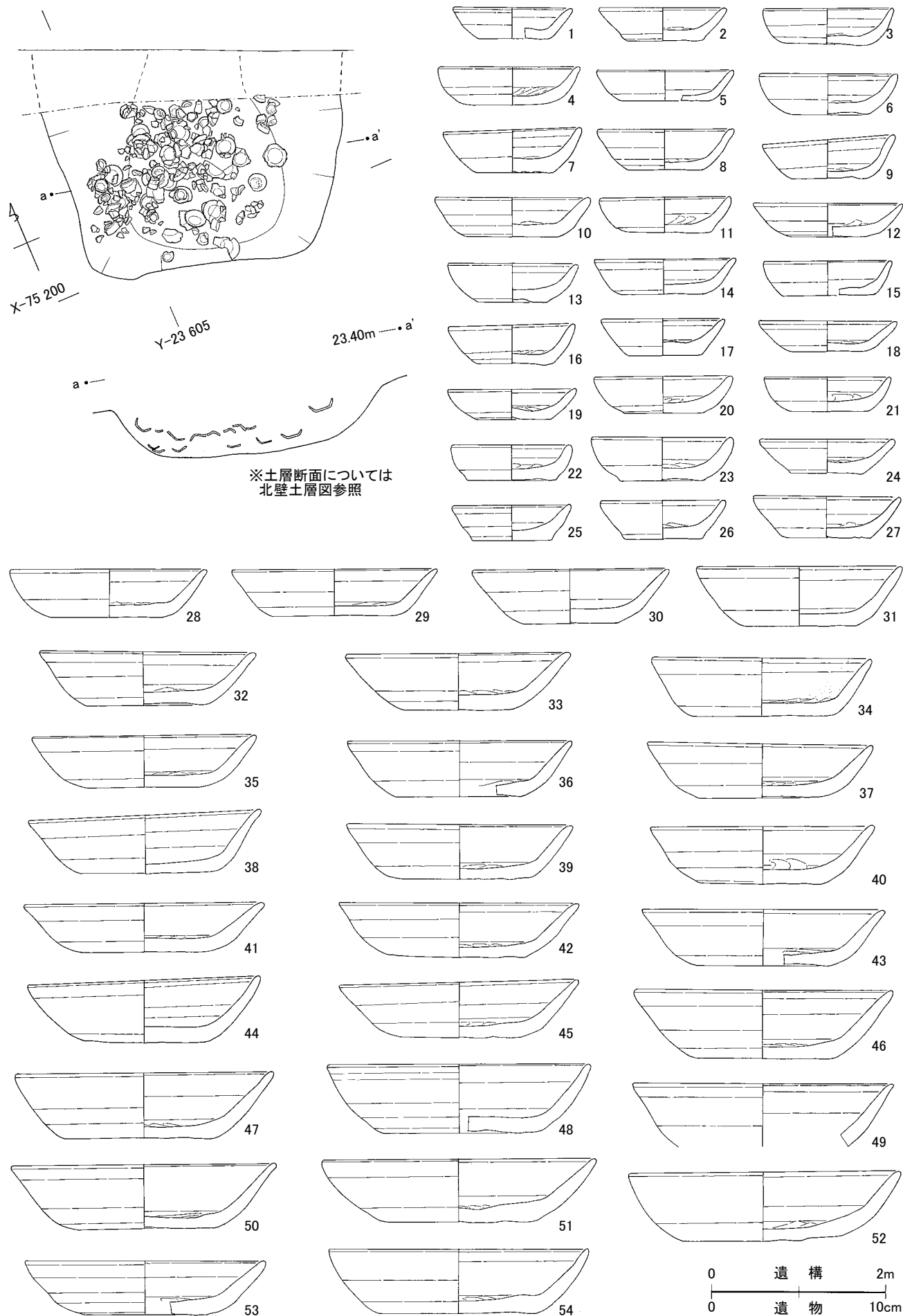


図5 土坑4, 同出土遺物

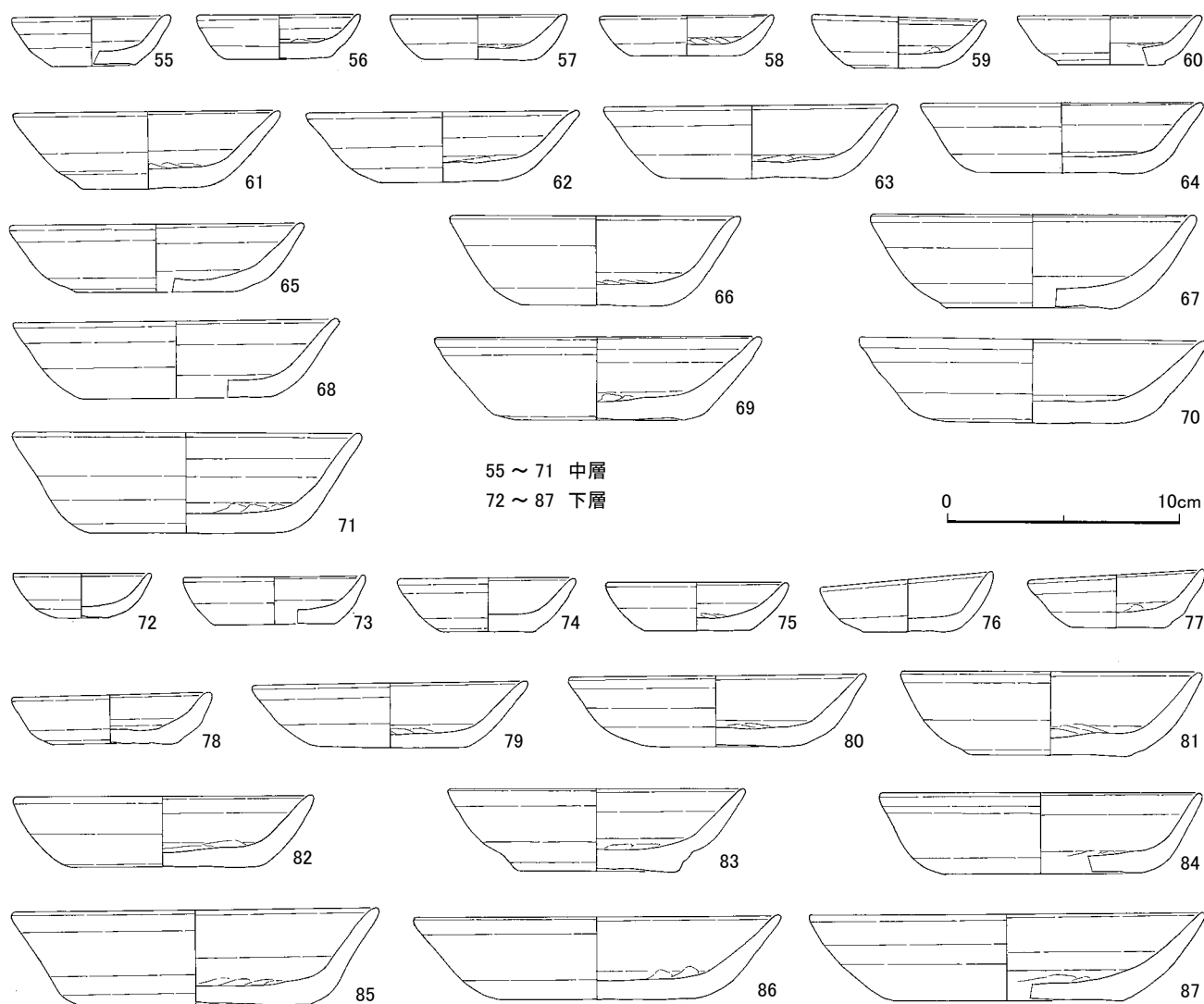


図6 土坑4出土遺物(2)

年代は14世紀末～15世紀前半か。

土坑5(図4)

位置：X - (75 198.49) ~ - (75 200.72) Y - 23 605.96 ~ - (23 607.12) 平面形：隅丸長方形 断面形：皿形 規模：238cm×126cm(北壁土層断面からの復元値)×深さ50cm(同前) 主軸方位：N - 25° - E
 重複関係：土坑3に切られる 出土遺物：土師器(図化不能片) 特記事項：下層の溝3が埋没した後に掘られている。性格は不明。

2.1b面(図7)

1b面出土遺物(図7)

土師器皿ロクロ種小型(1・2)・同種中型(3)・同種大型(4・5) 特記事項・年代：小型種は薄手を脱し、中大型種は直線的ないし僅かに外反する器壁を持つ。14世紀末～15世紀初頭辺に位置付けられよう。

溝1(図7)

位置：X - (75 198.67) ~ - (75 203.10) Y - (23 606.00) ~ - (23 607.96) 平面形：溝状 断面形：皿形 規模：432cm×90cm×深さ27cm 主軸方位：N - 13.5° - E 重複関係：南端で小穴と切り合うが新旧不明 出土遺物：土師器皿ロクロ種大型(6) 特記事項・年代：溝状だが南端で立ち上がり、その位置に

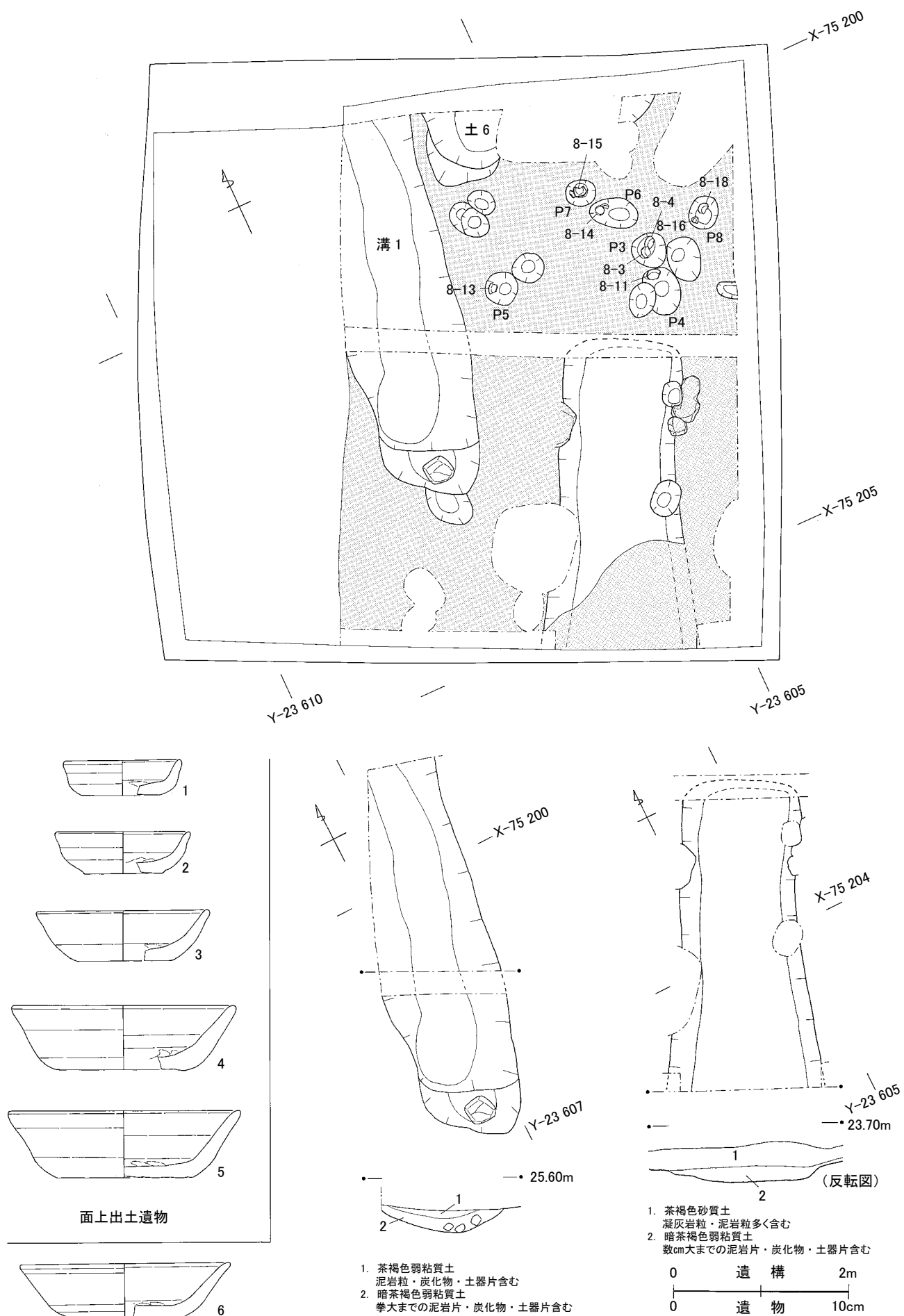


図7 1b面, 同遺構, 同出土遺物

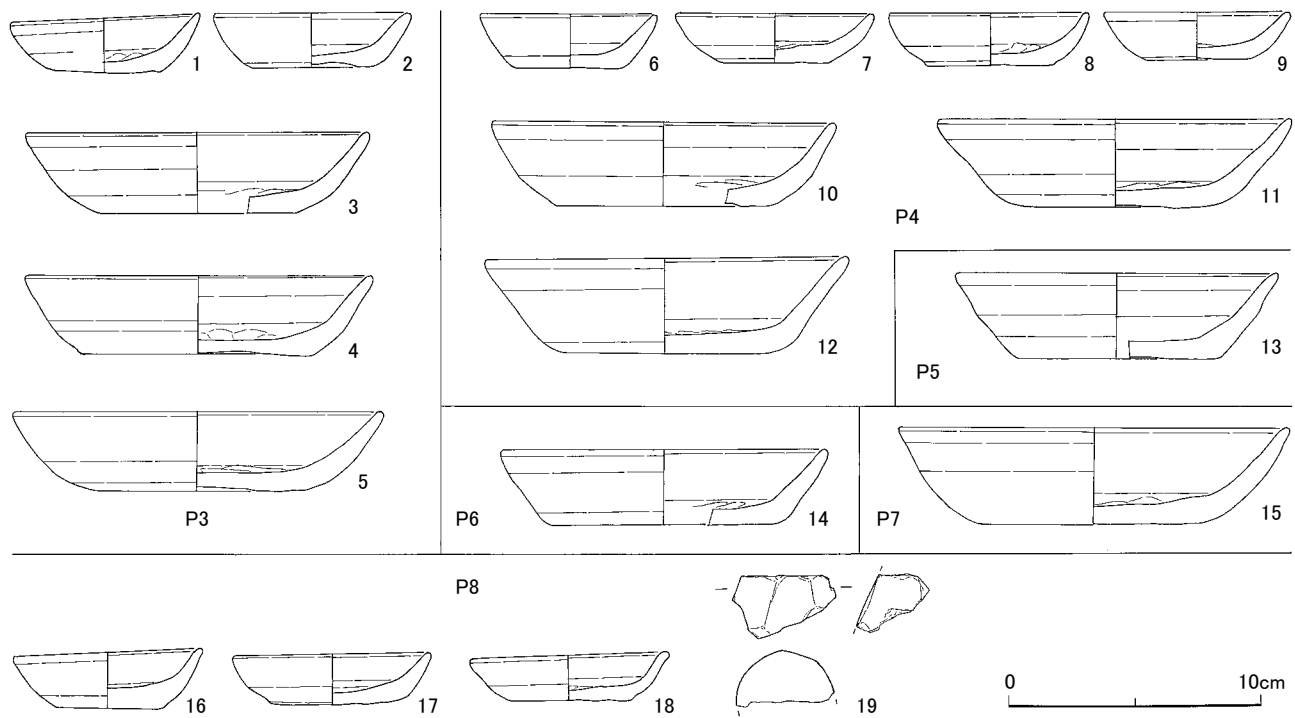


図8 1b面小穴出土遺物

人頭よりも大きめの平たい凝灰岩（「鎌倉石」）がある。溝3上面の窪みか。図化し得た1点の土師器は上述の面出土遺物とほぼ同時期、すなわち14世紀末～15世紀初頭に属する。

溝状遺構（図7）

位置：X - 75 202.07 ~ - (75 205.80) Y - 23 604.36 ~ - (23 606.18) 平面形：長方形または溝状 断面形：浅皿形 規模：(354)cm × (177)cm × 深さ 17cm 主軸方位：N - 25° - E 重複関係：小穴2口に切られる
出土遺物：土師器（図化不能片） 特記事項：積み増しで改修された面の下層側に属する。性格不明。

小穴群（図8）

出土遺物：【P.3】土師器皿ロクロ種小型（1・2）・同種大型（3～5）【P.4】土師器皿ロクロ種小型（6～9）・同種大型（10～12）【P.5】土師器皿ロクロ種大型（13）【P.6】土師器皿ロクロ種大型（14）【P.7】土師器皿ロクロ種大型（15）【P.8】土師器皿ロクロ種小型（16～18）・土師質獣脚（19） 特記事項・年代：器壁を見ると、小型製品では内湾型のものが多いが、大型品においてはすでに直線化は始まっており、大きく14世紀第4四半期としたい。

3.2面（図9）

溝2

位置：X - (75 198.75) ~ - (75 204.72) Y - (23 606.04) ~ - (23 609.60) 断面形：逆台形 規模：最大幅 275cm × 深さ 78cm 流下方向：北→南 主軸方位：N - 17° - E 重複関係：なし 出土遺物（図9）：土師器皿ロクロ種小型（1～3）・同種中型（4）・瓦器火鉢（5）・瀬戸入子（6）・瀬戸鉄釉碗（7）・瀬戸四耳壺（8） 特記事項・年代：後述の溝3の上部にあり、断面観察から掘り直しと判断できる。この段階では溝3のような石積みは失われている。遺物の年代は、内湾形の土師器を主体としていることから、14世紀代、南北朝期に収まるものとみてよい。鎌倉時代後期～末期に属するものが含まれているもの（6・8）、そこまでの遡行は前後層の年代から無理であろう。すなわち14世紀でも後半中心になる。

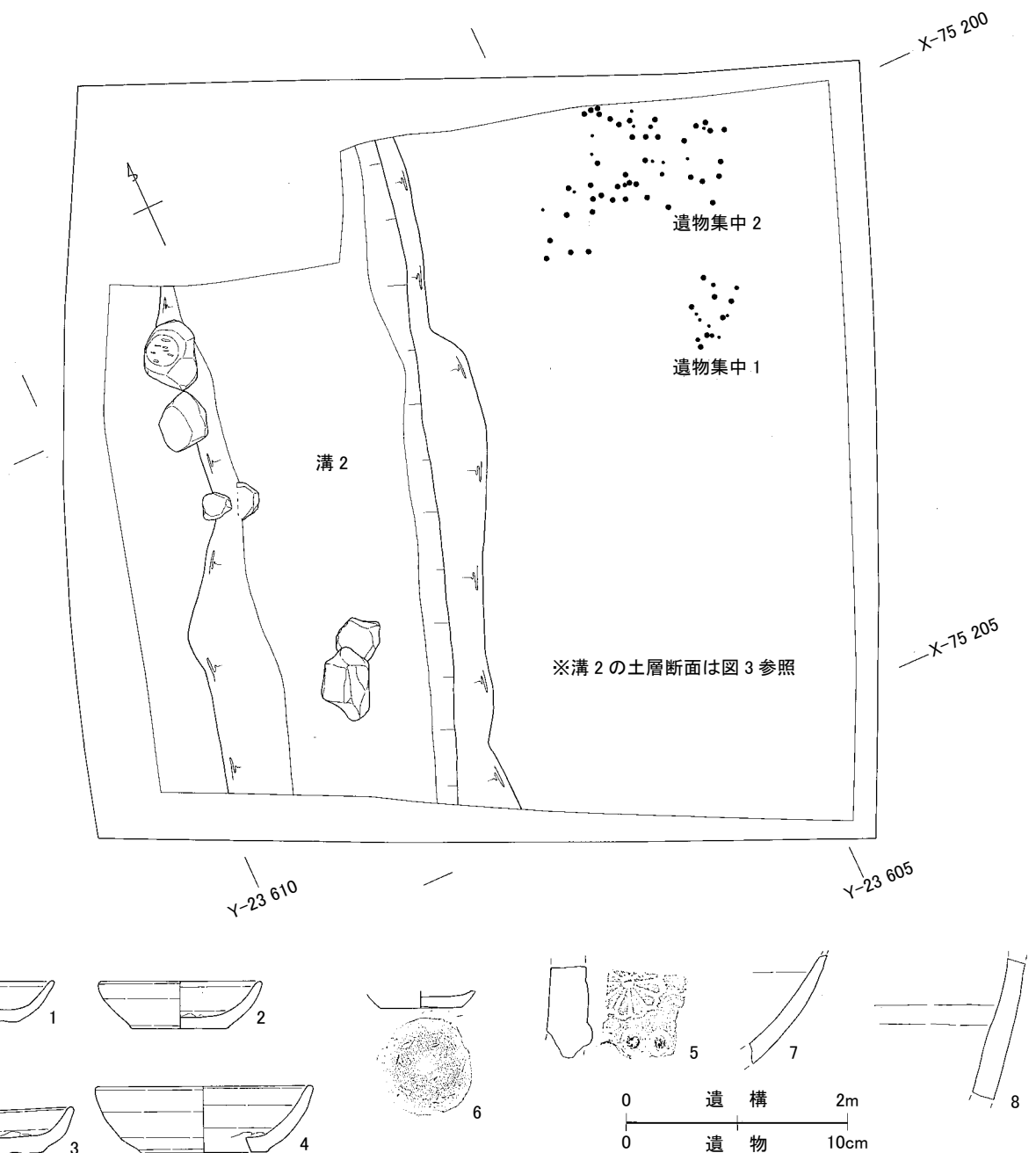


図 9 2面, 同溝 2 出土遺物

遺物集中 1 (図 10)

位置：X - (75 201.94) ~ - (75 202.58) Y - (23 604.20) ~ - (23 604.78) 平面形：不整形 規模：(70) cm × (44) cm 主軸方位：不明 重複関係：遺物集中 2 よりも新しい 出土遺物 (図 11)：土師器皿ロクロ種小型 (1 ~ 6)・同中型 (7 ~ 10)・同大型 (11 ~ 16) 特記事項・年代：小型土師器の器壁は内湾系のものが主体を占め、中・大型は直線状から外反傾向に移行する段階に来ている。年代的には 14 世紀後半を中心として 15 世紀初頭まで含むとみてよい。

遺物集中 2 (図 10)

位置：X - (75 200.16) ~ - (75 201.45) Y - (23 603.69) ~ - (23 605.75) 平面形：不整形 規模：(220) cm × (127) cm 主軸方位：不明 重複関係：遺物集中 1 より新しい 出土遺物 (図 11)：土師器皿ロク

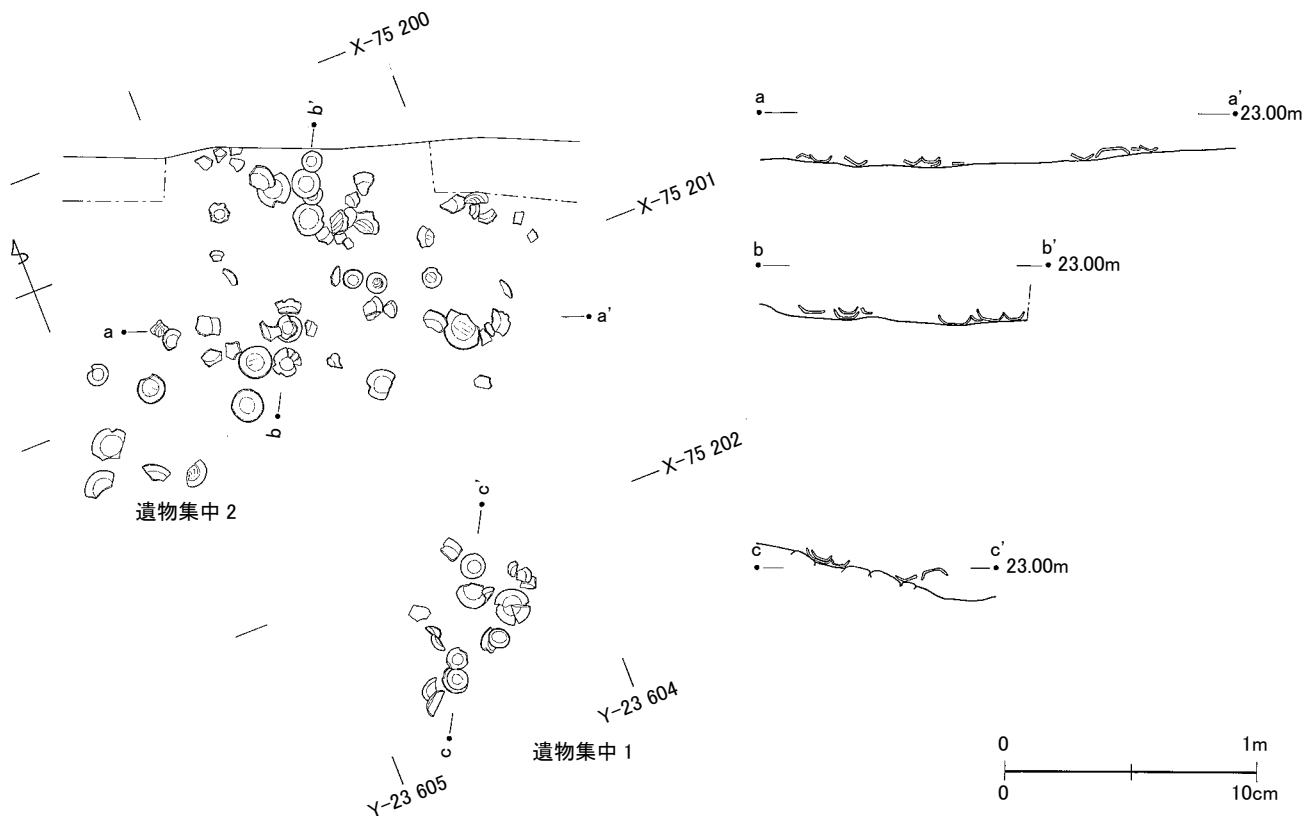


図10 2面遺物集中1・2

口種小型 (17～25)・同中型 (26～31)・同大型 (32～44) 特記事項・年代：小型の土師器は内湾系が主体を占めるなかで、直線的な器壁を持つものが含まれ、中・大型は外反するものが主流となっている。年代的には遺物集中2よりもかすかに後代の要素が認められる。すなわち14世紀第4四半期～15世紀初頭前後に位置付けられる。

遺物集中1・2出土遺物 (図11)

二つの隣接する集中出土の間にも土師器皿は出土しており、いずれに帰属するか不明なため、あわせて呈示する。

土師器皿口種小型 (45・46・49)・同種大型 (47・48) 特記事項・年代：全体に外反要素が強く14世紀末～15世紀前半に位置付けられよう。

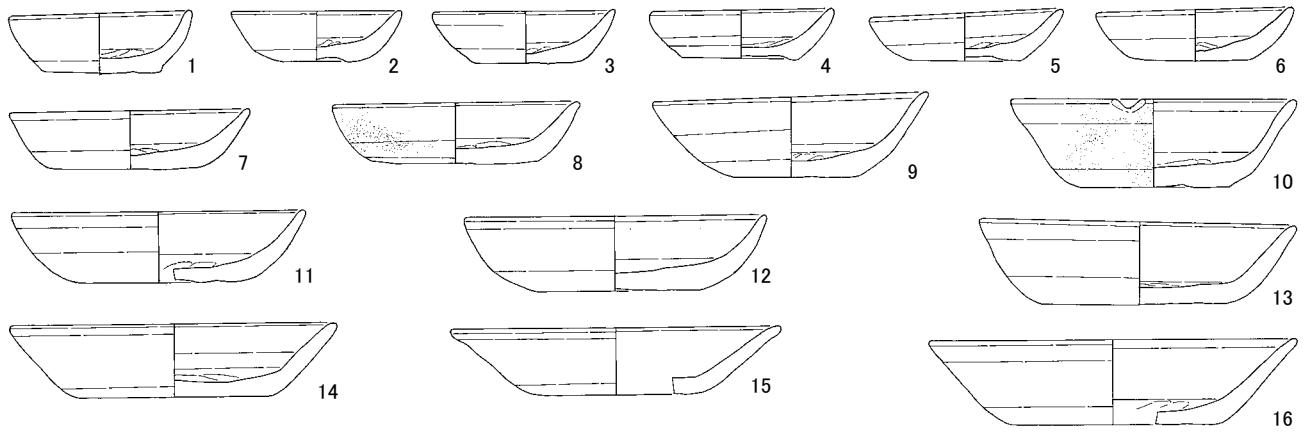
遺物集中1・2下部出土遺物 (図11)

1および2を取り上げたところ、薄い間層を挟み新たに何点かがまとまって出たため、分離して呈示する。

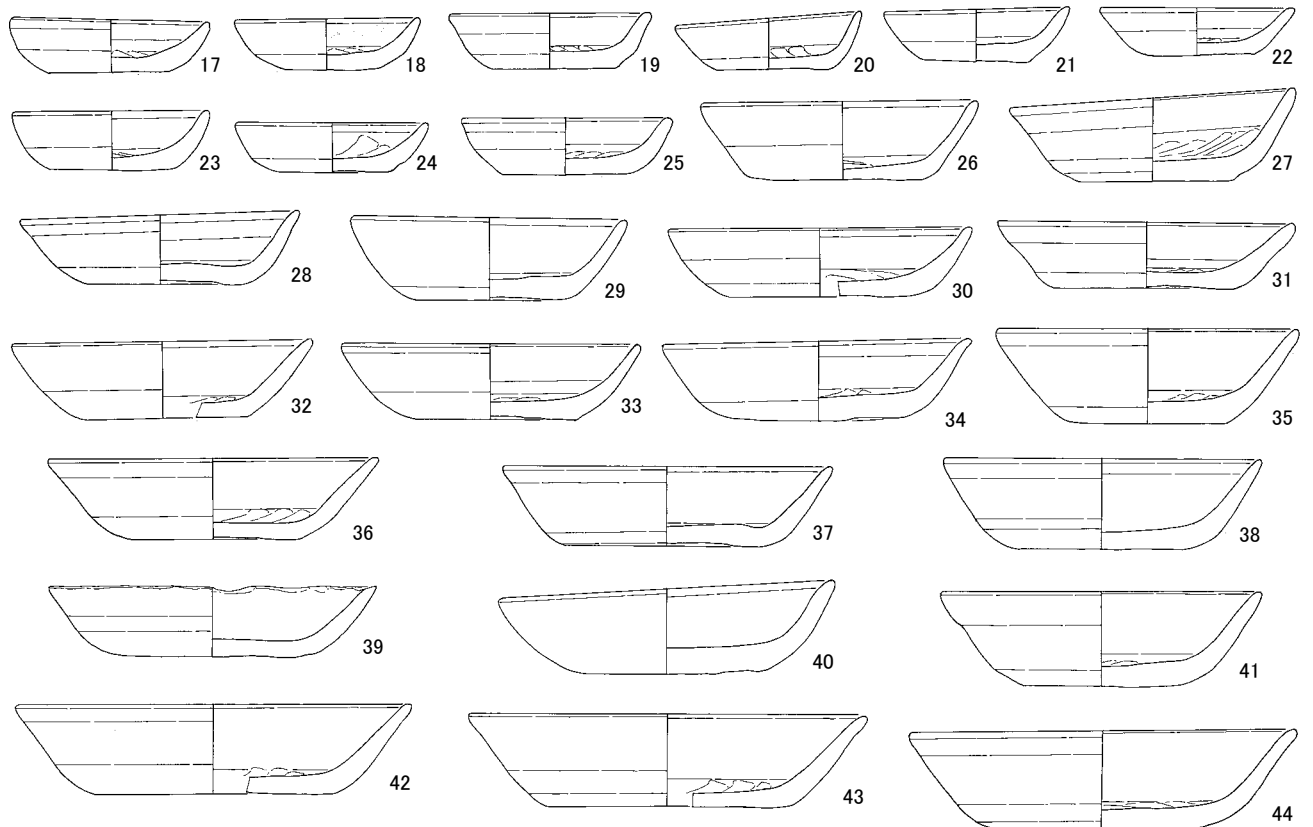
土師器皿口種小型 (50～53)・同種中型 (54)・同種大型 (55～56)・瓦器火鉢 (57) 特記事項・年代：全体的に上述の遺物集中1・2と変わらず、14世紀末～15世紀前半に属しよう。

西壁大型泥岩層 (図3 土層番号39～41)

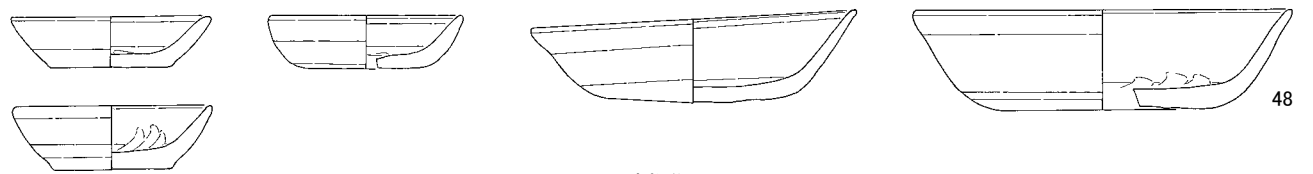
西壁土層断面に現われた泥岩を積み上げた遺構で、前代溝3に乗る形で存在していたとみられるが、同遺構の泥岩・凝灰岩の裏込めにまぎれ、調査区内には立体的な遺構としては確認しなかった。したがって溝3を掘り下げた段階での西壁面観察のみの所見となる。半人頭大～人頭大の泥岩と凝灰岩を、暗茶褐色～暗褐色の粘質土とともに版築したような硬さがある。断面では築地もしくは土塁様に見えるた



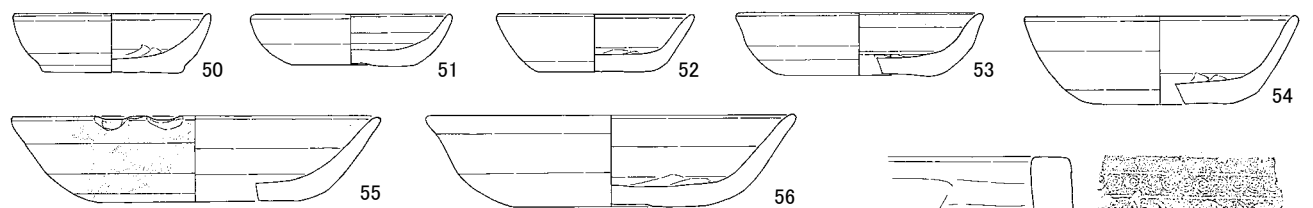
遺物集中 1



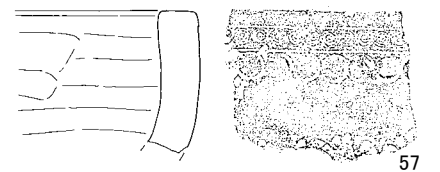
遺物集中 2



遺物集中 1・2



遺物集中 1・2 下部



0 10cm

図 11 遺物集中 1・2 出土遺物

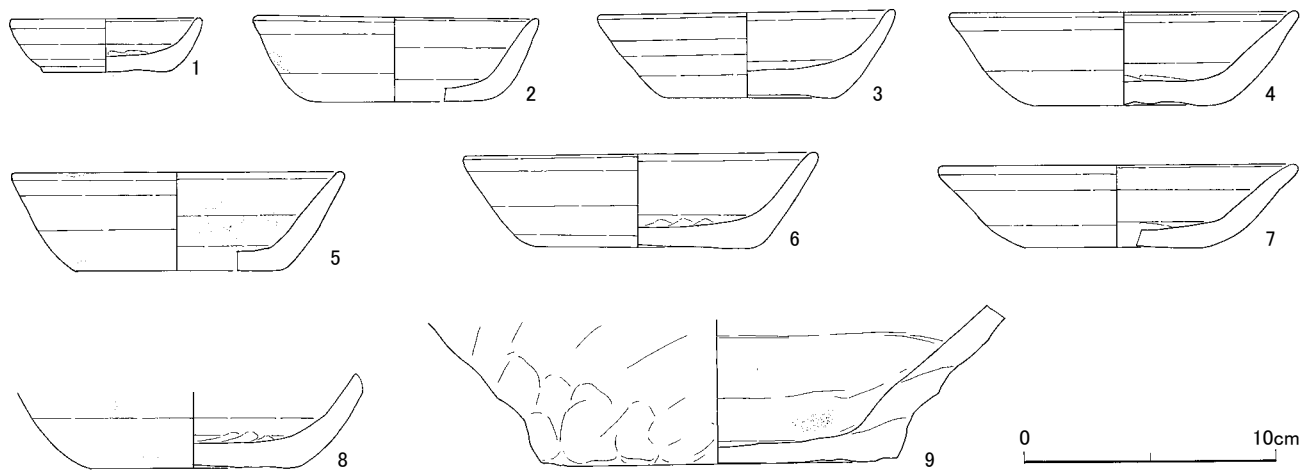


図 12 II区大型泥岩層出土遺物

め、ここに抽出しておいた。

規模：上部幅 80cm・下部幅 150cm・高さ 85cm 出土遺物（図 12）：土師器皿ロクロ種小型（1）・土師器皿ロクロ種大型（2～8）・常滑甕（9） 特記事項・年代：土師器は外反傾向のものが多く、14世紀末～15世紀初頭と考えたい。

4.3面

溝3（図 13）

位置（掘方含む）：X - (75 198.77) ~ - (75 204.70) Y - (23 605.30) ~ - (23 610.46) 断面形：箱形 規模：【掘方】上端幅 390cm以上（中央部）×深さ 135cm（中央部）～145cm（南壁際）【石組内】上端幅 153cm（北壁際）～152cm（南壁際）・下端幅 130cm（北壁際）～143cm（南壁際）×深さ（130）cm 流下方向：北→南 主軸方位：N - 15° - E 構造：岩盤を掘りこんだ逆台形の掘り方に切り石を積んで溝壁とする。切石は「鎌倉石」と呼ばれる角礫凝灰岩で、幅 30cm～50cm、長さ 60cm前後から最大 95cm（東岸最下段の南壁から2つめ）に及ぶ大きなものが使われている。岩盤から割り取ったあと、表面を簡単に鑿状の工具で整形した痕がある。上半部を溝2に削り取られているので石積みの段数は不明だが、現状で最大4段（南壁際）が残る。積み方は基本的に長手面を水流側に出した整層積みで、東壁北半部では小口積みとなっている。この部分は積み直しとみられる。重複関係：なし 出土遺物（図 14）：【溝中】土師器皿ロクロ種小型（1）・同種大型（2～4）・白色系土師器皿手づくね種中型（5）・瀬戸脚付盤（6）・瓦器火鉢（7・8）・土師質脚（9）・常滑片口鉢Ⅱ類（10～12・17）・常滑甕（13～16・18～20）・常滑甕転用摩耗陶片（21・22）・備前すり鉢（23・24）・瀬戸鉄釉碗（25）・瀬戸折縁深皿（26）・瀬戸卸皿（27）・白磁口はげ碗（28）・白磁碗（29）・滑石鍋（30）・砥石中砥（31）・漆器皿（32）・加工骨（33）・鉄釘（34）【裏込め】瀬戸緑釉小皿（35） 特記事項・年代：構築方法で見れば、長手面を出す整層積みであること、岩盤を削って掘り方を作ること、などの点で市内扇ガ谷の「清凉寺跡」で発見された石組溝（「遺構 8b」）によく似ている（伊丹まどか 2012「清凉寺跡（No. 183）扇ガ谷四丁目 556 番 4 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』28 第 2 分冊）。遺物からみた年代は、13世紀後半（1～5・11～14・28・29・32）に始まり、13世紀末～14世紀前半（23・24・27）を経て14世紀後半（6・25・26）まで1世紀ほどにわたる。大楽寺は京都泉涌寺六世願行房憲静の高弟公珍が開いたというから13世紀後半、鎌倉時代後期の開創と推測される。該址の始まりが13世紀後半であるとする符合するといえよう。

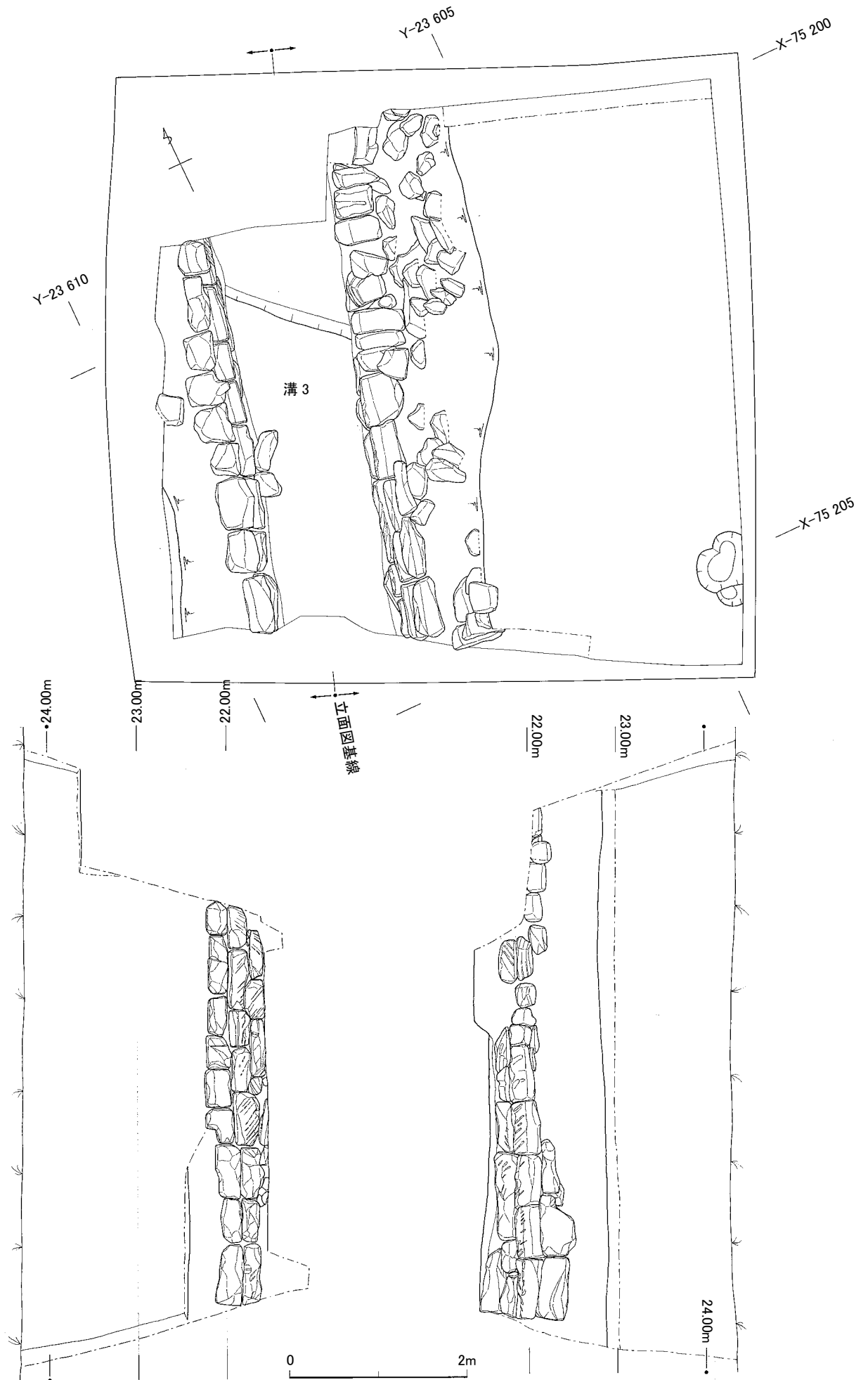


图 13 3面, 溝 3 立面图

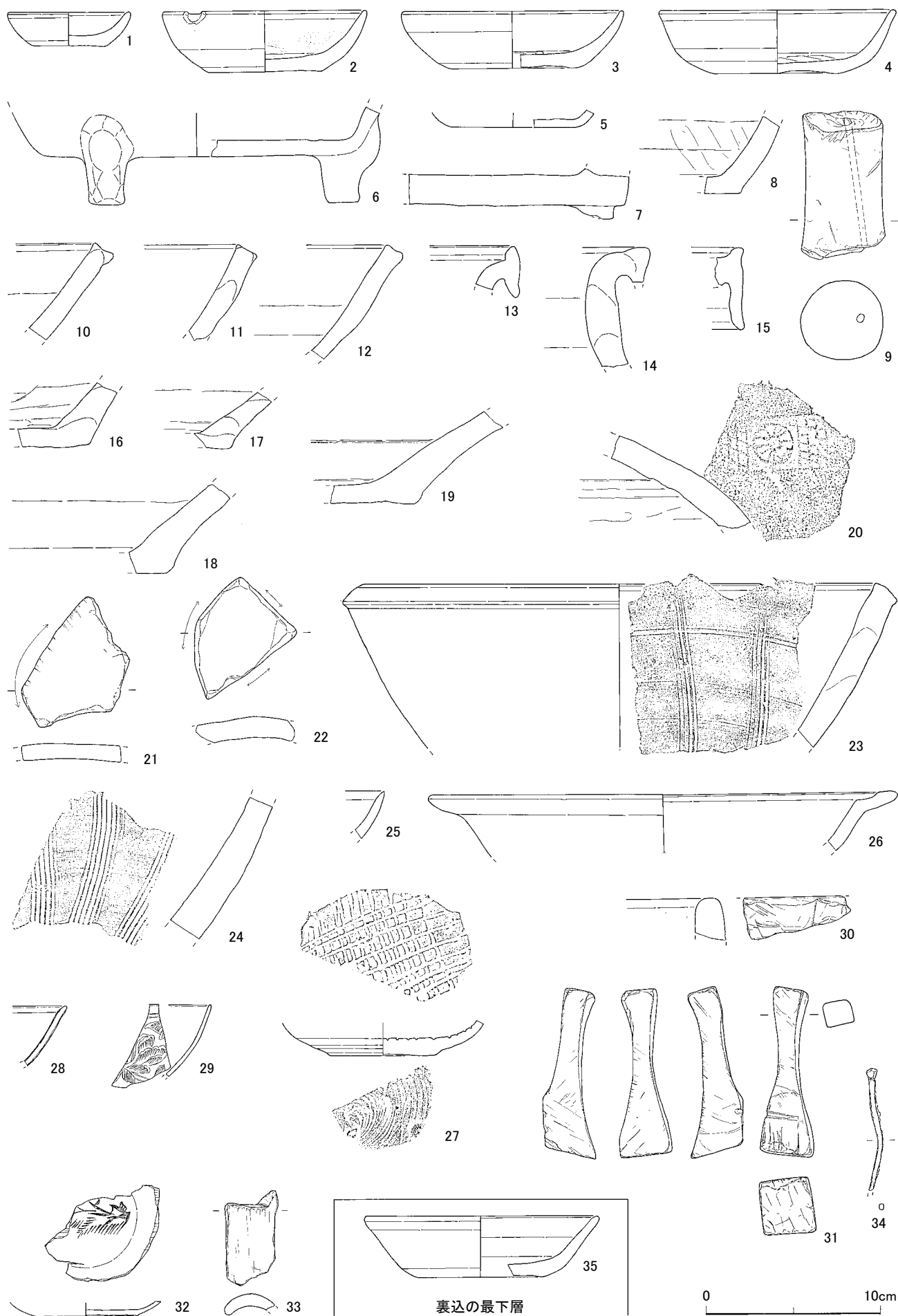


図 14 溝 3 出土遺物

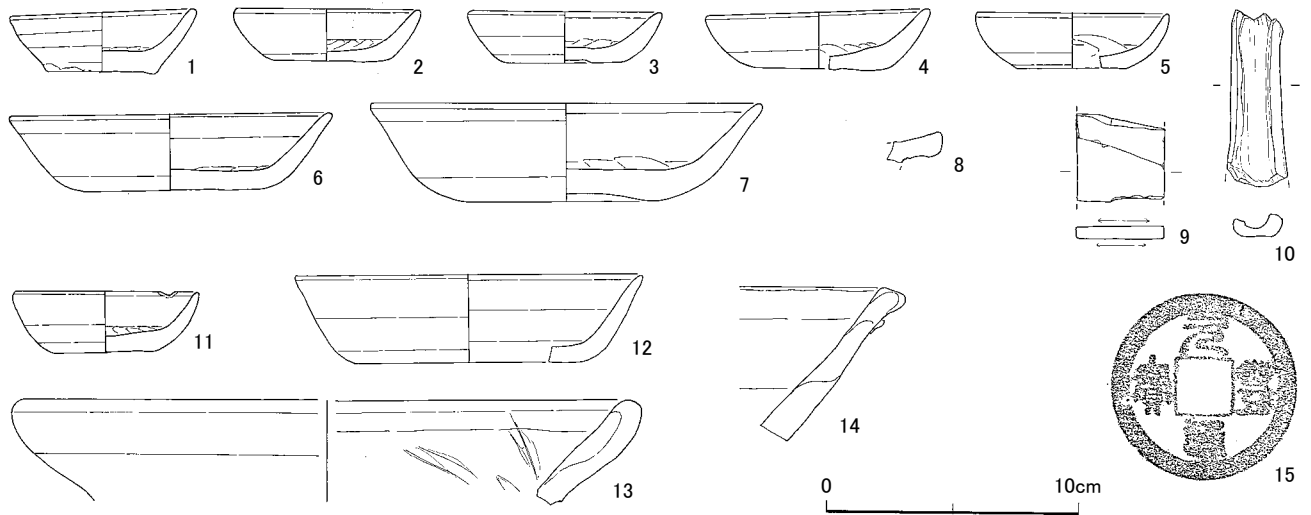


図 15 3面出土遺物

3面出土遺物（図 15）

【3面上包含層】土師器皿ロクロ種小型（1～5）・同種大型（6・7）・瀬戸折縁深皿（8）・砥石仕上砥（9）・鹿角製品（10）【3面】土師器皿ロクロ種小型（11）・土師器皿ロクロ種大型（12）・内耳土鍋（13）・常滑片口鉢Ⅱ類（14）・元豊通宝（15）年代：おおむね14世紀代を主体とするので、溝3よりも下ることになる。おそらくは溝3構築後も長くこの面が使われていたのだろう。13は管見の限りで鎌倉市内でまだ5点ほどの出土例にとどまる。

5. 4面

土坑6（図 16）

位置：X - (75 201.11) ～ - (75 202.53) Y - (23 605.10) ～ - (23 606.21) 断面形：箱形 幅 120cm × 深さ 29cm 主軸方位：N - 71° - W 重複関係：溝3に切られる 出土遺物（図 16）：土師器皿ロクロ種小型（3）・土師器皿ロクロ種中型（4～7）・土師器皿ロクロ種大型（8～14）・元祐通宝（15）特記事項・年代：発掘時に「土坑」とはしたが、整理時の検討から溝3に直交する溝とみられる。ただし遺物表記などの混乱を避けるため名称変更はしていない。年代は13世紀後半。

溝4（図 17）

溝3の項参照。 出土遺物（図 17）：土師器皿ロクロ種小型（1～4）・同中型（5）・同大型（6）・常滑片口鉢Ⅱ類（7）・白磁口はげ皿（8）・青白磁瓶子（9）・砥石仕上砥（10）・元豊通宝（11）特記事項・年代：3面溝3掘方。図化した土師器はすべて内湾型で13世紀後半～14世紀前半を示す。貿易陶磁（8・9）はほぼ13世紀後半に収まる。該址は3面溝3と同時期の13世紀後半～14世紀第1四半期頃とみたい。

4面上出土遺物（図 16）

土師器皿ロクロ種大型（1）・青白磁水注（2）特記事項：1は口径の大きさに比して器壁が低く、稀少な例といえる。2も異例に小型。小壺の可能性もある。年代は13世紀後半。

北側平坦面出土遺物（図 16）

土師器皿ロクロ種大型（16・18～21）・白色系土師器皿ロクロ種大型（17）特記事項・年代：全体に14世紀後半～15世紀前半に帰属するが、とすると土坑6や3面溝3掘方よりも新しいことになる。遺構構築時と使用期間の違いであろう。

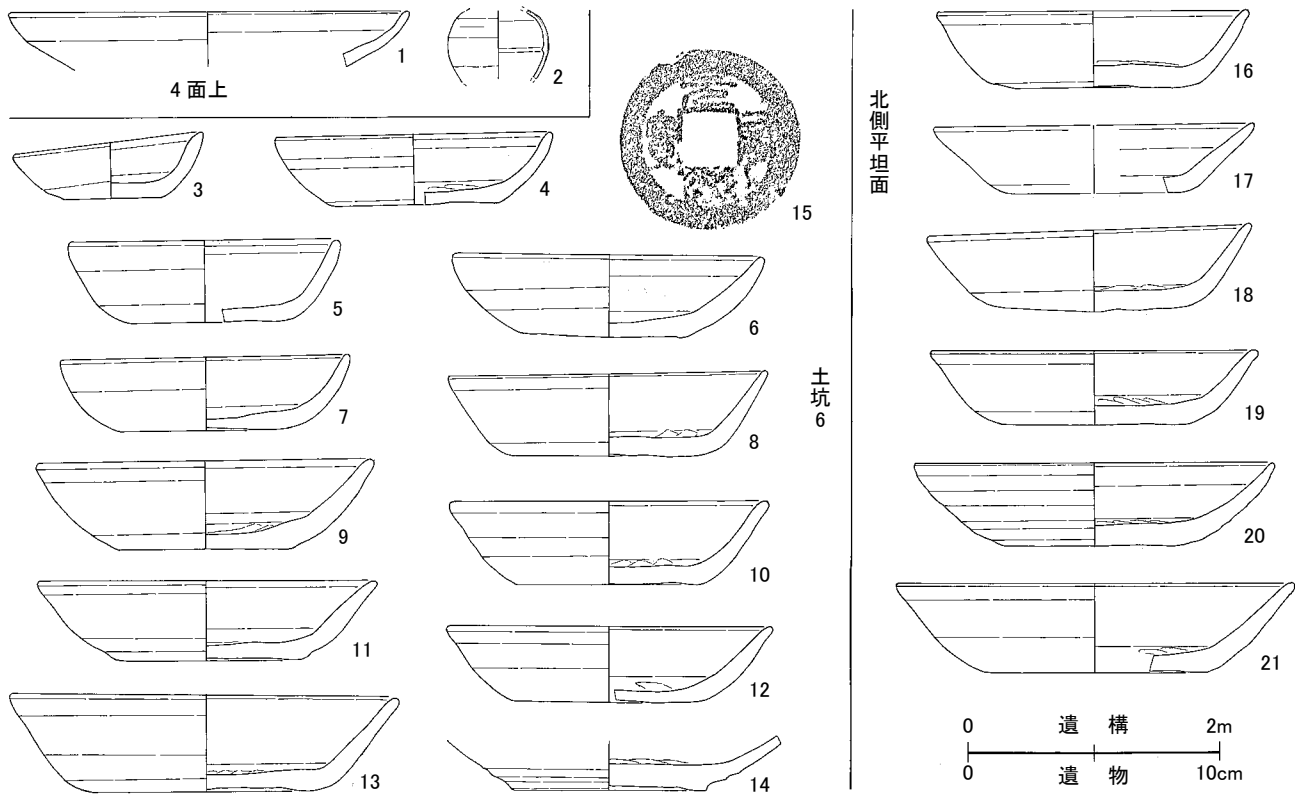
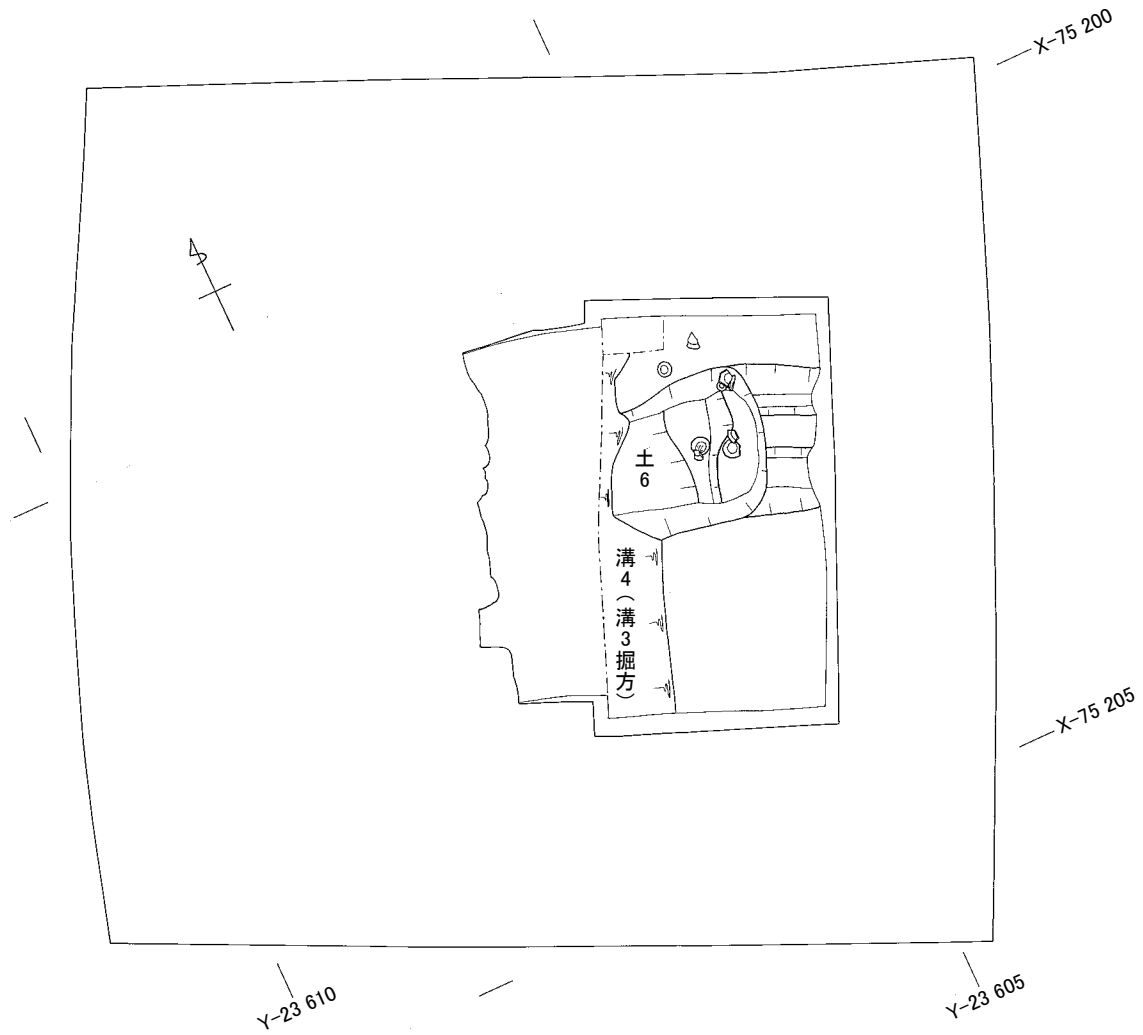


图 16 4 面, 同出土遺物

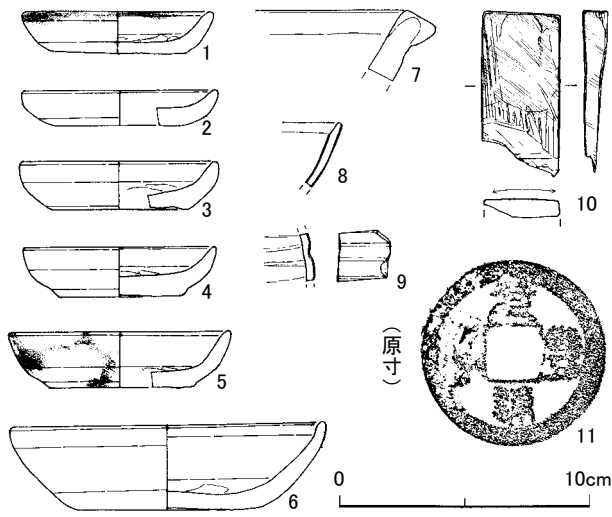


図17 溝4出土遺物

6.5面 (図18)

土坑7 (図3・18)

位置：X - (75 200.34) ~ - (75 202.08) Y - (23 605.06) ~ - (23 606.44) 平面形：隅丸長方形か
 断面形：箱形 規模：174cm × 105cm × 深さ 38cm 主
 軸方位：N - 10° - W 堆積土：図3 参照 重複関係：
 溝3 掘り方に切られる 出土遺物：土師器皿ロクロ種
 小型 (1) 特記事項・年代：図化した遺物は1のみだが、
 全体的には13世紀後半を示す。

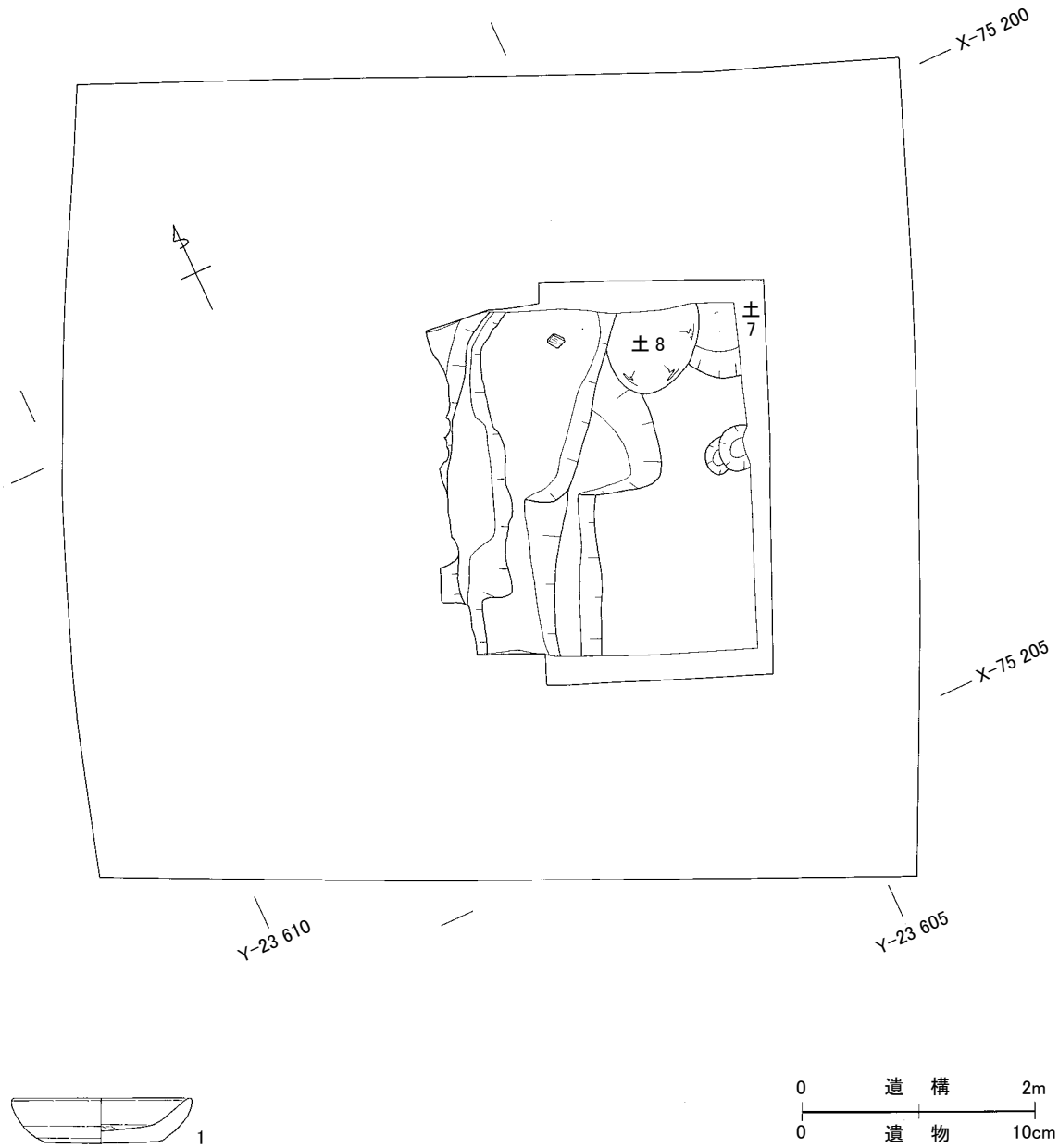


図18 5面, 同出土遺物

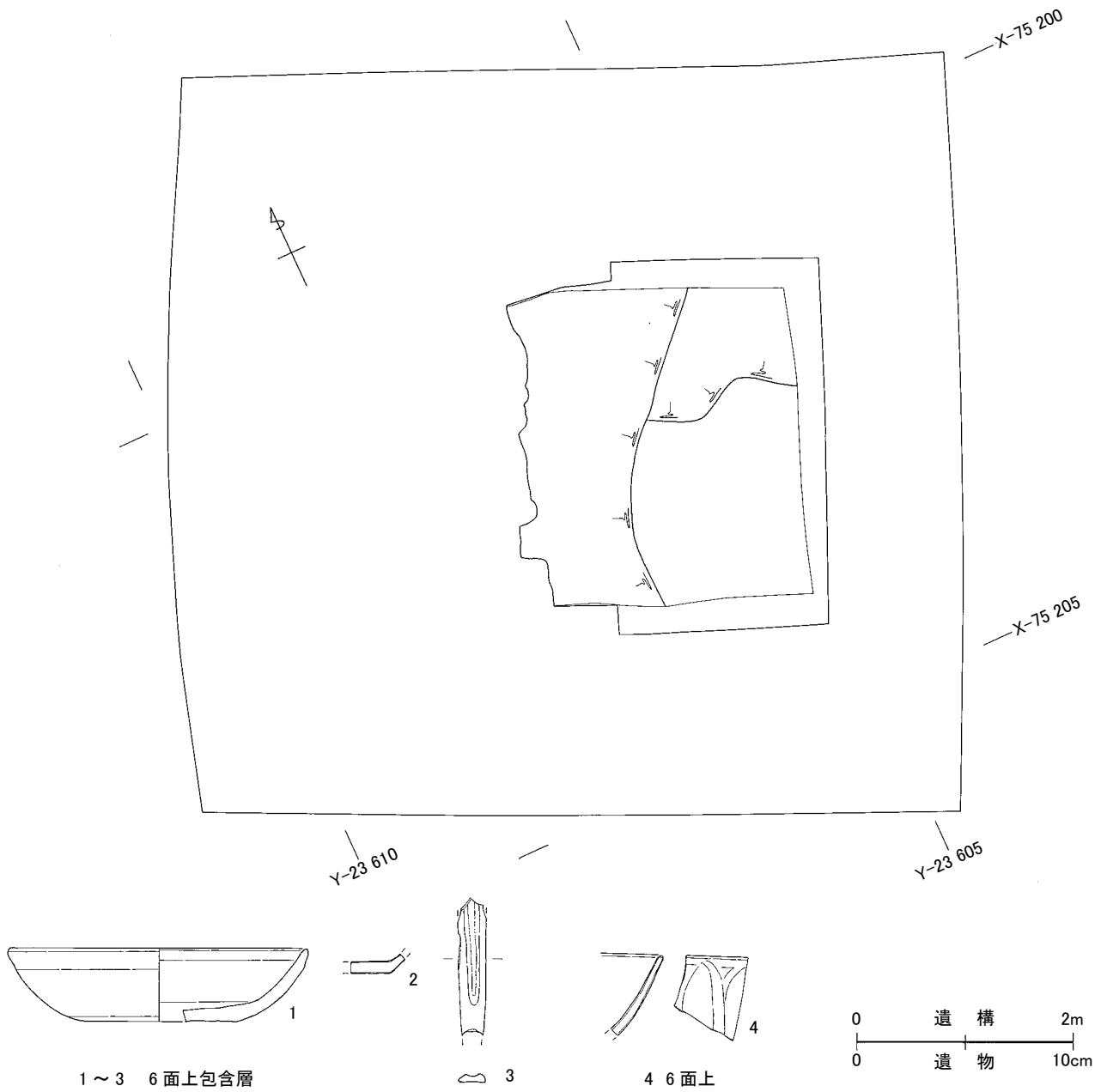


図 19 6面, 同出土遺物

7. 6面 (図 19)

出土遺物 (図 19)

【面上包含層】：土師器皿 R 種大型 (1)・白磁口はげ皿 (2)・骨製筭 (3) 特記事項・年代：1・2 は 13 世紀後半代に属する 【面上】：竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗 (4) 年代：13 世紀後半

8. 7面 (図 20)

凝灰岩置石遺構

位置：X - (23 604.58) ~ - 23 604.08 Y - (75 200.88) ~ - 75 201.32 平面形：不整形 断面形：長円形 規模：50cm × 46cm 主軸方位：不明 特記事項：礎石であろう。1点のみの検出で他に関連するような石は見当たらない。

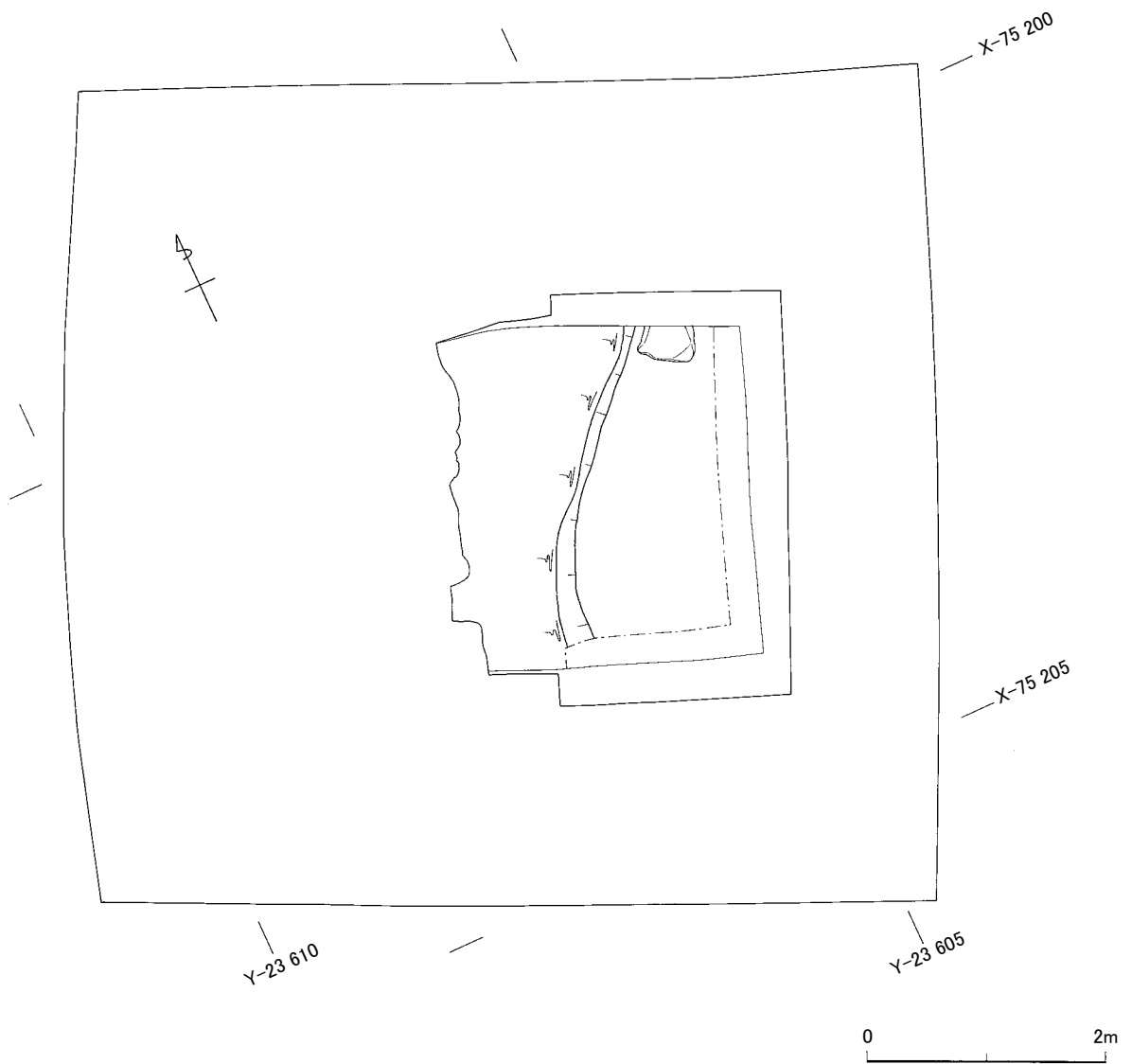


図 20 7 面

9. 8 面 (図 21)

小穴 (図 21)

長さ 42cm × 幅 18cm × 深さ 7cm。崖裾に流下した水の作用である可能性がある。

10. 採集遺物 (図 22)

Ⅱ区南壁深掘り (図 22)

常滑甕 (1) ・ 瓦質土器火鉢 (2) ・ 箸状木製品 (3)

Ⅱ区北壁深掘り (図 22)

常滑甕 (4)

北壁際排水溝 (上層部分) (図 22)

土師器皿ロクロ種小型 (5 ~ 8) ・ 土師器皿ロクロ種中型 (9)

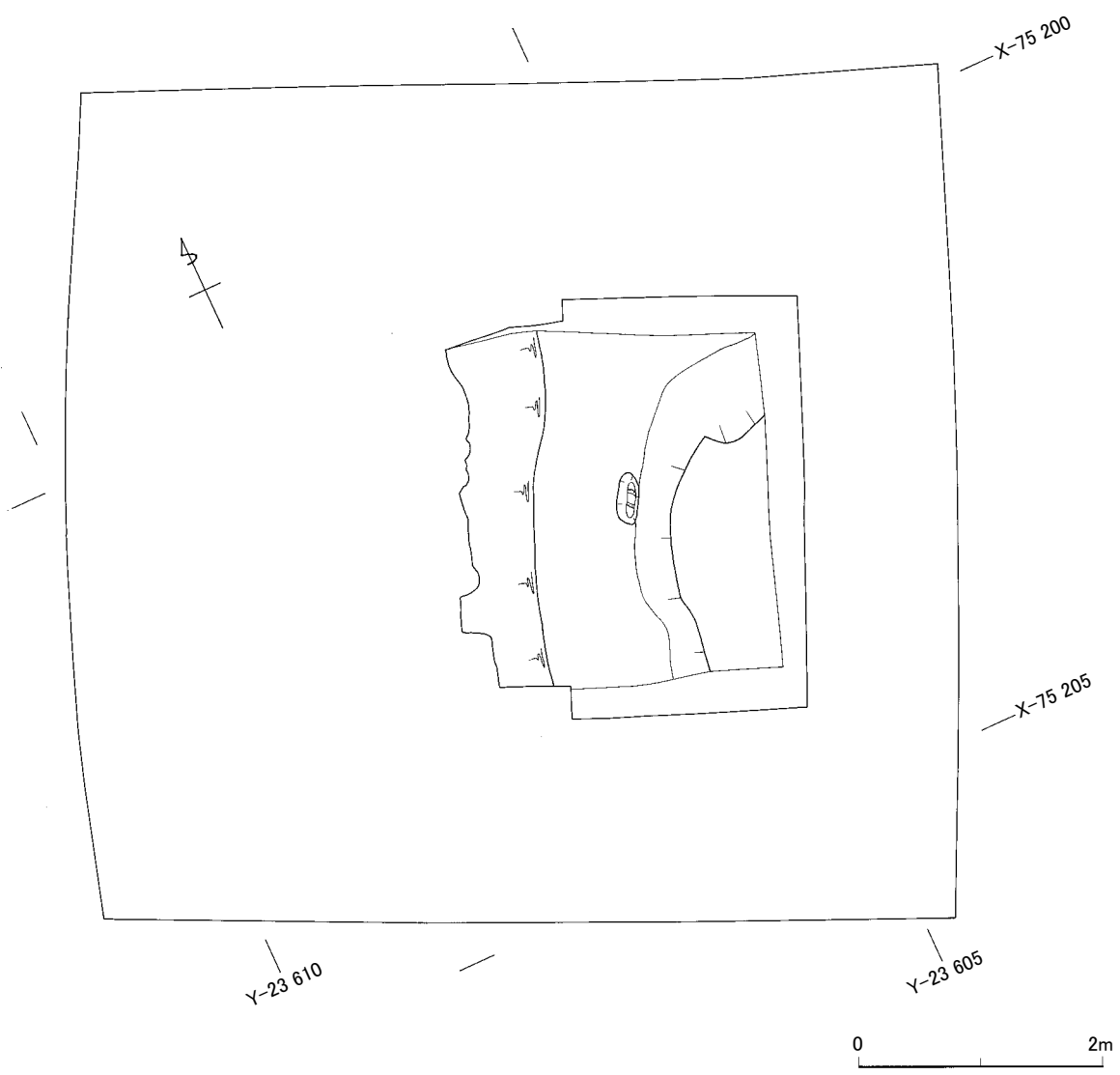


図21 8面

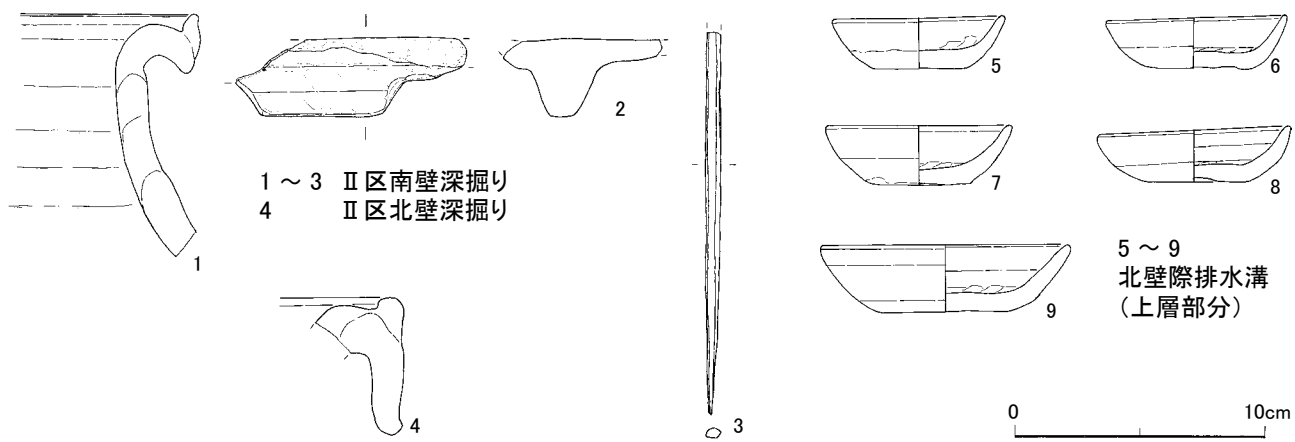


図22 採集遺物

表1 出土遺物観察表(1)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図4-1	1面	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.4cm 底径4.4cm 器高2.3cm 回転ロクロ 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色で白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
	2	土師器皿 ロクロ種大型	口径(11.7)cm 底径(6.4)cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子(多)・泥岩粒・海綿骨芯を含む
3	1面	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.5)cm 底径(7.0)cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
	4	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.6)cm 底径(8.3)cm 器高3.4cm 回転ロクロ 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
5	1面	土師器皿 ロクロ種大型	口径(13.0)cm 底径(7.0)cm 器高3.7cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
	6	土師器皿 ロクロ種小型	口径(6.8)cm 底径(4.0)cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子を含む
7	土坑3	土師器皿 ロクロ種小型	口径(6.8)cm 底径(4.0)cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子を含む
	土坑3	瀬戸 入子	底部片 底径(4.0)cm ロクロ成形 胎土は灰白で黒色粒子・白色粒子を含む 内底部に付着物
8	土坑3	瓦器 香炉	口縁部片 残存長4.0cm 幅4.3cm 厚さ1.0cm 胎土は灰色の砂質土を使用し、黒色粒子・白色粒子・赤色粒子を含む 器表面は灰褐色
	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(6.8)cm 底径(4.0)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
図5-1	2	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.1)cm 底径(3.9)cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・礫片・海綿骨芯を含む
	3	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.3cm 底径5.0cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.9cm 底径5.2cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
	5	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.7)cm 底径(5.0)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
6	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.7)cm 底径(4.9)cm 器高2.4cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒を含む
	7	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.7cm 底径4.5cm 器高2.4cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色で赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内面にヒモ状の黒色付着物
8	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.6)cm 底径(4.4)cm 器高2.3cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
	9	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.4cm 底径5.0cm 器高2.2cm 回転ロクロ 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
10	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(8.8)cm 底径(5.1)cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・礫片・海綿骨芯を含む
	11	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.4cm 底径5.3cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
12	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(8.4)cm 底径(4.5)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
	13	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.3)cm 底径4.0cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
14	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径8.0cm 底径4.7cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄褐色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内面に斑状に黒色付着物
	15	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.1)cm 底径(5.3)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内面に斑状に黒色付着物
16	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.2cm 底径4.5cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・海綿骨芯を含む 内面と割れ口に黒色付着物
	17	土師器皿 ロクロ種小型	口径(6.9)cm 底径(4.2)cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む
18	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.8)cm 底径(4.4)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子を含む 焼成良好
	19	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.2)cm 底径4.3cm 器高2.8cm 回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子を含む
20	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.8)cm 底径4.6cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
	21	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.1cm 底径4.6cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で砂粒(多)・泥岩粒・海綿骨芯を含む 口縁部油煤付着
22	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(6.6)cm 底径5.0cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
	23	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.9)cm 底径4.9cm 器高2.5cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
24	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.6)cm 底径4.0cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子を含む
	25	土師器皿 ロクロ種小型	口径(6.7)cm 底径4.6cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成時の高温のため亀裂入り、穴があく
26	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.0cm 底径4.5cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内外面に黒色付着物
	27	土師器皿 ロクロ種小型	口径(8.3)cm 底径(5.0)cm 器高2.4cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子を含む
28	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種大型	口径(11.2)cm 底径7.0cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
	29	土師器皿 ロクロ種大型	口径(11.6)cm 底径(7.0)cm 器高2.7cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 口縁部に油煤付着
30	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種大型	口径11.2cm 底径5.5cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・赤色粒子(多)・海綿骨芯を含む
	31	土師器皿 ロクロ種大型	口径(11.7)cm 底径(6.6)cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
32	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種大型	口径12.1cm 底径7.1cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 内外面に斑状に黒色付着物
	33	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.7)cm 底径6.5cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
34	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種大型	口径12.4cm 底径7.9cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内底部に油煤付着
	35	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.8)cm 底径6.8cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
36	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.8)cm 底径(7.7)cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
	37	土師器皿 ロクロ種大型	口径12.8cm 底径7.1cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
38	土坑4 上層	土師器皿 ロクロ種大型	口径13.2cm 底径7.8cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
	39	土坑4 上層	口径12.7cm 底径8.5cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒を含む

表3 出土遺物観察表(3)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
86	土坑4 下層	土師器皿 クワ種大型	口径(15.5)cm 底径(9.5)cm 器高3.5cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
	土坑4 下層	土師器皿 クワ種大型	口径(16.7)cm 底径(10.2)cm 器高3.7cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
図7-1	1b面	土師器皿 クワ種小型	口径(6.4)cm 底径(4.8)cm 器高2.0cm 回転クワ 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子(多)・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種小型	口径(7.5)cm 底径(4.5)cm 器高2.4cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	1b面	土師器皿 クワ種中型	口径(9.7)cm 底径(5.9)cm 器高2.9cm 回転クワ 外底部弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種大型	口径(12.5)cm 底径(8.0)cm 器高3.7cm 回転クワ 外底部弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	1b面	土師器皿 クワ種大型	口径(13.0)cm 底径(8.0)cm 器高3.8cm 右回転クワ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種大型	口径(11.9)cm 底径(6.2)cm 器高3.1cm 右回転クワ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
図8-1	1b面 P.3	土師器皿 クワ種小型	口径7.4cm 底径4.7cm 器高2.1cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種小型	口径7.6cm 底径4.8cm 器高2.2cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕、明瞭な条痕4本あり 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
3	1b面 P.3	土師器皿 クワ種大型	口径(13.5)cm 底径(8.0)cm 器高3.2cm 右回転クワ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種大型	口径(13.6)cm 底径(8.3)cm 器高3.1cm 右回転クワ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
5	1b面 P.3	土師器皿 クワ種大型	口径(14.6)cm 底径(8.4)cm 器高3.1cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種小型	口径6.9cm 底径4.4cm 器高2.2cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
7	1b面 P.4	土師器皿 クワ種小型	口径(7.6)cm 底径4.3cm 器高2.0cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種小型	口径(7.8)cm 底径4.9cm 器高2.1cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
9	1b面 P.4	土師器皿 クワ種小型	口径(7.3)cm 底径4.0cm 器高1.9cm 回転クワ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒を含む
		土師器皿 クワ種大型	口径(13.5)cm 底径(8.8)cm 器高3.4cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
11	1b面 P.4	土師器皿 クワ種大型	口径(14.0)cm 底径(8.0)cm 器高3.5cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子を含む
		土師器皿 クワ種大型	口径14.3cm 底径8.1cm 器高3.8cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
13	1b面 P.5	土師器皿 クワ種大型	口径(12.7)cm 底径(8.3)cm 器高3.4cm 回転クワ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種大型	口径(12.8)cm 底径(9.0)cm 器高3.0cm 回転クワ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
15	1b面 P.7	土師器皿 クワ種大型	口径15.3cm 底径9.6cm 器高3.8cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子(多)・泥岩粒・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種小型	口径7.4cm 底径4.2cm 器高2.2cm 回転クワ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 胎土は淡橙色で白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
17	1b面 P.8	土師器皿 クワ種小型	口径7.7cm 底径5.3cm 器高2.0cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種小型	口径7.7cm 底径4.3cm 器高1.8cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
19	1b面 P.8	土師質 獸脚	脚部片 残存長2.7cm 幅4.0cm 厚さ2.1cm 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む 胎芯は灰褐色 外面に面取り
		土師器皿 クワ種小型	口径(7.1)cm 底径(4.0)cm 器高1.8cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 口唇部外側に油煤の付着あり
図9-1	溝2	土師器皿 クワ種小型	口径(7.2)cm 底径4.5cm 器高2.1cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種小型	口径7.9cm 底径5.3cm 器高2.0cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	溝2	土師器皿 クワ種中型	口径(9.7)cm 底径(5.7)cm 器高3.0cm 回転クワ 胎土は淡橙色で赤色粒子・海綿骨芯を僅かに含む良土 焼成良好
		瓦 火鉢	胴部片 残存長4.2cm 幅3.2cm 厚さ1.8cm 輪轆み成形、横ナデ 胎土は淡橙色で白色粒子を含む 器表面は灰黒色 菊花押印文・貼付珠文あり
6	溝2	瀬戸入子	底径3.6cm 胎土は灰色 内底部に若干の降灰 外底部ヘラケズリ
		瀬戸 鉄釉碗	口縁部片 残存長6.0cm 残存幅3.0cm 厚さ0.8cm 胎土は黄灰色で白色粒子を含む 鉄釉漬け掛け、口縁部赤褐色・胴部黒褐色
8	溝2	瀬戸 四耳壺	胴部片 残存長6.3cm 残存幅8.0cm 厚さ1.0cm 胎土は灰白色 内外面に共に黒褐色の鉄釉がかかる
		土師器皿 クワ種小型	口径7.1cm 底径4.5cm 器高2.4cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子(多)・海綿骨芯を含む
2	遺物集中1	土師器皿 クワ種小型	口径(6.6)cm 底径(3.7)cm 器高2.0cm 右回転クワ 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子(多)・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種小型	口径7.1cm 底径4.4cm 器高2.1cm 回転クワ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子(多)・泥岩粒・海綿骨芯を含む
4	遺物集中1	土師器皿 クワ種小型	口径7.1cm 底径4.6cm 器高1.7cm 回転クワ 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種小型	口径7.5cm 底径4.6cm 器高1.9cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内外面に斑状に黒色付着物
6	遺物集中1	土師器皿 クワ種小型	口径7.8cm 底径4.8cm 器高2.0cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む
		土師器皿 クワ種中型	口径9.4cm 底径6.4cm 器高2.3cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
8	遺物集中1	土師器皿 クワ種中型	口径9.6cm 底径6.6cm 器高2.4cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色粒子(多)・泥岩粒・礫片を含む 外面に油煤付着
		土師器皿 クワ種中型	口径10.8cm 底径5.3cm 器高3.2cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成良好
10	遺物集中1	土師器皿 クワ種中型	口径(11.2)cm 底径6.0cm 器高3.5cm 右回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・白色粒子・泥岩粒を含む
		土師器皿 クワ種大型	口径(11.6)cm 底径(7.0)cm 器高3.8cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内面に斑状に黒色付着物
12	遺物集中1	土師器皿 クワ種大型	口径(11.8)cm 底径(6.8)cm 器高3.0cm 回転クワ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む

表4 出土遺物観察表(4)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
13	遺物集中1	土師器皿 口クロ種大型	口径12.4cm 底径8.2cm 器高3.3cm 右回転口クロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内面に斑状に黒色付着物
14	遺物集中1	土師器皿 口クロ種大型	口径(12.8)cm 底径(7.6)cm 器高2.9cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内面に斑状に黒色付着物
15	遺物集中1	土師器皿 口クロ種大型	口径(12.9)cm 底径(6.8)cm 器高2.7cm 回転口クロ 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
16	遺物集中1	土師器皿 口クロ種大型	口径(14.4)cm 底径(8.2)cm 器高3.4cm 回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
17	遺物集中2	土師器皿 口クロ種小型	口径7.8cm 底径5.0cm 器高2.1cm 右回転口クロ 内底部ナデ 胎土は赤橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
18	遺物集中2	土師器皿 口クロ種小型	口径7.2cm 底径4.2cm 器高2.0cm 回転口クロ 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内面に煤付着 内外面に灰黒色に変色している箇所あり
19	遺物集中2	土師器皿 口クロ種小型	口径(7.7)cm 底径(4.9)cm 器高2.2cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
20	遺物集中2	土師器皿 口クロ種小型	口径(6.8)cm 底径(3.6)cm 器高2.1cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒泥岩粒・海綿骨芯を含む
21	遺物集中2	土師器皿 口クロ種小型	口径7.3cm 底径4.5cm 器高2.1cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
22	遺物集中2	土師器皿 口クロ種小型	口径7.6cm 底径4.8cm 器高1.9cm 回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子(多)・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
23	遺物集中2	土師器皿 口クロ種小型	口径(7.6)cm 底径(5.0)cm 器高2.3cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・白色粒子・泥岩粒を含む
24	遺物集中2	土師器皿 口クロ種小型	口径7.5cm 底径4.7cm 器高2.0cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色で黒色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む 外面に帯状に黒色付着物
25	遺物集中2	土師器皿 口クロ種小型	口径8.2cm 底径5.2cm 器高2.2cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・海綿骨芯を含む 外面に斑状に黒色付着物
26	遺物集中2	土師器皿 口クロ種中型	口径(10.7)cm 底径6.5cm 器高3.1cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
27	遺物集中2	土師器皿 口クロ種中型	口径11.2cm 底径6.2cm 器高3.3cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・海綿骨芯を含む 外面に斑状に黒色付着物
28	遺物集中2	土師器皿 口クロ種中型	口径10.9cm 底径6.5cm 器高2.7cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 外面にヒモ状に黒色付着物
29	遺物集中2	土師器皿 口クロ種中型	口径10.8cm 底径6.0cm 器高3.3cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 外面に斑状に黒色付着物
30	遺物集中2	土師器皿 口クロ種中型	口径(12.0)cm 底径(7.8)cm 器高2.7cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・海綿骨芯を含む
31	遺物集中2	土師器皿 口クロ種中型	口径(11.7)cm 底径7.1cm 器高2.6cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・泥岩粒を含む 外面に斑状に黒色付着物
32	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径(11.8)cm 底径(6.9)cm 器高3.0cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子(多)を含む
33	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径11.8cm 底径6.7cm 器高2.95cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
34	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径12.1cm 底径7.2cm 器高3.2cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
35	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径(11.9)cm 底径6.0cm 器高3.8cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内外面に帯状に黒色付着物
36	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径(12.9)cm 底径(7.0)cm 器高3.2cm 回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子・泥岩粒を含む 外面に帯状に黒色付着物
37	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径(13.0)cm 底径(7.4)cm 器高3.1cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
38	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径(12.5)cm 底径6.8cm 器高3.6cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
39	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径(7.0)cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 口縁部 内から外側に向かい打ち欠かれている
40	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径13.2cm 底径7.7cm 器高3.4cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
41	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径(13.6)cm 底径(7.0)cm 器高3.1cm 回転口クロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
42	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径(15.5)cm 底径(9.8)cm 器高3.6cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
43	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径(15.7)cm 底径(9.6)cm 器高3.7cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
44	遺物集中2	土師器皿 口クロ種大型	口径15.3cm 底径8.2cm 器高4.0cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 内面に黒色付着物
45	遺物集中1・2	土師器皿 口クロ種小型	口径(7.8)cm 底径(5.0)cm 器高2.0cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
46	遺物集中1・2	土師器皿 口クロ種小型	口径(7.6)cm 底径(5.0)cm 器高2.0cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む
47	遺物集中1・2	土師器皿 口クロ種大型	口径12.8cm 底径7.8cm 器高3.3cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子(多)・海綿骨芯を含む
48	遺物集中1・2	土師器皿 口クロ種大型	口径(14.8)cm 底径(8.0)cm 器高4.0cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
49	遺物集中1・2	土師器皿 口クロ種小型	口径(7.7)cm 底径(4.8)cm 器高2.5cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・海綿骨芯を含む
50	遺物集中1・2下部	土師器皿 口クロ種小型	口径(7.6)cm 底径(4.9)cm 器高2.3cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色で黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
51	遺物集中1・2下部	土師器皿 口クロ種小型	口径(7.8)cm 底径4.8cm 器高2.0cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
52	遺物集中1・2下部	土師器皿 口クロ種小型	口径(7.7)cm 底径4.6cm 器高2.3cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・海綿骨芯を含む
53	遺物集中1・2下部	土師器皿 口クロ種小型	口径(9.6)cm 底径(7.8)cm 器高2.5cm 回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 口縁部油煤付着
54	遺物集中1・2下部	土師器皿 口クロ種中型	口径(10.6)cm 底径(6.1)cm 器高3.5cm 回転口クロ 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒を含む
55	遺物集中1・2下部	土師器皿 口クロ種大型	口径(14.5)cm 底径(8.0)cm 器高3.4cm 回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・白色粒子・泥岩粒を含む
56	遺物集中1・2下部	土師器皿 口クロ種大型	口径14.6cm 底径8.0cm 器高3.6cm 右回転口クロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色で黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 外面に斑状に黒色付着物
57	遺物集中1・2下部	瓦器 火鉢	口縁部片 残存長5.6cm 幅7.3cm 厚さ1.6cm 輪積み成形、横ナデ 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子を含む 器表面は暗灰色 渦状押印文と貼付珠文あり
図12-1	西壁大型泥岩層	土師器皿 口クロ種小型	口径(7.4)cm 底径(5.1)cm 器高2.1cm 回転口クロ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土 底部の一部が二次焼成を受け赤褐色化

表5 出土遺物観察表(5)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
2	西壁大型 泥岩層	土師器皿 ロクロ種大型	口径11.2cm 底径7.4cm 器高3.4cm 回転ロクロ 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 外面に帯状に黒色付着物
3	西壁大型 泥岩層	土師器皿 ロクロ種大型	口径11.7cm 底径6.9cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子(多)・泥岩粒・海綿骨芯を含む
4	西壁大型 泥岩層	土師器皿 ロクロ種大型	口径(13.6)cm 底径(7.6)cm 器高3.7cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子(多)・泥岩粒・海綿骨芯を含む
5	西壁大型 泥岩層	土師器皿 ロクロ種大型	口径12.2cm 底径6.6cm 器高3.3cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 内外面及び割れ口に煤付着
6	西壁大型 泥岩層	土師器皿 ロクロ種大型	口径13.8cm 底径8.7cm 器高3.8cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子(多)・泥岩粒・海綿骨芯を含む
7	西壁大型 泥岩層	土師器皿 ロクロ種大型	口径(14.0)cm 底径(7.4)cm 器高3.3cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 外面及び割れ口に油煤付着
8	西壁大型 泥岩層	土師器皿 ロクロ種大型	底径(8.4)cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子(多)・泥岩粒・海綿骨芯を含む 外面壁底部に斑状の黒色付着物 口縁部を打ち欠いている
9	西壁大型 泥岩層	常滑 甕	底部片 底径(14.0)cm 胎土は灰色で長石・白色粒子・赤色粒子・礫片を含む 器表面は赤褐色 内底面の磨減が著しい 内底部に黒色光沢の付着物
図14-1	溝3	土師器皿 ロクロ種小型	口径6.9cm 底径4.3cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 胎土は橙色で黒色粒子・海綿骨芯を含む 器表・内面共に黒色付着物著しい
2	溝3	土師器皿 ロクロ種大型	口径(11.6)cm 底径6.6cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・泥岩粒・礫片・海綿骨芯を含む 内面に油煤の付着が著しい
3	溝3	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.6)cm 底径7.4cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
4	溝3	土師器皿 ロクロ種大型	口径(13.4)cm 底径(7.3)cm 器高3.6cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子を含む
5	溝3	白色系土師器皿 手づくね種中型	底部片 底径(7.1)cm 手づくね成形 胎土は灰白色で粉質
6	溝3	瀬戸 脚付盤	底部片 底径(13.2)cm 外底部外周回転ヘラ削り 獸脚貼付 淡灰緑色の灰釉ハケ塗り 内底部に目跡あり
7	溝3	瓦器 火鉢	底部片 残存長12.5cm 残存幅8.0cm 外底部外周ナデ 胎土は淡赤褐色で白色粒子・赤色粒子を含む 器表面は灰色 角火鉢になる可能性もある
8	溝3	瓦器 火鉢	底部片 残存長5.8cm 幅7.5cm 厚さ1.3cm 胎土は灰色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・礫片を含む
9	溝3	土師質 脚	残存長8.5cm 径4.8cm 胎土は灰褐色 器表面は橙色 中央部に径0.4cmの貫通孔あり
10	溝3	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形、口縁部ナデ 胎土は暗灰色で長石・白色粒子を含む 器表面は暗褐色
11	溝3	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形、口縁部ナデ 胎土は橙色で長石・白色粒子・礫片を含む 器表面は赤褐色 内面調整が消える程度に摩耗
12	溝3	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形、口縁部ナデ 胎土は暗褐色で長石・石英・白色粒子・礫片を含む 器表面は淡褐色 内面調整が消える程度に摩耗
13	溝3	常滑甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗灰色で長石・石英・白色粒子を含む 器表面は黒褐色
14	溝3	常滑甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗灰色で長石・石英・白色粒子・礫片を含む 器表面は暗褐色
15	溝3	常滑甕	口縁部片 胎土は灰色で長石・白色粒子・礫片を含む 器表面は黒褐色
16	溝3	常滑甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は暗褐色で長石・白色粒子・赤色粒子・礫片を含む 器表面は赤褐色
17	溝3	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片 輪積み成形 胎土は灰黄色で長石・白色粒子・礫片を含む 器表面は橙色 内面は剥離する程摩耗
18	溝3	常滑甕	底部片 胎土は灰褐色で長石・石英・白色粒子・礫片を含む 器表面は褐色 内面全面に黒色の皮膜付着
19	溝3	常滑甕	底部片 胎土は灰色で長石・石英・白色粒子・礫片を含む 胎土は暗灰色 胎土は暗灰色 胎土は暗灰色
20	溝3	常滑甕	底部片 胎土は灰色で長石・石英・白色粒子・赤色粒子・礫片を含む 器表面は暗褐色 外面前面に自然釉
21	溝3	常滑甕転用 摩耗陶片	長さ7.5cm 幅5.5cm 厚さ0.9cm 胎土は灰色で長石・石英・白色粒子を含む 器表面は褐色 断面2面と外面が著しく摩耗 内面も若干の摩耗
22	溝3	常滑甕転用 摩耗陶片	長さ7.0cm 幅5.8cm 厚さ1.2cm 胎土は灰色で長石・石英・白色粒子・赤色粒子を含む 器表面は褐色 断面4面と外面が著しく摩耗 内面も若干の摩耗
23	溝3	備前 搦鉢	口縁部片 口径(29.5)cm 残存長10.5cm 幅10.5cm 厚さ1.7cm 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で長石・石英・黒色粒子・砂粒・礫を含む 4条の櫛目
24	溝3	備前搦鉢	胴部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は黄灰色で長石・石英・黒色粒子・砂粒・礫を含む 7条の櫛目
25	溝3	瀬戸 鉄釉碗	口縁部片 胎土は黄灰色 鉄釉漬け掛け、口縁部茶褐色、胴部黒褐色
26	溝3	瀬戸 折縁深皿	口縁部片 胎土は黄灰色 灰緑色の灰釉
27	溝3	瀬戸 卸し皿	底部片 底径6.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り 灰釉ハケ塗り 胎土は灰色
28	溝3	白磁 口はげ皿	口縁部片 ロクロ成形 口縁部軸を面取りにより剥ぎ取る 素地は灰色 透明釉
29	溝3	白磁 碗	口縁部片 ロクロ成形 口縁部軸を面取りにより剥ぎ取る 素地は灰白色 内面に花文の型押し 透明釉
30	溝3	滑石鍋	口縁部片 輪花状に加工した痕跡あり 残存長2.4cm 幅6.0cm 灰白色 外面暗灰色
31	溝3	砥石 中砥	上野(砥沢) 残存長9.5cm 幅3.1cm 厚さ3.0cm 4面全てが使い込まれて大きく変形している 切り出した際のノミ痕が認められる
32	溝3	漆器皿	口径(8.6)cm 底径5.9cm 器高0.8cm 輪高台 黒漆地に朱漆による手描き植物文
33	溝3	加工骨	残存長5.5cm 幅2.9cm 厚さ0.6cm 端部に加工の痕跡あり
34	溝3	鉄 釘	残存長7.0cm 幅0.4cm 厚さ0.4cm 重さ6.3g
35	溝3 裏込め	瀬戸 緑釉小皿	口径10.2cm 底径4.9cm 器高2.5cm 右回転ロクロ、外底部回転系切り 胎土は黄灰褐色 灰緑色の灰釉漬け掛け 内底部に目跡4点 内底部摩耗により調整不明瞭
図15-1	3面上 包含層	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.2cm 底径4.3cm 器高2.3cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
2	3面上 包含層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.2)cm 底径(4.2)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
3	3面上 包含層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.6)cm 底径(5.0)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む 口縁部に油煤付着
4	3面上 包含層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(8.8)cm 底径(6.8)cm 器高2.2cm 回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
5	3面上 包含層	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.5)cm 底径(4.4)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
6	3面上 包含層	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.8)cm 底径7.0cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
7	3面上 包含層	土師器皿 ロクロ種大型	口径(15.4)cm 底径(8.1)cm 器高3.9cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
8	3面上 包含層	瀬戸 折縁深皿	口縁部片 胎土は灰白色 回転ロクロ 灰釉ハケ塗り
9	3面上 包含層	砥石 仕上砥	鳴滝 残存長3.5cm 幅3.5cm 厚さ0.5cm 砥面は上下2面 黄灰白色
11	3面上 包含層	加工骨	残存長7.0cm 幅2.4cm 厚さ0.4cm 上端部に切り込み加工痕
11	3面	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.2)cm 底径4.3cm 器高2.4cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・海綿骨芯を含む 内面に斑状に黒色物質付着
12	3面	土師器皿 ロクロ種大型	口径(13.7)cm 底径9.2cm 器高3.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
13	3面	内耳土鍋	口縁部片 口径(24.0)cm 胎土は黄灰色で白色粒子・赤色粒子・礫片を含む 内外面共に横ナデ整形
14	3面	尾張山茶碗系 片口鉢	口縁部片 残存長7.5cm 幅6.5cm 厚さ1.2cm 輪積み成形 胎土は灰色で長石・白色粒子・礫片を含む

表6 出土遺物観察表(6)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
15	3面	元豊通寶	初鑄 1078年 北宋 篆書
図 16-1	4面上	土師器皿 ロクロ種大型	口縁部片 口径(15.8)cm 回転ロクロ 胎土は橙色で白色粒子(少)・赤色粒子を含む良土 焼成良好
	2	4面上	青白磁 水注 胴部片 型入れ成形 素地は白色 釉薬は青白色不透明
3	土坑6	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.5cm 底径4.0cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は灰黄色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 口唇部に煤付着あり
4	土坑6	土師器皿 ロクロ種中型	口径(10.8)cm 底径(6.6)cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は灰黄色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 外底部に広く、その他まばらに炭化物付着
5	土坑6	土師器皿 ロクロ種中型	口径(10.6)cm 底径(6.9)cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子を含む 口唇部の一部に油煤付着
6	土坑6	土師器皿 ロクロ種中型	口径(12.6)cm 底径7.4cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 内面に煤状の黒色物質付着
7	土坑6	土師器皿 ロクロ種中型	口径(11.2)cm 底径(7.0)cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子(多)・海綿骨芯を含む 焼成良好
8	土坑6	土師器皿 ロクロ種大型	口径12.6cm 底径7.4cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
9	土坑6	土師器皿 ロクロ種大型	口径(13.2)cm 底径(7.1)cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
10	土坑6	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.6)cm 底径7.4cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む
11	土坑6	土師器皿 ロクロ種大型	口径(16.7)cm 底径(10.2)cm 器高3.7cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄褐色で黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
12	土坑6	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.8)cm 底径(8.0)cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄褐色で白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
13	土坑6	土師器皿 ロクロ種大型	口径15.3cm 底径9.1cm 器高3.9cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子(多)・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
14	土坑6	土師器皿 ロクロ種大型	底部片 底径(7.8)cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
15	土坑6	元祐通寶	初鑄 1086年 北宋 篆書
16	北側 平坦面	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.2)cm 底径6.5cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
17	北側 平坦面	白色系土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.5)cm 底径(7.0)cm 器高2.7cm 回転ロクロ 胎土は赤灰白色で赤色粒子・海綿骨芯を含む
18	北側 平坦面	土師器皿 ロクロ種大型	口径12.7cm 底径7.7cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
19	北側 平坦面	土師器皿 ロクロ種大型	口径(12.8)cm 底径(7.0)cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
20	北側 平坦面	土師器皿 ロクロ種大型	口径(14.2)cm 底径6.8cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子(多)・海綿骨芯を含む
21	北側 平坦面	土師器皿 ロクロ種大型	口径(15.7)cm 底径(8.8)cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
図 17-1	溝4	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.3cm 底径5.4cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・海綿骨芯を含む 口縁部の内外共に灰黒色に変色して周回
	2	溝4	土師器皿 ロクロ種小型
3	溝4	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.7)cm 底径(5.3)cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で雲母・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒(径0.5cmのタイプも含み)を含む また、径0.7cmの玉石も突き出る
4	溝4	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.5)cm 底径5.0cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒を含む
5	溝4	土師器皿 ロクロ種中型	口径(8.7)cm 底径(5.8)cm 器高2.2cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で白色粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 外面に帯状の黒色付着物
6	溝4	土師器皿 ロクロ種大型	口径12.4cm 底径7.9cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は灰黄色で黒色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む
7	溝4	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 残存長2.8cm 幅6.2cm 厚さ1.0cm 胎土は暗灰色で長石・石英・白色粒子を含む 器表面は赤褐色
8	溝4	白磁 口はげ皿	口縁部小片 残存長3.3cm 幅3.4cm 厚さ0.4cm ロクロ成形 口縁部面取り 素地は灰白色で微砂粒を含む 釉薬は灰緑色不透明
9	溝4	青白磁 瓶子	小片 残存長1.9cm 幅2.0cm 厚さ0.4cm 素地は灰白色で堅緻 釉薬は淡青色透明
10	溝4	砥石 仕上砥	鳴滝(蒲浦ヶ谷) 残存長6.5cm 幅3.0cm 厚さ1.0cm 赤褐色 片面は全面剥離 側面に成形時の切り出し痕 使用面残存面に細かな掻痕が著しく残る
11	溝4	元豊通寶	初鑄 1078年 北宋 篆書
図 18-1	土坑7	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.6cm 底径4.7cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
図 19-1	6面上 包含層	土師器皿 ロクロ種大型	口径(13.7)cm 底径(7.0)cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	6面上 包含層	白磁 口はげ皿	底部片 残存長2.5cm 幅5.0cm 厚さ0.5cm ロクロ成形 素地は灰白色で微砂粒を含む 釉薬は透明
3	6面上 包含層	骨製斧	残存長6.3cm 幅1.3cm 厚さ0.3cm
4	6面上	竜泉窯青磁 鎚蓮弁文碗	口縁部片 残存長3.8cm 幅2.9cm 厚さ0.4cm ロクロ成形 素地は明灰色で黒色粒子を含む 釉薬は青緑色不透明
図 22-1	Ⅱ区南壁 深堀り	常滑 甕	口縁部片 残存長9.8cm 幅8.5cm 厚さ1.3cm 輪積み成形 素地は灰色で長石・石英片・白色粒子・赤色粒子を含む 器表面は赤褐色
	2	Ⅱ区南壁 深堀り	瓦質土器 火鉢
3	Ⅱ区南壁 深堀り	箸状木製品	残長15.3cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm
4	Ⅱ区北壁 深堀り	常滑 甕	緑帯部片 残存長5.5cm 幅5.0cm 厚さ1.5cm 胎土は灰色で長石・白色粒子・砂粒・礫片を含む 器表面は明褐色 緑帯外面に自然釉
5	北壁際 排水溝(上層)	土師器皿 ロクロ種小型	口径(6.9)cm 底径(3.8)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
6	北壁際 排水溝(上層)	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.1cm 底径4.5cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 口縁部油煤付着
7	北壁際 排水溝(上層)	土師器皿 ロクロ種小型	口径(7.3)cm 底径(4.2)cm 器高2.4cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
8	北壁際 排水溝(上層)	土師器皿 ロクロ種小型	口径7.6cm 底径4.2cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤褐色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
9	北壁際 排水溝(上層)	土師器皿 ロクロ種中型	口径(9.9)cm 底径5.1cm 器高2.7cm 右回転ロクロ 外底部回転系切り、板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む

表7 出土遺物計量表

			1面		1b面		2面		3面		4面		5面		6面		総計			
土器	土師器皿	T種	大	0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
		R種	大	1802	86.80%	467	82.65%	422	75.90%	626	74.35%	87	66.41%	40	90.91%	23	79.31%	3515	81.55%	
			中	11	0.53%	3	0.53%	12	2.16%	2	0.24%	6	4.58%	0	0.00%	0	0.00%	35	0.81%	
			小	237	11.42%	55	9.73%	96	17.27%	65	7.72%	10	7.63%	4	9.09%	2	6.90%	479	11.11%	
		T種白色系	大	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
		R種白色系	中	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
	土器質	火鉢			0	0.00%	0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		内耳土鍋			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		獸脚			0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		脚部			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	瓦質土器	火鉢			0	0.00%	0	0.00%	1	0.18%	3	0.36%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.12%
		香炉			1	0.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		瓦器	楠葉	輪花碗	0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	国産陶器	常滑	甕		13	0.63%	7	1.24%	12	2.16%	68	8.08%	11	8.40%	0	0.00%	1	3.45%	116	2.69%
片口鉢			Ⅱ類	1	0.05%	2	0.35%	0	0.00%	7	0.83%	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	11	0.26%	
甕転用摩擦陶片			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.05%		
四耳壺				0	0.00%	0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
瀬戸		瓶子			0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		平碗			0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		天目茶碗			0	0.00%	0	0.00%	1	0.18%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.05%
		卸皿			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		折縁深皿			3	0.14%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.12%
		縁釉小皿			1	0.05%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.05%
		入子			1	0.05%	0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.05%
		盤類			1	0.05%	0	0.00%	2	0.36%	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.12%
		器種不明			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		尾張	山茶碗系片口鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1
東濃		山茶碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
備前		播鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.05%
舶載陶磁器		青白磁	太宰府Ⅱ類	蓮弁文碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	3.45%	1	0.02%
			太宰府Ⅲ類	蓮弁文碗	0	0.00%	0	0.00%	1	0.18%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.05%
		白磁	梅瓶	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1
	水注		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	口はげ		皿	1	0.05%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	1	0.76%	0	0.00%	1	3.45%	5	0.12%	
	四耳壺		0	0.00%	0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	碗		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
壺類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%		
金属製品	銭	中国銅銭	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	2	1.53%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.07%		
	鉄	釘	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%		
石製品	滑石	鍋	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%		
		鳴滝	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.24%	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.07%		
	砥石	上野	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		碁石	1	0.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
石材・石	玉石	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
木製品	漆器	皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		箸(両口)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
	漆器以外木製品	箸(片口)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
		折敷	0	0.00%	4	0.71%	0	0.00%	12	1.43%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	16	0.37%
		板草履	0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	3	0.36%	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.12%
		箸	0	0.00%	8	1.42%	0	0.00%	3	0.36%	1	0.76%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	12	0.28%
		板状	0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	9	1.07%	2	1.53%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	12	0.28%
		棒状	0	0.00%	8	1.42%	0	0.00%	7	0.83%	3	2.29%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	18	0.42%
不明	0	0.00%	1	0.18%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%		
骨角製品	筭	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	3.45%	1	0.02%			
	加工骨	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.05%	
自然遺物	木材	部材	0	0.00%	3	0.53%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.07%		
	骨貝	獸骨	0	0.00%	0	0.00%	4	0.72%	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.12%
その他		カキ	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.59%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.14%
	近代	近世	2	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.05%
	不明土器	1	0.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	
合計			2076	100%	565	100%	556	100%	842	100%	131	100%	44	100%	29	100%	4310	100%		

第四章 まとめ

遺跡年代とその意味

年代の分かる最も古い面は第6面で、13世紀後半に属する。層位からみればさらに古い7・8面もあるが、当地点調査からは13世紀中葉以前の遺物は1点も出土していない。したがって遺跡全体でも、年代的に13世紀後半をさほど遡るとは考えられない。最新の面は1面で、15世紀前半の遺物が根拠となる。すなわち、当地点検出遺跡の存続年代は13世紀後半（鎌倉時代後期）から15世紀前半（室町時代前期）とみて大過ない。

第一章で述べたように、大楽寺は京都泉涌寺六世憲静の高弟公珍が開き（覚園寺寺伝『鎌倉鷲峯法流伝来記』）、室町時代前期の15世紀前半頃まで胡桃ヶ谷にあった。大楽寺はその後泉涌寺派の関東における根本道場である覚園寺に移った。公珍が憲静の高弟であれば、活動したのは鎌倉時代後期ということになる。すなわち、今回検出された遺構の年代は、大楽寺の開創から移転までの時期によく符合している。調査区から30～40mほど東南の山裾には大型やぐら群があり、その前面の平場に寺院が存在することは確実である。『新編鎌倉志』の記事からみて、それは大楽寺の可能性がきわめて高い（本報第一章参照）。とすれば検出遺構は大楽寺境内の一部施設とみていいであろう。

3面溝3について

第三章に書いたように、該址の存続年代は13世紀後半から14世紀後半までのほぼ1世紀である。すなわち、この溝は大楽寺開創期から存在していることになる。先述のように、構築方法で見れば、長手面を水流側に出す整層積みであること、粗くはあるが鑿様の工具痕が石の表面に見えること、岩盤を削って掘り方を作ること、などの点で市内扇ガ谷の「清涼寺跡」で発見された石組溝（「遺構8b」）によく似ている（伊丹まどか2012「清涼寺跡（No.183）扇ガ谷四丁目556番4外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』28第2分冊）。清涼寺は鎌倉時代後期の弘長二年（1262）、西大寺叡尊関東下向の際に止住した寺であるところから、真言律宗系寺院であったと推測される。泉涌寺の法流である大楽寺もまた律院である。南都と北京の違いはあるにせよ、両者ともに律、もしくは律系寺院であった。律は石造工芸の職人を組織していたことで知られる。鎌倉市内でこれまで2例しか知られていない長手積の石組溝がいずれも律院から発見されていることは、興味深いというべきであろう。



1 - 1 調査地点近景①



1 - 2 調査地点近景②



1 - 3 大楽寺跡やぐら①



1 - 4 大楽寺跡やぐら②



1 - 5 1面全景 (西から)

図版2



2-1 1b面土坑4上層(北から)



2-2 1b面土坑4上層(北から)



2-3 2面全景(南から)



2-4 2面遺物集中1・2(北東から)



2-5 2面遺物集中1(西から)



2-6 2面溝2西岸大型礎石(東から)



3-1 3面全景 (南から)



3-2 3面溝3 (北から)



3-3 3面溝3 (北から)

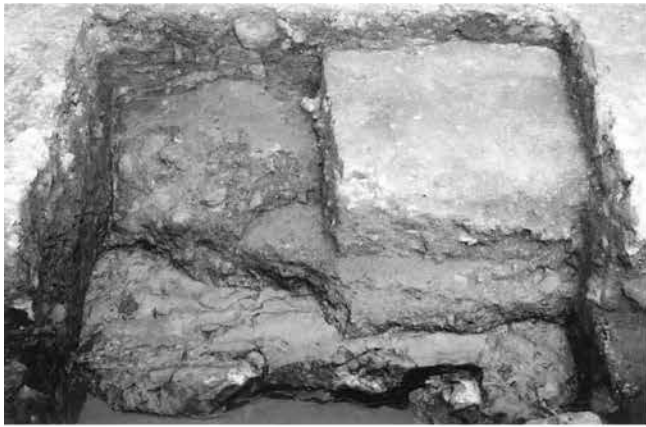


3-4 3面溝3 (南から)



3-5 3面溝3 (東岸)

図版4



4-1 4面全景（西から）



4-2 5面全景（西から）



4-3 6面全景（西から）



4-4 8面全景（西から）



4-5 西壁土層断面



5-1 II区北壁土层断面

5-2 II区南壁土层断面

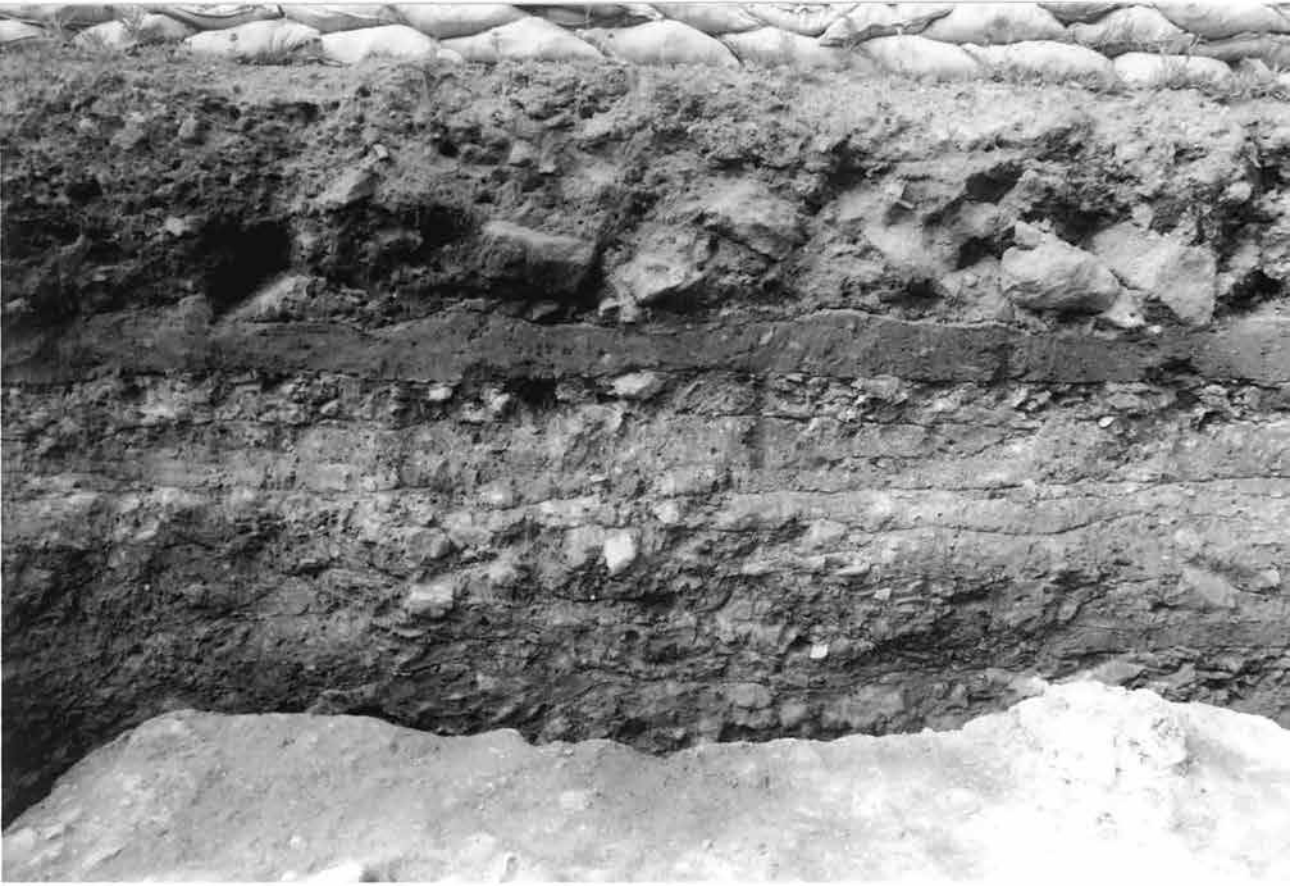




6-1 I区南壁土层断面①

6-2 I区南壁土层断面②



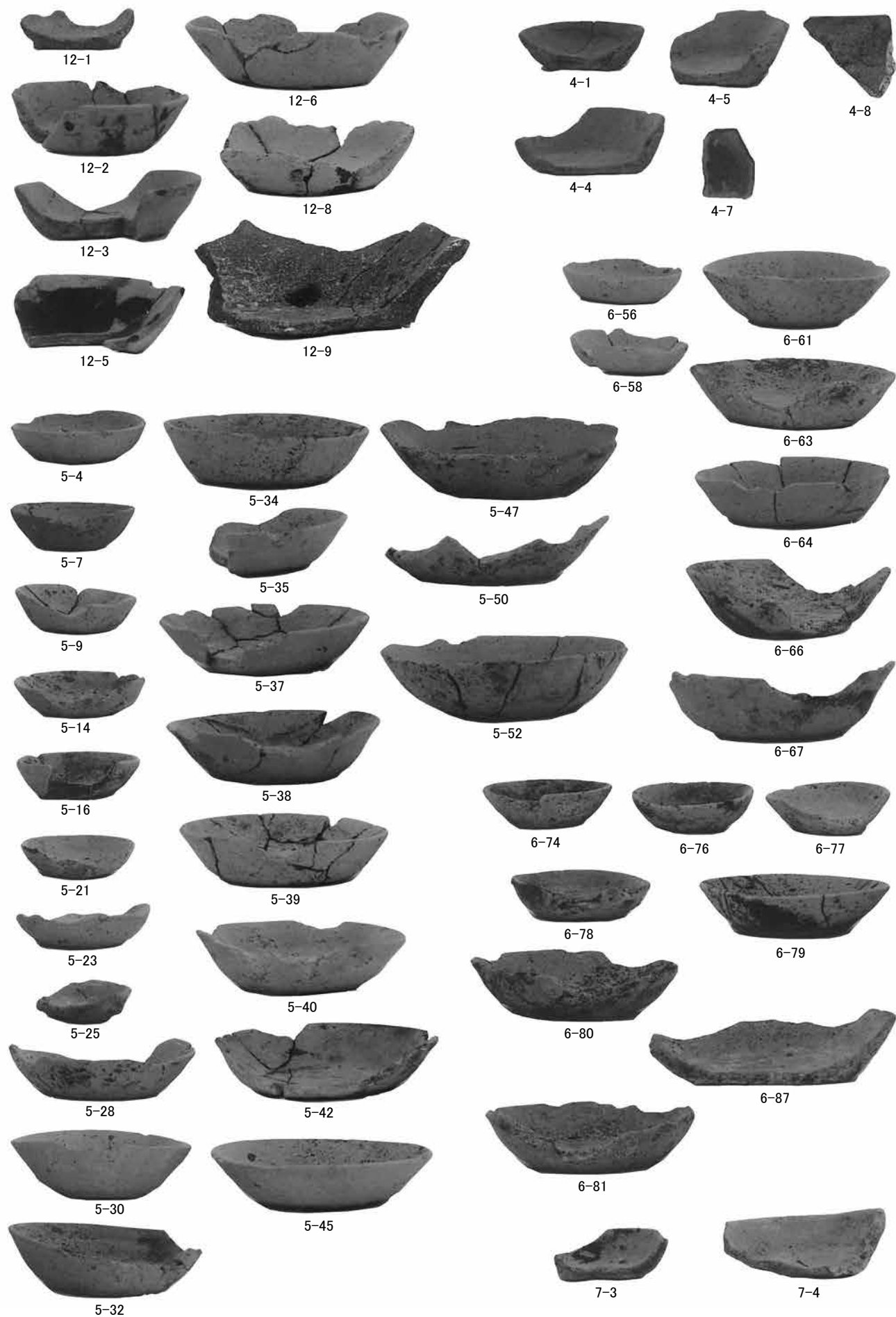


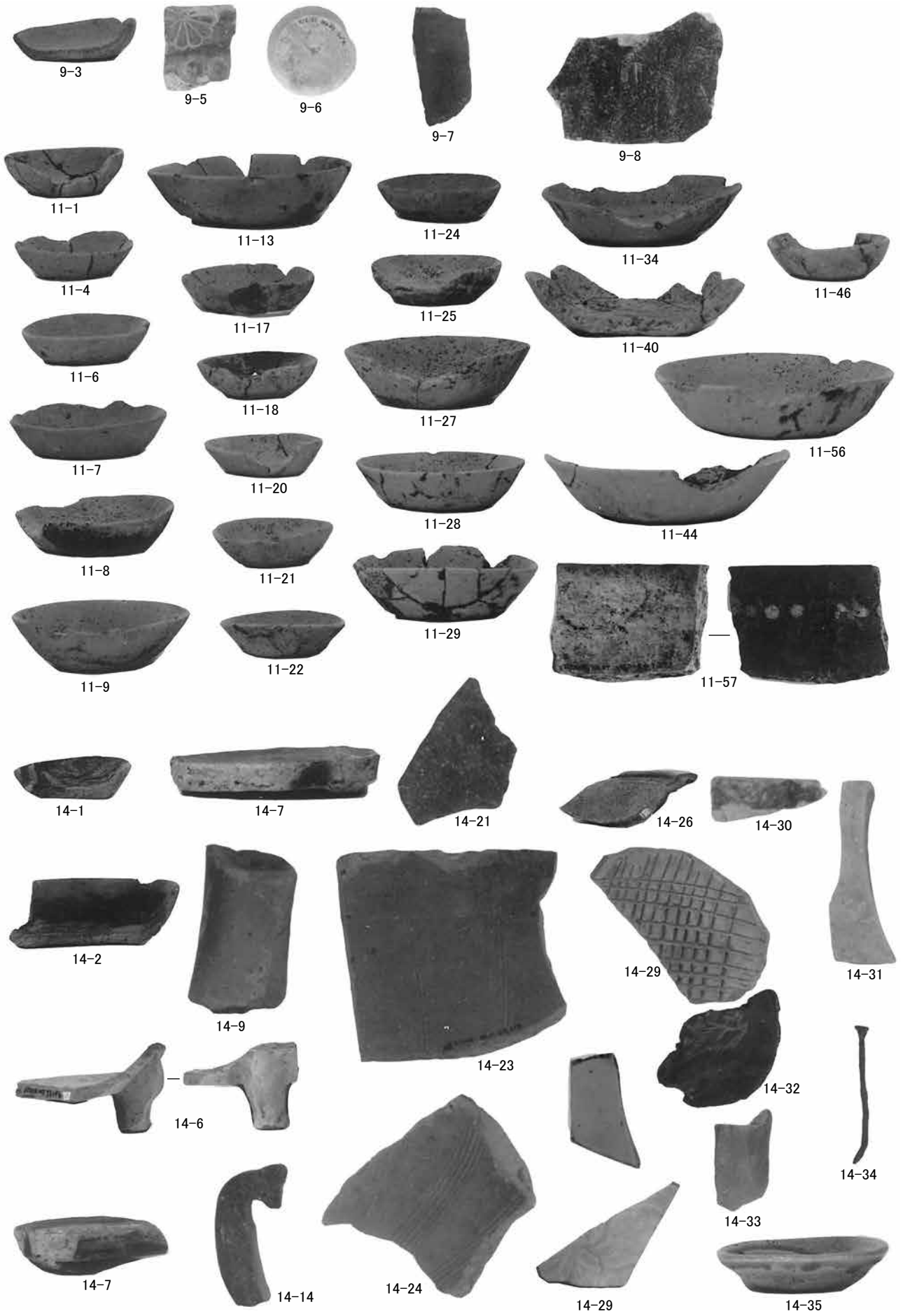
7-1 I区北壁土层断面

7-2 I区東壁土层断面



图版 8





图版 10

